

転生少年と月の目モドキ

琴介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テンプレ的にリリな世界に転生した少年が、特典に選んだ”物質化した奇跡”全てとおまけスキルを持って原作に関わるお話。

しかし少年が転生した時点で既に原作通りに世界は進まない事は確定した。

何処がどう違うのか分からないけど、主人公たちの友達としてハッピーエンドを目指す少年は生き抜けるのか……！

「生き抜くも何も、普通に生活しながら原作に関わるだけじゃん。大袈裟だな」

『あらすじくらい好きにさせてあげましょうよ』

「えー……」

『それに友達って、それ以上のフラグ建ててますよね』

「……………」

※特にこれと言って細かく考えて書いてないので矛盾があるかも。

しかも内容的には作者の妄想と言うか、ノリで書いているので拙い文章です。

それでも全然読んでやるよという方もそうでない方もよろしくお願ひします。

とりあえず目指せ、無印編完結！ 2016/5. 19 無事に達成！

さあ次の目標は、……………A☒S編の完結だ！

目次

主人公紹介、というか設定的なモノ	1
番外編：夢見る魔法少女じゃない	11
原作前	
プロローグ：二つの山	28
プロローグ：月の目モドキ	38
第一話：角麩ってすき焼き以外に使うの？	46
第二話：恥ずかしいセリフは効果抜群	64
第三話：お父さんの登場	81
第四話：急に焼き芋が食べたくなる事ってあるよね	99
第五話：遠足は前日が一番楽しい気がする	116
無印編	
第六話：今日、幼馴染が魔法少女になったよ！	132
第七話：公園って絶対何か住んでるよね	150
第八話：電話しながらの料理は危険	162
第九話：追いかけてっことは割と夢中になる	174
第十話：パスタは種類が多すぎて悩む	186
第十一話：幽霊ってお化けと一緒にされるよね！	198
第十二話：衝撃は突然やってくる	211
第十三話：オムライスがフワトロが良い	224
第十四話：目からビーム、一度は撃つてみたかった	238
第十五話：見送ってからの先回りは驚かれる	254
第十六話：サプライズは仕掛ける側になりたい	270
第十七話：残り時間〇〇！の時間は中々経たないよね！	291

第十八話：爆発を背景に登場するのは熱そう	306
第十九話：広いと泳ぎたくなるのは仕方ない	325
第二十話：呼ぶ事に意味がある	345

日常編

第二十一話：最近のアトラクションはリアルだね！	373
第二十二話：手が塞がってる時に限って転ぶんだよ	394
第二十三話：お土産の買い忘れは気を付けよう！	405
第二十四話：面と向って言うのは恥ずかしいんです	417
第二十五話：夏といえばやっぱり海	430
第二十六話：温泉の洞窟って何か惹かれるよね	443
第二十七話：口に出さなければ、やられなかったのに！	465
第二十八話：読書感想文って夏休み最大の敵だよね	508
第二十九話：筆記より実技の方が得意だったりします	517

A
S編

第三十話：貸し出し期限には要注意	530
------------------	-----

主人公紹介、というか設定的なモノ

名前：戸田 秋介

見た目：フラット (F a t e) とカウレス (〃) のラフver.
を足して二で割った感じ

(分かりやすく言えば子供っぽい感じ)

髪と瞳は黒色

身長はユーノよりちよつと高い、体重は平均的

イメージカラー：月が綺麗に見える日の夜

魔力光：月白

総魔力量：S (無印編)

魔導師ランク：推定AAA (無印編)

特技：家事全般、感覚で魔法を使う

好きなもの：カフェ・オレ、料理、ファンタジー系のゲーム

苦手なもの：年上の女の人に頭を撫でられる

「転生少年と月の目モドキ」の主人公その人である。

ちよつとした神様の姉弟喧嘩の末、頭上から降って来たガラスのよ
うなモノによってグシャア、となってしまう、イザナミさんの手に
よって転生した少年。

基本的には真面目で感覚的。時々天然が入る。

どの辺が天然かと言うと、目の前で大変な事が起こっているのに別
事を考えたりズレたことを言ったりする所らへん。加えて「女の子を
助けるのに理由はいらないでしょ?」とか「可愛いから好きだね」と
か、その場のノリや勢いでカッコつけちゃったりサラツと恥ずかしい
事を言っちゃう所も含まれたりする。

……しばらくして思い返した時に恥ずかしさのあまり悶えるのは、
まあ自業自得ということだ。

『寝坊した時に耳元で再生すると身悶えながら起きるんですよね』
とは某次元世界一のデバイスからの情報。

しかし最近では慣れてきたのか、反応が薄くなってしまったので残念

だとか。

学校での成績は中の上の下を行ったり来たりしているが、別に頭が悪いつて事ではない。

ただ勉強に対するやる気には波があるだけ。特にテスト期間ではそれが大きく点数に影響する。文系と理数系、点数が高いのはどちらかと言うと後者の方。まあ魔導師ですし。そうじゃないと困ると言うか。魔法の構築とか制御は理数系なので出来て当り前、……らしい。

前に一度、幼馴染の金髪お嬢様が「学校のテストなんて百点は当たり前で面白くないのよねー」なんてことをお昼休みに言っていたが、それは絶対におかしいと思う。思いませんか。そうですか。ごめんなさい勉強頑張ります。

喋り方が偶に○○よ、や、○○かしらと言った女口調になるのは転生する前、姉と妹、それに親戚が殆ど女の人だったのでちよつと影響されているからだったりする。本人は治したと思っていたが、転生した際に五歳の姿になった所為で昔の喋り方が戻ってしまったらしい。

本人曰く「まあその内、気が付いたら治ってるよね」との事。

まあ治ったとしても驚いたり不意を突かれたりした時にポロツ、と出るだろう。しみついた喋り方は中々治らない。方言の訛りが中々抜けないのと同じようなモノだ。

ちなみに現在は、セラフと一緒にハッピーエンド目指して楽しく気楽に第二の人生を満喫中。

もう一つちなみに。

仮に、もし仮に他の転生者に会おう事があったとしても「あー、俺以外にも居たんだ」と思うだけで、特に自分から関わり合おうとは思わない。とりあえずスルーで。

しかし、向うからなにかしらのアクションがあれば別で、協力を頼まれれば協力するし、敵対するならそれ相応の相手をする。この場合の他の転生者とは、所謂オリ主系転生者の事なので、敵対するよりも協力する方が可能性は高い。

不幸が嫌いで幸いが好き、泣いている女の子は放っておけない、ハッピーエンド目指します、コーヒーというよりはカフェ・オレ、コー

ヒー牛乳もアリ、とそんなタイプの転生者たちとは仲の良い友達としてやっていけるだろう。

俗に、“踏み台”と呼ばれる類いの転生者に出会ったとしても同じような事が言える。

超上から目線で周りを見下し、ヒロインたちを自分の嫁扱いする彼らを見ても「またやってる」くらいで、特に自分から関わり合おうとは思わない。むしろ心の中で「まあ頑張つて」の一言くらいは応援する。だが向うは自分が主人公、周りの連中はモブキャラ、または“踏み台”と、そう思っているのだ。なので、必然的に此方にも被害と言うか、面倒事がやってくるのは間違いない。

その場合は正当防衛と言う事で反撃する。こつちから手は出さな
いよ？ あくまで、向うが手を出して来たらの話だ。

加えて、ヒロインたちが心底嫌がっている場面に居合わせたならば、それを助けるくらいの甲斐性は持ち合わせているのが秋介さんである。それがきっかけで“踏み台”転生者に目を付けられようが、知つた事じゃない。人の嫌がる事をする向うが悪い。

あ、いや、別に正義の味方を気取っているワケじゃないです。見て
いるこつちの気分が悪いだけなんで。気にしないでね。突つかかっ
てくるのは別に良いけど程ほどに。

あまりにしつこいと宝具でドカンとやるよ？ もしくはズドンと
か。もしかしたらズバアかもしれない。はたまたグサアかも。

結果的に、ヒロインたちを助けた事によってほかの転生者たちをよ
りも先にフラグが建つ事になってしまふのだが、本人から言わせれば
「吊り橋効果は一時的なモノ」。

いずれ気のせいだったと、彼女たちが気付くだろうと思ひ特に気に
する事は無い。

……まあ、最終的には気のせいでは済まなくなるのだが、それはか
なり先のお話である。

とまあ此処まで書いていて何だが、結局の所、彼の世界には他の転
生者は存在しない。

なので、上記の事は「もし秋介以外に他の転生者が居たら」という

もしもの世界のお話。だから特に意味はない。ええ。意味はありませんとも。

特典

“Fateシリーズに登場する全ての宝具を使える”

・特殊能力系の宝具はそれ相応の強さになってから使えるようになる。

・特殊能力系と常時発動系の宝具にはON/OFF機能付き。

“全ての宝具を真名解放が出来る”

“全ての宝具に非殺傷設定が出来る”

“一晩寝たら体力と魔力が回復する”

“魔力量の成長限界突破”

おまけスキルその一。

「女神の寵愛EX」

皆さんご存知、日本最古のヤンデレお母さんことイザナミさんから、母の愛的な感じの寵愛。

国産みの神、黄泉の主宰神、日本の総氏神であるアマテラスの母親、と言うか日本の神々の母親とかいうとんでも設定なイザナミさん。

そんなとんでも女神様からの寵愛なら、本人が指定しようがしまいがランクはEX になる。

効果としては、身体能力の向上と身体及びリンカーコアへの魔力的負荷の軽減、加えて宝具による自身へのデメリットの軽減もしちゃう、結構な過保護っぷりだったりする。

宝具デメリットの軽減とはつまり、どこぞの古代ペルシャの大英雄の宝具を使ったとしても、五体四散ではなくその翌日に、全身筋肉痛に襲われる、と言った具合になる。

まあ簡単に言うとう「自滅・特攻系の宝具を使うと翌日に相応の筋肉痛が襲います」と言う事だ。

……きつちりアメとムチを使い分けるイザナミさんは、やっぱり母親である。

あとちなみに、某幽霊少女と話したり触れたり出来るようになったのも、このスキルのお陰だったりもする。どうして出会って直ぐに見えなかったのか、それは簡単。

向うからの接触が無かったからである。

つまりは某幽霊少女に「敵？」と思われたからで、彼女は妹を見守るためについて来たのだ。そんな妹を打ち負かして家に転移で連れて行った少年を警戒しない筈がない。

……まあ、行った先での思わぬ出会いによって一瞬にして「なんだ、良い人だ」と認識が変わった為に翌日の出会い方になった、と言う事だ。

おまけスキルその二。

「神授の智慧EX」

イザナミさん、イザナギ、アマテラス、ツクヨミ、スサノオたち五人のノリと高いテンションによって改良された、ギリシャ神話の大賢者先生の「神授の智慧A +」とは似て非なるスキル。

効果としては、「皇帝特権」や「星の開拓者」といった特定の英雄が持つスキルも含めて再現・取得可能なうえ、取得した各スキルは、最初はE、自身の成長に合わせて最終的にはAかEXまで上がる、と言ったモノ。

このスキルによって魅了系や自身にデメリットになるスキルは再現・取得出来ない。

が、その分他のスキルの効果がブーストされる、なんておまけ付き。つまり、気が付いたらいつの間にかスキルを取得している「全自動スキル取得スキル」である。

しかも再現・取得したスキルにはON/OFF機能付き。

だが大賢者先生とは違い、再現・取得したスキルを他人に授ける事は出来ない。

出来ないのだが、どこぞのローマ皇帝のように一部の、スキルの効果のみを付与する事は出来ちゃったりなんかする。

取得スキル一覧：無印編終了時

「対魔力A」「魔力放出A++++」「直感A」「気配遮断B+」「情報抹消D++」「騎乗A+」

「人間観察C」「縮地B」「千里眼C++」「魔力放出(炎)A++++」「中国武術C+」

「気配感知D++」「魔術A+」「呪術A+」「高速神言A」「射撃C++」「啓示C」

「宗和の心B」「無窮の武練E++」「支援砲撃B++」「道具作成C+」「陣地作成B+」

「コレクターB」「矢避けの加護C」「怪力D」「奇跡B」

ちなみに普段は「女神の寵愛EX」と「神授の智慧EX」以外のスキルはOFFにしている。

デバイス

正式名称：ムーンセル・オートマトン

愛称：セラフ

見た目：F a t e / E X T R A c c c v e r . のムーンセル、

大きさはレイジングハートより一回り大きい

イメージカラー：海のような青

特技：お茶淹れ、家事の手伝い

好きなもの：マスター、記録する事

苦手なもの：特になし

次元世界一のデバイス、セラフさん本機である。

基本はペンダント型で首から下がっているが、形状の変化は武器タイプからアクセサリータイプまで基本何でもオツケー。偶に、と言うかうちに居る時はほとんどフワフワと宙を浮いている。

性能的には、インテリジェントデバイスとしての機能を持った”事象の書き換えが出来ない”だけの、全てを観測し記録するF a t e / E X T R A シリーズのムーンセルと同じである。

一部宝具のON/OFF切り替えや重量調整、魔力的サポートに戦

闘補助、さらには晩ごはんの献立を考えるのを手伝ってくれたり日替わりでお茶を淹れてくれたり、財布の紐の管理もしてくれる割と所かなりデバイスらしくないデバイスである。しかも、インテリジェントデバイスにしてもかなり感情が豊か過ぎるデバイスでもある。

だってそれもそのはず。おまけスキル「神授の智慧EX」をノリと高いテンションによって改良（魔改造）を行った直後の、イザナミさんたち五人のさらに高いテンションによって設定されたデバイスなのだから。

まあそれはそれとして。

性能的な話の続きとしては、記録されている情報の中には魔法云々以外にも魔術や呪術と言った古今東西あらゆるモノが記録されていたりする。

本機曰く『マスターが居なくてもAランク程度の魔導師の相手は出来ず』との事。

……デバイスがそれってどうなのだろうか。

まあそれこそが持ち主の在る、知能を持った全てを観測し記録する月の目モドキなのだけど。

セラフさん人の姿ver.

人の姿での名前：月乃 乙女

見た目：黒髪で、長さは肩に触れない程度、瞳の色も黒

身長はなのはと同じくらい、体重は秘密

イメージカラー：夜を明るく照らす月の光

魔力光：月白

総魔力量：測定不能

魔導師ランク：推定AAA

特技：デバイス状態と同じ

好きなもの：デバイス状態と同じ

苦手なもの：デバイス状態と同じ

——人の姿になれば、それは、マスターと同じ生活が出来ると言う

事ですよね？

と、セラフが考えたのが事の始まりである。

リニスがテストロッサ家と一緒に帰っていた日の翌日。

マスターがふと「うちの中が静かになったね」ともらしたのを聞きました。確かに、とそう思います。だってリニスさんが居ましたから。

この世界で、私が初めてマスターと出会ったあの日から、……昨日の朝まで。ずっと。ですが今は、普通なら二世帯が余裕を持って暮らせる家に、マスターがただ一人だけです。

……これは私がかするしかないですよね……！

私は常にマスターの傍に居るようにしていますが、やはり私はデバイスです。リニスさんとは違って人の温もありません。

や、別に無いだけで出来ない訳じゃないんですよ？ 自分の表面に温もりっぽいモノを再現すればいい訳でして、でも、それだとなんか違うような気がするんですよー。

やっぱりこう、無機質な平面より人肌な軟らかさが必要というか。マスターは知らなかったでしょうが、リニスさんのようにマスターの頭を撫でて一人ではないですよ、大丈夫、私が居ますから、とかそんな意図を隠して微笑みたい。手をつないでお散歩とか、照れ顔のマスターに抱き着くとかもしたいですよ。

……マスターとのそういった生活は楽しそうで――。

あ、そうか。コレもうあれですよね。私が人の姿になれば良いだけじゃないですか。

簡単ですね。

という訳でそうしました。自分に記録されたあらゆるモノを参考に、新しい魔法を生み出しました。シミュレーションもバッチリです。

でもマスターに人の姿の説明をする際は、どんな理由で説明しましょうか……。

正直にマスターが寂しそうだったからです、なんて答えたら、絶対にマスターは誤魔化すでしょう。セラフが居るから寂しくない、と

か、なのはたちもいるから大丈夫、とか。前者に関しては私個機としては非常に嬉しい事ですが、それは良くないです。なのはさんたちだって一緒に住んでいる訳じゃないですから。

此処は今日まで、ひいてはこれから先ずつとマスターの傍でキラリと輝く次元世界一のデバイス、私ことムーンセル・オートマトン、セラフがその辺り、ええ、一回ガツンと本音をぶつけるしかないですかね……!?

話が脱線しました。戻しましょう。

ともあれマスターに説明するのなら「お帰りになったリニスさんの代わりに私が対人戦闘訓練の相手をするから」と、こんな所でしようか。まあ最近は、特になのはさんが魔法少女になった辺りからはそんなに戦闘訓練とかしていませんが、そこはスルーという事で。人の姿は有るに越したことはありませんから。私が。

他の説明としては「マスターを驚かせるためのサプライズです。どうです。驚きましたか？」や「リニスさんがお帰りになった今、特売でお一人様一点限りの卵とか買うのに便利でしょう」とかありますが、

……前者の説明一発で納得してくれそうですねー、マスターは。決定ですかね説明の方は。これであとはマスターにいつお披露目するか、ですが、それはまだ先にしましょう。タイミングを見計らつて、なのはさんたちとお約束がないようなお休みの日にでもサプライズという事で。

一体どんな反応をしてくれるのか楽しみですね……!

そんなこんなで出来上がった「人」の姿。セラフ自らが望み、考え、生み出した新しい魔法。

——名づけるなら『SERIAL PHANTASM』

自機に貯蔵する魔力によって生成した、マスターと共に日常生活を楽しむための「人」の姿。

厳密には「人間」の体ではなく、フェイトのような作られた生命でもない。ヴォルケンリッターのような魔法生命体でも、もちろん戦闘機人のような体でもない。似て非なるモノ。

人の姿、人の温もり、人の機能を再現した、純粋な魔力の塊、魔力のカタチである。

しかしその体は、怪我をすれば血が流れるし、何も食べなければお腹も空く。食事をすれば満腹になり、眠くなったら寝る。起きた時にはあくびをして、寝ぼけ眼をこすったりもする。

つまり。この姿のセラフはちよつと総魔力量が測定不能で生活・魔法・戦闘的なサポートが得意な、執務官クラスの魔導師を相手取れるくらいの普通の女の子。

魔力で形作られた体なので、見た目は任意で変更が可能。

加えて髪型から瞳の色、身長体重など体型まで自由自在、……のだが。人の姿になる時は必ず“その時のマスターと同じ歳”の姿になろうと決めている。

理由としては「だってその方がマスターと一緒に成長する気分が味わえるじゃないですか」であり、デバイス状態の時に比べて、若干、というより結構テンションが高め。さらには人の姿では相手取れる魔導師のランクがAから執務官クラスに上がっている。

といっても別に人の姿になったからパワーアップした、とかでは無い。その気になれば完勝するくらいワケないんですよ。要は気分の問題。テンションテンション。

普段をどちらの姿で過ごしているかといえば、もちろんデバイス状態の方。だってその方が学校とかついて行けますし。魔法で姿消したり色々と手を回して転入するとか、流星にそこまではしません。私、その辺りはわきまえていますから。

あ、や、マスターとの学園生活とかもの凄い魅かれるモノはありませんよ？ でも、それは私じゃなくてなのはさんたちの特権ですから、私はマスターの日常生活担当と言う事で。ええ。マスターの日常生活は私の特権ですから。

そんなセラフが戦闘訓練の際、とうてい武器には見えない旗を魔力で生成して「穂先に槍がついていますから、つまりはコレで殴れよということですよ」と、どこぞの聖女のような事を言いだすのは、まあ、愛嬌と言うことで此処は一つ。

番外編：夢見る魔法少女じゃいられない

今日こそは、と思った。

勇気を出して声をかける。たったそれだけの事だ。

帰りの挨拶を、ただ一言「さようなら」とそう言えばいい。

ショートホームルーム

S H Rが終わって周りの子が席を立ち始めた。

一人、また一人とクラスメイトが教室を出て行く。

そして隣の席の子が立ち上がった。

……今だ。

同じように自分も立ち上がる。鞆を背負い、自然に、変に思われな
いよう笑顔で、

「……あの。さ」

「せんせー、さようならー」

「ハイ、さようならー。また明日ねー」

「バイバーイッ！」

そう言つて、その子は手を振りながら離れた席の子と合流して教室
を出ていく。それを目で追いかけて、胸の高さまで上がっていた右手
を降ろし、

「よう、なら……」

ふと気が付けば、既にほとんどのクラスメイトが教室を出ていた。
残っているのは自分と先生、黒板の掃除をしている日直の子とそれ
を待つ友人たちだけになっていて、

……また、言えなかった。

今の自分は引きつった笑顔を作っていると自覚する。

息を吐いて表情をリセット。前へと視線をやれば、提出されたプ
リントをまとめていた先生と目が合い、

「さようなら。気を付けて帰ってね」

軽く頭を下げる事を返答として自分も教室を出た。

昇降口へと向う途中、横をすれ違つて行く他の子たちを見て思うの
は、

……これじゃあ友達なんかできっこないよね。

帰りに駄菓子屋さん行こうとか、私の家で宿題やろーとか、そういった会話が聞こえてくる。羨ましい。自分はこのまま帰るだけだ。「はあ」

おはようもさようならも言えないなんて、とつくづく自分が嫌になる。

人間関係は挨拶からと聞いた事があるけどそれは確かだ。だって現に自分は友達がないから。

昨日も一昨日も、そのまた前も。この学校に転入してから一度もクラスメイトに声をかけた事がない。かけられていないのだ。

……周りからはどう思われてるんだろう。

転入初日の自己紹介は大きく失敗したな、と今でも反省している。

お姉ちゃんから「最初はインパクトが大事だよ！」と聞いていたので、軽い挨拶として手からバチツと電気を発生させてみたのだが、

……皆、無表情だったなあ。

遠慮して出力を落としたのがいけなかったか。きつと静電気か何かだと思われたのだろう。

自分でも発生させた電気を見てちよつと色が薄いな、と感じたが、やはりお姉ちゃん言葉に従ってもつと派手にするべきだった。つまらない子だと思われたに違いない。

「百人とは言わないから、せめて一人だけでも……」

おはようの挨拶から始まって昨日見たテレビの話や宿題の話、給食の話。帰りには寄り道をして駄菓子屋さんに行ったり、お肉屋さんのコロッケを買って食べ歩いたり、家に呼んで宿題をやったりお菓子作りをするそんな経験を一度はしてみたい。

だけど、

……難しいよね。

何故なら自分には、いや、私には人に言えない秘密がある。

ごく普通の小学三年生。友達はいないけれど普通の小学生、だと思いたいです。

そんな私、フェイト・テストロッサの本当の姿は――。

く場所と時間は変わって夜の繁華街・上空く

私は、眼下に街灯りが望める位置で今夜も仕事をこなしていた。すでに封時結界は張ってある。

相対するのはこの町に暗躍する魔物だ。しかし、今までの猫型や黒い影と違って、今回の相手は鳥型。空中戦を得意としているために、「ッ、この……い！」

『Photon Bullet』

魔力光弾をばら撒いて牽制、相手の怯んだ隙について魔法のホウキ『バルディツシュ』に跨り、一気に下降する。

『——エエッ！』

「このまま真つ直ぐ！」

『yes sir!』

魔物の放った魔力砲の追撃をそのままに、地面へと激突する勢いで突っ込んだ。目指すは道路標示の『ま』の字。このまま一直線に落ちれば間違いないく頭から激突するだろう。

加えて、追つてくる砲撃は恐らく追尾型だ。避ける自信はあっても避け続ける自信はない。このまま逃げてもいつかは捕まるのなら、……ここだ！

右手に魔法陣を展開。それをアスファルトに叩きつけて砕き、爆風を利用して進路を変更する。

背後からアスファルトの破碎する音を聞きながら、そのまま道路沿いに大通り方面へと飛行していく。

そして大きな交差点を抜けた所で上空からの一撃が落ちてきた。振り上げばこちらの頭上。一つの影があった。

『……い！』

両の翼を広げて、魔物が咆えた。

「——来るよ。バルディツシュ！」

『yes sir!』

次の一撃で仕留める。それで今日の仕事は終わりだ。

あとは帰って明日の準備を終わらせれば、とそこで一つの事に気が

付いた。

……まだ宿題が残ってるよ……！

確か今日の宿題は漢字の書き取りをノート一頁分だけ？ うわ
苦手科目……！ 同じ読み方なのに字が違うとか同じ漢字でも読み
方違うとか、こつちの世界の言語文字は複雑過ぎる。

聞いた話では特にこの国の言語は難しいらしいが、

……お姉ちゃんは、そうでもないんだよね。

本人曰く「直感的な？ カタチから意味を察するとかそんな感じ感
じ」読みはともかくとしてそれで私より漢字が綺麗に書けるのは、
ちよつと納得いかない。

とはいえ、ここでお姉ちゃんとの差を思っても仕方ない。現状、翼
を閉じて、加速を得た魔物が一直線に落ちてくる。

回避の必要はない。こちらはただ、それを極大で迎え撃つ。それだ
けだ。

「サンダーレイジ——」

『——!?!』

捕らえた。

雷光の一撃が魔物をアスファルトへと縫い付ける。
落ちた魔物は、しかし悲咆混じりの一声を上げた。

同時に周囲へと魔力が放出され、それは複数の円形へと形を変えて
いく。それはきつと、この魔物の最後の一撃だろう。

バルディッシュを振り上げたこのタイミングで砲撃されれば、間違
いなく直撃する。回避行動を取るには既に遅い。防御も間に合わな
い。だが、

『Photon Burst!』

攻撃こそが最大の防御でもあると、そう以前に教わった事がある。
それを私に教えてくれた猫耳のメイド長は、ワンドを手にこう言っ
ていた。

「敵の攻撃を回避不能だと判断した場合、通常はそれをラウンドシー
ルドなり何なりで防ぎますが、戦闘中なら両手が塞がっているという
のは常。よくある事です。大技を発動するタイミングなんてそうで

しょう?」

例えば、

「魔物との戦闘において、戦いを長引かせないためにも相手を拘束、または隙をついて一気に大技で勝負をつけようとしています。しかし、同時に相手もそれを好機と一撃を放とうとします。

こちらは大技のために両手が塞がっていて動けず、さらには魔力の大半を発動に回しているので防御魔法を碌に張る事ができません。ならばどうするか、分かりますか?」

「魔法の発動をキャンセルして、一度回避してから再度大技の発動を狙う……?」

「惜しい。ただの魔物相手ならそれで十分でしょう。しかし現在、フェイトが担当している地域の魔物は他と違って野生動物を模ったものが多く、所謂野生の勘を持っています。再び同じ方法で挑んでも成功するかは怪しい所ですね」

「じゃあ、どうしたらいいかな」

「いいですか、フェイト? 貴女には母親譲りの『雷撃』があります。

古来より神の一撃と恐れられるそれは、魔法の中でも群を抜いた速度を誇り、それに伴った威力を持って敵を打ち砕く事ができる。……単純に言ってしまうえば、相手に攻撃される前にこちらが攻撃してしまえ、という事です。——このように」

と、いきなり動きを作った訓練用の傀儡に、見本として放った高速の一撃がたまたま近くの陰からこちらを覗いていた母さんを巻き込んで直撃したのだが、そこに執政官が現れて仕事に連れ戻すまでがいつものパターンだ。

あの時。彼女は念を押して私に言っていた。ですが、という前置き付きで、

……そんな状況になってしまったら、迷わず回避を選ぶ事。やられる前にやれの精神は発揮してはいけない、だっけ。

攻撃は最大の防御にもなるが、それが逆に諸刃の剣にもなるという事だ。それでもなお、そういった状況に陥ってしまう可能性はある。もし、そうなってしまったのなら、

……確実に勝てる状況であるのが、絶対の条件……！
それが成立している場合に限って挑むべきだと、彼女はそう言っていた。

ならば、今の状況はどうであるか。

魔物は拘束され、最後の一撃を私に放とうとしている。こちらも既に発射段階だ。あとは振り上げたバルディッシュをそのまま下に落とせば、

「フォトンバースト——ッ！」

上天よりの雷撃を魔物にぶち込んだ。

く……ふうく

『Mission Complete』

「お疲れ様。バルディッシュ」

魔物が消滅した事によって封時結界が解除されていく。その光景をビルの上から眺めながら、私は、はあ、と息を吐いた。

……疲れたあ——。

最後の―撃に、思った以上に魔力を持っていかれてしまったと思うのは、私が未熟だからだろうか。絶対に帰って布団に入ったら一瞬で寝落ちすると、そんな気もする。まだ宿題が残っていると思うと、かなり億劫だが、

「一件落着、だね」

『はい。お疲れ様です。先ほどの―撃はお見事でしたよ、フエイト』

「——えっ。リニス!？」

別に、誰に向けて言った言葉ではなかったのだが、思わぬ反応に驚いて待機状態に戻ったバルディッシュを落としそうになった。危ない危ない……。

「どうしたの？ 急に」

『明日の朝、アルフを迎えにやりますから一度こちらの世界に戻って来てください。女王が貴女に直接会ってお話したいそうです』

「……もしかしてメールじゃ話せないような内容？」

と、手元に表示された空間モニターの中。猫耳の彼女は苦笑して、『ええまあ、大体はそんな感じで。ほとんどはただ単にあの人が貴女に会いたいがための口実ですが』

「先週帰ったばかりなのになあ……」

『まったくです。彼女は心配が過ぎるといふか……。なんであれ、貴女が顔を見せれば彼女も安心するでしょう。明日、待っていますね』
そう言って、通信が切れた。

同時に、封時結界が完全に解けたのか、段々と下の方が騒がしさを増していく。

携帯を取り出して見れば、時刻は既に十時過ぎ。転移魔法を使って家に帰ったとして、そこから宿題を始めると恐らく一時間ほどで終わるだろう。多分。きっと。それから明日の準備をして、お風呂に入つて、

……あ。そういえば明日は創立記念日で学校休み……。

確かそんな事を担任が帰りのSHRで言っていた気がする。いかに友達が欲しくても、どうやって声をかけるかに集中して先生の話をおろそかにしてはいけないな、とすごく反省。

「だから朝に迎えに来るんだ」

迂闊だった。それなら無理に今日宿題をやらなくてもいいよね。明日やろう。向うから帰って来たら、いや、むしろ向うでお姉ちゃんと練習も兼ねて一緒にやろうかな。その方が、きっとお姉ちゃんも喜んでくれる。

「帰ろう。バルディッシュ」

言うと、魔法陣が展開された。

足元に広がるのは私の魔法と同じ金色のサークル。これを見ると、つくづく自分は普通じゃないなあ、と実感する。こういった所に友達ができない原因があるのかもしれないが、今私が思うのは、

「今日も無事、町を守る事ができたよ」

そう。それが私の役目。

私、フェイト・テストアロツサの本当の姿は、——魔法の国からやって来た魔法少女だったりします。

魔物と戦い、町の平和を守ったり守れなかったり、……そんな日々を過ごしています。

……それにしても、ホウキ以外の友達ほしいなあ……。

魔法の国

「転校、……ですか？」

唐突に、女王からそんな言葉を告げられた。

「そう。配置換えがあつてね？ 貴女の担当区域が変更になったの。魔物退治の成績を考慮して、まあ栄転と考えていいわ」

「でも、母さん……」

そんな急に、と思つた時だ。女王の横に控えていた執政官が、言葉を作つた。

「今の学校に親しいお友達もいないみたいだし、いいですよね？」

「フェイト」

「うぐつ」

「一言多いですよリンディ様……」

「でもリニス。うちの子はフェイトと同じくらいの時にはもう現地で沢山の友達を作つていたわよ？」

「ぐはっ」

「一緒にしないでくださいよ……」

これ以上は私の心の傷が深まるばかりだ。早々に話題を変えよう。

「……わかりました。それで新拠点^{転校先}は、私はどこに？」

聞くと、母が笑みを作り、こう言つた。

「海鳴市、——私立聖祥大付属小学校」

くすくす緊張する

「というわけで転入生のフェイトちゃんよ。皆、仲良くしてあげてねー」

「ふえ、フェイト・テスタロッサです。今日から、お願いしましゅー！」

一瞬、前回と同様にインパクト重視か、それとも普通に自己紹介をするか悩んだのがいけなかった。お陰で最後に声が裏返ってしまった。

すると何故か、おー、という声上がり、拍手が巻き起こった。横で先生も同じように手を叩いているが、

……え、えっ!?

「ねえ今の聞いた？　お願いしましゅだって。うん。——チョーカワイイ」

「金髪赤目、しかも日本語達者な帰国子女とか。うん。——チョーカワイイ」

「雰囲気的に見ても間違いない。うちのクラス三人目のお嬢様だ。うん。——チョーカワイイ」

「ファンクラブ作らね？」

最後だけよくわからないけどこの状況は、多分歓迎されているんだろう。誰一人として無表情じゃないし顔が引きつってもいない。誰も彼もこちらに笑顔を向けてくれている。

いや、若干一名、窓際の席の男の子が机に突っ伏して寝ているが、それに気が付いた先生がチョークを直撃させたので特に問題なし。

……け、結果オーライ……??

先生の技術に内心驚愕しながら、空いている席へと足を運ぶ。

後ろから数えて三番目。先ほどチョークが直撃した彼の隣の席だった。そして、

「じゃあ今日の一時限目は予定を変更して自習にします。いい皆？

席を立っても良いけど教室からは出ちゃダメよ？　あと他のクラスは授業中だから騒がない事」

「それって先生が自習中寝るから起こすな、って事？」

そう言った彼に再度チョークが叩き込まれた。この教室では失言をするとチョークが飛んで来るらしい。気を付けないと。

「それじゃあ皆？　別に転入生ちゃんを質問攻めにしても良いけど節度は守るように。オツケー？　ならよし。以上の事を踏まえて、自習開始——」

と、先生が一瞬で教師用のスチール机に突っ伏した。生徒の居眠りは注意して自分はいいいのか、と立場の差を実感した所で、一人のクラスメイトが立ち上がった。そして、

「あのー、テスタロツサさんってどこの出身ですか！」

「好きな食べ物とかある!？」

「前の学校ってどんなところだった!？」

「フェイトちゃんって呼んでいいかなー！」

「兄妹とかがついたりするの!？」

その子を皮切りに、次々とクラスメイトが殺到してくる。

えっと、その、と私が戸惑っている間にも質問は増えていき、ついには席を取り囲まれた。

……助けてお姉ちゃん——ッ！

そう心の中で叫んだ時だ。右斜め前の席の子が立ち上がった。

金茶の髪を腰まで伸ばした彼女は、質問を続けるクラスメイトに割って入って、

「はいはい、みんなそこまで。先生が騒ぐなって言ったでしょ？ 起こすと回転加わったチョコクが飛んでくるわよー。質問は一人一つまで、いっぺんに聞かないの! —— 一列に並びなさい! ——」

驚くほど綺麗に列が形成された。きっと彼女はこのクラスの女王、失礼の無いようにしないと。

「あの、ありがとう……」

「いいのよ気にしないで。あたし、アリサ・バニングス。これからよろしく。——あ、こちらそこー！ 横入りしないの! え？ 自分の方が先に並んでた？ 周りの子は見てないの？ ならじゃんけんで決めなさいよ」

と、アリサは列の後方へと仲裁に入っていった。そして交代するよ

うに、今度は紫髪の女の子がやってきて、
「それじゃあみんな、そこの仲裁が終わるまでに何を質問するか考えておいてねー、と。……あはは、話の途中にごめんね？ アリサちゃん、ああいうのを放っておけない質だから。」

あ、私は月村すずかです。よろしくね」

そう言つて、さすがが微笑んだ。すると右隣の席の子が、手をそつと挙げ、

「あのー。わたしも自己紹介いいかな？　　すずかちゃんたちだけずるいよー」

……あ。

「わたしは高町なのはつていいいます。……フェイトちゃん、でいいかな？　　わたしもなのはでいいよ。これからよろしくねー」

この教室で、——私は、運命的な出会いをした。

理由なんてない。一目見てそう思った。

ただそれだけで、私には十分だ。

この子と友達になりたい。

この子を守りたい。

私は、そう感じた——。

く……キユルルルく

バルデイツシュを通して執政官の声が聞こえる。

魔法の国からの魔物の出現や緊急時用の連絡手段だが、声の慌てようからして相当な事態なのだろう。

そこで私は寝返りの動作で枕を抱き、

「う、ん……。それはふしぎなであいなのです……」

『フェイト！　起きなさいフェイト！　　出撃よ！　　もうっ出撃なんだつてば——ッ!!』

く……キユルルルく

完全に出遅れた、と私は夜の街が大樹に覆われているのを眼下に見た。

……根がこんな所にまで……!!

「私のせいだ……ッ」

出撃が遅れて、そのうえ本体の位置を見誤ったのが原因だ。

今回の魔物は植物型。初めは小さな苗木程度で「フォトンランサーで一発かな」と高を括り、執政官の緊急目覚ましコールを三度無視したのがいけなかった。

……私の顔も三度までつて言うもんね！

あんな執政官の低い声は初めて聞いた。あれはリニスと一緒で本気で怒らせちゃいけないタイプだ。そんな人を母さんは毎日仕事を抜け出すなりして怒らせていたと思うと、あの性懲りのなさには呆れを通り越して尊敬するレベルだが、

……苗の成長速度が異常だ！

執政官が慌てて連絡をよこすのも頷ける。今回の相手は今までの中で一番厄介な相手だ。

核となる本体が四方に張り巡らされた根を移動していて、どこに狙いを付けたらいいのかが分からない。

「どこに……ッ！」

『見つけましたよフェイト！ 十時の方向、大樹の幹部分です！ だけどこれは——』

執政官の声を聞いて現場へと飛んだ。こちらを捉えようと伸びてくる根を回避しながら、速度を上げる。

「そんな——」

辿り着いた先。大樹の中央部に、一つの影を見つけた。

見間違うはずがない。そこにある栗色の髪を両側で結い、白の制服姿の彼女は、

「——なのはッ！」

恐らくはこの魔物の本体であろう核の輝きの真下に、彼女は囚われていた。

……私のせいだ……！

私の油断が、なのはを巻き込んでしまった。

本来なら魔法文化の無いこの世界の住人は、封時結界に入るどころか認識する事すらできないが、極稀に魔法を扱える才能を持って生まれてくる事がある。ほとんどの場合はその事に気付かず生涯を終えてしまうのだが、

「待ってて」

魔法文化の無い世界において、しかし魔法の才能を持って生まれた者は、魔法文化に触れる事でそれが開花する可能性がある。つまり、……今日の出来事で、なのはの才能が開花してしまうかもしれない！

もしそうなってしまったら私はどうすればいいんだろう。

なのはに全てを話したとして、それでも今まで通り友達として一緒に居られるのだろうか。

……きつと、なのはは驚くよね。

どんな反応をされるだろう。笑って、すごいね、とそう言ってくれらるだろうか。それとも、もう一緒に居たくない、そう言われても仕方がないとも思う。

そう言われるだけの危険な目に彼女を巻き込んでしまった。だから、

「撃ち抜け、轟雷——」

……絶対に、助けるから……！

「サンダースマッシュャー……ッ！」

く……キユルルルルく

酷い夢だ、と私はモニターに流れる映像を見つめていた。

画面の中ではちょうど私が特大の一撃を大樹にかましてなのはを救出、そのままお姫様抱っこで近くのビルへと避難している場面だ。

「明晰夢っていうんだっけ……」

夢の中でこれは夢だと気が付く夢。でも、流石に夢の中で夢をビデオで見るっていうのはどうかと思う。

「お姉ちゃんと一緒に見たアニメが原因かなあ」

多分、この夢にはリンディさんが持って来てくれたアニメの内容に影響されている。

……寝る前に見たのがいけなかったか。

私たちは近々地球へと引っ越す事になり、母さんとリニスはその手

続きの為に管理局本局へ行った時の事だ。リンデイさんが心配して様子を見に来てくれた際に、暇つぶしに、と地球のアニメを元にミッドチルダのテレビ局『ミッドウ卿』が制作した『魔導師少女トランプキヤッチャー☆フローズン』を持って来てくれたのだが、

……内容が、主人公の女の子が願いを叶えるために地球にバラ撒かれた五十二枚それぞれ違う能力を持ったトランプを集める、って。

そこはかたなくジュエルシード事件に似ているアニメをチョイスしたのは、リンデイさんの天然だろうか。あの人の事だからエイミィさん辺りに相談して選んだんだろうけどもうちよつと違うのは無かったのかな。

夏の旅行からもう一か月。こんな夢を見たら早く皆に会いたくなつちやうよ。

「それにしても、なのはがヒロインっていうのは納得だけど……」
と、ビデオを少し早送りする。

なのはを救出した私が、魔物に止めの一撃を放った場面で再生。雷撃が大樹へと直撃し、

『やった……!?!』

それはフラグだろう、と思うなりそうだった。

撃ちそこなった核が大樹を再生し、死角からの一撃を私へと振り抜いた。

『フェイトちゃん……ッ!』

直後。私が吹き飛ばされた。

……うわ。あれは痛い。

魔物が追撃として大樹を伸ばして来る。しかし、それを私は回避する事ができなくて、

『おっと危ない』

「あ……」

どこからか現れた黒の外套が、私を攫った。

その動きはゆっくりりと、しかし魔物の攻撃を受けぬよう下をくぐつて、

『え……?』

一瞬の内に、私は黒の外套に抱えられて上空へと移動していた。
多分、転移魔法だろう。

私を抱えている外套姿の足元に展開された月白色の魔法陣には見覚えがある。それは、私に驚きと安心と、幸いをくれた人の物だ。

『もう。マスターが「見せてもらおうか。新しい担当ちゃんの強さとやらを」とか言って傍観決めているからこうなるんです。——あと一歩遅れていたら大変な事になってましたよ』

『全くもって申し開きの言葉ありません。以後、超気を付けます。……でもまあ、間に合ったからいいよね？ 新しい担当ちゃん』

『……え？』

目深に被ったフードで顔は良く見えないが、声と口調、そしてキューブ型のペンダントとの会話を聞く限り違いない。

『あの』

『ああ、そういえばこの姿だとまだ会った事なかったっけ』

そう言って、画面の中の彼が首を振る動きでフードを取った。私を抱えたまま、なのはが見上げるビルの屋上に向かってゆるりと下降しながら、

『なのはを助けてくれてありがとう。それと、これから学校でもこっちの仕事でも、どうかよろしくね』

『……夢の中でも私を助けてくれるんだね。秋介』

出番は学校でのチョークシーンだけだと思っていたけどなんのその。主人公のピンチに駆けつける現地の魔導師役とはハマってる。実際にもそうだし、何より登場の仕方がずるい。

……いくら夢の中でも、お姫様抱っこは恥ずかしい。

映像といっても抱えられているのは私だ。見ているだけで頬が熱くなる。

『ずるいよ。もう……』

夢の中での彼の扱いがここまでという事は、私の中で彼はどれだけ大きな存在になっているのだろうか。

それはきつと感謝の気持ち以上のものだ。

恩人ともちよつと違う。同じ魔導師で、同じ相手に魔法を教わっ

て、最初は敵対したけど笑顔で受け入れてくれて。私の大切な人を助けてくれた。

リニス。母さん。そしてアリシア。

私だけじゃない。もし、皆が秋介と出会っていなかったら――。

「……ううん。違う」

多分、それは考えたくもない結末になっていたと思う。だけどそれでも私は前に進んだはずだ。

たらかねばとかそんな話は関係ない。過去の可能性より未来の可能性だ。

今の私が全てだから。

今の私は幸せで幸いだ。幸福と言っても良い。きっと、

「運が良かったんだ」

画面の中ではちようど私と秋介が合体技で魔物に止めを刺したが、何あれ。私たちそんな技持っていないよ。この前なのはとフォーメーションでも作ろうか、って話にはなったけど秋介とはまだなのに。

……先を越されちゃった――。

いいもん。今度会った時に作るから。夢よりもすごいのを絶対に作ってやる。

「は」

何だか急に眠くなってきた。

という事はつまり、

「夢はもう、おしまいかな」

きつと、そろそろ起きる時間。目が覚めたらまたいつもの朝になっているのだろう。

この夢の事は覚えているだろうか。分からない。ただ、

……私のこの想いは、現実だ。だから、

「次に会える日が楽しみ」

くそして目が覚めてく

「という夢を見たんだ」

「お姉ちゃんなのに一回も出番がなかったあ——!？」

それはまあ、ほら、アルフも同じだから。

「……あれ？　そういえばユーノは？」

「あっ」

名前すら出てこなかったなあ。

原作前

プロローグ：二つの山

空が黄色い。

そこに雲は無く、ただ、黄色が広がっていた。

それを、寝転がって俺は見ている。

「まじかー」

なんとなくだが、自分の状況が理解できた気がする。

……これって、もしかして……。

俗に言う、あれかな？ 二次創作でよくある――。

「ん？」

……頭の下に、なんかある。

後頭部が、軟らかい”ナニカ”に乗っている。

頭を動かしてみると、フニフニと弾力があり、顔を動かしても崩れない”ナニカ”。

うーん、と考えながら頭でフニフニしていると、

「ふふふ」

唐突に、頭の上あたりから声がした。

「へ――？」

声の方を見ようと顔を向けると、横に布で覆われた大きなふくらみがあった。

……山……？

違う。こんなところに布を被った山？ があるわけがない。

触ってみると軟らかく、弾力があつた。

なんだコレ、と考える。

触った”ソレ”は、今なお後頭部に感じる”ナニカ”と同じ感触だ。

そして、先ほどの声。あれは間違いなく女の人の声だった。

今の自分の状態と、軟らかい”ソレ”と”ナニカ”に加えて女の人の声。

導き出されるのは……、

——胸か——！

「えっと、その、——ごめんなさいい!!」

考えが至るや否や、俺は即座に起き上がり、土下座する。

「あら、もういいんですか？ ふふふ、気にしていませんから、顔をあげてください」

言われ、顔をあげると、さっきまで自分が寝ていた所に一人の女の人が座っていた。

「……誰？」

「神様です！」

ものすごい笑顔で言われた。

マジで？ 神様って、ええ!?

「……お名前は？」

「イザナミです」

ははは、……それって、

「……天照大御神とかの、お母さんの？」

「あら。よくご存じですね」

ゲームとかアニメで、興味持って元ネタになってそんな神話とか、色々調べていた時期があっただんで。

「……神様が俺なんかにごんご用件で……？」

……いや、まあなんとなく予想はつくけど。

「あ、予想はついているんですね。なら、話は早いです」

考えを読まれた!?

「ふふふ、私、神様ですよ？」

それを言われると納得するしかないあ。

「——単刀直入にいいいますが、貴方は死んでしまったんですよ
ですよねー。なんか知っているようなシチュエーションだったし。

「やっぱ、死んでたかー」

「……覚えています？ 死んだ時の事」

「うーん。なんか、……ガラス？ みたいなのが降ってきた」

確か、学校帰りで駅に向かっていている時の事だ。

なんとなく、いつもと違う道を通って帰ろうとして、信号待ちをしていた時だった。

危ない！　と言う誰かの叫び声が聞こえ、ふと上を見たら、ガラスのようなものが降ってくるのがゆっくりと見えた。

「そうです。……そして私は、貴方に謝らなければいけません」

何故？　もしかして、俺が死んだのってイザナミさんの所為だった感じ？

「似たようなものです。本来、貴方はあの場で死ぬ運命ではなかったのです。」

私の子供たち、……アマテラスとスサノオが喧嘩をしまして、それを止めに入ったツクヨミも加わってしまい……、その影響が少なからず、人間界にも出たみたいでして……」

……え、喧嘩!?

「それで俺、死んだの……?」

「……はい……」

「他に死んだ人は……?」

「いません……」

本当に、申し訳ありません、と頭を下げるイザナミさん。

「死んじゃったもんは仕方ないですって。気にしていませんから、顔をあげてください」

「ですが……!」

……親や友達を悲しませただろうなあ。

録画していたアニメやドラマ、クリアしてないゲームに読みかけの漫画やラノベの続きが気になる。

だけどそれでも、イザナミさんは謝ってくれた。神様なのに、頭を下げてまで。

だから、

「ほんと、気にしてないですから。何だったらさっきの、その……胸、……を触っちゃったのでチャラってことで」

謝罪の言葉だけで十分だ。

俺以外の犠牲者はいないみたいだし。

「……ありがとうございます。それで、ですね、……貴方を転生させようと思います」

「転生……?」

「今回は我々の不手際で貴方は死を迎えてしまったので、お詫び、と言うことです。」

——所謂、第二の人生、を差し上げます」

……ほほう。それはありがたい。

二度目の人生はめちやくちや楽しんでやる……!」

「そこで、貴方には選択をしてもらいます」

「選択って、転生先選べるの?」

「はい。まず一つ目は『生前と同じ世界』 二つ目は『生前と同じ世界だけど違う時代』 三つめは『アニメやゲームなどの世界』です。どこがいいですか?」

「三つ目で!!」

「ふふふ、即答ですか」

やっぱり、と笑顔になるイザナミさん。

「当たり前だ! アニメとかゲームとか、二次元の世界に行けるなんて最高じゃないですか!」

「それで、どこの世界に転生できるんです!?!」

「そうですね……。貴方が最近、はまり直していた『魔法少女リリカルなのは』の世界なんてどうですか?」

「マジで!?!」

「よろしいですか? では、特典を五つ、決めて下さい」

「へ、五つ?」

特典って、あれかな。

よく二次創作とかである、所謂、チートな能力をもらって異世界へGo! みたいな?」

「その通り、何でもいいですよ。好きなモノを選んで下さい」

「うれしいけど、何で五つ? こういうのって大抵、三つまでとかだよ
ね」

そういった二次創作の小説とかを読んだことがあるが、基本的には

二、三個ぐらいだ。

「さつきも言ったように、お詫びだからです。原因となったアマテラス達三人と親である私と夫——イザナギの二人分です。——子の責任は親の責任、とも言いますからね……」

「……そっか」

それなら、遠慮せず選ばせてもらおう。

「じゃ、一つ目はデバイスの——」

「ああ、それでしたら別枠でお聞きます」

設定を、と言おうとしたら、先にイザナミさんが言った。

「なら改めて、一つ目は『Fate』シリーズに登場する宝具を全て使える」で。

——でも、特殊能力系の宝具は、自分がそれ相応の強さになってから使えるようにしてください」

「構いませんが……」

何故？ と頭に疑問符を浮かべるイザナミさん。

「その方が鍛える楽しみが増えるし、自分が強くなったって実感できるところから」

……使うかわかんないけどねー。

どちらかと言うと武器・アイテム系の方が好きだし、使ってみたいのよね。

「……変わっていますね。自分から制限をかけるなんて」

「やっぱり？」

「ふふふ、自覚はあるのですね！」

むう。笑われるとは思わなかった……。

自分の顔が赤くなったのが分かる。

「まあまあ、ふふふ。それで、二つ目はどうします？」

「んー、じゃあ二つ目は『全ての宝具を真名解放できる』でお願いします。使えるだけじゃ意味が無いので」

「なるほど。それもそうですね」

「三つ目は『全ての宝具に非殺傷設定が出来る』でお願いします」

武器系とか破壊兵器だからね。間違っても人殺しとかしたくない。

「それで、四つ目は『一晩寝たら体力と魔力が完全回復する』で。……次の日まで疲れが残るの、嫌ですから」

「やっぱり、朝は気分よく起きたいよね！」

「五つ目は『魔力量の成長限界突破』でお願いします」

「最後は無難な感じで良いよね。」

「わかりました。では、デバイスですが、何かご要望はありますか？」

「インテリジェントデバイスにしてください。それで、性能はFat e／EXTRAシリーズのムーンセルと同じ性能でお願いします。」

「……あ、『事象の書き換えができる』は無しで」

「さすがにそこまでは要らない。特典で『Fat eシリーズの宝具を全部使えるように』と『魔力量の成長限界突破』を頼んだが、別にそれで無双をしたい訳でもない。単純に宝具を使ってみただけ。」

「……だって、ビーム撃つたり名前叫んで攻撃とか、誰でも懂れるよね？」

「原作にだって関わってハッピーエンドにしようとは思うけど、ハーレムはどうでもいい。」

「主人公たちとは友達くらいになりたい。だってその方が気楽でしよ。」

「あら、それでよろしいのですか……。では、他の性能はどうしますか？」

「ふふふ、と口元を隠して笑うイザナミさんは、どこか楽しそうだ。」

「他は、……無いか……。イザナミさんにお任せで」

「特にこれといって思いつかないし。」

「わかりました。そう言う事なら期待しててくださいね。……それで、魔力量はどうしますか？」

「最初はそんなに高くなくていいですよ。頑張って鍛えるから」

「……そうですか……。——では、次で最後になりますか？
なんでございませうか？」

「——転生の前に、ご家族を一目見て行きますか……。？」

「それは。」

「……やめとこうかな」

「何故ですか？」

「——だって、泣きたくなつちやうじやないですか……」

今だって、泣きたいし、謝りたい。先に死んでごめんなさい、と。

「ははは、……我慢してたのに、——なんで」

涙が、溢れてくる。

「泣いてください。好きなだけ……」

「ううっ——」

イザナミさんに抱きしめられ、

「うあ——！」

一気に涙が零れた。

「我慢するなんて、……男の子ですね、やっぱり」

イザナミさんは、俺の涙を拭い、頭を撫でてくる。

「……落ち着きましたか？」

「はい。なんとか……」

久しぶりに泣いた、と思い今の状況を考える。

イザナミさんの胸を借りていて、頭をなでられている。

……今、絶対顔赤い……！

超が付くほど恥ずかしさが込み上げてきた。

「とりあえず、離して……。……めっちゃ恥ずかしい」

「ふふふ、もう大丈夫みたいですね」

そつと、優しくイザナミさんは離れた。

「では、気を取り直して、転生と行きましようか！」

「お願いします」

「はい！ それでは、行きます——！」

えい！ と言う掛け声とともに、俺の体が、光に包まれた。

「——よい、人生を。戸田・秋介とだしゅうすけくん」

イザナミさんの、とびつきりの笑顔が見えた瞬間、俺の意識は途切れた——。

く視点変わってイザナミさんく

これで彼は第二の人生を送る訳ですが……。

「デバイスは奮発するとして、戦闘面では少し心配ですね……」

鍛えるとは言っていたものの、今のままでは過ぎた力に振り回されるだけでしょね。

「転生時期は原作の四年前にしましょう。年齢は五歳で、両親は既に他界、と」

袖から一枚の紙を取り出して、筆で書きこんでいく。

これなら転生先の世界で「彼女達」と幼馴染です。それに四年も特訓期間があれば、十分に使いこなせるようになると思いますからね。あの子なら大丈夫です。きつと心強い助っ人が現れる筈ですから。

……あと目覚めた時の反応が面白そうですね。

「初期の魔力量はEにしておきましょう。……あ、家の設備も充実させておきましょうか」

これで準備は出来ましたが、やはりまだ、心配が残りますね……。

……おまけで何か、スキルでもつけましょうか？

懐から手鏡を取り出して覗く。

「ええと、あの作品のスキルで良い感じのモノは……」

手鏡に映し出される一覧を見る。

「あら、——このスキルなんて良いですね。私からならなにか、役立つかもしれないですね。ランクは、……EXにしておきましょうか」

他になにか、彼の役に立ちそうなスキルはありませんかね？

……彼は別段、ハーレムなどは考えないようでしたね。

だからといって単に強力なスキルを付けるだけでは面白くないです……。

「どうでしょうか……」

「だったら、……このスキルはどうだ？ これなら彼の助けにもなるだろう」

後ろから声がした。

「あら。来たのですね、ナギさん」

「おう。俺も一言、彼に謝りたかったからな。……まあ、間に合わない

かったようだが」

「ナギさん……」

「俺だけじゃないぞ？」

子供らも、と夫が言うと、

「……あれ、一足遅かった？」

「お前が羊羹食ってるからだろうが！」

「あ痛っ!？」

「まったく。どうして二人はすぐ喧嘩するんですか……」

子供たち——アマテラス、スサノオ、ツクヨミが現れた。

「貴方達まで来たのですね。……残念ながら、今しがた送り届けた所ですよ」

「えー。お話したかったなー」

「……姉さん。私達が此処に来た目的、忘れてませんか？」

「ソナナコトナイヨー？」

「コイツ……」

「はあ……。申し訳ないです、母さん」

顔を背けるアマテラスを見てツクヨミは頭を抱えた。

「……まったく、貴方達のミスでこうなってしまったのですよ。——反省してくださいね……?」

「「「はい——ッ!」」」」

「良い返事です。でも何故、ナギさんまで?」

「ははは、……つい。昔を思い出しちゃったよ……」

あの時は貴男が悪いのですよ? ふふふ……。

「ヒッ!？」

「……まあ、今となっては些末な事です。それよりもナギさん。このスキルは……」

「あ、ああ。此処に来る途中、話を聞いていたんだがな。そのスキルをちよいと改良して付ければ、彼の選んだ特典と合わせて良い感じになると思ってたな」

「改良、……ですか。——良いですね! 汎用とか特有とか取っ払いましよろー!」

なんだか楽しくなってきました！ 流石は私の夫です。

……これなら心配する必要はありませんね！

私の選んだスキルと合わせて効果が出るようにもしなければ……。
「当然ランクはEXだな。——そうだ！ 彼の望まないようなスキルを消して、その分他のスキルがブーストされる、みたいな感じにしよう！」

「ナギさん、良いアイデアです。なら、魅了系は消して問題は無いですね」

後はデメリットになるようなスキルも消しましょう。それが原因でなにかあつてはいけませんからね。

「お母さん、お母さん！ 私は時代とか地域の制限も無くせば良いと思います！」

「——採用です。他にはなにかありますか？」

では私が、とツクヨミが手を挙げた。

「彼の成長に合わせ、スキルのランクが調整されるようにするのはどうでしょう？」

「なるほど。……それなら、あの子の特典と同じようにすればいい塩梅になりますね！」

最初は魔力量と同じくEで、最終的にはAかEXランクになるようにしましょう。

これでおまけのスキルは決まりました。この二つがあれば、大抵の事は何とかなるでしょう。

「では次に、あの子のデバイスですが——」

ふふふ。あの子は一体どんな反応するのでしょうか！ 楽しみです！

プロローグ：月の目モドキ

「……知らない天井だ」

気がつくくと、見覚えのない天井が目の前に広がっていた。

……まあ、お約束だよな。嫌いじゃないけどね！

それと、なんか意識が無いはずなのに豪い騒がしかったのは気のせいだよな。そうに違いない。

顔を動かして見ると、どうやら俺はベッドで寝ているようだ。

「まぶしいなあ、もう……。つて、おお!? 低っ！」

顔を直撃してくる光から逃げようと起き上がってみたら、今までよりかなり視線が低くなっていた。

自分の体を見てみると、手足が小さく短くなっている。

……まるで子供のようにだ。

いや、ようだ、じゃなくて子供なのか……。

「ん？」

枕元に一通の手紙と、青く光るものがあつた。

……イザナミさんかな。

とりあえず、青いのは置いておき手紙を読むことしよう。

『おはようございます。これを読んでいるということは無事に転生してきましたみたいですね。』

早速ですが、説明に入りたいと思います。貴方が転生したのは原作開始から四年ほど前です。年齢は五歳。親は事故で他界した事になっています』

なんで五歳なのよ。ご近所付き合い大丈夫か？

『ちなみに、五歳にした理由は、——反応が面白そうだったからです！』

「酷くない!?!」

『だって、指定が無かったじゃないですか』

ちよつと待って。なんでツツコミの返しが手紙に書いてあんの……。

『今、なんでツツコミの返しが、みたいなこと考えましたね。私、神様

ですよ?』

……気にしたら負けだな。

『話を戻しますよ。貴方の現在の総魔力量はEです。ですが、鍛えれば原作が始まる頃にはSにはなっているはずなので、頑張ってくださいいね。くれぐれも、無理はし過ぎないで下さいよ?』

それと、貴方のデバイスは手紙と一緒に置いておきますので、後で確認してください。色々と奮発しましたので期待してください!』

あと、勝手ながらもおまけで「女神の寵愛EX」と「神授の智慧EX」を付け加えておきました』

マジカイザナミさん。そのスキルっておまけで付けるレベルじゃない気がするんですが。

……しかも両方EXとか……。

『前者は貴方の身体能力が向上します。後者の方は私と夫、子供たちが協議の結果、色々と改良してしまい名前通りのスキルではなくなくなっていました。』

効果を簡潔に言ってしまうえば“好きなスキルが再現・取得が可能”です。取得した各スキルのランクはEですが、貴方の成長と合わせてランクが上がります。

あと、魅了系などの貴方にデメリットとなるスキルは対象外となっています。その分、他のスキルが使用時にブーストされます。事後承諾ですみません』

改良って……。どちらかと言うと魔改造では? と思う。ありがたいけど。

それに魅了系が無いのは嬉しい。間違えて取得とか嫌だからね。……しっかしねえ。英霊特有のスキルまで使えるとはなあ……。

「皇帝特権」みたいなチートスキルまで取得可能は凄いいけど、宝の持ち腐れになりそうだしな……。

「……どのスキルを取得するかはその内で良いよね」

とりあえず今は手紙を読むのが先だ。

『取得したスキルのランクはAまたはEXまで上がります。特典の宝具と合わせて此方も頑張ってください。』

ちなみに、全てのスキル（あ、先程書き忘れましたが宝具もです）はON/OFF機能を付けました。必要に応じて切り替えてくださいね。

以上で説明の方は終わりますが、最後に一言。貴方の新しい人生に、幸いがありますように——』

最後まで読み終わると、手紙は光になって消はじめる。

……ありがとうございます、イザナミさん。

手紙が消えるのを見届け、頭を下げる。

「……よし！ じゃあデバイスの確認と行こうかね！」

気分を入れ替え、枕元に置いたままのデバイスを手に取る。

しかしこの形、どっかで見たような……。

全体的に青色で、ルービックキューブのような正方形、しかし、一部が欠けているため、そこから薄い桜色の球体が埋まっているのが見える。

……まんまムーンセルじゃないですか。

その見た目は、F a t e / E X T R A c c c v e r . のムーンセルを小さくしたものだっただけ。

しかもこれ、ペンダントになってるよ。イザナミさんが気を利かせてくれたのか。

持ち運びも楽だね！ と思っていると、

『——問います。あなたが私の、マスターですね——？』

少女の声で、どこかで聞いた事のあるようなセリフが聞こえた。

そして、そのセリフを聞いて俺は安心した。

……日本語でよかったー。

インテリジェントデバイスは英語でしゃべるイメージがあった。

俺、英語の成績悪かったし、不安だったけど取り越し苦労だったみたいだ。

『……あれ？ セリフ選び間違えちゃいましたかね……』

おっと、なんか落ち込んで……？

「いやー、かわいい声だったから、つい」

『もう……！』

うれしいですよ！ と桜色の球体を淡く光らせながら、ミニムーンセル（仮）が照れたように見えた。

「あー、ごめんごめん。で、さっきの質問だけど俺がマスターだよ。よろしく」

『はい。よろしくお願いしますね。――では、さっそくですがマスター認証を始めましょうか』

ミニムーンセル（仮）は球体を淡く点滅させながら、手元から浮かび上がる。

『まず、個体名称を教えてください。あと、出来れば愛称もお願いします』

「んー、……じゃ、個体名称は“ムーンセル・オートマトン” 愛称は“セラフ”で」

『――はい。登録完了しました。セットアップをお願いします。バリアジャケットを設定しますので、頭の中にイメージしてください』

「よっし！ ——ムーンセル・オートマトン、セットアップ——ッ！」

『初セットアップ、行きます！』

体が、薄い青みを含む白い光に包まれる。

「うおっ！」

反射的に目を瞑り、開くと服が変わっていた。

『いかがですか？』

「すげえ……！」

体を見回し、バリアジャケットの確認をする。

襟元を着物のように仕立てた白いジャケットに、黒いズボン。フード付きの、黒地に白いラインの入った外套を纏っていて、首からセラフを下げている。

『マスター。どこか直すようなところありますか？』

「特にない、……あ、外套の裾もう少し短くならない？ 膝上くらいまで」

言うつと、裾の部分が薄っすらと光に包まれ、収まると短くなってい

た。

『これくらいですかね』

「おー、ちょうどいい」

バリアジャケットもいい感じにできたし「アレ」を試してみようかな？

「なあ、魔法ってどうやって使うの？」

『イメージしてください。バリアジャケットと同じ感覚で良いですよ』

あれか、常にイメージするのは最強の自分だ、的なの？

まあ、それはともかくやってみようじゃないか。

剣を持つ構えをとり、イメージする。

リンカーコアが活性化し、手に魔力が集っていくのが分かる。

Fateにおける代表的な宝具。彼の騎士王が持つ星の聖剣。

——〈^エ約束^スされた勝利の剣〉——。

「おお……！」

構えた手に光が集まり一本の聖剣が現れる。

「よっしゃ——！」

……なんか軽くね!?

軽く素振りを試してみるが重さをあまり感じない。

『一応、私の方でもサポートとして軽量化をしています……。いかがでしょうか……?』

「マジで? 道理で軽いと思った。ありがとう、セラフ」

胸元のセラフを軽くなでる。

……意外と触り心地良いな……。

『——マスター……っ!』

ふ、照れてんじやねえよ、コイツ。ここか、ここが良いんか?

一瞬、俺のデバイス感情豊か過ぎね? と思ったが、すぐにどうでもよくなった。

だってその方が楽しいじゃない。これから一人暮らしだし、話し相手がいるのは嬉しい。

「……なんか疲れてきた……。これってどうすればいいの……」

『魔力の流れを止めてください。それで魔法は消えるはずですよ。』
言われた通りにすると、〈約束された勝利の剣〉は光になって消えた。

『宝具は真名開放しなければ、大した魔力消費はありませんが……。今のマスターは魔力量が少ないので仕方がないことかと』

「まあ、それは鍛えればいいことだし……。あ、俺の魔法——宝具って非殺傷設定に出来るよね？」

『もちろんです。そのあたりのサポートも私の役目ですから！』

よかった。これなら安心して戦える。いや別に、戦いたいわけじゃないけどね。

これから先、原作に関わることになるし自分の身は自分で守りたい。

「そういえば、……セラフって武器にはなれないの？」

レイジングハートやバルディッシュは宝石型から杖や斧とかに変わっていた。

だけどセラフはセットアップ後も変わらずにペンダントのままだ。

『なれますよ？ 武器タイプからアクセサリータイプなど色々』

「そっか。なら、セラフ用の魔法も考えないとだねー」

『ありがとうございます、マスター！』

楽しみが多くて困っちゃうな！

特に、オリジナルの魔法とか覚えたいじゃん。スターライトブレイカーみたいなやつを。

……いや、あそこまではいらなかなあ……。

うーん……。ま、明日でいいか。

「とりあえず、家の中の探検をしようじゃないか」

これから住む家だ。色々と把握しとかないとな。

「でもその前に、バリアジャケットは解除したいけど、……と。おお、出来た……！」

『よくわかりましたね。バリアジャケットの解除方法』

「なんとなく、宝具と同じような感じがしたから、試しに魔力を止めたら消えた」

『……マスターって、結構感覚で実行するタイプなんですね』

「まあね。理屈とか細かいことは、……苦手じゃないけどめんどくさいからね！」

特に覚える系がね！

『胸を張って言えることじゃないと思います……。マスターのそういう性格は好きですよ』

「はは、ありがと」

急に好きとか、……やめてよ恥ずかしい。

セラフはデバイスとはいえ、少女の声だ。生前、告白をしたこともされたこともない。

そんな俺にいきなりの好きは、……照れる。

まあ、そんなことは置いておいて、

「一通り終わったし、——改めて、これからよろしく、セラフ」

『はい！こちらこそよろしくお願いします、マスター！』

その時、俺のお腹が、クウ、と鳴った。

「……とりあえず、何か食べよ……」

『そうですね』

とりあえず寝室を出て、階段を下りる。

結構この家広いのね……

「これはまた立派な。……ん？」

階段を降りてすぐのリビングに入ると、一流コーデイネーターがデザインしたと言わんばかりのオシャレな家具が配置されていた。

だが、そんなものより気になったものがある。

「おおっ、揃いにそろってる……！」

それは、キッチンだ。

大きな冷蔵庫はもちろん、炊飯器や電子レンジといったお馴染みのものから、ガスとIHを合わせたコンロに備え付けの大きいオーブントースター、それに加え、

「石窯付きとか、……イザナミさんグッズヨブ！」

これでピザが焼ける！ それに色々活用できそうだ。

『うれしそうですね、マスター』

「ふっふっふ、とりあえず昼飯作るか！」

冷蔵庫には食材が入っていたし、調味料も一通りそろっている。

あとは何を作るか、だ。

「軽く焼き飯でも作るか……」

前世で両親がよくお昼に作ってくれたものだ。

ごはんは卵、母さんはウインナーで父さんが鶏肉、ねぎ入れてフライパンで炒めるだけの簡単な料理。

……親の味、ってね。

「……て、ごはんないやん。……しかたない、炊くか……」

とりあえずお米をといでタイマーをセット。

「お米はこれでいいとして、炊けるまで時間があるな……。散歩にでも行くか」

『散歩、ですか。——でしたら少々お待ちください。今調べますので……。』

——完了しました。この街——海鳴市一体をスキャンして地形を把握しました。道案内はお任せください！』

「一瞬だったね!?!」

セラフの高性能ぶりに秋介さんもビックリである。

『私、こう見えて次元世界一ですから!』

なにこのデバイス、頼もしすぎる……!!

第一話：角麩つてすき焼き以外に使うの？

散歩のため家を出て数分、近所の公園を通りかかった時、思わぬ人物を見つけてしまった。

「なあなあセラフさんや」

『なんでしょうか、マスターさんや』

『あそこのかまってちゃんオーラ全開の子なんだけど……』

『すごいですよね。なんで周りの子は話しかけないんでしょうか……』

「はあ、……なんでこんな早く」

ブランコに座り、鬼ごっこやかくれんぼで遊んでいる他の子を見ている少女。

——高町なのは——。その人である。

一人にしてほしいけど一人にはなりたくない、といった矛盾した雰囲気を漂わせているよ。

同じ街に住んでいることだし、いつかは出会うだろうと思っていたよ。

だがまさか、初日から出会ってしまうとは……。

「……帰ろうかな？」

『いや話しかけましょうよ。あんな可愛い少女が寂しがっているんですよ？　ここで話しかければ好感度アップしますよ、きつと』

いや別に好感度とかはどうでもいいよ。小学校で友達になれたらいいなあ、ぐらいだ。

『それに、友達になるなら早い方がいいですよ？』

むう。それもそうだけど……。

『ほら、こっち見えますよ』

「何ですって？」

高町の方を見ると、

「あ……」

目が合い、シュン、といった感じで高町が俯いた。

『マスター……』

「え、何？ 俺が悪いの？」

『冗談で言ったのに彼女と目が合っちゃうマスターってすごいですね』

嵌めやがったな、ちくしよっつ！

『とりあえず行きましようよ』

「……わかった。行ってくるから、セラフはしばらく喋らないでね。説明とかめんどくさいし」

『別にいいですけど、……念話もダメですか？』

念話……？ あっ。

「……忘れてた。一応、それも無しで」

『マスター……』

セラフの呆れ声は無視して考える。

……普通に話しかけたら、面白くないよね。

何かいい方法は……。あ、そうだ。

姪甥が遊びに来た時によくやった方法。後ろからこっそりと近づき、軽く右手を振り上げ、

「そいや！」

「にやい!？」

ストンツ、と高町の頭に手刀を落とした。

「うう、誰なの！」

「戸田・秋介です。初めまして」

「あ、高町・なのはです。……ってそういうことじゃないの！」

ノリツツコミとは、……流石だな！

「じゃあ、どういうことなのよ」

「なのはの頭を叩いた事なの！」

「だってなんか構ってほしそうだったから」

「そんな事、……ないの」

「そいや！」

また落ち込んだのもう一度手刀を落とす。

「にやあ!？ また叩いたの〜！ なんでっ！」

「なんとなく」

「む。ひどいの……」

目に涙をためながら頭を押さえるのは。

「さつきから見ただけど、何で一緒に遊ばないのさ？」

「……遊びたく、なかったの」

「そいや！」

「うう、また叩いたの……」

「今のは嘘ついたから。遊びたくないなら帰ればいいのに」

「……今は、ダメなの……」

「なんでよ」

「お母さん達、お店忙しそうだから……。邪魔しないように良い子に
してないとダメなの……」

「別にいいんじゃないの？ そんなの気にしないで甘えればいいの
に」

「だって、だってお父さんが、入院して、……グスツ、お兄ちゃんもお
姉ちゃんも、グシュツ、忙しくて、なのはが、笑ってないと、だから、
迷惑、かけ、ウグツ、ないように、……ううっ——」

「ちよっ——!？」

うわーん、と泣き出してしまった。

『マスター、泣かせちゃったんですか……』

ちよつとセラフさんは黙っててください。

「ご、ごめんなさい!? とりあえずこれで涙を、……って何もなかった
!」

クソツ! 俺としたことがハンカチを忘れるなんて……!

どうする、どうすんのよこれ!? は、そうだ——。

「な、なら、今から一緒にお店に行つて、甘えていいか聞きに行こう!
もし言い難いなら俺も一緒に聞いてやる! だから泣かないで!

ね!？」

マジでお願いします。そろそろ周りの目も痛くなってきた。

これ以上泣かれると、俺も一緒になって泣いちゃうぞ!？」

「グスツ、……ほんとうなの?」

袖で涙を拭いながら上目遣いで言われた。

「任せろ！」

だから早く公園からでしょう？ あそこの奥様方が何かひそひそ話してるんで！

「……うん。じゃあ、行こう……？」

高町なのはに手を引かれ公園を出る。

くやっちやった……、と思いながら移動中

俺は高町に連れられ、翠屋というお店にやってきた。

「今なら大丈夫そうだね」

「うん」

中を覗き、お客さんがいないことを確認して、高町はお店の中に入っていく。

俺は店に入らず、扉のガラス越しに中を見る。

『なあ、セラフ。どうにか中の会話聞こえるようになんない？』

『できますよ。というか、マスターって念話初めてですよね？』

『ならよろしく。なんか勘でやったらできた』

『わかりました。やっぱりマスターはすごいですね』

『そりやどーも。……おお？』

お店の中にいる高町の声が聞こえてきた。

『お母さん、ちよつといい……？』

『お帰り、なのは。どうしたの？』

『えつと、あのね……』

言葉、高町。胸の内を吐き出すんだ！

『私ね、お願いしたいことがあるの……』

『あら、何かしら』

『その、あの……』

『どうしたのなのは。さっきから……』

チラチラこっちを見ないの。お母さんが余計に心配してるでしょが。

『彼女、すごい助けを求めていますよ。約束したんですから、行ってあげ

ましようよ』

『えー、でもー』

『マスター』

『はいはい。行ってきますよ』

セラフとの念話を切り、扉を開け中に入る。

「まったく、……早く言えばいいのに」

「あう、……ごめんね」

シユン、落ち込む高町と、

「あら、なのはのお友達かしら」

「さつき公園で会った戸田・秋介です」

「私は高町・桃子です。なのはのお母さんよ。よろしくね、秋介君」

「よろしくお願いします。今日は高町ちゃんの付き添いできました」

「付き添い？」

「なんか、お母さん達が最近遊んでくれないのが寂しいって言ったんで……」

「えっ——」

「だから、お願いします！ 忙しいかもしれないけど、高町ちゃんと遊んであげてくださいー！」

「秋介君……」

「ごめん、高町。つい言っちゃった。」

『お見事ですよ、マスター』

……恥ずかしくなってきた。

「——ね、なのは」

「お母さん……？」

「ごめんね、なのは！ 寂しい思いさせて、ごめんね……」

バツ、と桃子さんが涙を流しながら高町を抱きしめた。

「お母さん……。おかあ、……さんー！」

うわーん、と今度は高町が泣き出す。

ちよつと!? またこの展開です!? こんどは桃子さんまで……。

勘弁してよ……。と俺は頭を抱える。

「と、とりあえず落ち着き——」

「どうした、なのは!? つて、母さんまで!?」

「ええ!? お母さんまで泣いてるの!」

ドタバタとお店の奥から二人の少年少女が出てきた。

……あれはまさか……!」

「お母さん、なのは、大丈夫!」

少女は二人に駆け寄り、ハンカチを渡す。

「うう——」

「大丈夫よ、美由希。それよりも恭ちゃんを——」

桃子さんが、高町の涙を拭いながら少女と何か話している。

……あ、俺死ぬかも……。

思った瞬間、

「——お前が、泣かせたのか?」

少年の方に、もの凄い殺気で睨まれた。

「へう!」

今の今まで俺の横では絶賛、桃子さんと高町の二人が泣いていた。

高町に至っては号泣だ。

見方によつては、俺が二人を泣かせた、となる。

まあ、間違いじゃないんだけどね……。というか正解です。

……これが、……殺気!」

『マスター、結構余裕ありますよね』

『まあね』

それでも怖いものは怖い。今の俺は五歳ですよ?

「お前が泣かせたのかと、聞いているんだ!」

「勘違いいっ——!」

急に胸倉をつかまれ、引き寄せられた。

「二人に何を——」

「——恭ちゃん。手を振り上げて何をする気なの?」

「母さん! 待ってくれ、俺は——」

「ちよつとお話しましょうか」

桃子さんは少年を連れて店の奥に入って言った。

『ぎゃあああああ!』

お店の奥から何か悲鳴のようなものが聞こえた。

……あの人は怒らせない方がいいな。

『大丈夫ですか、マスター』

『ちびるかと思った』

とうるかセラフさん、何故に助けてくれなかったの？

『桃子さんが動いていましたので……』

『ああ、なるほど』

セラフと念話で話していると、

「大丈夫……？」

高町が心配してくれた。

「大丈夫よ、大丈夫。それよりあの人って……」

「高町恭也って言って、私となのはの兄だよ。さつきは恭ちゃんがごめんね」

「えっと……」

「あ、私は高町・美由希。なのはのお姉ちゃんだよ。よろしくね」

「戸田・秋介です。よろしくお願いします」

……やはりシスコンは恐ろしいな。

などと考えていたら、桃子さんが戻ってきた。

「ごめんね、秋介君。恭也には言い聞かせておいたから」

「別に気にしないでください」

「ふふ、やさしいのね。それと、……なのはの事、ありがとうね」
優しく頭を撫でられる。

……撫でられるのは、やっぱり恥ずかしい。

『マスター、マスター！ 顔をもちよつと下に——！』

セラフさんは黙っていてください。

「……恥ずかしいです」

「あら、かわいい」

桃子さんは俺を撫でるのを止め、今度は高町を撫で始める。

「お母さん……。恥ずかしいの……」

「いい、なのは？ 今度からはちゃんと言ってね」

「うん！」

抱き合う母娘を見て思う。

……お母さん、……か。

『羨ましいですか?』

『まあ、ね』

『……マスター……』

『おいおい、そんなしんみりしないですよ。こっちまで悲しくなってくるだろ』

俺はもう気にしてないし、そもそも今の状況は俺が望んだことだから。

『マスターがそう言うのなら』

『おう』

そういつて念話を切る。

「じゃあ、俺はそろそろ帰ります」

「え、でも——」

「大変だ、母さん！ 父さんが——！」

お店の奥から、恭也さんが飛び出てきた。

「——士郎さんがどうかしたの!?!」

「お父さんがどうしたの、恭ちゃん!?!」

「え? ええ!?!」

「落ち着いてくれ、三人とも。——いいか? たった今病院から電話があった。それで——」

「それで?」

「——父さんの、意識が戻ったって」

「——!」

恭也さんの一言で、突然の事についていけてなかった高町も目を見開いて驚いている。

「……士郎さん。よかった……」

「私病院に行く用意してくる!」

「ああ、俺も行く。なのはは母さんと店で待っていてくれ。……それと、秋介君だったな」

こっそりとお店を出ようとしたら呼び止められた。

「……なんです？」

「先ほどはすまなかつた。俺の早とちりで怖い思いをさせてしまった。本当に申し訳ない……」

恭也さんは深々と頭を下げてくれた。

どうやら桃子さんのお話しが聞いたようだ。

「呼び捨てでいいですよ。あと、さっきの事は気にしてないですから。頭をあげてください。……早く、お父さんの所に行ってあげてください」

「……ありがとう、秋介。——行くぞ、美由希！」

「待って恭ちゃん！ またね、秋介君」

そう言って、恭也さんと美由希さんはお店を飛び出して行った。

「それじゃあ、帰りますね。さよならです。桃子さん、高町ちゃん」

「あ、待って秋介くん！」

「……なにさ。高町ちゃん」

「なのはって呼んでほしいの……」

今それ言うのかい!?

「……高ま——」

「なのはっ！」

「……………」

「な・の・は！」

まさかここまでとは……。やっぱり呼ばなきゃダメ？

『マスター、呼んであげましょうよ。遅かれ早かれですよ』

セラフお前もか。

「……じゃあね、なのは」

「うんっ！ また明日！」

「あらあら、なのはったら……。はい。これはお礼よ、秋介君」

また来てね、といつの間に用意したのか、桃子さんにシュークリームをもらった。

「それじゃ、ありがとうございましたー」

……翠屋特製シュークリーム、ゲット……！

『うれしそうですね、マスター』

俺、帰ったら美味しくシュークリーム食べるんだ。あ、ご飯はちやんと食べるよ？

『それフラグになりませんか？』

「はは、まっさかー」

く鼻歌を歌いながら移動中く

俺は、ちよつとテンション高めで家路を急いでいた。

『マスター』

「なんだいセラフさん」

『その角を曲がった先、林の中にわずかながら魔力反応があります』

「マジで……？」

『マジです。どうしますか？』

「とりあえず見に行こう」

『わかりました。では、案内します』

「おう！」

急いで林へ向かおうじゃないか。あ、シュークリーム振らないように気を付けないと……。

『マスター、その林です。——そのまま真っ直ぐ行ってください！』

セラフのナビに従って急ぐ。

それにしても魔力反応って……。

……転生初日から色々あり過ぎだろう……！

俺ってまだ魔法も使えないんですけど。戦いになったらどうしよう……。

『この辺りのはずですが……』

「あれか……！」

草むらの中、大きめの猫が倒れていた。

……もしかして、リニス……？

この猫がリニスなら、このままでは消える。

それだけは、何とか避けたいな。

『——外傷はありませんね。ですが、魔力が枯渇しかかっています。』

「……このままでは消えてしまいます」

「どうすればいい？」

『契約をするのが一番ですが、今はその時間も惜しいので直接魔力を送ってください。魔法を使うのと同じ感覚でできるはずです』

「わかった！」

魔法と同じ、ということはイメージすればいいのか……。

リニス？ に触れ、魔力を流し込む。

「なあ、セラフ。この猫、連れて帰ろうと思うんだけど……」

『私に聞かずとも、マスターのお好きにすればいいと思いますよ』

「じゃあ連れて帰る。……動かしても大丈夫かね」

『問題ないです。きちんと魔力は流れていますので、そのまま抱きかかえて帰れば家に着くころには、ある程度回復するでしょう』

「そうかい。なら、よいしょ、……つと」

リニス？ を抱え、林を出る。

「はたから見たら、面白い子供だよな……」

右手にリニス？、左手にシュークリーム。

『そうですか？ ペットとお使いの帰り、くらいだと思えますけど……』

「猫とお使いは行かないだろう」

『あ、その方は猫と言っても山猫ですね』

「やっぱり？」

『はい。地球には存在しない種ですが、間違いないかと』

ワオ、うちのセラフさんはそんな事まで解るのね。すげえ。

『ということは、やっぱりリニス、……なのか？』

『その辺は、ご本人が目覚めないと分かりません』

「ま、それはその時に聞けばいいか」

とりあえず、リニス？ を起こさないようにゆっくり歩いて帰ろうかな。

くゆつくりと移動中く

家についてリニスをリビングのソファーに寝かせ、食事の用意をしていた。

「セラフ、今すぐ美味しい割り下のレシピを！」

『お任せください！ 今表示します！』

今夜はすき焼きだ。せつかくの転生初日、豪華で美味しい物が食べたいよね！

なので、最高のデバイスであるセラフさんに手伝ってもらっているのだ。

「あ、お風呂入れるの頼んでいい？ 今ちよつと手が離せなくて……」

『ふふふ、それは既に済ませてありますよ……！』

「悪いね、魔法とか関係ない事頼んで」

『気にしないでください。好きでやっていることですから！』

まったく、うちのデバイスは次元世界一だね！

「——あの、ここは一体、……どこでしょうか……？」

声が聞こえ、振り向くと、そこには女の人が立って辺りを窺っていた。

「おお、目が覚めた？ もうちよつとまってなー、いまご飯作ってるから」

「えつと、貴方は……」

「それより、ちよつと手伝って」

「——へ……？ は、はい……」

「はい。このお盆、テーブルに運んで。それ、液体入ってるから気を付けて」

「はあ……」

「食器は二人分出して、卵とお肉、野菜を出して、……よし。次はこれを運んで」

「……は、はい」

「豆腐はつと……。あ、角麩見つけ！」

「あの……」

「ちよつと待って。今コンロを、……あつたあつた。これがないと意味ないからねー」

コンロをテーブルに設置、鍋を置いて牛脂を引く。お肉に軽く火を通して割り下を投入する。

白菜などの野菜、豆腐などを投入し、準備完了。

「よし、食べよう！ さあ、お姉さんも座って座ってー」

「……はい……？」

お姉さんも席に着いたことだし、食べようか。

「いただきますー！」

「い、いただき、……ます？」

お姉さんは戸惑いながら、俺をまねて手を合わせる。

「ご飯と卵はお代わり自由だから」

そう言っつて、卵を器に割り、食べ始める。

……はは、すき焼き美味え……！

牛豚鳥の三大お肉を贅沢に食べれるなんて……！

『マスターマスター。あのお姉さん、すごい呆気にとられていますよ』

『む、少しやり過ぎたか……』

とりあえず、火を止めよう。煮込み過ぎたのは好きじゃないし。

じゃあ改めて、

「どちらさんですか？」

「えええっ!？」

そんなに驚かなくてもいいじゃない。

「……ええつと、その、……私は、リニスと言います」

イエーイー！ 予想的中、あの山猫はリニスだった。

「俺は戸田・秋介。秋介でいいよー。それでこっちが……」

『デバイスのムーンセル・オートマトンです。セラフと呼んでくださいね』

セラフの自己紹介を聞いて女の人は驚いていた。

「秋介は魔導師、なのですか……？」

「今日からだけどね。体の方は大丈夫？」

「体、……ですか」

『一時的ですが、マスターの魔力を通すことで枯渴しかかっていた貴女の魔力を回復させました。調子はどうですか、リニスさん？』

「——そういうことですか。危ない所を助けていただき、ありがとうございます。ごぎいます。体の方は大丈夫です」

リニスは、頭を下げお礼を言ってくれた。

「頭をあげて。俺は気にしてないから」

「わかりました。それで、二、三お伺いしても……?」

「なに?」

「ここは一体、どこですか? 見たところ、ミッドチルダではないようですが……」

「海鳴市」

「ウミナリシ、ですか。聞いたことのないですね」

『マスター、それじゃわかりませんよ。——正確に言えば、ここは第97管理外世界「地球」の極東地区、日本と呼ばれる国の海鳴市という街です』

「なるほど……。わかりました」

え、今ので分かったの? 理解早くね!?

「——では次の質問ですが、何故、私を助けたのですか?」

そんなの単純だ。

「助けたかったから」

「——それだけ、ですか?」

いささか拍子抜け、といった顔のリニスに聞かれた。

「そうよ」

「そう、……ですか。なら最後の質問ですが、……私をどうするつもりですか?」

「別にどうもしないよ? 好きにしていよいよ」

『ええ、マスターの言う通りです。お好きになさってくださいって構いませんよ?』

「別に、今すぐ答えを出さなくていいし、ゆっくり考えればいいよ」

「秋介は、知っているんですか……? 私の、前の主の事を……」

「知らない。けど、なんとなくそう思っただけ」

……いや、本当は知ってるけどね。

でも、言うようなことじゃないからな。これは。

「なんか訳アリっぽいし、無理には聞かないよ。リニスが話してくれるなら聞くけど……」

「すみません……」

あー、重い。空気が重いよー。誰か助けてー。

『つかぬことをお聞きしますが、リニスさんは何故あのような所で倒れていたんですか?』

流石セラフ。助かったぜ!

「倒れていたのですか、私は……?」

「覚えてないの?」

「はい。プレ、——以前の主との契約が完了し、消えたはずなのですが……」

何故、この世界に……、とリニスは考え込んでしまった。

……以前の主、……プレシア・テスタロッサか。

「契約の内容って聞いてもいい?」

「——え、あ、はい。ある女の子を魔導師として育て最高のデバイスを渡す、というものです」

『なるほど。では、デバイスを渡してリニスさんはその子の前から消え、気付いたらこの家に居たということですか……?』

「その通りです」

リニスのいう女の子とは、フェイト・テスタロッサの事だろうなあ。デバイスとはバルディッシュだろう。

「……帰りづらいのって、その女の子が関係してるでしょ……?」

「——!」

驚愕といった顔で、リニスは目を見開いた。

「やっぱり……。別に、話さなくていいよ。……でも、リニスはどうしたいのかは教えて。リニスが帰りたくないなら、この家にいればいい。……まあ、寝場所とご飯ぐらいしか提供できないけど」

「それは——」

「俺、一人暮らしたからさ、セラフ以外に話し相手がいるとうれしいし」

『そうですね。私もデバイスですから、出来ることには限界がありま

す。リニスさんがいれば安心ですね』

「……………両親は……………」

「もう居ない」

「この世界じゃそうなってる。イザナミさんの手紙に書いてあった。

「寂しくないのですか……………」

「セラフがいるからね」

『マスターったら……………!』

ふ、照れんなよ。俺まで照れるだろ。

とか言っても、まだ出会って一日も立ってないけどね!

「まあそんな感じだけど、どうする?」

「秋介……………」

貴方は強いですね、トリニスは微笑み、

「——私は、帰りません。貴方に救われたこの命、その恩を返すまでここにいさせてください」

「いいの? 後悔とかしない?」

「はい。もう決めましたから。それに、私がいなくとも大丈夫だと、信じていますから」

トリニスは決意のこもった声で言った。

「そっか。じゃあ、これからよろしく、リニス!」

「はい。私の方こそよろしくお願いしますね、秋介」

さあ、一件落着! ご飯食べようぜ、ご飯!

再びコンロに火を点ける。

『なら、正式に契約した方がいいですね。私の方で済ませておきましようか?』

セラフさんたらそんな事まで出来るのか…………。

「リニスはそれでいい?」

「ええ。お願いします、セラフ」

『わかりました。——マスターとリニスを繋げて、契約術式発動、と…………』

足元に丸い魔法陣のようなものが現れ、すぐに消えていった。

『——終わりました。これで離れていても魔力が供給されるはずで

す。どうですか』

「確かに。秋介との繋がりを感じます」

「よかったよかった。じゃあ、気を取り直して食べるとしますか!」

「はい!」

改めて、二人で手を合わせ、

「いただきます!」

やっぱご飯は一人で食べるより、誰かと食べる方がおいしいよね。

「美味しいですね……。なんという料理ですか?」

「すき焼き」

「スキヤキ、ですか……。興味深いですね……」

ああそうか。ミッドには地球の料理は無いんだっけ。

「この白いモチモチしたのも中々……」

「角麩ね。まだあるからいっぱい食べてよ」

「はい、いただきます!」

リニスさんが角麩の良さを知ってくれて秋介さんはうれしいよ

……!

て、俺の分の角麩が無いだとう!? 油断したあ!!

『マスター、お風呂沸きましたよ』

「あつ、はい」

とりあえず、ちやつちやつご飯を食べてお風呂に入ろう。

そして、翠屋のシュークリームを食べる……!

「ごちそうさまでした。じゃあ、俺お風呂入ってくるから」

「あ、待ってください、秋介。それなら私が背中を流します」

はい!?! どうしてそうなるの!?!

「い、いやいいよ、一人で入れるから! リニスはゆっくり食べてて

!」

「ダメです。もう決めましたから!」

『よかったですね、マスター』

よくないよ! 見た目は子供でも中身は思春期の男の子よ! リ

ニスはやばいって!」

「セラフ、お風呂はどこですか?」

『リビングを出て左、突き当りを右の部屋です』

ちよ、セラフさん!?! 助けてくれないの!?!

「わかりました。——行きますよ、秋介!」

『行つてらっしゃい、マスター』

「い、やあ——!」

思わず、走つて逃げようとしたら、

「バインド——!」

「ぬをつ!」

いきなり現れた淡い黄色の鎖に捕まった。

「ダメですよ、家の中で走っちゃ。——さあ、行きましようか」

「いやだああああああ——!」

くリニスとお風呂中く

……大きかったな……。

何が、とは言わないよ。恥ずかしいから。

「いいお湯でした」

リニスは、何故かあった大人用のパジャマを着ている。

『マスター、リニスさん。デザートを用意しておきましたよ』

「お、マジで? てかどうやったのさ」

テーブルを見てみると、シュークリームとコーヒーが用意されており、置きっぱなしだった鍋と食器がキッチンに片づけられていた。

『浮遊魔法を使えば簡単ですよ。……ですが、コーヒー入れるのは初めてなので出来はいまいちかもです……』

そんなことない。十分すぎる。

「ありがとうな、セラフ」

「そうですよ。コーヒーも美味しいです」

『……お二人共、ありがとうございます……!』

セラフのさらなる万能感に驚きながら、リニスと共にシュークリームを食べた。

……翠屋のシュークリームは美味しいね……!

第二話：恥ずかしいセリフは効果抜群

拜啓、イザナミさん。転生してから三週間が経ち、原作開始に向けて日々頑張っています。

そうそう、家族が一人増えました。リニスといって生真面目で優しい、所謂お姉さんキャラです。

リニスは以前、魔法や勉強を教えていたらしく、俺の特訓に協力してくれています。

そして、俺は現在うちの地下室でニスに協力して貰い、

「魔力が、魔力が吸われるうううう!?!」

死にかけています。

のたうち回る俺を横目に、セラフは浮いて俺の魔力を吸い上げ、リニスはお茶をすすっていた。

『すごいですね、リニスさん。マスターの特異体質を活用し、総魔力量の最大値を引き上げようなんて……』

「いえいえ、セラフもすごいですよ。魔力の貯蔵が出来、限界が無いなんて」

『褒めたってマスターの寝顔写真くらいしか出ませんよ?』

「それは良いことを聞きましたね。後ほどデータをいただきます」

この三週間、二人の仲が良い。たまに何か隠れて話しているが怖くて聞けない。

「ちよつ、とおおお——!?!」

……セラフさん、吸い上げる速度上がってない!?

これやばいって! 何か頭がボーとしてきたんですけど!?

『あ、頑張ってくださいいマスター。昨日だってEランクからDランクに上がったんですから。今日も大丈夫ですよ! ね、リニスさん』

「ええ。——秋介の特異体質、一晩寝たら体力と魔力が完全回復する」は、裏を返せば「どんなに体力と魔力を使い果たしても次の日には影響が出ない」となります。

それならば、極限まで魔力を失うことで総魔力量を引き上げることができないのではないかと」

火事場の馬鹿力というやつですね、トリニスには笑うが……、
……俺はどこぞの戦闘種族じゃないよ!?

『マスターのリンカーコアや魔力資質は特殊ですからねえ。そういった無茶でも耐えられると思います』

「いやそれはな、——あれ……?」

カチャツ、と何かが外れるような感覚が来た。

急に体が楽になった。どゆこと……?」

「どうしたのですか?」

「いや、なんか開くような感じがした……」

「開く、……ですか」

一体何が起きたんだ……。教えてセラフ!

『……マスターには驚かされますね。たった今マスターの体をスキヤンした所、総魔力量がDランクからBランクに上がっています』

「はい……?」

Dから、……B? Cじゃなくて?」

『どうやらマスターのリンカーコアには、何かしらの鍵が掛けられているようです』

「鍵、……ですか」

『イメージとしては魔力量のランクごとに部屋があって、それぞれの扉に鍵が掛かっている感じです。』

部屋は鍵を開ければ入る事が出来ますから、それと同じようにマスターの許容量が増えたんじゃないかと』

おお。それは解りやすい例えだ。

つまり、Dまでの部屋にしか行けなかったけど鍵を開けたことでBまでの部屋に行けるようになった、と言う事だ。

「じゃあ今回は、一気に二つの部屋が開いたって事?」

『そうなりますね。まさしく、——火事場の馬鹿力ですね』

「まさか、一気にBランクまで行くな……?」

予想外です、と驚くりニス。

『この調子だとすぐにSランクとか行きそうですね……』

「ええ、これなら総魔力量の引き上げはゆっくりで良いでしょう」

やったね！ 死にかけなくてもよくなったよ！

「ふ、これで少しは宝具の強化が——」

『まだ無理でしょうね。マスターが思ってる以上に宝具と言う『物質化した奇跡』をさらに強力にするのは、もの凄く大変な事ですよ？』

「……うん。わかつてる。わかつてるけどさあ……」

そんな正面切って言わなくてもよくない……？ 少しぐらい夢見させてよ……。

「そもそも、秋介は何故そこまで宝具の強化にこだわるのですか？

以前見せていただいた聖剣、……エクスカリバーでしたっけ？ あの威力なら十分だと思うのですが……」

「まあ確かにねー」

この前、リニスに特訓の強力をお願いするに際、試しに一発〈約束された勝利の剣〉をこの地下室で人形に向かって撃ったら大惨事になりかけた。

……ホント、地下室が特別仕様でよかった。

セラフ曰く『この地下室にはあらゆる魔力現象を外に漏らさない境界が張ってあります』だそうだ。

お陰で地上には何も影響は無かったが、室内に居た俺達はヤバかった。何故かと言うと、外に漏れないという事は、中に溜まる、という事だ。

いやー、危うく死ぬ所だったよ。だって〈約束された勝利の剣〉撃つたら魔力が壁に当たって跳ね返って来たんだよ？

〈全て遠き理想郷〉で何とか防いだけど。

「アレは強いよ？ でも俺が強化したいのは〈約束された勝利の剣〉じゃない」

『それは初耳ですね。一体どんな宝具を強化したいんですか？』

「……強化って言うか、本来の能力を使えるようにしたい、なんだけど」

リニスの前ではあまり言いたくないんだけど……、と思いチラ見すると、リニスは頭に？を浮かべていた。

『——ああ、あの宝具ですか。……でしたら、最低でも総魔力量がSラン

クは必要ですね』

今ので分かるとは……。やっぱセラフさんすげえ。話が早くて助かる。

「ま、そう言うことだからよろしく頼むよ」

『私は構いませんよ』

「私もです。秋介には恩がありますから、とことんまで付き合いますよー!」

頼もしい先生が居て、秋介さんは嬉しくて泣きそうだよ……!

「じゃあ今日はこれぐらいで、続きは明日つてことで。それでいい、お二人さん?」

「わかりました。片づけの方はやっておきます」

「よろしくー。あ、着替えたら晩ごはんの買い出し行ってくるわ」

『行ってらっしゃいませ、マスター』

さて、今日の晩ごはんは何にしようかな……。

く今夜は肉料理にしよう!く

「ん? あの二人は……」

商店街での買い物を終え、帰る途中、金茶髪の少女と紫髪の少女が公園で遊んでいるのを見つけた。

……また、この公園……。

なのはといい、今回といい、なぜこうも早く原作キャラと出会うのか……。

まあ、考えても仕方ないよね! 触らぬ神に祟りなし、だ。

早く帰ろう。お腹減ったし。今日はカツ丼とお吸い——。

「——あんだ、さつきから何よ!」

「へ?」

公園を離れようとしたら、急に声をかけられた。

「へ? じゃないわよ! さつきからこっち見てたでしょ!」

声の主は、先ほどまで公園で遊んでいた金茶髪の少女——アリサ・バニングスだった。

「うわー、めんどくさいー……」

勘弁してよー。早く帰りたいのに……。

「な、何よあんた——」

「あ、アリサちゃん……」

詰め寄ろうとしたバニングスの後ろにいた、紫髪の少女——月村すずかが止めてくれた。

「あの、……ごめんね？」

そんな上目遣いで謝らないで。こっちが悪いことした気分になる……。

「気にしてないよ、……うん」

「……それで、何か用なの？」

明らかにちよつと不機嫌なバニングスと、

「……ずつとこっち見てたから、何かなって……」

恥ずかしいのか、バニングスの陰から俺を見る月村。

「仲いいなーって思つて、つい……。ごめんね」

「——うん、アリサちゃん！」

この二人の友情は平和的だなあ。なのはもこんな感じになればいいけど……。

……ま、そんな時考えればいいや。

「誤解が解けたみたいだから、帰るね」

「あ、待ちなさい——」

バニングスが言いかけた直後、キキツ、と二台の黒いワゴン車が止まり、中から三人の男が現れた。

そして、

「ちよつ——!？」

「——いや！ はなしなさい！ ——んん!？」

「——離して！ アリサちゃん——!？」

三人そろって車に押し込められた。

……やべえ。これって誘拐じゃね!？」

確か、あの二人の家は金持ちだった。だからか？

「——おらあ！ 大人しくしろ！」

「暴れんなよ、縛りにくいじゃねえか！」

声の方を見ると、バニングスと月村は後ろ手に縛られていた。

「おい小僧。怪我したくなかったら、暴れんなよ？」

俺も縛られて三人仲良く床に寝かされた。

「なによ、あんた達！ こんなことしてただで済むと思ってるの!？」

「黙ってる、金髪！」

男はハンカチでバニングスの口をふさぐ。

「んん——!？」

「アリサちや、ん——」

もう一人の男が月村の口も同じようにふさぐ。

すると、二人は眠ってしまった。

……おいおい、睡眠薬かよ……！

「お前らな、——むぐつ!？」

三人目の俺も口をふさがれ、そこで意識が途切れた。

く秋介さんが誘拐された……！く

気が付くと、工場のような所でうつ伏せに寝かされていた。

横では二人の少女——バニングスと月村が泣いている。

「う、うう……」

「大丈夫よ、すずか。もうすぐ助けが来てくれるわ……」

泣く月村をバニングスが慰めている。

女の子より後に目が覚めるとは……。いや、そんなことより今の状

況、もの凄くヤバいでね？

……セラフさん繋がるかな……。

試しにセラフへ念話を飛ばす。

『おや、どうかしましたかマスター？』

『ちよつとね……。リニスは？』

『リニスさんでしたら、洗濯物を干してはいますが……。——もしかして緊急事態ですか？』

流石セラフ、話が早い！

『……そう、出来ればリニスには知られたくない』

『わかりました。では、少々お待ちください』

セラフがそういうと、念話が切れた。

……痛ッ!?

直後、胸辺りに硬いものが刺さった。

『——お待たせしました、マスター』

もしかして、この硬いのは……。

『転移魔法でやって来たあなたのデバイス、セラフです！』

流石、次元世界一のデバイスだ。

『急に悪いね』

『いえいえ。ところでどういう状況ですか、コレは』

『公園であの子達と話してたら誘拐された』

『……なるほど、そういうことですか。——あちらの紫髪の少女が一

番の目的、という事でしうか』

『え、そうなの、お金目当てじゃないの？』

てつきり二人の家が大金持ちだと思ってた。それに、何で月村が

……？

と考えていると、複数の足音がして四人の男が現れた。

……見るからにあいつがボスだろう……。

俺たちを攫った三人を引き連れ、ビジネススーツを着た男がこちら

を見た。

「おやおや、これは可愛いおまけ付きじゃないか」

「あんた誰よ！ 何が目的なの!？」

「目的、……ですか」

スーツ男は顎に手を当て、月村の方を見た。

……なんか腹立つな。

その仕草をする人初めて見たけど、しゃべり方といい小物感が凄い

……。

『マスターマスター、余裕ですね!』

『セラフがいるからね!』

いざというときは魔法で二人を助ける。まだ特訓中とはいえ、数人の大人くらいなんとかなる。

「……なん、ですか……」

月村は涙を浮かべ、震えていた。

「我々の目的は、そちらの月村すずか嬢ですよ。貴方達二人はものついでです」

「なんで、すずかなのよ……!!」

「ご存じないので？ 夜の一族の事を」

「——!!」

男の言葉に月村が顔を真っ青に染め、目を見開いた。

……何か訳アリ？

『あの少女が吸血鬼の一族だからでしょうね』

『へー、そうなんだー』

『おや、薄い反応ですね』

『だって俺、魔法使えて喋るペンダントに猫耳尻尾のお姉さんと暮らしてるんですよ？』

それに加えて神様にも会ってるんですよ。月村には悪いけど、今更吸血鬼とか言われても大した事無い。

『それもそうですよねー』

て呑気に話してる場合じゃないよね——!!

「なんのことよ!」

「知らないのであれば、教えてあげましょう。彼女は——」

「ダメ——!!」

月村が男に体当たりをしようとするが、

「おっと、危ないですね。ちよっと抑えといてくれますか。ああ、気を付けて下さい。いくら子供とはいえ、何が起きるか分かりませんから」

「了解です」

スーツ男の指示に、後ろの一人が月村すずかを抑える。

「い、や——」

「すずか! あんたたち、すずかを離さないよ!」

「さつきからうるせえんだよ、小娘！」

「こっちの小娘は好きにしていいいんで？」

残った二人がアリサ・バニングスを抑える。

「構いませんよ」

「ダメ!! 私はどうなつてもいいからアリサちゃんを離して!!」

「化け物風情が友情ごっこことは……。笑わせますね。気持ち悪い」

二人の男はバニングスの服に手をかけようとする。

「い、いや——!?!」

『マスター!』

『わかってる!』

バニングスが服を脱がされる前に、足に魔力を込めて二人に向かって突っ込む。

「ぐおっ!」

「なんだあ!?!」

「——え?」

二人の男はフツ飛び、バニングスはポカン、と口を開けている。

……間に合ったー……!?!

危ねえ、もう少して一生のトラウマにする所だった……!!

「あ、あんた——」

「痛い、頭打った……」

くそう、縛られたままは危険だな。

『セットアップすればよかったのに……』

あ、そうじゃん。忘れてましたわ。

「……てつきりまだ眠っていると思っていました、油断しました」

スーツ男は顔をしかめ、俺を睨んでくる。

「こんの、クソガキが!」

「殺してやる!」

フツ飛ばした二人が、おもむろにナイフや拳銃を取り出す。

「落ち着いて下さい、二人とも。この子達には、まだ役目があります」

スーツ男がそういうと、二人の男は舌打ちをしながら下がる。

「さて、坊やお嬢さん。怖い思いをさせて悪かったね」

「はあ？ 誘拐しといて何言ってるのさ。そう思うんならその子と俺たち帰してよ」

「——そうよ！ ずずかを離しなさい！」

いつの間にか俺の後ろ、隠れるようにバニングスがいた。

「それは出来ない。彼女は化け物だからね。離れた瞬間、襲われでもしたら困るんだ」

「ずずかがそんな事出来るはずないじゃない！」

「それが出来るんですよ。先ほどは言いそびれましたが、彼女は——」

「いや——！」

「——夜の一族と呼ばれる、吸血鬼なんですよ」

「——吸血、鬼——？」

「……………」

言っちゃったよ、コイツ……。

『その男、マスター達に真実を話して自分に有利な状況を作ろうとしてますね』

『最低だな』

精神的に女の子を追い詰めようとするとか、クズだなコイツ。

……まあ、大丈夫だろうけど。

「どうだい、お嬢さん？ 気持ち悪いだろう、怖いだろう。そんな化け物に君は騙されていたんだよ？」

「アリ、サ、ちゃん……。ごめんね、ごめんね……」

月村の瞳からは光が失われ、ただ謝っていた。

『マスター』

『ああ、セツトア、——ん？』

スウツ、と後ろから、バニングスが俺の前に出る。

「——によ」

「なんだい、おじよ——」

「だから何よ！ ずずかが吸血鬼ですって？ そんな事、関係ないわ！」

バニングスが、叫んだ。

「あたし達は親友なのよ!? それくらいの隠し事、笑って許してあげ

るわよ!!」

「——アリサ、ちゃん——!」

月村の瞳に光が戻り、涙が溢れている。

『彼女達の友情は一生ものでしょうね』

『だろぅねえ』

二人の友情が証明されたことですし、そろそろ——。

「——じゃ、じゃあ、坊やはどう思う? お友達が吸血鬼だなんて気味

が悪いだろ!?!」

焦った様子のスーツ男が俺に話を振った。

「俺は友達じゃないよ? さつき公園で会って、話しかけられたただけだし」

「——!」

そう言うと、バニングスと月村が目を見開いて俺を見る。

「そ、そうかい? ならなおさら——」

「でもまあ、どうでもいいよね? そんな事」

「な——」

「夜の一族とか吸血鬼とか……。そんななんでもいいわ!」

「どうしても、いい……?」

月村が俺の言葉に反応した。

「おうよ。むしろ好きだからね、そういうファンタジーっぽい!」

『マスター、カッコいい!』

『うるせえ』

お前が褒めるせいで恥ずかしくなってきたじゃないですか……!」

「——————————————————————————————」

スーツ男はそう言うと、下がらせた二人の男に向かって、

「——————————————————————————————」

言い放った。

「ふん、やっとか!」

「おい、娘の方はまだ殺すなよ?」

「わかってるって」

「アリサちゃん逃げて——!」

「来ないで！」

ナイフを持った男が、バニングスへと手を伸ばす。

「セラフ！」

『はい！』

「セツトアップ——！」

言った瞬間、服がバリアジャケットに切り替わり、縛られていた手が解放された。

なので、

「この変態が——っ！」

手を伸ばした男を、魔力を込めた拳でぶん殴った。

「な、ぐえっ!?!」

男はフツ飛んだ。

「大丈夫？」

「あ、ありがと……」

バニングスはその場に、ペタンツ、と座り込む。

「小僧……！」

もう一人の男が拳銃を構えるが、

「死ねえ！」

「——ふん！」

「がっ!?!」

打たれる前にぶん殴った。

……銃とか止めてよ怖いなあ……！

『二人の無力化、確認できました。お見事です』

「……あとは——」

「う、動くな！ この小娘がどうなってもいいのか!?!」

「すずか！」

スーツの男は残っていた男と共に、月村を人質に取っていた。

……お約束すぎる——！

もしかしてさっきまでのってキャラ作ってた!?!

『マスター、こちらに向かっている反応が複数。彼女達のご家族かと』

『オツケー。ちやつちやと助けて、ここに来る前に逃げよう』

『宝具か魔法、どちらか使います?』

『魔法!』

こんな所で宝具使ってあの二人を巻き込んだら最低だからね。
……いっちょやりますか!

足元に薄い青みを含んだ白い魔法陣を展開すると、俺の周りに複数の魔力弾が現れた。

「——なっ!?!」

月村を捕らえる男が一步下がったのを見て、

「——シュートッ!」

『はい、Chute——ッ!』

男の顔に向かって魔力弾を叩きこむ。

「——ッ!?!」

男はバウンドしながらフツ飛んだが……。

「あ——!?!」

「すずか——!?!」

男が飛んで行った衝撃で、捕まっていた月村が投げ出された。

……このままだと月村が地面に頭から落ちる……!

「——お、とおおお!?! だ、大丈夫だった……?」

思いつきり飛び込んで月村をキャッチし、ゆつくりと降ろす。

「あ、ありがとう……」

何とか怪我とかは無いみたいだな……。後は——。

「お前だけだ」

スーツ男を見ると、

「う、うわああああ——!?!」

泣き叫びながら逃げて行った。

「あ、おい!」

『大丈夫です。こちらに向かう反応と鉢合わせるでしょうし、心配はないかと』

だったら問題ない。

「よし、逃げるか!」

『ですね。——転移魔法陣展開します』

足元に魔法陣が現れる。

……帰ったらリニスのお説教かなあ……。

夕飯の買い出しも公園に置いてきちやっつたし。気が重い……。

「待って！」

「ん？」

バニングスと月村すずかに呼び止められた。

「あ、あのー！ た、助けてくれてありがとう！」

「わ、私も、その……。ありがとうございます！」

「え!? いいよ、気にしないで！」

二人の少女にお礼を言われるのが、ここまで恥ずかしくなるとは……。

『照れ顔のマスター、いただきました！』

うつさい、セラフ……。

「その、……何で初対面のあたしたちを、助けてくれたの……?」

「……どうして?」

上目遣いで聞かれる。

何故こうもこの二人は、そろって示し合わせたかのように破壊力抜群の仕草をするのよ……。

「理由か……」

友達になりたい、はなのはだし……。うーん……。

『マスター、お急ぎを』

「はいよ。——で、助けた理由だけど……」

遠くから複数の声と足音が聞こえてくる。

……急がねば……！

とりあえず、

「女の子を助けるのに理由はいらないでしょ?」

「——っ！」

言っておいてなんだけど……。やっべ、超恥ずかしい……！

「セラフ——！」

『——転移魔法、実行します！』

瞬間、視界が光に包まれた。

く顔真つ赤で転移中く

光が晴れ、そこには……、

「おかえりなさい、秋介」

笑顔のリニスさんがいました。

……オワタ……。

「急にセラフが転移して行ったので、心配したんですよ？ 何事かと思つて様子を見に行つたら、途中の公園に夕食の買い出しが落ちていますし、秋介もいなくて……」

怒られると思つたら、めっちゃ心配されてた。

「あー、ごめんね？ ちよつと誘拐されちゃつて……」

ピクツ、とリニスの耳が動いた。

「誘拐、……ですか？」

……あれ、なんかヤバ——。

「すみません、秋介。ちよつと出かけてきます。ごみの処分を忘れていたので……」

「ちよつと待つて、何する気!? ごみは昨日出したでしょ!？」

魔力弾を展開しながらどこに行くつもりなの!？」

「ああ、そうでした。……今日は生ごみの日でしたね」

「違うよ!？」

どうしよう、リニスが話しを聞いてくれない。

あと、誘導弾に変わつてない!? なんかフワフワユラユラしてるんですが……!？」

「落ち着いてください、大丈夫です。——ちよつと人間を処分するだけですから」

「あんたが落ち着けよ!？」 とうか処分？ 人間を処分つて言ったよね!？」

あかん。このままでは本当にリニスが誘拐犯共を消しかねない。

あんな奴らどうなるうが知つたこつちやないが、身内がそれを消した、と言うのはなんかヤダ。

『リニスさんリニスさん。これを見てください。落ち着きますよ』
「流石セラフ、助か——」

パツ、と空間モニターが現れ、そこにはバリアジャケット姿の俺が映っていた。

「……これってまさか……!」

モニターの中の俺は、笑顔で、

『——女の子を助けるのに理由はいらないでしょ?』

さっきの超恥ずかしいセリフを言い放った。

「いやああああ——!?!」

やめてくれ! そんなリピート再生しないで——!

リニスは止まってくれたみたいだけど、……何でプルプルしてんの?
?

『効果は抜群ですね!』

「俺にもね?!」

『知ってますよ』

確信犯か……! と思っているとリニスが、

「——私も、愛しています——」

と言って倒れた。

「誰を!?!」

というか、どうしてそうなった!?

『マスターじゃないですか?』

「うれしいけど今聞きたくなかった!!」

死亡フラグになっちゃうから! 目を覚ませ、リニス……!」

『とりあえずリニスさんは私が見ておくので、夕食の用意をしたらどうですか?』

「……そうしよう」

何故か山猫の姿になったリニスを抱え、ソファーに寝かせる。

『気絶しているだけみたいなので、十分もすれば目が覚めると思いますが』

「そっか、じゃあよろしく。……準備するか、……はあ」

今日は疲れたよ……。早く寝たい……。

バニングスと月村の二人と出会うとは思ってもみなかった。
しかも誘拐されて、魔法を使った初の戦い――。

「――あ！・ 思いつき魔法使っちゃったじゃん……！」

状況が状況だったから仕方がないとはいえ、かなり早い段階から二人が魔法の事を知ってしまった。

しかも俺は顔を見られてる。

……小学校まで会わないのは無理かー……。

あの二人、家がお金持ちだし、月村家に至っては夜の一族とか、なんかヤバそうな家だ。

独自の情報網とかで此処がバレたりしないだろうか……。

『そのことなら大丈夫ですよ？』

「え？」

どう言う事だい、セラフさん。

『私がマスターの下へ転移した時、彼女達には一種の暗示魔法をかけました。』

マスターと別れた後、マスターの“外見的特徴をうまく思い出せなくなる”というものです。なので、マスターの顔がバレることは、ま
ずないかと』

「……ありがとう、セラフ」

やっぱすごいわ……。

『ふふふ、お気になさらずに』

心配事もなくなったことだし、夕食の準備でもしますか！

第三話：お父さんの登場

「——見つけたの……!」

「はい……?」

山猫姿のリニスを頭に寄せ、近所を散歩兼ランニングしていたら声が聞こえた。

声の方を見ると、茶髪をツインテールで結んだ少女がこちらに走ってくるのが見える。

……うわー、なのはだよ……。

『お友達ですか?』

『そうよー。前に色々あつてね』

『マスターの初にしてたつた一人のお友達です』

うるせえやい。他にもいるよう……?」

『何故に疑問形ですか……』

『あのお二人はカウントされませんよ』

……分つてるよ……。

誘拐事件から二週間ほど経つが特に問題はなく、バニングスと月村の二人とは一度も再会していない。

しかもセラフの暗示魔法とやらで俺の事をうまく思い出せないらしいし、今の所は大丈夫だろう。

ならば、今考えるべきは……。

「……何だ、なのはか」

「なんだ、じゃないの! ずっと探してたの!」

——高町なのはの事だ。

「また明日って言ったのに、何で来てくれなかったの!」

「何でって……。行くとは言わなかったでしょ?」

「ずるいのー!」

むく、と不機嫌になるなのは。

『えー。俺が悪いの……?』

『悪いですね』

おおう、揃って言われた……。

「……ごめんね」

「……だったら一緒に遊んでほしいの」

「えー」

「……なのはは嫌？」

涙目で首をかしげられた。

『マスター……』

『秋介……。お友達は大切にしないとダメですよ？』

むう。仕方ない。今日は遊ぶか……！

「……わかった。何して遊ぶ……？」

「いいの!? じゃあ——」

「——なのは？ ダメよ、急に走って行っちゃ。……あら、秋介君？」

高町なのはの母、桃子さんがやって来た。

……なんか前より若返ってない？

翠屋で会った時より肌艶がよく見える。

『この方、……すごいですね。以前より肌年齢が五歳ほど若返ってます』

『マジで？ 一体何が……』

高町家には若返り薬でもあるのだろうか……。

「翠屋ぶりです」

「ええ、久しぶり。また会えてよかったわ」

「俺もよかったです。シュークリーム美味しかったって伝えたかったんで」

「ふふ、ありがとう。気に入ってもらえて何よりよ。それに、かわいい猫ちゃんね〜」

そう言って桃子さんは、頭の上にいるリニスを手を撫でる。

「猫は猫でも山猫のリニスです。俺の大切な家族よ……！」

『もう……！』

ペチペチと前足で頭を叩いて来るが、……肉球が気持ち良い。

「なのはがずっと寂しがってたのよ？」

「色々ありますねー」

嘘は言っていないよ？

翠屋の帰りにリニス拾ったり、特訓で死にかけたり、この前は誘拐されたりしてたからなあ。

……普通の子供はこんな経験しないよな……。

特に後半。死にかけとか誘拐とか……。俺が転生者だからか？
そうなのか？

「むく、お母さんばかりずるいの……！」

「あら。ごめんなさい、なのは」

「なのはも猫さん触りたかったの！」

「山猫ね。名前はリニスよ？」

「リニスさん触ってもいい？」

『だって』

『構いませんよ』

「じゃあ、はい」

リニスを頭から降ろし、抱える。

「フサフサなの……！」

おお。リニスとなのは、レアな組み合わせだなあ。

『マスター、顔がにやけてますよ』

『……顔に出てた？』

『いいえ』

鎌かけやがった……！ と思っていたと、一人の男がやって来た。

……この人は……。

「——もしかして、君が秋介君かな？」

「あ、お父さん！」

なのははリニスを撫でるのを止め、男の人に飛びつく。

「あら、士郎さん。私ったらつい……」

「いいんだよ。それで、この子が……？」

「ええ、秋介君よ」

「君がそうか……」

男の人は俺をマジマジと見てくる。

「えつと……」

「ああ、すまない。——私は、高町・士郎。なのはの父だ」

「戸田秋介です。よろしくー」

……よかった、退院してたのか。

道理で、桃子さんが元気になってるはずだわ……。

『この男性、歩き方といい、気配の消し方といいただ者じゃないですね』

『わかる?』

『大体は。怪我の後遺症が残っているようですが、この間の誘拐犯程度なら赤子の手をひねるように勝てるんじゃないでしょうか』

全盛期はどれだけなの、この人……。

「君の話は聞いているよ。桃子やなのはが世話になったようだね。ありがとう」

「お世話をした覚えはないですよ? ただ話をしたり聞いたりしただけです」

「それでもだよ。二人がとても感謝していたからね」

……感謝されるような事はしてない。むしろ泣かせちゃったのに……。

「よかったらこの後、うちに来ないかい? お昼をご馳走するよ」

「え、いいの?」

「ああ、構わないよ。この間のお礼と、……恭也のお詫びも兼ねて、ね」

ポンツ、と俺の頭を軽く撫でる土郎さん。

「ご存知でしたかー。俺はもう気にしてないですよ?」

めっちゃ怖かったけどね! あの時はちびるかと思ったよ。割とマジで。

「その言葉は恭也に言ってやってくれ。結構気にしていたよ」

むう。あの時も気にしないって言ったのに……。兄妹揃って頑固者か……。

……でもねー……。

『私の事は気にしないで良いですよ』

『そうっ?』

『はい。なのはさんとの約束もあります。ここは行くべきですよ』

さあ早く、と肉球でほっぺをプニプニしてくるリニス。

「そっかー。じゃあ、ご飯いただきます」

「秋介くん、なのはのおうち来るの!？」

「そうだけど、ダメ？」

「全然ダメじゃないの! 早く行こう？」

「もう、なのははつたら……。ダメでしょ? 秋介君も親御さんにいい聞かないといけないのよ」

「ああ俺、リニスと二人暮らしなんで大丈夫ですよ?」

「——ッ!？」

士郎さんと桃子さんに目を見開いて驚かれ、なのはは理解できてない。

あれ、なんかまずいこと言ったか俺?

『マスター、流石に五歳の子供が一人暮らし発言はまずいと思いますよ……?』

『でも、リニスと一緒に言ったで?』

『……秋介、今の私を見てください』

言われ、抱えるリニスを見る。

……しまった。

今のリニスは、猫の姿だった。

つい、普段の人間リニスを考えて喋ってしまった。

まずいです。リニスが使い魔だとは言えないし……。

『どうしよう、セラフ……!』

『もう、魔法使えます! とか言っちゃいます?』

『それはまだな……』

できればなのはが魔法少女になって、その事を家族に話してからがいい。

どうしたものかなー。この人達に魔法を使いたくないし……。

……どないしよう……。

……よし。ここは——。

「……本当なのかい、一人暮らしと言うのは……?」

「本当よ。両親とも事故で死んじゃった」

「それは……」

「そんな顔しないでください。……いつまでも俺が悲しんでたら、それこそ怒られそうで……」

「君は——」

強いね、と土郎さんに頭を撫でられた。

「辛いことを聞いてしまったね。……話してくれてありがとう」

「気にしないでください」

「秋介君……」

今度は桃子さんに抱きしめられた。

「……恥ずかしいんですが……」

まいった。こんな真つ昼間から人前で美人の奥様に抱きしめられるとか……。

……嬉しいけど勘弁して……！

『マスター、マスター！』

『くっ、彼女の胸で秋介の顔が……!? セラフ！ 保存はしましたか!?』

『抜かりなく……!』

騒がしいよ、あんたら。いい感じにシリアスだったのに……。

というか、何を保存し——。

「——カフツ!？」

いきなり横から衝撃が来た。

「……なのは?」

「むく。ずるいの! なのはもギユツ、てするの!」

「あらあら、なのはったら」

そう笑って桃子さんは俺から離れるが……、

「なんだ、なのははやきもちか? だったら僕はお母さんに抱き着こうかな!」

「もう、お父さんったら」

「なのはも負けないの!」

ウフフアハハ、とか言って抱きしめ合うバカップルな両親を見て対抗心を燃やすなのは。

……ヘルプ、ヘルプミー……!」

『マスターったら嬉しいくせに』

『どこが？ どこがそう見えるの!?!』

『心の中、……ですかね』

『わかるの!?!』

『なんとなく』

『うそお!?!』

『嘘です。ふふ、驚きました?』

『……驚くっていうかなんか……』

セラフならそのくらいの事が出来るかもって、……思える。

ああ、リニスよ。お前の肉球が気持ちいい……。

「……はあ、お腹すいた」

「うん、なのはもお腹が空いたの……。お母さん、お父さん！」

なのはが離れ、高町夫妻へ突撃した。

……やっとなんか解放された……。

「お腹が空いたの……!」

「あら、ごめんなさい」

「そうだね、そろそろ帰ろうか。……秋介君はどうする?」

「一旦帰って、リニスにお留守番頼んでから行きます。翠屋に行けば

いいですか?」

「ああ、待ってるよ」

「ちゃんと来てね、秋介くん！」

「あいよ。また後でー」

手を振って三人を見送り、俺も家に帰ることにする。

〜リニス、留守番よろしく〜

翠屋へとやって来た俺は、お昼をご馳走になった。

「美味かったー!」

「当り前なの!」

食後の一服。俺はカフェ・オレ、なのはは牛乳を飲んでいる。

俺は最初、土郎さんおすすめのブラックコーヒーを飲んでいたけ

ど、……やっぱり苦かった。

なので、お願いして特別に作ってもらった。

「やっぱカフェ・オレは最高……!」

「気に入ってくれて嬉しいよ」

お店の奥からエプロン姿の土郎さんと桃子さんが出て来た。

「デザートにどうぞ。翠屋特製シュークリームよ」

「やったね!」

「お母さん、私も!」

「はいはい。ちゃんとあるわよ」

なのはと二人、シュークリームを食べていたら、お店の扉が開いた

「ただいま、……って秋介じゃないか!」

「え、本当に!? ……あ、居た!」

「恭也さん、美由希さん。お久しぶりです」

「久しぶりだな。元気そうで何よりだ」

「久しぶり〜。あ、良いなく二人とも。お母さん、私の分は?」

「はいはい。二人の分はちゃんとあるから、荷物を置いてきなさい」

「はい」

「じゃあな、秋介」

そう言っ二人はお店の奥に入っていった。

「さて、お腹もいっぱいになったことだし、……帰るか」

「ええ、帰っちゃおうの! 遊ぶって約束したのに……。秋介くん、意地

悪なの」

むく、と頬を膨らませるなのは。

「ごめんって。それで、何して遊ぶ?」

「じゃあ、なのはのお家に行くの!」

そう言っなのはは席を立つ。

「おやなのは、お出かけかい?」

「うん。秋介くんとお家で遊ぶの!」

「そうか。気を付けて行くんだよ。……秋介君、なのはの事よろしく

頼むよ?」

「ははは、……頑張ります」

もしなのは何かあったら俺の身が危ない。士郎さんは解らないが、恭也さんは間違いないで殺りに来る。

『何かあったら私がいますよ、マスター』

頼もしいねセラフさん。秋介さんは嬉しいよ。

「行こう、秋介くん！」

「あいあい」

く嫌な予感がする……く

結論から先に言うと、なのはとお風呂に入ることになった。

……どうしてこんなことに……。

「はあ……」

頭を洗いながらさっきまでの事を思い出す。

なのはの家に遊びに来て少し経った頃、恭也さんと美由希さんが帰って来た。美由希さんが一緒に遊びたいと言い出し、四人でかくれんぼする事になったのだ。

恭也さんが鬼を担当し、美由希さんは道場へ、俺となのは庭へと向かった。

だが、それがダメだった。

どこに隠れようかと辺りを窺っていると、

「木の上なら見つからないの……！」

と、なのはが言い出したせいで木登りをする事になった。

木の上で待つこと数分、道場の方から美由希さんの大きな悲鳴が聞こえた。

瞬間、

「にやっ!？」

「はいい!？」

驚いたなのはがバランスを崩し、ドボンツ、と俺を道ずれに池に落ちた。

その音を聞いて駆けつけた恭也さんと美由希さんに救助され、今に至るということだ。

「……ごめんね、秋介くん」

「いいってもう。ほら、場所開けて」

「うん」

石罅を落とし、湯船に入る。

「ふい〜」

やっぱりお風呂はいいよね。日本人でよかった〜。

『マスター、なのはさんとお風呂って、……恥ずかしくないんですか？』

頭撫でられたり抱きしめられたりするのには恥ずかしくありませんよね』

『全然』

なのはは俺と同じ五歳の子供ですよ？ 中学生や高校生ならいざ

知らず、小学校にも入学してないお子様とお風呂に入っても思う事は

無い。

『リニスさんとお風呂は嫌がるのに……』

『……だってねえ。あんなスタイルの良いお姉さんと一緒にお風呂

は、ちよつと』

目のやり場に困る。

『まあ、なんにせよ。マスターがロリコンじゃなくてよかったです』

『あたりまえじゃー！』

何を言い出すか、このデバイスは……。

「おーい、着替えおいとくからねー」

「はーい」

……とりあえず上がるか……。

〜着替え中〜

お風呂から上がりなのはとリビングへ行くと、土郎さんと桃子さんが帰って来ていた。

「あ、お母さん、お父さん！ お帰り！」

「ただいま、なのは。秋介君も、服のサイズはどうかしら」

「ちよつどいいです。貸してもらってありがとうございます」

「いいのよ。でもよかったわ〜。恭也の小さい時の服があって」

「まさか、池に落ちるとは……。なのはに怪我がなくてよかった……。」「恭也さんや。それじゃあ、俺は怪我しても良かったみたいじゃないですか。」

と言うか、池に落ちた原因を作ったのはあんたですよ？

「恭也さん、一体美由希さんに何をしたんです？」

「……俺は何もしていないぞ」

「……恭ちゃん、私の胸触ったくせに……」

「恭也さん……」

流石に兄妹でそれはダメでしょう。

「お兄ちゃん……」

「恭也……」

「恭ちゃん……」

他にも三者三様の反応を見せる高町家の皆さん。

「ま、まってくれ！ あれは美由希が急に襲い掛かって来たから反撃しただけだ！」

「えー？」

「……お兄ちゃん」

「秋介、なんだその目は！なのは、頼むから俺を見てくれ……！」

恭也さんはなのはの反応に本気で落ち込んでいる。

……シスコン度たけえ。

この人はもう、妹離れ出来ないのではなからうか……。

「……とりあえず恭也は放っておこう。秋介君、よかつたら夕飯も食べていくと良い。服が乾くまでまだ時間があるからね。……いや、せつかくだし今日はもう泊まっていくかい？」

「あら、いいわね。それじゃあ私、お夕飯の準備をしてくるわ」

「え！ 秋介くんお泊りするの!？」

「よかつたね、なのは」

「うん！」

……なんか勝手に話が進んでる……。

『マスター、マスター。そのことですけど、……もうリニスさんには私から連絡してありますよ?』

『え、いつの間に……?』

『こんなこともあるのかと、マスター達がお風呂に入っている間に連絡しておきました』

『マジか……』

『はい。それで私、帰ってリニスさんと特訓メニューの相談などがあるので戻りますね』

『念話じゃダメなの?』

『……ええ。そういう事なので、失礼します』

そう言つてセラフは転移していった。

……今の間、何?

気になる。本当に特訓メニューの相談だけなのか……。よし――。

「土郎さん、土郎さん」

「なんだい?」

「一回、うちに帰ってリニスのご飯を用意してきます」

「ああ、そうだったね。気を付けて行っておいで」

「はい。あ、濡れた服もついでに持って帰ります」

く足早に帰宅く

「動くな! 今すぐ手を頭の後ろで、……つて何してんの?」

リビングに入るなり、何かを整理するリニスを見つける。

「おや、今日はお泊りだったのでは?」

『ああ、着替えですね』

「なるほど。それなら用意してありますよ」

「お、おう……」

……しまった。

家にはセラフが居た。俺が戻って来る事もわかってた可能性が……。

「ん? 何これ――」

……俺……?

テーブルに広げられた写真? を見ようとした瞬間、シュツ、と頬

を何かがかすめた。

「——なんのことです……?」

振り返るとそこには笑顔のリニスが立っていた。

「何でもないです……」

「そうですか。では、これを。中には着替えや歯ブラシなどを入れておきましたので」

「ありがと。……じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい、秋介」

『お気をつけて、マスター』

とりあえず、何も見なかったことにしよう。

……知らぬが仏……。

世の中には知らない方が幸せなこともあるって誰かが言ってたよ……。

俺は振り返らず、家を出た。

くさあ高町家に、……ん?く

高町家に向かう途中、目を疑った。

……なんでこんな所に……!」

行き倒れを見つけた。

髪は紫で、紺色のスーツの上から白衣を着ている男だ。

——ジェイル・スカリエッティ。またの名を、

「変態か……!」

「待ちたまえ。何故そうなったのかね!」

ジェイル・スカリエッティはその場で立ち上がった。

おお、生きてた。というか、何でこの時期の海鳴市に居るのさ。登場はもつと先じゃなかったか?

「ちようどいい。君はこの街の人間のようだ」

「……なんでしょうか。変態」

「待ちたまえ。私は変態ではない。私は——」

「——ドクター!!」

ジエイル・スカリエツテイの言葉を遮って女の人が走って来た。
……あの人は……。

確か、ナンバーズのウーノだっけ？

「む、ウーノじゃないか。どこに行っていたのかね？」

「それは私のセリフです。……まったく、フラフラと」

「……まあ、そんなことより、この少年の誤解を解くのに協力してくれないか。さつきから私の事を変態と呼んで聞かないのだよ」

「——ッ!？」

バツ、とウーノがこちらに振り向き、俺の両肩をつかむ。

「な、なに……?？」

「——大丈夫ですか？ 変な事されていませんか？ 薬とか何か変なもの飲まされたりしませんでしたか？」

体のあちこちを触って心配される。

……ええ？ 何でこんなに心配されてんの？

「どうやら大丈夫そうですね……。気を付けてください。この変た、……人は危険なので」

「待ちたまえ、ウーノ。今私の事を変態と言いかげなかつたかい？」

ふう、とウーノは一息つき、ジエイル・スカリエツテイに再び向き合った。

「いくらなんでも子供にたかるのは止めてください。みつともない……」

「……別にたかっていた訳では無いのだが……。私はただ少年の変態呼びを——」

「言い訳は結構です。それよりさっさと例の場所を突き止めに行きますよ」

例の場所？ 一体何を……。

「……むう。言い訳ではないのだが。まあいい。ちょうどその事を少年に聞こうとしていた所だよ」

「そうでしたか。てつきりドクターが空腹のあまり、ついに子供にまで手を出したかと……」

「君とは一度、話し合う必要があるそうだ。……さて少年。この際私

の呼び方は横においてくれ。私はただ君に聞きたいことがあるだけだ」

「……何？」

「どうする？ セラフは家だし、念話で呼ぶ前に攻撃されでもしたら……。」

「ふむ。そんなに構えなくてもいいと思うが。危害を加えるつもりはない。ただ聞きたいことがあるだけだよ。」

「わざわざこんな管理外世界まで足を運んだ挙句、見つからなかったでは済まないからね。それでだね、私が聞きたいのは——」

「この辺りに大きなテーマパークがあると聞いて来たのですが、道に迷ってしまい困っているのです。ご存じありませんか？」

「……………」

「……テーマパーク…………？」

「マジで？ この人達が…………。」

「なんですか、ドクター？」

「……いや、私のセリフを奪っておいて、…………それはないと私は思うのだが」

「ドクターの話が長いからです。子供相手につらつらと長い話をして、なんの意味もないと理解してください」

「…………この前、ドゥーエやトーレにも言われたよ。私は話が長いと」

「ガクツ、と肩を落とすジエイル・スカリエッティ。いやこの人は——」

「…………スカさんって立場弱いのか？」

「そんなことは、…………無いと思いたいのだが。いかんせん最近娘が増えてね、遊び道具を作ってくれたのどこかへ連れていけだのと騒がしくてね…………。」

「——それよりも君は、何故私の名前を知っているのかね？ 名乗った覚えはないのだが…………」

「それは…………！ 貴方まさか——」

「え、だってポケットのハンカチに名前書いてあるよ？」

「そうなのだ。先ほどスカさんが起き上がった時に見えた。」

白衣のポケットから覗くハンカチには確かに、ジェイル・スカリエツティと書いてあった。

でもこの人達のやり取りを見てると、ジェイル・スカリエツティよりも「スカさん」なんだよなあ。

……一気に親しみやすくなった。

「ウーノ」も「一架さん」のイメージだし。呼び方って大切だね！ これなら話しやすい。

「……ドクター」

「……わかつているよ。多分、クアットロだろうね」

「もしかしてスカさんって呼んじやダメだった？」

「ふむ。スカさん、か。……構わないよ。なんだかしっくりくる感じがする」

「じゃあ、スカさんで。確かスカさんたちはテーマパークに行きたいんだよね。それって夢の国の事？」

この辺りの大きなテーマパークと言えばあそこしかない。

ネズミやアヒル、犬などの色々なマスコットキャラ達が有名な「夢の国」だ。

「ああ、そこで間違いないよ。行き方は解るかね？」

「この道を通つ直ぐ行くと駅があるから。そこから確か「夢の国」行きの電車があるよ」

「そうか。それはいいことを聞いた。感謝するよ、少年」

「ええ、ありがとうございます。それでは……」

スカさんは踵を返し、ウーノさんは軽く会釈をしてスカさんとは逆方向に去って行った。

「スカさん！ ウーノさんあっち行ったよ？」

「……度々すまないね、少年。待ちたまえ、ウーノ！」

「あら、気づいたのですか」

「また私が行き倒れてもよかったのかな!？」

「これに懲りたら一人でフラフラと出歩くのは止めてください」

「……肝に銘じておくよ」

今度こそ、二人を見送った。

……スカさん、ガンバ!

「あ、高町家に行かなきゃじゃん」

スカさんの登場で忘れてた。早く桃子さんのご飯食べたい……。

「……行くか」

俺は高町家に向かって歩き出す。

く疲れた……く

夕食の最中、なのはがとんでもない事を言った。

「今日は秋介くんと寝るの!」

「マジで?」

「マジなの!」

……なのはさんや、余計なことを……。

と思っていると、横で、

「——恭也ちゃん、後ろ!」

「何、——がつ!」

「ダメだぞ、恭也。子供相手にムキになるのは」

「しかし父さん!」

「いいか、恭也。母さんを見てみろ」

「——恭ちゃん……?」

「……わかったか。お父さんも悔しいが、今日の所は引こう。相手が悪い」

「……ああ、わかったよ……」

恭也さん、五歳の子供に相手にそれは、……シスコン度数高すぎです。

土郎さんも親バカだったのか……。桃子さん、ありがとう。

「じゃあ、私の部屋にいくの」

「えー」

「い・く・の!」

「はー……」

なのはは桃子さんに似たようだ。さすが、未来の魔王、……もとい

魔法少女だ。

俺は手を引かれ、なのはの部屋に連れていかれた。

……もういいや。今日は諦めよう。

その夜、なのはの説得——という名の泣き落とし——に負け、一緒に布団で寝ることになった。

だって、恭也さんが近くに居る時に泣きそうになるんだもの。こんな所で命は捨てられないよね……。

第四話：急に焼き芋が食べたくなる事ってあるよね

転生して二年が経った。なんか急に時間が飛んだ気がするけど、そんな事はどうでもいい。

セラフやリニスとの特訓が実を結び、俺の魔力量がAAまで上がった。セラフが言うには、ゆっくりしても原作が始まる頃にはSランクに到達するそうだ。

魔力量が増えた事で宝具の真名解放をしても魔力切れしなくなつたし、おまけで貰った「神授の智慧EX」のお陰でスキルも取得できた。いや、取得したと言うより、いつの間にか取得していた、かな？

……確か転生して半年くらいだっけ。

く回想く

日課の訓練を終えて夕飯の準備をしようとしたら、

『マスター。忘れていると思うのですが、スキルの方は放っておいていいんですか？』

セラフが頭に乗って来た。

「スキル？ ……あつ」

『思い出しましたか？』

「うん……」

自分でもビックリだよ。まさか忘れてるとは……。

その内に、つて思ってたら半年も経っちゃったよ。一度も確認してないや。

「今の俺って、何のスキルを持ってるんですかね……？」

『確認しますか』

「見れるの？」

『はい。スキルランクは現状のランクで表示しますね』

そう言っただけセラフは空間モニターを映し出した。

「あ、思ってたより多い……」

モニターには、

『女神の寵愛E X』『神授の智慧E X』『対魔力A』『魔力放出B +』『直感C』『気配遮断E +』『情報抹消E ++』『騎乗E +』『人間観察E』『縮地E +』』

と書かれていた。

「俺、何もしてないよね？　なのに何でこんなにスキル取得してるのよ……」

「対魔力」は心当たりがある。「直感」は勘が影響して、「縮地」は鍛えてるからか？

「うーん……。いつの間に……」

『「魔力放出」は、マスターが初めて宝具を使用した時、「気配遮断」はなのはさんと桃子さんの会話を外から覗いていた時、「情報抹消」はマスターが誘拐された時に取得されたようです』

「え、そんな前からあったのか……」

……あれ、でも「情報抹消」が誘拐の時なら……。

「何でセラフは二人に暗示魔法をかけたの……？」

『それはですね。あの時の「情報抹消」は取得直後で、ブーストされていたとはいえランクはE +でした。効果が発動したとして一日、もつて二日で効果が消えます。』

なので私が似通った暗示魔法をかけました』

「あー……。ありがとうございます」

セラフってやっぱ凄いね。でも、それならそうと次の日にでも教えてくれれば良かったのに。

ま、それは俺が忘れてたのが悪いんだけどねー。

『いえいえ。それよりも今はスキルの事ですよ』

「ですね……」

スキルのランクは確か俺の成長に合わせて上がるみたいな事が手紙に書いてあった気がする。

……それに、新しいスキルって……。

セラフの話を聞いて分かったけど、俺が何かしらの行動をしたり、状況になった時にスキルを取得してる。

「思ったより簡単に他のスキルも取得できそう？」

『ええ。マスターが意識して鍛えるなり何なりすれば新しいスキルも取得できますし、ランクの方もマスターの成長と合わせて上がっていきますからね』

「要は頑張り次第って事か……」

『はい。と言う事で、——明日からの特訓はメニューが増えます！』

「おう！………え？」

マジで？

～回想終わり～

あれから順調にスキルのランクも上がり、新しいスキルも取得できた。これで原作が始まったも、自分の身は自分で守れるようになった。

……まあ、何もないのが一番だけだね！

とまあ現実逃避の前置きはこの辺にして、そろそろ本題に入ろう。

「よし。帰るか……」

現在、俺は私立聖祥大付属小学校の入学式にやって来たのだが……。

……めんどくさくなってきた。

ある日、なのはに「秋介くんはこの小学校に行くの？」と聞かれ焦った。

だって俺の両親、事故死した事になってるのよ？ 最悪セラフに頼んで身元偽造したりニスに親代わりを頼もうかと思っただが、タイミングよく次の日に入学の案内が送られてきた。

イザナミさんが元から組んでいたのだろう。さすが神様、抜かりがないね。今更だけど……。

『マスター、ここまで来てそれはダメでしょう』

「ダメですよ、秋介」

「えー」

昨日までは楽しみだったんだよ？ でも当日になってめんどくさくなるよか、よくあるよね！

まあ一応、リニスには親代わりで来てもらい受付やらを頼んだ。

……一人で受付なんて、そんな嫌な目立ち方はしたくないからね。

「それでは、私はこの辺りで帰ります。後は一人で大丈夫ですか？」

「大丈夫よー。後は長話聞いて教室に行くだけだし、先生の指示に従えば問題ないよ」

「わかりました。何かあったら念話で呼んでくださいね」

では、と言ってリニスは帰っていった。

「さてと、長い戦いが始まるな……！」

そう。俺がこれから赴くは体育館。数多の生徒たちを眠りへと誘う睡魔を生み出す魔境。

「あ、新入生の皆さんは此方に座ってくださいね」

「あつ、はい」

とりあえず、誘導の先生に言われて席に着く。

〜絶賛睡魔と戦闘中！〜

『マスター、終わりましたよ』

「はえ……？」

おっと寝てたか。仕方ないよね、あんな長い話を聞かされたら。何せ俺は二回目ですし。一回目はうろ覚えだけど……。

しかし、周りを見て思う。

……ピッカピッカの一年生、てか？

友達百人はいらなないけど、せめて数人はほしいよねー。

『皆さん行っちゃいましたよっ…』

「マジで？」

しまった。さっさと教室に行かねば……。

体育館を出て、校舎に入る。クラス分けが張り出された廊下へと向かった。

「さて、俺のクラスは……。ええ……」

『よかったですね。知っている方が一緒に』

よくないよ。何で一緒になった……。

クラス分けを見ると、知っている名前が書いてあった。

高町・なのは、アリサ・バニングス、月村・すずかの三人の名前が。

「あの三人と一緒にとか、……絶対めんどくさい」

勘弁してくれ……、と思う。なのははともかく、バニングスと月村が一緒だと誘拐事件での事が気付かれるかもしれない。

『とりあえず、中に入ったらどうですか』

「そだね……」

教室に入った瞬間、

「あんた、さつきからなんなのよ！」

「そっちが悪いんだよ、人の物勝手に使って！」

「あたしとすずかは親友だから大丈夫だって、言ってるでしょ!？」

「それでも、ちゃんと言わなきゃダメだよ!!」

なのはとバニングスが取っ組み合いの喧嘩をしていた。

「何やってんのよ、あの二人は……」

月村も間に挟まれてアタフタしてるじゃん。というか、何があった。

『無視していいかな』

『いや、止めに行きましょうよ。……ほら、なのはさんの見事なビンタが入りますよ?』

パチンツ、と音が聞こえ、

「なにすんのよ!」

「そっちが聞かないからだよ!」

「むく」

また二人が取っ組み合いになった。

「はあ……」

まったく、入学初日から……。周りのクラスメイト見てみる。全員、ちよつと引いてるぞ。

……頭痛くなりそう。

原作とは内容が違うけど、ちゃんとこのイベントはあるのね。

それによく見たらそこ俺の席じゃん。どの道止めるしかないとか……。

「仕方ないなあ、もう」

俺はゆっくりと服や髪の毛を引っ張り合う二人に近づき、

「そいやー！」

「にや!？」

「あう!？」

スパンツ、と二人の頭に手刀を落とす。

「初日から何やってんの。周りの迷惑も考えなさいな」

「うー、……あ、秋介くん……?」

「何よ、あんた、——ツ!？」

「えっ——!」

なのはとバニングス頭を押さえ、月村は俺の顔を見て驚いていた。

「何で喧嘩してんのか知らんが、……そこ、俺の席なんだけど」

「……あ、ごめんね」

「……むう」

「……アリサちゃん」

「うん……」

そう言っつて三人はどいてくれた。

机の横に鞆を掛け、座る。そして……、

「おやすみ」

机に突っ伏した。

「寝ちゃダメだよ!？」

「なんなのよ、あんた……!」

「この人……」

『喧嘩の矛先を自分に向けることでお二人の喧嘩を止めるなんて、

……流石ですね、マスター!』

『え?』

……もしかしてそうなっちゃった……??

面倒な事になる前に逃げ——。

「——秋介くん!」

られなかったか……。]

「……なのは」

「一緒のクラスだよ！　これからよろしくなの！」

さつきまで喧嘩してた人とは思えないですねー。あと、

「またなのの言い出したか……」

最近言わなくなったと思ったけど、どうやら時たま今でもなのの言ってるみたいだな……。]

「い、言っていないよ！」

「はいはい。言っていない、言っていない」

「もうー！」

バカにしてー！　とポカポカ叩いて来るが、痛くない。

「あー、もうちよつと右……」

「わたしはマッサージ屋さんじゃないの——！」

！
と言いつつも、右にずらして叩いてくれるのはとってもいい子……

「わかった、わかったから。もう叩かなくていい。……それで、何で二人は喧嘩してたのさ？」

「うっ」

ピタッ、と手を止めるのはと、

「あ、あたしは悪くないわよ!?!」

「……」

急に話を振られて慌てるバニングスと俺をじっと見つめる月村。

……もしかして気づかれたか……?!

誘拐事件の時の事を？　と思うが今は置いておこう。バニングスの方は微妙な反応だし。

「どっちが悪いかじゃなくて、何で喧嘩してたのかを聞いてるんだけど」

「……この子が人の物を勝手に使ったりしてたから」

「……だから、すずかとあたしは親友だって言ってるでしょ！」

「それでもだよ！」

「むっ」

と二人は向き合ってしまった。

「はあ……。それで、本当なの？」

「え、あ、はい……」

考え事に夢中だったのか、月村は気のない返事をした。

「そうか。じゃあ、二人とも悪いな」

「えっ？」

「どうして……？」

「まず、なのはだけど……。ちゃんと話を聞かないとダメだ。相手が悪くても、先に手を出すのは止めときな。変な誤解されるから」

「……ごめんなさい」

「俺じゃなくてそっちの二人に謝りなさいな。……それで、二人の方はだけど……」

「なによ……」

「……」

「そっちの喧嘩してた方も手を出すのは良くないし、見た方も止めなきゃ。」

いくら二人が親友だとしても、親しき仲にも礼儀あり、だ。ちゃんと言声をかけないと誤解されるよ？ 今日みたいな初対面の人ばかりだと特にね」

「わかったわよ……」

「ごめんなさい……」

「俺じゃなくなつて、向うにね。——はいじゃあ、三人は向き合つて……」

「「ごめんなさいー」」

うんうん。これで一件落着だね。

『今のマスター、先生と言うか、……お父さんみたいでしたね』

『やめてくれ……！』

と念話しているとチャイムが鳴った。

「ほれ、席にお戻りよ」

「うん。後でね、秋介くん」

「……ふん」

「それじゃあ……」

三者三様の反応で自分の席に戻っていった。

……やっとなんて解放された。

『お疲れ様です』

『ホント疲れた……』

しばらくして、茶髪を束ね、青いジャージ姿の女の人がやって来た。どうやらこのクラスの担任らしい。

一通りの連絡事項を終え、恒例の自己紹介タイムがやって来たのだが……、

「じゃあ、誰から始めようかなー。あいうえお順じゃ普通すぎて面白みが無いのよねー」

いや普通に良いじゃん。何で自己紹介に面白さを求めているのさ。

「うーん……。——戸田君、君に決めた！」

「はい!? なんで!?!」

よりにもよって俺かよ!?

「男の子なんだからとやかく言わないでさっさとやりなさい。あ、名前だけ言うのはダメよ?」

周りを見てみると、全員、ホッ、と安心していた。そりゃね、自己紹介の一番手とか嫌だよねー……。

なのはは頑張り、と目で応援してくるし、バニングスはちよつと睨んでくるし、月村はジツ、と俺を見てるし……。もうヤダ。

『マスター、こう考えるんです。一番に自己紹介するということはつまり、——残りの時間、高みの見物で余裕ですよ……!』

『……それだ!』

流石セラフ、良い考え方だ! さっさと終わらせよう。

俺は立ち上がり、

「戸田・秋介です。特技は家事全般、好きな物は料理とファンタジー系のゲームが好きです」

「普通ね。ツマラナイワ」

「当り前でしょう!?! 子供に何を期待した!?!」

「んー、好きな相手にコクするついでに世界征服宣言したりとか?」

「それどころの馬鹿だよ!？」

そんな奴この世界にはいないよ!? むしろいてほしくない!!

「あー、はいはい。終わったんだから早く座って。じゃあ、次は、……出席番号一番、葵君からね」

そう言っただけ出席番号順の自己紹介に変わった。

……なんなんだよ、結局あいうえお順になってる……。

その後、自己紹介は順調に進みお昼を知らせるチャイムが鳴った。

「はい。今日はここまで! 本格的な勉強は明日からなので、皆、ちゃんと準備してくるのよ? ……解散!」

そう言っただけ担任は教室を後にした。

「あー、お腹減った、……ん?」

今日のお昼なんだっけ、と考えているとなのはがやって来た。

「秋介くん! 一緒に帰ろう!」

「おう、なのは。帰るか」

「うん!」

鞆をもって席を立ち、教室を出ようとする……、

「あの、……戸田君? ちよつといい……?」

月村に声をかけられた。後ろにはバニングスも居る。

……やっぱバレたか……?

今日会ってからずっと見られてたから、……まさかとは思ったけど。

「……今日じゃないとダメ?」

「うん」

「……はあ。ごめん、なのは。先に帰ってて」

「……校門で待ってるの」

「わかった」

そう言っただけなのはを見送る。

「……とりあえず、屋上行くか」

「……うん」

俺は月村とバニングスの二人と屋上へ向かった。

く屋上へく

屋上に俺達以外誰も居ないのを確認する。

『セラフ。一応人除けよろしく』

『わかりました』

これで、万が一にでも俺達の話が聞かれる事はないだろう。

『それで、俺に用って?』

「……戸田君って、ファンタジーが好きなんだよね」

「そうですね?」

「じゃあ、吸血鬼って、……居ると思う?」

「すずか……」

月村は両の手を強く握りしめ震えており、バニングスはそんな彼女を支えるように隣に立つ。

……バレてますね。

『なあセラフ。この二人、俺の事ちゃんと思いついてるよね』

『ですね。マスターの「情報抹消」の効果は切れてますし、私のかけた暗示魔法も弱まっていたはずですから。

彼女が吸血鬼という事もあり、マスターに会って暗示魔法が解けた、と言う感じじゃないでしょうか。隣の彼女は言われて気付いた、と言う所でしょう』

『マジかー。そんな御伽話みたいな事があるなんて……』

『マスターがそれを言いますか』

ですよねー。俺もセラフも、リスだって言われて見ればファンタジーの塊だ。

しかし今現在、目の前で月村が目には涙を溜めて俺を見ている。

自分の最も知られたくない秘密を、知っているかもしれない相手に直接聞くのは……、

……かなり怖いだろうねえ……。

月村の様子を見ただけで分かる。どれだけの覚悟で俺に話しかけて来たのかを。

だから、

「吸血鬼ねえ……。居てほしいし、会ってもみたい」
「怖いと、思わないの……?」

こんな頑張る月村の顔を見たら、……。嘘はつきたくないよね。

「——むしろ好きだからね、そういうファンタジーっぽい」
「——うっ！」

言った瞬間、月村は涙を溢れさせ、泣いた。

「やっぱり、あの時の、……ううっ」

「まあね。あの後大丈夫だった？」

「——はい、……。ありがとう、ございま、した。助けて、……。くれて」

「あ、あたしからも、ありがとうございました！」

「いいよ、気にしなくて」

「グスツ、……。はい」

「とりあえず涙拭きな」

はい、とハンカチを渡す。

「ありがとう……」

そう言つて月村すずかは涙を拭いた。

『よかったですね、ハンカチ持つてきて』

『いつぞやのなのはに感謝だな』

昔、公園でいきなり泣かれた経験を踏まえて、ハンカチを持ち歩くようにして良かった。

「じゃあ、改めて。戸田・秋介です。秋介でいいよ、よろしくー」

「あ、……。月村・すずかです。私もすずかで、良いよ……。?」

「あたしはアリサ・バニングスよ。アリサでいいわ」

「おう、よろしく。すずかにアリサ」

「うん！」

「……。ふ、ふん！」

笑顔になつたすずかと照れるアリサ。

『女の子は笑顔が一番ですね、マスター』

『まったくだな』

泣き顔もいい時はあるけど、やっぱ女の子は笑顔じゃないとね。

「ねえ、秋介君は、……。魔法使いなの？」

「そうよ。私もそれ聞きたかった!」

「あー、それは、……いつか話すよ。だから今は誰にも話さないでくれないかな」

最低でもあと二年は待つてほしいね。

『結構ひどいですね』

『うるせえ』

だって、話したらこの二人ついてきそうだし、それにもう怖い思いさせたくない。

「むー、何よそれ。……まあいいわ。いつかちゃんと話さないよー!」

「……私もそれでいいよ。その代り、私のお願ひも聞いて?」

「俺に出来ることなら……」

そう言うのと、すずかは俺の右手を取り、

「——私と、お友達になつてください」

笑顔で言われた。

「それくらいなら、喜んで」

「すずか、ずるいわよ! ……あたしとも友達になりなさい!」

「なりなさいって……。まあ、いいや。俺で良いなら」

よろしく、と空いている左手を出す。

「……よろしく」

アリサ顔を背け、手を握つてくれた。

……ほほう。これはこれは。

『照れてますね。耳まで真っ赤です』

そんな恥ずかしがらなくても……。

「アリサは可愛いなー」

「……なっ!」

『マスター、セリフと心の中が逆ですよ』

なんだと!?! やつちま——。

「——痛い!?!」

右手が、右手がああああ!?!

急にすずかの手を握る力が強くなった。

……これが吸血鬼の力か!?!

「……ねえ、秋介君。……私は？」

「え、可愛いと思うけど……？」

「——ありがとう……！」

いや、自分で聞いたという赤くならないですよ……。

「……とりあえず二人とも。手を離して——」

ほしい、と言おうとしたら扉が勢いよく開き、

「——ここに居たの！ 遅いから心配し、た、……秋介くん！」

中からなのはが現れた。

『セラフさんや。何でなのはが来たん？ 人除けを頼んだよね』

『私の所為じゃないですからね？ 確かに人除けは発動していますし、なのはさんの実力ではないかと』

『マジでか……』

まだ魔法にも出会ってないのに人除けの魔法を無視するとか、……主人公補正すげえ。

と言うかそんなこと言ってる場合じゃない。

……オワタな、コレ。

現状、俺の右手を握るすずかと左手を握るアリサ。二人は顔を真っ赤にしている。

『……マスター』

『言うな、セラフ』

わかってる。この後どうなるかくらいな。

「ごめん、なのは。ちよつと話が長引いて、——ガフツ！」

俺の横腹になのはが突き刺さった。

バカな!?! さっきまで入口に居たはず……!?!

「——秋介くんは渡さないの……！」

「いや、俺はなのはの物じゃ——」

「ダメよ！ 秋介はあたしの友達なのよ、離れなさい！」

「わたしの方が先に友達だもん！」

「そんな事関係ないよ。ね、秋介君……？」

すずかさんヤメテ。俺の腕がヤバイ。ミシツ、て聞こえた気がしたんだけど!?!

『セラフ!?!』

『頑張ってください!』

一言で念話を切られた。

……ええ、助けてくれないの……。

「もう、ヤダあ……」

泣きたくなってきた……。

「は・な・れ・な・さ・い・よ!」

「い・や・な・の!」

俺に抱き着くのはをアリサが引き剥がそうとするが、頑固として離れようとしない。

「すずか! あんたもいつまで秋介にくっついてるのよ。手伝いなさい!」

「わかったよ、アリサちゃん!」

二人は一緒になのはを掴み、そして、

「せーの、——ハイ!」

「にゃ〜!」

なのはを釣り上げた。

流石は親友コンビ。息の合った動きですね。なのはもこれはたまらず手を離した。

なのはが起き上がり、二人と対峙する。

バチバチツ、と火花が散ったように見えた。

そんな三人を見て思う。

「あ、焼き芋食べたいな……」

三人の髪色と火花つぼいので頭に浮かんだ。

この時期にサツマイモあるかな……、と考えてたらセラフから念話が来た。

『マスターって、こういう状況でもやっぱり余裕ですね』

『まあね』

『それで、彼女達を止めなくてもよろしいのですか?』

『いいんじゃない? 喧嘩するほど仲が良いって言うし、……ほら』

見ると、何故か三人娘が握手をして仲直りをしていた。

……一体何があったのか。

女の子って不思議だね。さつきまで喧嘩してたのに、いつの間にか仲良くなってる。

『……やはりこうなりますよね。流石マスターです』

『え、俺何もしないよ……?』

『まあ、知らなくてもいいと思いますよ』

『……まあ、いいや』

何があったかは気になるが、知らなくてもいいなら気にしても仕方ない。

リニスがお昼を用意して待っているだろうから早く帰りたい。

「おーい。俺もう帰るぞー?」

そう言うと、三人は此方を振り向き、

「待つてよく、わたしも一緒に帰る!」

「あ、待ちなさい。ずるいわよ、なのは! あたしも一緒に帰るんだから!」

「アリサちゃんもなのはちゃんも待つてよー……」

もう呼び捨てする仲になっているとは……。

……女の子って解らない……。

俺は三人娘と共に校門へ向かった。

くやつと帰れる……く

「また明日ね、秋介、なのは!」

「それじゃあね、秋介君、なのはちゃん」

「うん、バイバイ! アリサちゃん、すずかちゃん!」

「おう、また明日な」

校門を出て坂を下りた所で、アリサ、すずかと別れた。

アリサの執事——鮫島さんが迎えに来ていて、二人は一緒に帰っていった。

……高級車で下校か。羨ましいな。

そんな事を思いながら俺はなのはと二人で帰った。

高町家が見えた辺りでなのはは、

「ねえ、秋介くん」

「ん？」

「わたしね、気付いたの。ちゃんとお話をすれば、喧嘩してもお友達になれるって」

「そりゃよかった」

「秋介くんが教えてくれたんだよ？ だからアリサちゃんやすすかちゃんとお友達になれたの。」

だからね、———ありがとう、秋介くん！ また明日なの！」

そう言って、自分の家へと走っていった。

「……そりゃどうも」

なのはよ、不意打ち過ぎる。

『顔が赤いですよ、マスター』

『夕日の所為だ』

『まだ昼過ぎです』

『……仕方ないじゃん』

『あれは反則ですよね』

本当だよ。どこで覚えたんだか……。

『でも嬉しかったでしょう？』

『当たり前だよ』

あんな事言われて嬉しいに決まってる。

「……早く帰ろう」

『そうですね』

遅くなっちゃったし、リニスも心配しているだろうから急いで帰るとしますかね。

第五話：遠足は前日が一番楽しい気がする

俺は明日の遠足に向け絶賛準備中だ。

「レジャーシートって何処だっけ？」

「それでしたらソファアールの上に置いてありますよ。紙皿と紙コップはテーブルの上に」

「あいよー。……これで後は明日の朝お弁当を詰めるだけ、……と」

……遠足の前日って、何でワクワクするんだろうね！

今までに何回も経験したとはいえ、やっぱりこれだけは変わらない。流星に寝れないなんて事はないけど。

『マスター、明日は晴れるようです』

「お、本当に？ ……んー、でもなあ、最近の天気予報は結構外れてるよなあ……」

昨日だって雨が降るって言ったのに日本晴れだった。一昨日もその前の日もだ。

『その心配はないですよ？ 私が衛星にちよこつとお邪魔して調べて来た情報ですので』

「いつの間に……」

しかし、セラフが言うのなら間違いはない。なんてったって次元世界一のデバイスだからな！

衛星にちよこつとお邪魔とか、それってハッキングしたって事だよ
ね。

国の機密に明日の天気を調べるためにハッキングするなんて、……
誰も思わないよね、普通。

「所で、秋介。本当に明日の遠足、私もついて行ってよろしいので？」
「山猫の姿で、だけどね。リニスも家でお留守番だけじゃ退屈でしょ」

リニスとは俺が学校に入学して以来、一緒に散歩や買い物に行く機会も減って家に居ることが多くなった。

本人は気にしなくて良い、と言ってくれるがやっぱり気になる。

「先生も俺が一人暮らしなのを知ってるから、連れてきても良いって
言ってた」

『そうですよ、リニスさん。行けばマスターに抱っこされたり、頭に乗っかり放題ですよ?』

「——それもそうですね! 分かりました、行きましょう!」
「程ほどによろしく……」

まあ、いざとなったらなのは達に任せよう。うん。

そう決意し、今日はもう寝ることにした。

……お休み、……ぐうう……。

く寝坊はしてないよ?く

翌日、俺達は海鳴臨海公園と並ぶ二大公園の一つ、海鳴自然公園へやって来た。

「良い、皆? 私達のクラスはここで一旦解散ね。十二時になったらここにまた集まりなさい。皆でお昼にするから。だから、あまり遠くへ行っちゃだめよ? 先生が探しに行かないとダメだから。仕事増やさないとよね、わかった?」

はーい、と周りの皆が答える中、俺は思う。

……何でこの人教師になれたのさ……?」

小学校の先生が居なくなつた生徒探すのを嫌がったらダメだろ。

『秋介は皆さんと一緒に行かないのですか?』

『そうねえ、どうしようかな……』

俺が楽しみだったのは『遠足に行く』だ。だからこの公園に着いた途端、テンションは下がった。

……やっぱ、準備の時間が一番楽しいよね……。

『なのはさんたちとは遊ばないのですか?』

『流石に遠足に来てまで俺と一緒に……』

『マスター、マスター。周り見てください、周り』

『え?』

周り?」

「——秋介くん、あのそり滑りやりに行こう!」

「——あっちのアスレチックがいいわ!」

「——私はメリーゴーランドと一緒に乗りたいな」

いつの間にかなのは、アリサ、すずかの三人娘に包囲されていた。

『俺なんかとは、何です?』』

『……ナンデモナイデス』

友達が居るのは良い事だよね……。

「……わかった、順番に回ろう。とりあえずなのは落ち着け。アリサはスカートだから注意しなよ? それとすずか、メリーゴーランドって何? 此処って自然公園だよね、何でそんな物があるの?」

「わかったの!」

「じゃ、最初はそり滑りね!」

「そうだね」

よし。何とか三人の包囲を抜けられた。今のうちに——。

「——あでツ!」

シユルツ、とりニスの尻尾が目隠しになり、そのせいで転んだ。

『逃げちゃダメですよ……』

『そうですよ、マスター』

やっぱダメか……。良いだろう。こうなったら今日一日楽しんでやろうじゃないか。いくら疲れても明日には影響ないからな!

「大丈夫、秋介くん?」

「何やってんのよ……」

「大丈夫……?」

「……気にしないで。それよりそり行くぞ、そり!」

向かう先、小山になった斜面を家族連れやカップルが楽しそうに滑っているのだが……。

……あれ、本当にそりか……?」

普通ならプラスチック製のそりだろう。季節で言えば冬ならデカイ浮き輪みたいなものがあるけど……。

「バリエーションあり過ぎだろ。あのウサギとか、どつかで見たぞ……?」

中には猫にしか見えない豹や花、アミュレットや星のような見た目をしたモノまである。

「わたしはあのウサギにするの……!」

「ならあたしはこの犬にするわ!」

「私は猫にしようかな」

三者三様のそりを選び、それぞれスタート位置に向かっていく。

……俺はどうしようかな……。

うーむ。ここまで色々があると悩むなあ。海賊船に戦車とかまである

「いつその事このライオン号に、——うえツ!」

「——秋介くん! わたしと一緒に滑ろう!」

「二なのは(ちゃん)!? ずるい!」

滑る気満々で位置に着いたはずなのはが横にいた。

……なのは、いつの間に!?

最近、なのはによく不意を突かれる。

「気配遮断」のスキルでも習得したんじゃないかと思うほどに気付けない。これも主人公補正のなせる業なのか。

『ただ単に、マスターが周りを見ていないだけだと思いますよ?』

『そうですね。もう少し周りを見た方がいいです』

『俺ってそんなに?』

『はい』

むう。俺の不注意が原因だったとは……。気付かせてくれたなのはに感謝しなければ。

「ありがとう、なのは。お陰で自分の悪い所に気付けた」

「……まさかお礼を言われるとは思は無かったの……!」

なのはが顔を赤くし、俺の手を引いてそりへと歩いていく。

……あれ、なんか恥ずかしいこと言ったか……??

『うーん、この、噛み合っていない感じが流石ですねマスター……!』

『秋介……。貴方は結構、恥ずかしいセリフを言いますよね』

『え、何が? 俺はただ単に、——あ、もしかして勘違いさせちゃった感じ……?』

なのははきつと、自分が誘って俺がありがとう、と言ったと思ったのかもしれない。

すまん、なのは。今回は俺が悪かった。俺は、自分が周りを見ていないことに気付かせてくれた事に対してありがとうと言ったんだ。『その通りです。マスターはもう少し彼女達の気持ちを考えましようよ』

『あー、そうね。次からちよつと気にしてみるわ……』
『ちよつとだけですか……』

そりやそうよ。何から何まで気にしてたらこっちが疲れるよ。こういうのは程ほどが良いのよ、程ほどが。

『それよりも、リニスってば頭の上で大丈夫？』
『大丈夫ですよ。しつかりと掴まっていますから!』

この際、猫の手でどうやって掴まるのかは聞かないでおこう。きつと魔法の力だ。間違いないね!

『私は心配してくれないんですか、マスター……? スポツ、と飛んで行ったらどうするんですか』

『セラフはペンダントだから平気でしょ。……まあ、その時はちやんと見つけ出すよ』

『もう、マスターってば……!』

やんわりと点滅するセラフは無視して、なのはとそりに乗る。

「秋介くん、準備は良い?」

「いつでもオーケー……!」

何やかんやで俺も楽しくなってきた。そり滑りとか一体何年ぶりだろ……。

「秋介、なのは! あんたたちには負けないんだから! 行くわよ、すずか。あたし達の力を見せてやろうじゃない!」

「わかったよ、アリサちゃん! 私たちが勝ったら今度は一緒に滑ってね、秋介君!」

何故か二対二のそり滑り対決になっていた。

「二人には負けないよ! 次もわたしが秋介くんと一緒に滑るの……っ!」

三人がスポーツマンガよろしく、燃えている。

「いいか、三人共。俺は賞品じゃな、——いいッ!」

急にそれが発進した為に舌を噛みそうになった。

……いや、何でそりがこんな速いの……!?!?

思っていた以上の速さに、気が付けば麓に着いていた。

「むぐ。同時だったの……」

「もう一回勝負よ！ 行くわよ、すすか！」

「うん！」

「望むところなの！ 行こう、秋介くん！」

「いいね。でも今度は俺一人がいいかな！」

「ダメ！」

「はい……」

こうして、しばらくそり滑りで遊んだ後、アリサ要望のアスレチックへ向かった。

くアスレチック……?…?

俺は今、目の前で繰り広げられる光景に対して自分の常識が間違っているのか？ と疑い出した。

「あははは！ 何この炎、全然熱くないのに燃えてるわ!?!」

「すごいよ、秋介君！ この氷、冷たくないのに凍ってる……!」

「うぐ、二人共すごい……」

炎の海に浮かぶブロックを飛び移っていくアリサと、その隣、氷で造られたメリーゴーランドの馬をのりこなし手を振るすすか。そんな二人を羨ましそうに眺めるのが居る。

……おかしい。アスレチックってこんなだっけ？

コレはもう、アトラクションでは……?…? とか、ここ本当に自然公園なの？ といった疑問が尽きない。

「……なにコレ。何処のアクシオンゲームだよ」

『いいじゃないですか、楽しそうですよ。マスターも好きでは?』

『好きだけどさあ、……自然公園には無いよねー。普通はジャングルジムとか吊り橋でしょうに』

他には網を使った遊具やターザンロープだと思うんだけど。楽し

かったな、アレ。

『似たようなモノはミッドにもありましたが……。此処までリアリティのあるモノは見たことがないですね』

『じゃあ、これ造った人って何者……?』

さっきのそりといい、このアスレチックといい……。オーバーテクノロジーすぎるよ。

『先ほどのそりやこのアスレチック、……。どちらも同じ人物が造ったみたいですよ。それぞれに開発者の名前のようなものが刻まれています』

『なんて?』

『D・Sと』

『……………』

『おや、秋介は心当たりがあるのですか?』

やっべえ。めっちゃ心当たりある。てか、何でD・Sなの。ゲーム機か。名前がばれないようにしたんだろうけど、もうちよつと如何にかならなかったのかな。

『いや、知らない人だよ、……。多分』

『そうですか。一体どんな方なのでしょうね』

ホントにね。何で“無限の欲望”とか呼ばれる人がアスレチックの遊具なんかを作っているんでしょうね……。

……ま、楽しければ何でも良いけど。

『なのはよ。行こうじゃないか、二人の所に!』

『え、でも運動苦手なの……』

『知ってる。だけどそんな事気にしてたら楽しめないって。手伝うから一緒に行こう?』

『……………うん。行くの!』

『よし。じゃあ、リニスは荷物番を頼んだ。俺達の弁当をよろしくつ!』

『ニヤウツ!』

頭からリニスを降ろし、後を頼んだ。

『行くぞ、なのは! 目指すはあのジャングルジムよ!』

「おー……!?!」

俺はなのはの手を取って燃え盛る炎の中にそびえ立つジャングルジムに向かう。

ジャングルジムの麓に着き、登ろうとすると横から声が来た。

「やつと来たわね、二人共！ さあ、誰が一番上まで早く登れるか競争よ！」

「……待たせたな。アリサ・バーニング！」

「誰がバーニングよ！ バニングスよ、バ・ニ・ン・グ・ス！ 知ってるでしょう!?!」

「いやー、ごめん。なんか言いたくなっちゃって」

「もう何なのよ！」

「あはは、秋介君ったら……」

声の主はアリサで、すずかと一緒に現れた。

「……まあ、いいわ。とりあえず競争よ。そり滑りでの雪辱を晴らすわ！ 今度はあたしと秋介がチームだからね！」

「あいよー」

「勝とう、なのはちゃん。勝って秋介君と一緒にジャングルジムを登ろうー！」

「高町なのはは頑張るの……!」

こうして俺達の早登り対決は始まった。

ふっふっふ、前世でもジャングルジムは得意だったんだよね……!」

『マスター。時計見て下さい』

「時計？ —— ああつ!?!」

十二時三十分だと……!?! これはヤバイ……。

「三人共、急いで降り——ツ!?!」

ゾクツ、といきなり背筋が寒くなり、いつかの恭也さん以上に恐ろしい感じが背後から来た。

「やつと、見つけたわよ……??!」

「せ、先生……??!」

振り返ると、そこには荒ぶる炎を背景に女の人——俺たちの担任——

―が仁王立ちしていた。

「どうしたのよ、秋す―ヒツ!?!」

「にゃ―!?!」

「嘘―!?!」

……俺とした事が時間を忘れるとは……!

しかも先生の接近に気付けないなんて、魔導師失格だな……。

『落ち込むことは無いですよ、マスター。まだ子供なんですから、これから先に生かせばいいんです』

『そうだな。ありがとう、セラフ。……所で、気付いてたなら何で教えてくれなかったのよ……』

『いやー、マスターが楽しそうだったので、つい』

『さいですか……』

とりあえず今は、

「逃げろ、アリサ! 俺の事は放って行け!」

「秋介!?! ―ダメ! あたしたちはチームなのよ!?! 放って行けるわけ無いじゃない!」

「くっ、……このままじゃアリサまで。――なのは、すずか! 今すぐ

アリサを連れて逃げろ!」

「で、でも……!」

「そんな事したら秋介君が――」

「いいから早く!」

このままじゃ、四人仲良く――。

「――へうっ!?!」

ガシツ、と肩を掴まれた。

「先生、言ったわよね? 仕事が増えるのが嫌だって。なのに、何で集合時間無視して遊んでるのかな……?」

怒るところそこかよ!?! と突っ込みたくなかったが今はそんな状況じゃない。

周りで燃え盛る炎がイイ感じのエフェクトになって先生が地獄の戦鬼に見える。

……いや、どちらかと言うとアマゾネス……。

『マスター、余裕過ぎますって』

『やっぱり?』

仕方ないじゃん。そう思っちゃたんだから。

「……ごめんなさい。夢中になり過ぎました」

そう言うのと、先生が苦笑した。

「……まあ、ただ遊んでいただけで迷子とかじゃなくてよかったわ。これに懲りたら次からはちゃんと時間を守るのよ。そっちの貴女たちも、わかった?」

「「はい……」」

「わかったのなら宜しい。……じゃあ、戻るわよ。皆が待ってるわ」

そう言って先生は集合場所に戻っていく。

「……戻るか」

俺たちはアスレチックを後にして、集合場所へと向かった。

くあの先生、一体何者……?」

……やっぱ遠足と言ったらお弁当だよね!

昨日から仕込んでいて正解だったな。青空の下で食べることでなお美味しい……!

『流石、秋介です。この唐揚げ、下味も揚げ加減も完璧です』

隣で、山猫の姿で器用に唐揚げを頬張るリニスから念話が来た。

『ふふん。食に関しては俺の辞書に手抜きは無いよ……!』

『……こればかりは、秋介には勝てませんね。悔しいです』

『そう? 俺はリニスの料理好きだよ。なんかホツコリするし』

他にも士郎さんや桃子さんが作ってくれるご飯も同じようにホツコリする。やっぱ子供を育てた経験かね。

料理には人それぞれの持ち味があるって言うからね。そんな気にするような事じゃない。

『マスターとリニスさん。お二人が違う味なのは良い事だと思いますよ』

『……秋介、セラフ。ありがとうございます』

そつと、周りに気付かれないようにリニスは頭を下げた。
俺はそんなリニスの頭を撫でる。

「うんうん。——うん？ どしたの、すずか」

「秋介君のお弁当って、もしかして手作り？」

「そだよー。良かったら食べる？」

「え、良いの？ ……じゃあ、卵焼きが良いな」

「あいよ。……ほい、どうぞ」

お弁当から卵焼きを一切れ箸で摘み、口元に持っていく。

「……いただきます！」

一瞬驚いた顔になったすずかは、パクツ、と一口。

「どう？」

「——美味しいよー！」

「そりやよかった。なのは達も、……どうしたのよ、二人共」

まさかジト目で見られるとは思わなかった。

『マスター、わざとやってます？』

『……まあ、一応』

『………』

ヤメテ。沈黙が痛い。リニスもジト目で見ないで……。と言うか
山猫姿でもジト目って出来たのね。

『マスター……』

『秋介……』

『……ゴメンナサイ』

俺が悪かった。

「二人は何が食べたい？ 秋介さんが食べさせてあげよう——」

「——卵焼き（なの）！」

「……まずはアリサからね。なのはは後。この前ご飯食べに行った時
にやったでしょ？」

「むく。わかったの、——にや!？」

渋々といった感じで納得したなのはをアリサとすずかが囲んだ。

「ねえ、なのは。どういふことか教えてくれるわよねえ……？」

「なのはちゃん。一人でそれはズルいよ？」

「あわ、あわ、あわわわわ……！」

あたふたするなのはに二人はさらに詰め寄った。

「どういうことか」

「教えてね。なのはちゃん」

「にや、にやあああ……」

……女の子って怖いね……。

『原因を作ったのはマスターですよね』

『ごめん。今回は本当にごめんなさい』

三人には今度、うちに来てもらってご馳走しよう。何が食べたいか聞いておかなきゃなあ……。

と、お茶を飲もうとしたら、中身が空っぽだった。

「……今の内に飲み物買ってくるか。リニス、三人の事よろしく」

「ニヤウ」

リニスにこの場を任せ近くの自販機に向かった。

「これは——」

自販機には、お水にお茶、コーヒーといった商品が売っているが……。

「——メロンソーダ・スイカ味だ?! 意味が解らんけど面白そうだから買ったあ……ッ!!」

メロンとスイカ。相反する二つの味を合わせた奇妙な飲み物。こんなモノを見たら買うしかないじゃない!

「あ、ポチツとな」

自販機にお金を入れてボタンを押すと、ガコンツ、という音がした。「おおう、なんだコレ。緑と黄緑が赤に侵食されてる……」

取り出して見ると、ちよつと引いた。見本では上半分が赤く下半分が緑と黄緑に分かれている。しかし出てくる際にシェイクされたのか、奇妙な色をしていた。

「とりあえず一口。——コレは中々、……不味い!」

飲んで分かったけど、コレ果肉入りですやん。しかもメロンとスイ

カのダブル果肉入りだ。

メロンのモニュモニュした食感とスイカのシャクシャクした食感が、中途半端に入っている所為で喉越しが悪い。ドロツ、てしてる。

「コレ、どうしよう……。——ん、あれ……。？」

ふと気づくと、見覚えのある白衣を着た男が隣の自販機前に立っていた。

「む、なんだね、コレは。メロンソーダ・スイカ味？ 意味が解らないが興味を誘うネーミングじゃないか。メロンとスイカと言う、相反する味を組み合わせるとは、……。中々どうしてコレを考えた人物が何を思ったのか気になるじゃないか。……。ふむ。飲めば解るだろうか。どれ、一つ買ってみようじゃ、……。なんだ、売り切れか。仕方がない、別の物を買おうとしよう」

男は長い独り言の末、お茶を買った。

……。まさかの再会か……。

「スカさん、何してんの？ あと、飲みかけで良かったらこれ飲む？」
「おや、君はいつぞやの少年じゃないか。私はちよつとした野暮用で来たのだよ。それよりいいのかね、それは君が買った物だろう？」

「別にいいよー。俺にはちよつと合わなかった」

「そうか。それならば戴くよ。どれ一口、……。ふむ、コレは中々に不味いね。この微妙な量の果肉がさらに不味さを引き立てるというか、これが不味さの元凶じゃないだろうか。そこさえ改良すれば美味しく飲めるようになりそうだが……」

どうすれば、と顎に手を置きスカさんは考え出した。

『マスター、この男性は次元犯罪者のジェイル・スカリエツティですよ。ね。いつの間に関り合っただんですか？』

『知り合ったのは二年前よ。俺が初めて高町家にお呼ばれして、泊まるために着替えを取りに帰ったでしょ？ それからまた高町家に戻る時に会った』

『——ああ、あの時ですか。マスターって結構、重要人物とのエンカウント率高いですよね』

『ホントにね』

これから先もエンカウトするんだろーな……。――

「スカさん、長い。話し長いから」

「……ならばセインに、――おっと、すまなかった。改めて久しぶりだ、少年。あの時は道を教えてくれて助かったよ。お陰で娘たちにとどやされることなく、それでいて新しい発見も出来た。感謝するよ」

と、スカさんは頭を下げた。

「いやいや、俺はただ道を教えたただだから気にしないでよ。今日は一人みたいだけど、娘さんたちは元気？」

スカさんは顔を上げ、

「ああ、困るほどにね。最近、また娘が増えたのだがその子がまた大の料理好きでね。この間も調理器具を作ってくれと言いに来たよ。試しに色々と作ってみたのだが、思いの他大喜びで料理を作り過ぎてしまつてね。食べるのが大変だったよ。」

他にも最新のPCが欲しいだの化粧道具が欲しいだのと言いはじめ
てね」

本当に困つたものだよ、と肩をすくめるスカさんを見て思う。

……何この良いお父さん。

「楽しそうだね、スカさん」

「……君には私がそう見えるのか。何故だろうね、先日もウーノに同じような事を言われたよ」

「じゃあ、ウーノさんも俺と同じことを思ったんじゃない？ 良いお父さんだ、って。娘さんの話をするスカさん、すげえ楽しそうだったよ」

そう言うと、スカさんは驚愕から笑顔になった。

「――そうか。私は楽しんでいたのか。この私が……。――これは良い事を聞いた。以前君と出会ってから私は色々変わったようだ」

「何で……。？」

道を教えたと言っても直通の電車があるって教えたただけだし。

……わからん。

「あの日、君が教えてくれた道のお陰でテーマパークに行った日の事だ。私はただ娘たちの付き合いで行つたつもりだったのだが、……。娘

の一人に何て言われたと思う?」

「んー、楽しそう、的な?」

「惜しいね。その時に言われたのは「嬉しそうですね」と、そう言われたよ。あの時は何故そんな事を言われたのか、そもそも私は何が嬉しいのかが理解できなかった。しかし今日、君に再会し、君と会話し、君の言葉がヒントになった。私は、答えを得たのだ。」

そう、——私は娘の笑顔を見るのが嬉しかったのだ、と」

スカさんは何か吹っ切れたような顔で、そう宣言した。

「そりゃ良かったね。今のスカさんなら娘さんだけじゃなくて、世界中の子供を笑顔に出来そうだよね」

「……世界中の子供を笑顔に、か。——面白そうじゃないか! どうも最近、知り合いの老人たちからの要望がしつこく嫌気がさしてきた所だ。これを機に彼らの下を離れるのも良いかもしれないね。さっそく娘たちに連絡しなければ……!」

と、何処かに連絡を入れるスカさんはめっちゃ楽しそうだ。

……さて、そろそろ戻らないと心配させちゃうよね。

「ねえ、スカさん。俺、そろそろ戻るよ。向うで友達が待ってるから」「そうか、引き留めて悪かったね。それと今日は色々助かったよ。君には感謝してもきれない。……良かったら向うにある遊具、アスレチックと言ったかな。アレで遊んでいくと良い、アレはテーマパークに行つた際に刺激的な体験をしたのでね、その時に造つたモノだ。もちろん私の技術の粋を集めたモノで、安全対策は完璧だ。」

ちなみに、今日はそのメンテナンス方法をまとめた物をここの管理所へ持ってきたのだよ。一々ここまで来るのは骨が折れるからね」

楽しんでくれたまえよ、とメロンソーダスイカ味のペットボトルを懐にしまった。

「そつか。じゃあ、後で友達と一緒に行くよ。さつきは色々あつて全部楽しめなかったからね」

「そうしてくれたまえ。……では、私もこの辺りで失礼するよ。娘たちが待っているからね。」

——さらばだ、少年っ!」

踵を返して去っていくのを見て、

「スカさーん。出口あつちだよー？」

「……度々すまないね、少年。今度こそ本当にさらばだ」

今度はちゃんと出口に向かって歩き出したスカさんを見送った。

「さて、戻るか」

『そうですね。——ほら、探しに来たみたいですよ？』

……コレは……。

『リニス、そこに三人つて居る？』

『いえ、今しがた秋介を探しにそちらに向かっていきましたよ？』

『ソウデスカー……』

とりあえずお茶を買って——。

「——カフツ!？」

自販機にお金を入れようとしたら三つの衝撃が来た。

「見つけたの!」

「心配させるんじゃないわよ!」

「本当だよ、もう!」

なのは、アリサ、すずかの三人娘に捕まった。

「いやー、ちよつと悩んじゃって……」

「「悩み過ぎ(だよ、なの)！」」

「ごめんなさい……」

思った以上に心配させたみたいだし、さっさと戻ってお弁当食べようかね。

それで、午後からはスカさんおすすめのアスレチックに再チャレンジと行きますか……!」

無印編

第六話：今日、幼馴染が魔法少女になったよ！

ある日、目が覚めたら目の前にイザナミさんの顔があった。

「ふふふ、おはようございます」

「——はいっ!？」

バツ、と起き上がって辺りを見ると、雲一つない黄色い空が広がっていた。

……ここって、転生前の……。

「目覚めの方はいかがですか？」

「え、あ、はい。バッチシ覚めましたよ……。でも、何でイザナミさんが」

「此度、貴方を呼んだのは、そろそろ原作が始まるのでその報告と、貴方の顔が見たかったからですよ？」

ふふふ、と口元を隠して笑うイザナミさん。

「もうそんな時期ですか。一応、自分の身は自分で守れるようになったんで心配はないですねー」

……入学して三年、思ったより早かった。

小学校に入学してから特訓に使う時間が減ったが、何とか魔力量がSランクになった。

一部だけ特殊能力系の宝具も使えるようになった。

スキルの方も順調にランクが上がったり、新しいスキルを取得したりで順調だ。

「それと、セラフをありがとうございます。お陰で色々助かってます」

「ふふふ、それは重畳です。あの子は私の思った以上に貴方の事を好んでいるようなので、これからもお願いしますね」

「もちろん。セラフは家族ですからね！」

「やっぱり感情豊か過ぎない？ と今でも偶に思うが、それも含めてセラフは家族で相棒だ。」

「ふふふ、あの子は幸せですね。……さて、目覚めの時間が近くなりま

したから、そろそろ本題に入りますね」

「ああ、原作が始まるんですよね。もしかして何か問題でも?」

「いえ、問題は特にはないです。ただ、貴方があの世界に存在する事での影響は出ています。」

「ですから、貴方が持つ知識とは似て非なる未来が訪れます。一応の注意をお願いしますね」

「まあ、その辺は想定内なので大丈夫ですよ。いざと言うときは俺とセラフが何とかしますから」

その事も含めて自分が選んだ事。だから、逃げるなんて選択肢を持ち合わせてない。楽はしたいけどね!

「……私の心配が過ぎていたようですね。今の貴方なら心配は無いでしょう。……では、時間のようですね」

「そうですか、なら……。——イザナミさん」

「はい、何でしょう?」

「色々、ありがとうございます。お陰様で楽しく第二の人生を歩んでいます。俺は今、幸いです! だから、——本当に、ありがとうございます!!」

「……顔をあげて下さい。貴方が幸いなら、それで十分です。……それでは、お元気で」

「はい! イザナミさんもお元気で!」

そう言って、俺の意識は途切れた。

くお目覚めく

『気分はどうですか、マスター?』

「バッチシ」

原作が始まるらしいし体調には気を付けないとね!

「さ、朝ごはんを食べに行きましょうかねー」

寝室を出て一階に降り、顔を洗ってからリビングへと向かった。

中に入るとリニス朝食を用意していたが、

「どしたの、リニス。元気ないみたいだけど……」

「え？ あ、何でもありませんよ。秋介の気のせいでは？」
「ならいいけどさ……」

最近のリニスは、何か考え込む事が多くなった。

『絶対何か隠してるよね』

『間違いなく隠していますね。もしかしたら以前の主の事ではないでしょうか……』

『あるかもねえ』

以前の主ってことは、……プレシア・テストロッサか。

……ジュエルシードの事ね。

原作が始まるなら、すでにジュエルシードがこの街に散らばってるはず。

「ねえ、リニス。もしかして前の主の事で悩んでる？」

「何故、そう思うのですか……？」

この反応、……やっぱり。

「だって、リニスがそこまで気にするような事はそれしかないでしょ。初めて会った時と同じ雰囲気だったし」

「……それは」

「話せる事だけで良いから話してよ。俺でよければ力になるよ？」

「秋介……。私は——」

『——マスター、近くに急激な魔力反応が出現しました！』

「マジか、何処で!？」

ああもう、せっかくリニスが話してくれそうだったのに！

『庭です！』

「うそお!？」

急いで庭に出ると、そこには青い光を放つ宝石のようなものが落ちていた。

……もしかしなくてもジュエルシードが!？」

「どうしよう、セラフさん!？」

やっべえ、魔導師呼ばないと、……あ、ユーノ君いないかな!？」

『落ち着きましようよ。慌てすぎです。——セットアップして封印すればいいんですよ』

「あ、そっか。——セットアップ！」
体が光に包まれ、バリアジャケットに変わった。

「とりあえず、封印！」

『封印魔法発動します。——封印！』

すると光は収まり、後にはジュエルシードだけが落ちていた。

「まったく。何でこんな所にあんの、危ないなあ……。ん、リニス？」
バリアジャケットを解除して、ジュエルシードを拾って家の中に入るとリニスがポカン、と口を開けていた。

「——はっ！ すいません。急なことで呆気に取られてました……」

「わかるよその気持ち。俺だって信じらんないもん」

だって家の庭でロストログアが暴走しそうだったんだよ!? ビビるわ！

あーあ、話の腰も折れちゃったし、さっさと朝ごはんを食べて学校に行こうかね。

俺はリニスと朝食を食べた。

「じゃあ、俺は学校に行ってくる。帰ってきたら話しの続きをしたいんだけど、良い？」

「考えておきます、じゃダメですか……?」

「それで良いよ。……じゃ、行ってきます！」

「行ってらっしゃいませ、秋介……」

くなのはたちと合流く

三年生になっても俺は、変わらずなのは、アリサ、すずかの三人と同じクラスになり、担任も一年の時と変わってない。ちなみに、二年生の時もなのはたちと担任は一緒だった。

まあ、そんな事は横に置いておいて、今日の授業は“将来の夢”を考える事だった。

「——こうやって、色々な仕事があるわけだけど、皆は将来的にはどんな仕事に就きたい？ 無理にとは言わないけど、今から考えておくと良いかもしれないわ、……と。時間なので授業はここまで。午後は体

育だから皆遅れないようにねー」

そう言つて先生は教室を出て行った。

「秋介くん、お弁当食べに行こう?」

「あいよー」

なのはに呼ばれ、アリサとすずかも一緒に屋上へ向かった。

屋上に着くとなのは、アリサ、すずかはベンチに座つて、俺はその前に胡坐をかいてお弁当を広げた。

「ねえ、秋介は将来どんな仕事をしたいの?」

「特に考えてないよ。今は色々やりたい事あるし、考えるのはそれが全部終わってからかな。皆はどうするのよ」

「あたしはいっぱい勉強して、高校卒業したら家の手伝いをするつもりよ」

「私は機械系が好きだから、そういう関係の仕事に就きたいなつて」

「わたしは、……どうなのかな」

「なのは、あんた翠屋継がないの?」

「それも良いけど、……やりたい事はある気もするんだけど、まだそれが何なのかハッキリしなくて……」

よく分からないんだ、となのはは空を見上げた。

……コレ、見事なフラグだよねー。

確か、今日の帰りにフレット姿のユーノ君を見つけたっけ?

「私は運動も苦手だし、特技も無くて……」

「何言つてんのよ、このバカチンが! あんたはあたしより理数系の点数良いくせに特技が無いですつて!? そんな事自分で言うんじゃないわよ——!」

「あう!」

ペチツ、とアリサが投げたカットレモンが、なのはのほっぺに張り付いた。

「そうだよ、なのはちゃんにしか出来ない事がきつとあるよ!」

「だね。なのはなら普通じゃない仕事とかに就きそうね」

「そ、そうかな……。そうだよね、ありがとう! あ、秋介くんその唐揚げちようだい?」

「竜田揚げね、ほいよ。アリサとすずかも食べる?」

「食べるに決まってるじゃない!」

「いただきます!」

こうしてお昼を食べ終え、午後の授業は睡魔と戦いながらもなんとか切り抜け下校時間になった。

「はーい、皆お疲れさま。着替えた子から帰っていいわよ」

先生はそう言っつて職員室に歩いて行き、俺はさっさと教室に戻つて着替えた。

「秋介くん、帰ろう?」

しばらくして、着替えを終えて戻つて来たのはたちが教室に戻つて来た。

「んー、今日は一人で——」

「にゃ〜……」

「む……」

「じー……」

「——帰ろうと思つたけど、やっぱり大勢で帰つた方が楽しいよね!」

「うん!」

「当り前よ!」

「そうだね!」

別にいつも一緒に帰らなくても、と思う。他にも一緒に帰りたいたいと思つてる子居るよ、絶対。

今では普通になったのはたちとの登下校は、それはもう最初は疲れた。

だって、いつからか聖祥小の三女神と呼ばれるようになっていた三人と、行きも帰りも一緒なわけです。妬みやら嫉妬の視線が鬱陶しかった。今はもう慣れたけど。

『マスター。先ほどリニスさんから連絡がありました、帰ってきたら話したい事があるそうです』

『あらホントに?』

なのはたちには悪いけど、今日は先に帰らせてもらおう。

「あー、ごめん。やっぱり今日は先に帰えるよ。ちよつと今、リニスが調

子悪いみたいでさ」

「え、リニスさん大丈夫なの!？」

「それなら仕方ないわね。あたしたちもお見舞いに行きたいけど、今日は塾だし……」

「そうだね……。よかつたら良い獣医さん紹介しようか？」

「ちよつと気分が落ちてるだけみたいだから大丈夫だって。じゃお先に、また明日な」

そう言つて俺は教室を後にした。

「うん、バイバイ！」

「また明日よ！」

「さよなら、秋介君！」

くちよつと急いで帰宅中

「つまり、最近リニスが変わったのはこのジュエルシールドが原因だったのね」

「はい。私の、以前の主が探していたモノです。ここ最近、この街に妙な魔力反応が転移したのを感じたので見に行く……」

「それが落ちてた、と」

俺が今朝封印したジュエルシールドとは別の、封印されたジュエルシールドをリニスは持ってた。

「はい。此方のジュエルシールドは私が封印したのですが、まさかうちの庭に落ちているとは思いませんでした」

「だよなー、俺も焦った。と言うか、リニスが気付いてたならセラフも気付いてたよね？」

『もちろん気付いていましたよ？。ですが今朝の一件まで特に暴走する気配も無く、昨日は何者かが回収しようとしていたので言いませんでした』

セラフよ、そんな大事な事を黙ってないでほしいな。

……あれ、もしかしてそれに気付けなかった俺って魔導師としてダメなんじゃ……？

『マスターが気付かないのも無理はないです。何せ、かなり小さな魔力反応でしたから』

「そうですね。私も偶然気が付いた感じなので、それを察知していたセラフが凄いのかと……」

「ああ、それは納得だね！ 流石セラフさん、俺の自慢だ……！」

『もう、うれしい事言ってくれますね、マスター……！』

イエーイ、とハイタッチした気分になった。

「じゃ、話を戻すけど、……何で言ってくれなかったのよ。言ってくれば封印の協力するよ？」

『そうですね。みずくさいですよ、リニスさん』

「う、すみません……」

シユンツ、とリニスの猫耳と尻尾が下がった。

「もしかして、前言つてた女の子と顔を合わせるかもしれないって思ったから？」

「……その通りです。以前の主はこの世界にジュエルシードがあることを知っているでしょう。ですが、その方は病を患っていて直接本人が来ることは無いはずです。来るとしたら——」

『リニスさんが教えていた女の子、ですね。しかし、何でリニスさんはジュエルシードを集めようと思ったのですか？ 以前の主に送るつもりだったとか？』

「いえ、管理局に引き渡そうと思っていました。あの方がジュエルシードを求めるのは、ある願いを叶える為なんです。その願いは、一歩間違えば他の次元世界を巻き込んだ大規模次元震を起こしかねません」

「その願いつてのは、……話せそうにない？」

「……はい。すぐには言えませんが、近い内に必ず話します」

「ん、わかった。……よし。この話はここまで」

『では、これからどうします？』

「もちろん、ジュエルシードの回収。晩ごはん食べたらず探しに行こうか」

「な、良いのですか!? 何が起きるか分からなくて、危険なのですよ!?

それに、これは私が勝手に始めたことです。貴方たちは——」

「関係無い、とは言わないでね。リニスのそんな顔を見たら放っておけないって。それに、以前の主も教え子の女の子もリニスにとっては大切な家族なんですよ？ だったら俺にも手伝わせてよ」

「——！」

リニスは驚愕して俺を見る。

……こういったのは俺のキャラじゃないよね……。

と思うが、気にしてもしようがない。今くらいはカッコつけても良いよね。

「俺にはさ、宝具っていう『奇跡』が使えるって知ってるよね」

「……ええ、初めて見た時は大変でしたが、……それが一体」

「ほとんどが戦いに使うようなモノだけど、中には人を助けることができるモノもある。もしかしたら宝具の中にはリニスの言う『以前の主の願い』を叶えるモノだってあるかもしれない」

「——それは——！」

「リニスの言う『以前の主の願い』が何か、俺は知らない。だから好き勝手言ってる。

だけどこれだけは覚えておいて。俺はリニスの事を大切な人だと思ってる。リニスだけじゃないね、なのはもアリサもすずかも大切な人だ。

会ったことは無いけど、リニスの以前の主と教え子の女の子もそこに含まれるからね？」

だからその人たちが、リニスが望むのなら、

「大切な人の為だったら俺は、どんな『奇跡』でも起こしてみせるよ」

「……あ、——ッ」

ツウツ、とリニスの瞳から涙がこぼれた。

……えええつ!?! 何で!?!

どうしよう!?! リニスが、リニスが泣いちゃった!?!

『セラフ、セラフ！ まさか泣くとは思ってなかった!?!』

『落ち着いてください、マスター。普段のマスターとのギャップが凄いです。カッコよかったですよ……!?!』

『今感想は求めてないよ!』

ガラでもない偉そうな事ペラペラと吐いて、しかも泣かすとか最悪だな、俺!?

何が「大切な人の為だったら俺は、どんな『奇跡』でも起こしてみせるよ」だ。カッコつけすぎだわ!

……いかん。恥ずかしくなってきた……!

『今更何を恥ずかしがってるんですか。今までの恥ずかしいセリフを再生しましょうか?』

「お願いそれだけは堪忍して下さい、セラフさん! てか、前にも同じような事があつた気がする!」

『ちなみに、此方が今までの映像や写真です!』

セラフがそう言うのと、複数の空間モニターが現れ、生活のワンシーンが映し出されていた。

「アルバム作る手間が省けるね! って、言ってる場合か!!」

ええい、セラフと漫才してる暇はない。急いでリニスを――。

「――プ、ははは……ッ!」

「リニス……?」

「フフツ。す、すいません、……。今の今までカッコよかったのに、急に、――プフツ!」

涙を吹きながら、笑いを堪えるリニスの顔は何か吹っ切れたように見える。

『マスター、もしかしてワザとやりました?』

『セラフには俺がそんな風に見える?』

『少しだけ、でもほとんどは素ですよ。……マスターのそんな所、好きですよ』

『……ありがとう、セラフ』

ホント、このデバイスは優秀すぎる。俺にはもつたないくらいだよ。

「それで、リニスはまだ反対する? 俺がジュエルシードを集めるのをさ」

そう聞くと、リニスは横に頭を振り、

「いいえ。どうせ言っても聞かないでしょうから諦めます。……ですが、ジュエルシードを封印に行く際は声を掛けて下さい。私も一緒にしますから」

絶対です、と念を押された。

「わかった。その代り、近い内にちゃんと話聞かせてね?」

「はい、必ずお話しします」

「なら宜しい。さ、早く晩ごはんの準備しよう。んで、ちゃっちゃと食べ探しに行こう」

あ、今夜は簡単に炒飯と餃子にしよう。

くパラパラ感にこだわったら遅くなった……く

家を出る前に、なのはから携帯にメールが来ていたのに気付いた。

『なのはさんのメールには何と?』

俺の頭に乗る山猫姿のリニスから念話が来た。

「塾に向かう途中で傷ついたフェレットを見つけて、病院に連れて行っただと」

『フェレット、……ですか』

「らしいよ。それで、なのはが飼い主見つかるまで預かるって」

……ついにユーノ君となのはが出会ったか。

時間的にも、もうすぐユーノ君が念話を飛ばす頃合いかな。

「セラフ。一応、広域サーチしといてくれる? 別の場所でジュエル

シードが暴走したら大変だから」

『もう行っていますよ。……今の所、目立った反応はありませんね』

流石。万が一は起きないと思うけど、注意はしておかないとね。

「そっか。じゃ、そろそろ行きましようかね。セラフ、セットアップ」

「了解です、マスター!」

バリアジャケットに着替え、家を出た。

……とりあえず、アレ使つときですか。

——〈ノフェイス・メイキング顔の無い王〉——。

サツ、と緑のマントを纏う。

「あ、フード被るけどリニスは大丈夫？」

『構いませんよ。ですが、このマントは一体……？』

「これは〈顔の無い王〉って言って、……まあ、簡単に言えば周りから見えなくなるんだよ」

確か、完全な透明化、背景との同化だったわけ？ 詳しい事は忘れてたから今度セラフさんに聞こう。

『なるほど……。そのような宝具もあるのですか』

興味深いです、と頭の上でリニスが顎に手を置いたのが分かった。

猫の手で器用な……、と思い、飛行魔法を使って浮き上がる。

「さて、と。ジュエルシードは何処かな？ ……ん、今のは……」

辺りを見回すと、視界の端に青い光が映った。

『マスター、近くの林に反応があります』

「やつぱり。……お、あれか！」

急いで飛んでいくと、落ち葉の中に光るジュエルシードが落ちていた。

「セラフ、封印よろしく」

『はい。——封印完了しました』

「……よし。次は何処らへんよ、セラフさん？」

封印したジュエルシードを拾い、とりあえずポケットにしまっておく。

『ここから十時の方向に反応がありますが、——どうやら其方よりも優先した方がいい反応が出現しましたね』

「……それって」

まさか、と思った瞬間、少年の声で念話が聞こえた。

『——聞こえますか？ 僕の声が聞こえる方、お願いです。力を貸してください！』

直後、遠くの方で何か破壊されるような音が響いた。

『管理局の魔導師でしょうか？ ……いえ、いくら何でも早すぎますね。では一体……？』

『おそらく昨日、ジュエルシードを回収しようとした人物じゃないでしょうか。魔力反応も一致しますし、マスターはどう思います？』

「んー、まあ、とりあえず行こう。その方が手っ取り早い」
十中八九、ユーノ君だろうけどね。

『ですね。いざと言う時は私も加勢しますから』

「あいよ。セラフ、場所は？」

『近くの動物病院です』

「んじや、行きますかねー！」

飛び上がり、少しすると動物病院が見えて来たが、

「黒いマリモか……」

『どちらかと言うと埃では？』

『……どっちでもいいと思いますよ』

その周りを黒い影っぽいのが飛んだり跳ねたしているのが見えた。

「……なんかデカくね？」

俺が知ってるのより一回りは大きいんですが。これも俺が関わった影響なのかね……？

『そのようです。あの異相体、……反応からして三つのジュエルシードを取り込んだようですね』

『三つですか!? 秋介、急いで封印しないと被害が……!』

ペシペシツ、と猫の手でリニスは催促してくる。

「ちよ、リニス待つて、前が見えないい、——危ねえ!」

リニスの肉球が視界を遮り、電柱にぶつかりそうになった。

「……もう少しで頭から突っ込む所だった」

リニスは抱えた方がいいかな、と思ったら急に、キーン、と音が鳴った。

「今のつて、結界……?」

止まり、フードを取って周りを見ると人の気配が無かった。

『この辺り一帯を覆うほどの結界を張るとは、中々の魔導師のようですね』

『そんな事よりも急いでください、秋介!』

「落ち着いてリニスさん! 貴女の肉球が視界を邪魔するんですよ!」

……あ、なのはだ」

『誤魔化さないでください、——え、本当になのはさん!』

視界を遮る猫の手を捕まえ病院の方を見ると、そこにはなのはが居た。

『何故なのはさんがここに、……もしかして先程の念話を聞いて!?』

『そうでしょうね。なのはさんはジュエルシールドがこの街に散らばった辺りから、元々秘めていた魔力資質が少なからず目覚めていたようですからね』

『流石、ですねセラフは。私は気づきませんでした。……もしかすると、秋介も知っていたので?』

「まあねー」

『貴方は変な所で鋭いですね。……これも才能、と言うものでしょうか? ……はあ』

むう。何で最後ため息をつかれたのか分かんないけど、変な所は余計じゃね?

「……そんな事よりも、なのは見てみて? 頑張つて埃マリモから逃げて、——ええ!?!」

いつの間にか、フェレット姿のユーノ君を抱えたなのはが埃マリモに追われていた。

『マスター——ッ!!』

「わかつてる……!! セラフ、弓モード!」

『はい!』

セラフは瞬時に白い弓へと形を変えた。

周りに被害が出ないよう最小にまで込める魔力を抑え、

「——梵^フ天^ラよ、地^フを^マ覆^スえ——ッ!」

光炎の矢を放った。

ヒュンツ、と矢は真っ直ぐ飛んで行き、触手のようなものを伸ばす寸前の埃マリモを射抜いた。

……今度は目からビームver.を試してみようかな!

ま、そんな事は置いておいて、何とか間に合つてよかった……。

『お見事です、マスター。ですが、すぐに再生しますよ』

元のペンダント型に戻ったセラフの言う通り、埃マリモは徐々に元に戻っていくが……。

「……いや、時間稼ぎくらいがちょうどいい」

「どうやら主役の準備が整ったようだからね、離れて見学と行きましようか。」

『どういうことですか、秋介？』

「あそこ見てみ。せっかくの出番を取っちゃかわいそうでしょ？」

『——まさか……！』

リニスを促した先、ユーノ君となのはの足元に桜色の魔法陣が展開されていた。

「——管理権限。新規使用者設定機能、フルオープン。これから僕のような事を繰り返して！」

「は、はい！」

なのはがユーノ君の言葉に頷き、唱えた。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり……」

「契約のもと、その力を解き放て」

「契約のもと、その力を解き放て……」

「風は空に、星は天に」

「風は空に……、星は天に……」

「そして不屈の魂はこの胸に」

「そして不屈の魂はこの胸に！」

「この手に魔法を！」

なのはが赤い宝石のようなものを持つ右手を掲げ、

「——レイジングハート、セット、アップ！」

言った瞬間、桜色の光に包まれた。

『すごい魔力ですね。彼女にこれほどの資質が眠っていたとは……』

『……推定AAAランク。ふふ、これほどの魔力量とは、なのはさんは流石ですね、マスター？』

「まったくですね！」

泣きたくなっちゃうね。自分で選んだ事だけど、俺は四年間特訓して最近やっとSランクなのに。

なのに、なのはつてば魔導師になってすぐAAAランクとか、……

もう、流石主人公！ としか思えないね！

「これなら手を貸さなくても何とかかなりそうね」

『では、マスターはこのまま静観するという事ですか』

「そうね。今なのはに俺が魔導師だってバレると、色々とめんどくさいからねえ」

リニスの事も気付かれるかもだし、後々の事を考えると動き難くなる。ましてや管理局がいつ介入してくるかわからないので余計に、ね。

『先ほどの攻撃でばれてしまったのでは……？』

「大丈夫だよ、リニス。——そのために〈顔の無い王〉を纏ってるんだから。……お、なのはが出て来た」

桜色の光が収まると、そこには白いバリアジャケットに身を包み、杖状のレイジングハートを持ったなのはが立っていた。

「え!? ええええええええ!?!」

「やっぱり君には凄い資質が——」

自分の姿に驚くのはと、感嘆するユーノ君を眺めながら思う。

……ついになのはが魔法少女に……!

歴史的ワンシーンを目前に、ちよつとテンションが上がった。

「よし、これで心配はないかね。——なのは、頑張れよ……!」

リニスを頭から降ろし、抱えて静観を決め込むことにした。

見守る先、なのはがレイジングハートを盾に埃マリモの攻撃を防ぎながら右手を掲げ、

「こう、かな!?!」

「——ッ!?!」

放たれた魔力砲に吹き飛ばされた。

「凄い……!?! あっ!?!」

埃マリモは三体に分裂し、空中へと逃げた。

「——オオオオオッ!」

「待って!」

なのは飛び上がり、埃マリモの攻撃をフラフラしながらも躲している。

……飛行魔法も簡単に使ってるよ……。

『マスターも飛行魔法を使いこなすのは早かったですよ?』

「え、そうなの?」

『ええ、本当です。秋介はイメージで魔法を使うタイプなので、飛行魔法などの集中する系の魔法は無意識の内にマルチタスクを使いこなして処理しているのでは?』

「……マルチタスクって、なに?」

『はい……!?!』

セラフとリニスに声を合わせて驚かれた。

……え、そんなに驚かれることなの……?」

名前は知ってるけど、実際の所よく知らないだよね、アレ。

『まさか、この状況でマスターに驚かされるとは思いませんでしたね……』

『同感です、セラフ。私も、まさか秋介がマルチタスクを理解していないなんて……』

はあ、と二人のため息が胸に刺さる。

「何かごめんなさい……」

『帰ったら話し合いましうね、秋介』

うう、リニスの呆れた声が耳に痛いです。

『……まあ、それは置いておいてなのはさんを見てください。そろそろ終わりそうですよ』

セラフに言われ、なのはの方を見ると埃マリモが逃げ出していた。

そんな埃マリモになのはがレイジングハートを向けると、レイジングハートが変形した。

そして、

「シュート——ッ!!」

桜色の砲撃が、三体の埃マリモを一掃した。

『ほほう。今の一撃で三つのジュエルシードを同時に封印とは、……中々やりますね』

『……なのはさんは、将来は優秀な魔導師になるでしょうね』
「ですな……」

なりますとも。エース・オブ・エースと呼ばれるまでにね。

……無事何とか終了、と。

さーて、これから大変になりそうな感じがするね！

「よし。そろそろ帰りますか」

『そうですね。これ以上此処にとどまると、なのはさんに気付かれる可能性が万が一にもありますからね』

あー、なのはの主人公補正ね。

前もあつたなー。人除けの結界を無視されたのはビックリしたよ。

『帰ったらマルチタスクについて教えますので、——覚悟してくださいさ
いね……?』

「はい……」

リニスのマルチタスク講座は夜中まで続く気がする。明日も学校
なのに……。

第七話：公園つて絶対何か住んでるよね

なのはが魔法少女になった夜から数日が経ったある日の学校帰り。

「——はっ！ 角麩を買い忘れた……！」

俺はスーパーで夕飯の買い出し中だ。

急いで売り場にむかったが、残念なことに角麩は売り切れていた。

「くっ、リニスの為に今日はすき焼きにしようと思ったのに。仕方ない、豆腐屋まで行くか……」

他の食材の会計を済ませ、買い物袋をゲート・オブ・バビロンの「財宝」にしまい商店

街に向かうことにした。

「角麩がないと、リニス落ち込みそうだよね……」

『どうでしょうね……。今のリニスは色々とパンクしそうですから気付かないと思います』

「それは、……ありそうね。真面目過ぎなんだよ、リニスは。……はあ」

どうにかして元気付けたいよ。何か良い方法ないかな？ うーん……。

『マスターはリニスさんが言う“以前の主の願い”は予想がついているのでしょうか？』

「二応はね。でも、確証が無いんよ。下手に動いて変な事になったら嫌だし……」

イザナミさんに聞いた話だと、原作と違った出来事が起きるらしい。

リニスが消えてない時点でかなり違うが、それを除いても何か原作と違うような気がする。

この前のリニスの反応からして、アリシア・テストロッサが死亡しているのは間違いないだろう。気になるのはフェイト・テストロッサとプレシア・テストロッサの関係だ。

俺としては原作みたいな関係じゃないと良いんだけど……。

……今の段階で判断は難しい。

リニスが話してくれるのを待つしかないね……。

「それに、ジュエルシードの方はなのはに任せても大丈夫だよね」
なんだか原作よりも成長が早い気がするし、ユーノ君との魔法の訓練も順調みたいだからね。

現状、二十一個あるジュエルシードの内、俺たちが三個、なのはたちが四個。セラフによると残りの十四個のある内の二つは、すでに第三者が封印、所持してるらしい。

……間違いなくフェイト・テスタロッサだろうね。

なのはと出会ってもらう為にも、ここで俺たちは出張らない方がいいな。

『この期に及んでなのはさんに丸投げは酷いですよ、マスター。もういつその事、正体明かして手助けしましょうよ。彼女も喜んでくれますよ、絶対』

「えー、もうちよつと俺の正体明かすの引つ張りたいんだけど……。その方が面白い反応見れそうじゃん？」

『……今の言質取りましたからね？ いずれマスターはなのはさんに砲撃される……！』

「ごめんなさいそれだけはやめてくださいお願いします」

そんな事されたらデイベインバスターが飛んで来るじゃないですかヤダー。俺まだ死にたくないよ……。

『防げるくせに何言ってるんですか』

「精神的に死にそうなの。それでなのはが泣いてみ？ 理由は知らずとも恭也さんが殺りに来る」

もしかしたら士郎さんも来るかもしれない。そうなったら桃子さん、助けてくれるかな……。

最悪魔法で……、と考えながら商店街までの近道をしたら、

「……………うわあ」

『これはまた……。ここまで来ると運命ですね、マスター！』

……二度あることは三度ある、か……。

金髪少女——フェイト・テスタロッサと、燈髪お姉さん——アルフが、そこには居た。

なんとなく、ホントなんとなく近道だから公園を通り抜けようとし

たら遭遇してしまった。

なのは、アリサ、すずかの三人と出会った思い出の場所。この公園、絶対出合いの神様住んでるよね!?

よし、見なかったことにしよう。今は角麩を買うのが最優先だからね!

回れ右をして離れようとしたら、

「その人、動かないでください」

テストロッサに絡まれた。

……何で!? 俺何もしてな——。

『マスター、ズボンのポケットにジュエルシードが入ったままです』

『……マジか』

セラフに言われズボンのポケットを探ると、そこにはひし形のつるつるしたモノがあった。

……あ、忘れてた。

このジュエルシード、なのはが魔法少女になった夜のだ。拾ってポケットに入れたままだったのか……。

『……でもバリアジャケットのポケットに入れたのに何で?』

『マスターの場合、服とバリアジャケットを置換しているので物質的なモノはそのままなんです』

あー、なるほどね。……なんだ、勝手にセラフに回収されてるわけじゃないのか。

うう、まさかこんな事で絡まれるとは思わなかった。何とか切り抜けないと……。

「さつきから黙ってないで、何とか言ったらどうだい?」

いつの間にかアルフが背後に回って拳を構えていた。

「そのポケットに隠しているものを渡してください。出来るだけ穩便に済ませたいですから」

目の前のテストロッサも、黒い斧を俺に向けていた。

……いつの間にもバルディッシュを……。

セットアップはしてないようなので、本当に穩便に済ませたいのだから。

「ならその物騒なモノを降ろしてくんない？ 逃げたりしないから」
「……わかりました。アルフもこっちにきて」

そう言っただけでテストタロツサはバルディッシュを降ろし、後ろのアルフを呼んだ。

「…わかった。フェイトがそう言うなら従うよ」

渋々、と言った感じでアルフがテストタロツサの横に立った。

「貴方の要求には答えました。今度は私の要求に答えてください」

「良いけど、その前に聞かせてよ。何でコレを集めてるのか」

ポケットからジュエルシードを取り出して見せる。

まあ、答えてくれないと思うけど、一応聞いておかないとね。

「……貴方には関係ありません。早くソレを渡してください」

やっぱ話してくれないよね。逃げてでも追っかけてくるだろうし、リニスに助けを、……ダメだな。何を気にしてるのか知らんが、テストタロツサに会うのが気まずそうだし……。

『このまま、はいどうぞ、って渡すのはちよつと気が進まないかな。リニスの事もあるし』

『そうですね。どうしますか？』

隙を見て転移魔法かな……？

「あんた、一体何者だい？ ただのガキんちよにしか見えないけど……」

そう言っただけで、アルフが再び拳を構えた。

「ジュエルシードを持ってるとして事は魔導師なんだろう？ ——まさか、管理局か！」

「——ッ!？」

アルフの言葉を聞いてテストタロツサが一步飛び退のき、

「バルディッシュ、セットアップッ！」

『set up』

バリアジャケットを身に纏い、臨戦態勢になった。

……いや、ええー……？

ちよつとアルフさん、変なこと言わないでよ。あとテストタロツサ、こんな人目のある所でセットアップは止めよう？ 人に見られたら

大変でしょうが。

『セラフ、人除けよろしく……』

『もう張ってあります。それよりも、今は目の前のお二人をどうするかですよ』

だよね。何とか誤解を解かないと……。

「いや、俺は管理局の魔導師じゃないよ？　ただの……魔法使いだよ？」

『何故疑問形……。しかも魔導師と魔法使いは同じようなモノです』

むう、そうだった。じゃあ何て言えばいいの……。

「どっちも同じじゃないか！」

いきなりアルフが距離を詰め、拳を俺の顔めがけて突き出してきた。

「おう——ッ!？」

すんでの所で躲し、横へ逃れる。

「——と、と。いきなり殴りかかるのは良くな、——はいッ!？」

ジャラツ、と言う音と同時に体が燈色の鎖に捕まった。

……バインドですかい!？」

テストタロツサさん！　見てないで止めてよ、貴女の使い魔でしょ!？」

バツ、とテストタロツサの方を見ると、

「フォトン——」

バルディツシユを掲げ周囲に金色の魔力弾を複数展開し、

「ランサー——ッ!——」

撃ち放って来た。

おいおいおい、マジですか！　もしかしてホントに俺の事管理局の魔導師だと思ってる!？」

「ああ、もう！　セラフ、セットアップッ!——」

バリアジャケットに身を包むと同時にバインドを砕き、

「熾天覆う七つの円環——ッ!!——」

光でできた七枚の花弁を展開し防ぐ。

「——ッ!?!——」

俺がテストタロツサの攻撃を防いだのを見て、二人は驚愕って感じ

だ。

「危ねえ、もう少しで直撃する所だった……」

『お見事です、マスター。これも特訓の成果ですね!』

「はっはっは、ありがとうセラフさん! でも今はそれどころじゃありませんよ!」

なんか二人共さつきより警戒して構えてるんですけど!

『無理もないですよ。バインドで動きを止めたはずの相手がそれを碎き、なおかつ攻撃を防いだんですから』

「えー、それくらい誰でも出来るでしょ」

『……マスターは一度、自分のデタラメさに気付いた方がいいですね』
次元世界一のスペックを持つセラフにデタラメなんて言われるとは思は無かった。

……あ、今更だけど常時発動の宝具があつたね……。

あれ? でもそれなら……。

「何で俺、バインドを受けたの?」

確か、キヤッサー・デ・ロジエステイラ〈破却宣言〉があつたはず……。

あの宝具なら所持してるだけである一定以下の魔法を常時無効か出来る。

元は魔術だったけど、この世界ではちゃんと魔法を無効化できるのはリニスとの訓練で確認した。なのに何故?

『一応、一部の宝具は私の方でも制御出来るので、普段はOFFにしています。日常的に魔法を無効化していたら、何処で管理局に目を付けられるか分かりませんかね。』

ちなみに、先ほど〈破却宣言〉を発動しなかったのは今のマスターなら平気かな、と』

「なるほどなるほど……。はは、でもそれなら生身と同じだから俺危なくない!」

『いえ。マスターには数多くのスキルがありますので、いい感じに普段でもデタラメですね』

「……………」

『マスター?』

「……いや、何でもない。何でもないよう」

普段、戦闘とかほとんど無いからスキルがある実感薄かったんだよなあ……。

「何ごちやごちや言ってるんだい!」

「うをつと——!?!」

不意打ち気味に撃ち込まれたアルフの拳を躲した先、

「はア——ッ!!」

テスタロツサがバルディツシュで切りかかって来た。

「ああもう……ッ!」

ガキンツ、とバルディツシュを〈紅蓮の聖女^{ラ・ピュセル}〉で受け止める。

交差する〈紅蓮の聖女〉とバルディツシュを挟んでテスタロツサを見る。

「話も聞かないで切りかかるのは良くないと思うんですけど!?!」

「……ッ!」

テスタロツサは俺の頭上に四つの魔力弾を展開した。

「シュート——ッ!」

「またかつ!」

降ってくる魔力弾を後ろに飛ぶことで躲す。

……誘導弾!?

が、躲したはずの魔力弾が地面に当たる直前、直角に曲がり追って来た。

『shooot——ッ!』

セラフが四つの魔力弾を展開し、迫りくる魔力弾へ打ち込む。

直後、爆発が起こった。

それにまぎれて空へと飛びあがる。

「ありがとう、セラフ!」

『向うは割と本気で来ますよ!』

「やっぱり!?!」

と思ったら、爆発で上がった煙の中から、

「ハアツ……!」

『Arc Saber』

二つの光刃が回転しながら飛んできた。

「——ッ！」

左から飛んで来る光刃は体を捻って躲し、右の光刃は〈紅蓮の聖女〉で切り落とす。

「貫った——ッ！」

「何にもやらん！」

横から来たアルフの拳を左手で受け止め、

「ほい、っとー！」

その勢いを借りて下に居るであろうテストロッサめがけて投げる。

「しまっ!？」

「アルフ! ——きゃっー！」

アルフはテストロッサと激突して公園に落ちていく。

そんな二人を追って俺も公園に降りる。

……これで大人しくして——。

「——くれない!？」

降りる途中、先に落ちて行くテストロッサが俺にバルディッシュを掲げた。

「轟け、轟雷！」

『Thunder Smasher』

雷撃を纏った砲撃が飛んできた。

……あ、コレ直撃コースだわ。

なので、

「うお、——とっ！」

〈紅蓮の聖女〉に炎をのせた魔力を纏わせ、一気に振り切った。

……疑似真名解放、てね!

ホントに真名解放すると危ないからね。「魔力放出(炎)」のお陰でそれっぽく使えるのが良いね!

剣先が砲撃と触れた瞬間、さっきよりも大きな爆発が起きた。

上がった煙をかき分け、公園に降りる。

……おおう。周りが見えん……。

炎を纏わせたのが悪かったかね? こんなに見えなくなるとは思

わなかった。

「おーい。お二人さ——ッ!？」

大声を出したらテストarroツサが飛んできた。

『当り前です!』

『ごめんなさい!!』

そうこう言ってる内にテストarroツサが目の前に来た。

「ハッ——ッ!!」

「うおっ!？」

ガキンツ、とバルディッシュをへ紅蓮の聖女で受け止める。

再びへ紅蓮の聖女とバルディッシュを挟んでテストarroツサを見る。

「いい加減大人しくしてくれませんか!？」

「管理局に邪魔される訳にはいかない……!」

「だから俺は管理局の魔導師じゃないって、……言ってるでしょうが!!」

「——あッ!？」

バルディッシュを上へ弾き飛ばすと、その反動でテストarroツサは尻餅を着き、

「フェイト! ——くッ!？」

それを見て飛びかかって来たアルフをバインドで拘束する。

「アルフ!」

そんなアルフにテストarroツサが駆け寄るのを横目に、足元に落ちていたバルディッシュを拾う。

まさか戦闘になるとは思わなかったが、これで二人も話を聞いてくれるかね……?」

思い二人を見ると、

「フェイト! 私的事はいいから早く逃げるんだ!」

「出来ないよ! アルフまで居なくなったら私……」

今なお絶賛勘違い中である。

『この場面だけを見るとマスターが悪役ですよね』

「……うん。俺も思った」

これじゃまるで俺が悪いみたいじゃない。むしろ俺は被害者です

よ？ 今の戦闘は正当防衛です！

『とりあえずお二人の誤解を解きましょうよ。いつまでも帰らないとリニスさんが迎えに来ますよ？』

それもそうだよね。じゃあ、さっそく、

「そいや！」

「あうっ!？」

「あいたっ!？」

両手でテスタロツサとアルフ、それぞれの頭に手刀を落とし、ついでにバインドも解く。

「いきなり何を、——うっ!？」

また魔力弾を展開しようとするテスタロツサを二発目の手刀で抑える。

テスタロツサは両手で頭を抑えながらしやがむ。

「まったく。最初から違うって言ってるのにさあ。俺の事を管理局の魔導師だって、勝手に勘違いして襲ってきたそっちが悪いんだからね？」

「え、違うの……?？」

「違います。一応魔導師だけど、管理局とは何にも関係ないよ。ジュエルシードを持ってたのは知り合いの手伝いで封印したから、……あ、デバイス返すよ」

「バルデイツシュ！ ……ありがとう」

「それで、そっちのお姉さんから何か言う事は？」

「うっ、……勘違いして悪かった」

「あいあい。謝ってくればいいよ」

さて、誤解も解けたことだし、早く商店街に——。

「——待って！」

「何……?？」

行こうと思ったらテスタロツサに手を掴まれ止められた。

「あ、いや、その、……ジュエルシードを、渡してください」

どうしよう。振り出しに戻った気がする。

「……はあ。あのね、さっきも言ったけどコレは知り合いの物なの。

だから勝手には渡せない」

「お願いします。私たちにはどうしても必要なんです」

この頑固さと言うかなんと言うか、……どうしたものかねえ。

『マスター、急がないとお豆腐屋さんしまっちゃんいますよ』

わかっている。だけどこのまま無視して行くのもかわいそうじゃない。こんなに必死に頼まれるとき。

でもなあ、ここでジェルシード渡して帰ったら、リニスに何て説明しようかし……。

しかし急がないと角麩が買えなくなってしまう。むう、一体どうすれば、……あ、そうだ！

『いっその事、二人をリニスに会せばよくね？』

『マスターって、意外と大胆ですよね』

偶には良いよね。今日の所は角麩無しのすき焼きかな……。

「とりあえず、逃げないから手離して」

「あ、……ごめんなさい」

ボツ、と顔を赤くしてテストロッサは手を離れた。

アルフはアルフでテストロッサを心配そうに見つめて、……無いやん。

「お姉さんどしたの……」

「え、アルフ……？」

「ごめん、フェイト。アタシもう限界だよ……」

クウ、とアルフのお腹から聞こえた。

「……これ食べる？」

先程スーパーで買ったソーセージをへ王の財宝から取り出し渡す。

「良いのかい!? アンタ善い奴だね、さつきは急に襲って悪かったよ！」

受け取るや否や、勢いよくソーセージを完食した。

「えっと……。アルフがごめんなさい」

「お腹すぎすぎちゃってさ、ホント助かったよ」

ペコリ、と頭を下げるテストロッサと、あははー、と頭に手を当てるアルフ。

「いいよ、別に。それよりもお姉さん、ちよつとここち来て」

「……？ 何だい？」

警戒心が解けたのか、アルフがテストタロツサの隣に立った。

「じゃ、二人は動かないでね。——セラフ、うちの玄関に転移！」

『はい、わかりました。——転移魔法発動です！』

「ええっ!?!」

瞬時に足元に魔法陣が展開し、視界が光に包まれた。

第八話：電話しながらの料理は危険

視界が晴れると、玄関に立っていた。

「セラフ、カセットコンロの用意お願い」

『わかりました。先にリビングへ行きますね』

首から下げているセラフを外すと、フワフワとリビングへ飛んで行った。

さて、二人はどうかね？

「え、ええっ!？」

「ちよ、アンタいきなり何のつもりだい!？」

いまだに驚くテストタロツサとそのテストタロツサを庇うように立つアルフ。

「別に何もしいないって。ただ単にうちに転移しただけ。それに——」
会わせたい人がいる、と続けようとしたら、

「——秋介、おかえりなさい。セラフから聞きましたが、お友達を連れて来た、と、——フェイト？ それにアルフ!? どうして……」

リビングからリニスが出て来た。

「リニス……!？」

「ホントに、リニスカい!？」

「おー、ただいまー。今日はすき焼きだけど、角麩かい忘れちゃったごめんね?」

「そ、そんな事より、どうして二人が、というかどうして秋介が二人と……!」

「いやね、金髪ちゃんが使った魔法がリニスの魔法に似てたから。もしかしたら、と思って」

「そ、うですか……。しかし」

「リニス——ッ!」

テストタロツサが、リニスに飛びついた。

「……久しぶりですね、フェイト」

「うん、うんっ! 良かった、……リニスにまた会えて良かった……!」

「リニス、……アンタどうして此処に？」

「それは、その……」

チラツ、とリニスは俺を見た。

……やっぱ動揺するよねー。

そのつもりで連れて来たんですがね！ これでリニスも少しは元気になるかな？

「じゃ、俺は晩ごはんの準備をするから、リニスは二人と部屋で話でもしてくれればいいよ」

「……ありがとうございます、秋介。行きましようか、フェイト、アルフ」

「うん」

「あ、ああ……」

リニスは二人を連れて二階の部屋へと上がっていった。
「さーて、準備しますかね」

く上は何か楽しそうく

リビングに入ると、セラフがすき焼き鍋をコンロにセットし終えていた。

俺は〈ゲート・オブ・バビロン王の財宝〉から買い物袋を取り出し、確認する。

「セラフさんや、食べる人数が二人増えるかもだけど食材足りるかな？」

『野菜類は大丈夫ですが、お肉がちよつと足りないかもですね。あのお二人、特にアルフさんの方はよく食べると思いますし』

「うーん。もう一つ鍋出して海鮮鍋でも作るか。確かカニとかエビとか残ってたよね」

『他にもホタテにカキ、鮭の切り身にイワシのつみれなど色々ありますね。お昼のおかずや、この前作った季節外れのおでんの具材が残ってますて良かったですね』

「じゃ、セラフはもう一つ鍋の用意頼んだ。俺は具材を切るから」
『わかりました。土鍋で良いですよね』

「よろしくー。さて、すき焼きは割り下を作るとして、海鮮の方は出汁を取らないと、……お、昆布見つけ」

簡単に昆布出汁で良いだろう。時間もないし、後は野菜を切らないと……。

冷蔵庫を開けて食材を取り出す。

「豆腐くつみれく白菜く、ねぎに椎茸、えのきく。……あ、いとこん忘れてた。お肉は豚鳥牛肉で、魚介は鮭とブリ、ホタテにカキ、カニにエビっと」

これだけあれば足りるかな……？ でもアルフが居るからなあ。

少しは取っておこうかな、と思つて白菜を切っていると、

『マスター、土鍋はこれで良いですか？』

フヨフヨと土鍋と一緒にセラフが飛んできた。

「良いよ。ついでに昆布で出汁取つといて。コンロは確か、……あつたあつた。コレのセットもよろしく」

『はい、わかりました。……おや？ マスター、なのはさんから電話です』

セラフがテーブルに置いておいた携帯を浮かせて持つて来た。

「え、マジで？」

『どうします、出ますか？』

「そうだね。何か急ぎの用事かもだし……」

わかりました、とセラフは器用に携帯を開き、通話ボタンをどうやってか押した。

……今、どうやったの？

勝手に通話のボタンがへこんだけど、……魔法か、魔法なのか？
むう。分からん……。

『あ、良かった……。秋介くん、今大丈夫？』

「大丈夫だけど、どしたの？ こんな時間に珍しい」

『うん。ちよつと秋介くんに聞きたい事があつて……。秋介くんつて、——金髪の女の子を見なかった？』

「へ？」

今何て言った？ 金髪の女の子？ うわあマジかー……。

「金髪、……アリサの事じゃないよね」

『うん。ごめんね、急に変な事聞いて』

「いや、別に良いけど……。金髪の女の子がどうした……?」

『あのね、外国の子みたいなんだけど、この前なのは事助けてくれたんだ』

「助けたって、……一体何があったの!？」

何か知らない内になのはが危険な目に会ってるんですが!？」

『そんな危ない事じゃ無いよ? 森で探し物してたら転びそうになつて、その時助けてもらったの』

「それなら良かったけど……。ちなみに、その子ってどんな見た目だった?」

『えつとね? 私たちと同じ年くらいの子でね、黒い服を着て綺麗な瞳の子だったよ』

あ、オレンジ色の大きな犬と一緒に居たよ、となのはが付け加えた。

「へ、へえー……」

どうしよう。間違いなくテスタロッサの事よね。オレンジ色の大きな犬はアルフ事だろうし……。

と言うかなのは、もう出会ってたのか。しかも助けられたって、かなり予想外だわ。

……でも、いつの間に?

最近はジュエルシードの暴走が無かったはずだけ……。

『それでしたら三日前、近くの神社で戦闘があったのでその時かと』

『あれそうなの? 全然気付かなかった……』

『そうでしょうね。あの日は珍しく、マスターが地下室に籠って何やら一人で特訓していましたので』

『なるほど。あの時かあ……』

偶には一人で頑張ってみようと思つてスキルの使い道とか考えてた日の事だ。

……出会う所見たかったなあ……。

今、うちの二階にいるよ、つて言ったらどんな反応するかしら?

『マスター……』

『いや、流石に言わないよ』

ホントだよ？ 言ったら今すぐ乗り込んできそうなもの。

『今何か、秋介くんが隠したように感じたの……！』

「——!?」

包丁を握る右手が狂い、シュツ、と左手のすんでの所をかすめた。

「はっはっは。まっさかー……」

危ねえ。もう少しで手を切る所だった。

……調味料以外での赤い白菜とか、食べる気がしないな。

白菜の純白が染まる事は無かったから良いけど、なのはの前で迂闊な事は言えないね……。

魔法少女になったからか？ だからなのはの勘が鋭くなったのか

？

「ただの気のせいだって。それよりも、なのははその子を探してるの？」

『あ、うん。助けてもらったお礼を言えなかったから、ちゃんとお礼を言いたくて。最近この街に来たみたいだったから、秋介くんなら知ってるかなって』

「何で俺が知ってると思ったのさ」

『……だって秋介くん。偶に知らないお姉さんとお出掛けしてるよね』

「……はい？」

『だ・か・ら！ 秋介くんは！ 偶に知らないお姉さんとお出掛けしてるから、何処かで見てるかなって、そう思たの!!』

知らない、お姉さん……？

……誰だ、ソレ。

『マスター。なのはさんが見たのはリニスさんの事では無いでしょうか』

『——あっ！』

そう言う事か。まさかリニスと出掛けたのが見られてるとは……。

「なのは。良いか、よく聞いて？ その人は知らないお姉さんじゃないのよ?」

『わたしもアリサちゃんもすずかちゃんも、見た事無いお姉さんだったよ……?』

マジか!? アリサとすずかにも見られてたの!?

最近はりニスと出かける事は無かったし多分、三人が見たのは結構前か……!

「それはですね、その……」

『秋介くん——?』

やべえ。声だけなのに威圧感が来る。

「……いつかちゃんと紹介します」

『むー……。まあ、それなら良いの』

「はい……」

流石なのは。魔法少女になってさらに迫力が増したね!

「それですね? 俺はなのはの言う金髪の子は見えてないよ?」

『そっか……。もし見かけたら教えてね』

「あいよ。……所でさ、なのは。森で探し物って、何を探してたの?」

『え!? えーと。それは、その……』

電話の向こうでなのはが何て答えようか困ってるようだ。

……ジュエルシードだって事は知ってるけどね!

『ごめんね。今はお話しできないの……』

なのはは、何処か寂しそうな声で言った。

「……そっか。分かった、これ以上は聞かない。けど、一つ言わせて」
『なに?』

無理するな、とは言わない。どうせ言っても聞かないだろうから。
言うとならば——。

「——もし何か悩むことがあったら、ちゃんと自分の思いをぶつけろよ?」

『——ッ』

もちろん言葉でね。間違っても物理的になんてのはダメだよ?

『ふふ』

『何……』

『いえ。何でもないですよ? ふふ……』

『……………』

変にカッコつけなくて良かった……。

『秋介くん、……何でわたしに悩んでるって分かったの?』

「何となく、初めて会った時と同じような感じがしたからさ。なのはの事だし、また一人で抱えて泣きそうだなー、って」

『……あの時の事は言わないでほしいの。なのはもあれからちゃんと成長してるんだよ』

「そうか? ま、それは横に置いておいて」

『むく、横に置かないでほしいの』

「はっはっは。良いじゃん別に。……ああそうだ。アリサとすずかの二人にも、心配させないように一言伝えておきなよ?」

二人にも話せないなら、それを黙っていると喧嘩になるからね。

『うん、分かったよ。ありがとう、秋介くん。……あ、お母さんが呼んでるから切るね』

「あいあい、また明日」

『うん。また明日、学校でね』

そう言って通話が切れた。

……なのはは大丈夫そうね。

そう思い、切り終わった白菜やらをテーブルに運んでいると、

「秋介。今日の夕食なのですがフエイトとアルフも一緒に、……流石ですね」

リニスがテストタロツサとアルフを連れて降りて来た。

「どことなく、さつきよりも明るい雰囲気になったりニスを見て思う。」

……少しは元気が出たみたいで良かった。

荒療治だったけど二人を連れて来たのは正解だったみたいね。

「ゆつくり話せた、リニス? 今ちようど食材入れた所だから、もちつと待ってね。二人も食べるだろうと思って多めに用意したから」

「ありがとうございます。……ほら二人共、自己紹介を」

「うん……」

「わ、わかったよ」

リニスが促すと、後ろに居た二人が前に出た。

「フェイト・テストアロッサです。リニスを助けてくれてありがとうございます。ございました」

「私はアルフ、フェイトの使い魔さ。リニスの事、本当にありがとうございますね」

ペコリツ、と頭を下げるテストアロッサとアルフを見て、

「二人が迷惑をかけたようで、……本当にすみません。元家庭教師として謝ります」

リニスも続いて頭を下げた。

「別に気にしなくて良いよ。頭をあげて、ね？」

「はい。では、私は二人の食器やらを出しますね。二人共、良い子で待っていてくださいね」

と、リニスは食器棚へと歩いて行った。

「じゃ、改めまして俺は戸田・秋介、秋介で良いからね！」

『私はデバイスのムーンセル・オートマトンです。セラフと呼んでください！』

「うん。よろしく、秋介、セラフ。私もフェイトで良いよ。それで、これがデバイスのバルディッシュだよ」

『Nice to meet you』

「私もアルフで良いよ。よろしく頼むよ、秋介！」

「よろしくー。……じゃ、そろそろ食べようか！」

良い感じに鍋も煮えてきたし、お腹減ったからね。リニスも食器の用意が出来たみたいだ。

俺、リニス、アルフ、フェイトの順番で鍋を囲んで座り、

「それじゃ、いただきます！」

「いただきます」

「い、いただき、ます……？」

「——なんだい、コレは！ こんな美味しいの、食べたことないよ……！」

俺に続きリニスが手を合わせ、フェイトが見よう見まねで手を合わせる。アルフは海鮮鍋を食べ始めた。

「もう、アルフったら、……行儀が悪いよ」

「うう、……つい。ごめんよ」

「ああ、良いよ。気にしないで好きに食べて」

「本当かい!? じゃあお言葉に甘えて——!」

アルフは勢いよくカニを食べ始めた。

「フェイトも食べなよ! 美味しいよ、この料理! なんて言うんだい!」

「それは海鮮鍋、こつちがすき焼き、……ってフェイト、カニは殻を剥かなきゃ食えないよ」

「あう、……通りで硬いと思った」

「ほら貸してみ、……カニはこう剥くんだよ」

「あ、……」

フェイトの手からカニを取って殻を剥いて渡す。

「ほい、お食べ」

「え、うん……。あむ、あむ、………美味しいね!」

ええ、マジか。まさか身を受け取るんじゃないかと食べてみるとは……。

『流石マスター。ここであくんとはやりますね!』

いや、コレは俺も予想外ですよ?

「……!」

ボツ、とフェイトは顔を赤くし俯いた。

「あー、ごめん。今のは俺が悪かった」

「……ううん。美味しかったから良いよ……?」

「そ、そう……」

どうしよう、一気に気まづくなった。セラフが余計なこと言うから……。

「秋介! 私にもお願いします……!」

突然リニスが詰め寄って来た。

「いやそれくらい自分で剥けるでしょ。……しかもソレ、カニじゃないくてエビだからね?」

「……くっ、フェイトが伏兵だったなんて……!」

伏兵って何だよ。それに山猫姿ならまだしも、人の時のリニスにあ

くんはちよつと気が引ける。

『——マスター！ 鍋の中身が！』

「——ッ!？」

セラフの声に振り向くと、そこには空っぽになった二つの鍋があった。

「いつの間に——ッ!？」

リニスも同じことを思ったのか、驚愕していた。

……確かに気にしないでって言ったけど、早すぎだ……。

まさか四人分以上もあつた鍋を一人で平らげるとは。二つとも綺麗に食べてくれたのは作つた身からしては嬉しいけどさあ……。

「あー、美味しかったー……。リニスが羨ましくなってきたよ、毎日こんな美味しいのを食べてるなんて」

「アルフ……」

「え、あー!？」

ほらあ、フェイトも残念がつてるし。お前、ちよつとは周りの事考えよ？ ね？

「……はあ、まさかここまでとは。アルフの食い意地を見誤つたか」

『マスター、冷蔵庫から食材出しましょうか?』

「そうしよう。もしかしたらと思つて取つておいて良かった……」

セラフと冷蔵庫から食材を取り出し、鍋に入れて煮込みだす。

「——あ、セラフー、卵出すの忘れたー」

『もう、しょうがないですね』

そう言つてセラフは冷蔵庫を開け、卵を持って来てくれた。

……アルフめ、卵まで使い切るとは。

「まったくアルフは……。秋介の料理が美味しいのは解りますが、少しは節度を守ってくださいね?」

「……ごめんよ。以後気を付ける」

「私よりフェイトに言つてください」

「ごめんよ、フェイト……」

「いいよ、気にしなくて。まだ残ってるみたいだから、一緒に食べよ?」

「フェイト〜！ アンタって子は……！」

いい子だねえ、とアルフはフェイトに抱き着くが、

……まだ食べるんかい！

と心の中だけで突っ込んでおく。なにせ気まずい空気を壊してくれた一人だからね！

「はいはい。——んじゃあ、仕切り直しますか」

「そうですね。では改めて——」

「……いただきます！」

食事を再開し、今度はちゃんとフェイトも鍋を堪能出来、満足そう
で良かった。

〜食事終了〜

俺は食器類を洗い終え、一息ついた。

「——ふう。あー疲れた。セラフ、お風呂どう？」

『いつでも入れますよ。どうします？ 先入りますか、それともリニスさんに先に入ってもらいますか？』

「その方が良いかもね。リニスもゆっくりできるだろうし」

フェイトとアルフはどうするのかね、と考えていたら、

「秋介、ちよつとよろしいですか？」

リニスと呼ばれた。

「なにー？」

「今日はもう遅いですし、フェイトとアルフには泊まってもらおうか
と思うのですが……」

「あー、そうね。久しぶりの再会だろうし、明日の朝は気にしなくていいから今日は一緒に居てあげな。あとお風呂先に入って。俺はちよつと休んでからにするから」

「ありがとうございます。……ではお先に失礼しますね」

と、リニスは二階へ上っていった。

……積もる話もあるだろうし、今夜は騒がしそうね。

今日はリビングで寝るか。明日は学校だ。もしかしたら邪魔し

ちやうかもだからね。

お風呂に入ったあとすぐにソファで寝たが、眠りに落ちる瞬間、

『——ふあく。私も寝る〜』

という声が聞こえた気がした。

第九話：追いかけては割と夢中になる

目が覚めると、リビングの天井が広がっていた。

……ああ、昨日はソファで寝たんだっけ。

「セラフ。リニスたちってまだ寝てる？」

『はい。どうやら昨日は、皆さん一緒に寝たみたいですよ』

『そうか……。じゃあ、フェイトもまだ寝てるのね』

『ええ、そうなりますが、……。起こしてきましようか？』

「いや、起こさなくていいや。それで、出来れば俺のほっぺ抓ってくれる？」

『流石に無理なので、今から私が全力でぶつかります！』

セラフはゆっくりと俺から離れていき、

『行きますよ……！』

「ちよ、待っ——!？」

シュバツ、と目にも止まらぬ速さで消えたと思ったたら左ほっぺに激痛が、……。来なかった。

「……あれ？」

ペチ、と何かが引っ付いたような感触がした。

『ふふ。どうです、目が覚めたでしょう？』

フヨフヨと俺の顔の横をセラフは浮いていた。

「——あー、ホント。一気に目が覚めた。セラフ、お茶入れてー」

『少々お待ちを』

そう言つてセラフがキッチンへ飛んで行くのを見送り、今の自分の状況を見て思う。

……何で俺の上に居るのか……。

現在俺に被さる状態で、一人の少女が眠っている。

『んく、ママのわからずやあー、……。ぐう。すぴー、すぴー』

金髪を水色のリボンでツインテールに結び、青いワンピースを着たフェイトがそっくりな少女。

——アリシア・テスタロッサ。プレシア・テスタロッサの娘で、フェイトの基になった少女だ。

何故に俺の上で寝てる？ それにどうやってうちに？ 昨日は居なかつたし……。ダメだ。寝起きで頭が回らん。

「……しかし良く寝るなあ、人の上で。……それにしてもプニプニだな、ほっぺ」

『うにゆうく……。』

なんとなく触ったら、軟らかいお餅みたいな感触だ。

『マスター、お茶入れて来ましたよー』

セラフがお盆に湯呑みを載せて戻って来た。

「お、ありがとー。……あー、美味しい」

左手で湯呑みを取り、首だけを動かして何とかお茶を飲む。

朝はあったかいお茶が一番だよなー。目が覚めるっていうかなんというか。頭が冴える感じするよね。

『所で一体、マスターは虚空を突いてなにをしているんです？』

「なについて、この、人の上で寝てるテストロッサ(ちび姉)のほっぺを、

——待って。セラフ、もう一回同じこと言って」

『——ああ、そう言うことですか。……ところで一体、マスターは虚空を突いて何をしているんです？』

「……………マジか」

セラフの反応からしてこの、俺の上で寝てるテストロッサ(ちび姉)はセラフには見えてない。

——つまり、幽霊って事か……。

それなら色々な事に説明がつくけど……。

「ねえ、俺の周りに何か反応ってある？」

『私に姿は認識できませんが、反応はありますね。マスターの胸下あたりに、かなり特異な反応が一つ。魔力的な反応とは違った、……所謂、魂と呼ばれるモノじゃないですかね』

「いやー、話が早い。流石だねセラフは」

『いえいえ。それで、マスターには姿が見えるんですね？』

「フェイトにそっくりな少女が寝てます」

今現在も、すぴー、と寝息を立てるテストロッサ(ちび姉)はもぞもぞと動き、

『ふあつ、あく……、良く寝たく……。あれ、フェイトが居ない……。?』
体を起こしあくびをして、軽く伸びてから首を傾げた。

そんなテスタロッサ（ちび姉）を見て、セラフに念話を飛ばす。

『ホントにセラフは見えてない?』

『はい。先ほども言った通り、魂らしき反応だけは感知できるので何処に居るか、くらいしかわかりませんね』

『そうか』

とりあえず、そろそろ朝ごはんの準備がしたい。もし遅刻でもしたらアリサに怒られるからね。

「……考えるのは良いけど、いい加減降りてくれない? そろそろ起きたいんだけど……」

むむむ、と考えるテスタロッサ（ちび姉）に声を掛ける。

『お? あ、ごめんね。今降りるか、ら、——ええっ!? 秋介、私の事見えるの!』

「見えるし聞こえるし触れますよ? ほらね」

プニツ、と、ほつぺをつまんだ。

『おおお、ホントだ!? 何で!』

「知らん。俺が聞きたいよ。というか、やっぱ幽霊だったか」

今更だけど声が念話っぽく聞こえるし、若干透けてるようにも見える。

『そうだよ! 私はアリシア・テスタロッサ。アリシアで良いよ!』

「あいよー、アリシア。さっそくで悪いけど早く降りて」

『あ、ごめん』

よつ、とアリシアは降り、俺の顔を見て、

『ふふん、秋介ってば照れちゃってカワイイー!』

グツ、と親指を立てて言われた。

「はいはい」

『あうっ!』

手刀を落としたら昨日のフェイトと同じ反応をした。

……てか、なんで俺の名前知ってるのよ。まだ名乗ってないよね。

『うー、こんなカワイイお姉さんの頭を叩くとは、……ママに言ってや

る!』

「何処がお姉さん。どう見ても妹でしょ。お姉さんを名乗るんだつたらリニスやアルフみたい成長してから出直して来なさい。あと、そのお母さんはアリシアの事見えるの?」

『う、気にしてる事を的確について来るなく。……あれ、でもカワイイは否定しなかったって事は認めてくれるんだね!! やったよ、ママ!』

私、秋介を魅了したよ!』

「やかましい」

『あうっ!』

二発目の手刀で静かにさせる。

「あのさ、さつきから気になってるんだけど何で俺の名前知ってるの
さ」

『だって昨日教えてくれたじゃん』

「え?」

『え?』

いつ自己紹介した? アリシアを見たのは今日が初めてのはず
……。

『マスター、彼女、——アリシアさんの反応は昨日からありましたよ?』

正確にいうと、フェイトさんたちと出会った時から反応は感知して
いました』

「セラフさんよ、なして言うてくれなかった?」

『マスターが気付いていないようでしたので、別段今話す事では無い
かと思ひまして』

今度から教えてほしいね。

『おー、セラフってすごいんだね! ママやバルディッシュも気付か
なかったのに会ってすぐ気付いたなんて!』

「でしょう? セラフは俺の自慢のデバイスで——」

『——次元世界一ですからね!』

ホント、その通りです。というかセラフ。もしかしてアリシアの声
聞こえてませんか?

『おお、セラフも私が見えるの!?!』

『いえ。姿は見えませんが、念話のような感じで私にも声を聞く事は出来ますよ』

『セラフ……!』

『アリシアさん……!』

イエーイ、とデバイスと幽霊がハイタッチした錯覚を見た。

「……とりあえず朝ごはん食べよ」

思わぬ時間をくってしまった。急いで用意しないと。お弁当も詰めなきやだからね!

く何気に初めての一人朝食く

朝ごはんを食べ終え、お弁当を詰めた。

「さて、そろそろ学校に行きますかね」

制服に着替えるとアリシアが、

『あ、お出かけ? 私も一緒に行く!』

などと言い出した。

「やだよ。何で幽霊連れて学校行かなきやいけないの。フェイトと一緒に居なさい。お姉ちゃんでしょ?」

アリシアを連れて行ったら絶対疲れる。

『むう。こんな時だけお姉ちゃん扱いして……。だって暇なんだよ? フェイトもアルフも私の事見えないし声も聞こえないから楽しくないもん』

「……そうか、それは仕方ないね。——じゃ、俺は学校行くから。行ってきまーす」

『えええっ!? 今の普通「じゃあ一緒に学校行く?」って聞く所だよ!』

私寂しくて死んじゃうよ!』

「はは、アリシアはもう死んでるでしょう?」

『あ、そう言えばそうだった』

「今の内……!」

『逃がさないよ……!』

こうして俺とアリシアの追いかけてこが始まった。

く壁の通り抜けとかずるくない!?く

何やかんやあつて結局、アリシアと一緒に学校へ来てしまった。

『……まあ、此処まで来ちゃったし、今更帰れとは言わないからあまり騒がないでね』

『アイアイツサーー!』

ビシツ、と敬礼をするアリシアを見て思う。

……大丈夫かなあ。

念のため学校ではアリシアとも念話で話す事にした。周りには幽霊が見えるとか言いたくないからね。

アリシアを連れて教室に入り、自分の席に着くとアリシアは俺の膝上に座った。

『いや何で』

『良いじゃん。勉強始まったらどくから。ね?』

上目使いで言われた。

『ホントに?』

『ホントだよ?』

だったら目線を合わせてよ……、と思いながらアリシアを見ていたら、

「おはよ、秋介」

「おはよう、秋介君」

アリサとすずかが教室に入ってきた。

……あれ、なのはが居ない……?」

『大丈夫ですよ』

セラフは言うど、

「おはよう、秋介くん!」

少し遅れてなのはが入って来た。

「遅いわよ、なのは」

「にやはは。ちよつとハンカチ落としちやつて……」

「ちやんと見つかった?」

「うん」

「まったたく。……それよりも、何であたしたちより先に学校に居るのかしら、秋介えく？」

何か急に俺に矛先が向いた。

……えー、先に行っても怒られるの……？

「黙秘します」

幽霊と追いかけてっこしてる内に、いつの間にか学校に着いたなんて言えない。

「却下！」

「じゃあ、時計が壊れて時間を間違えた」

「じゃあ、って何よ、じゃあって!!」

「お、落ち着いて、アリサちゃん!？」

「そうだよ！一回くらいでそれはダメだよ！」

ウガー！と飛びかかりそうになったアリサを、なのはとすすかが抑えてくれた。

……平和だなー。心配は取り越し苦労だったみたい。

とうかすすかささん。一回くらいって何？もし次やったら俺、どうなるの？

『血を吸われるんじゃないですか？』

ヤメテ、セラフ。ソレは否定できないから困るね!？」

でも、すすかだったら別に良いかな？特に害があるって訳じゃないだろうし……。

『まあ、そうだと良いですね……』

待って！何その言い方、めっちゃ不安になるんだけど!？」

『冗談だよね……?』

『ふふ、——本当にそうだと良いですね!』

ええ!?! いつもみたいに『冗談です』って言うてくれないの!？」

『ええ。冗談ですよ。どうです、偶にはこういうのも良いでしょう?』

『はあ、勘弁して……』

うう、マジで冷や汗掻いた……。

『ねえ秋介。そんな事よりあの茶髪の子、フエイトと一緒にジュエル

シード集めてたよ?』

そんな事って酷くない、アリシアさん!? 別に良いけど。

『知ってる。今度フェイトに会ったら助けてもらったお礼が言いた
いって言ってたけど……』

でも昨日の反応を見る限りだと、ジュエルシードを前に二人が再会
でもしたら……。

『そうだね……。戦いになっちゃうんじゃないかな? フェイト、
ママの為にジュエルシードを持って帰るのに一生懸命だから』

『ママの為、ねえ。……そう言えば昨日、何でジュエルシード集めてる
のか聞けなかったな』

『それは私が話しても良いけど、フェイトの事があるんだよね……。』

むう……。とアリシアは難しい顔をした。

『……秋介はさ、私の事どう思う?』

『どうって、妹よりちびっこい姉、妹より騒がしい姉、妹より子供っぽ
い姉の三点セットでございますよ?』

今ならなんと、妹より先に幽霊になった姉もついて四点セットに出
来ますよ?。

『むう、本当の事だから良いけど、……それ以外で』

『幽霊になったって事は、何かしらの心残りがあるんだろうな、って』
『……じゃあ、フェイトの事はどう思う?』

『姉より——』

『姉より大きい妹とかは無しだよ。秋介から見えてどう思ったか、それ
を教えて』

おおう、中々に対応が早いじゃない。もしかしなくても気にしてる
のね……。

……さて、何て答えよう……?

単刀直入に「フェイトってクローンだよね」って聞く、……のは止
めどころ。

昨日リニスたちが何を話してたかは知らないけど、多分その場にア
リシアも居たはず。だったらリニスから何も聞いてない俺がそんな
事を言ったら変だよな。

……セラフに聞いたって事にしても……。

ダメだな。セラフの事だから話を合わせてくれるだろうけど、俺から聞くような事じゃない。

『……なんか色々抱えてそうだよね』

『どうして、そう思うの……？』

始業を知らせるチャイムが鳴ってなのは、アリサ、さすがが自分の席に着き、先生が教室に入ってきて授業が始まった。

授業を聞きながら思い出す。

『少し友達に似てる気がしてね。その子も昔、家庭の事情を一人抱え込んで泣いちゃってき。』

……一緒にするわけじゃないけど、フェイトも何かしら家庭の事情があるんだろうな、って』

片や家族に迷惑を掛けないように、片や親の願いを叶える為。理由は違い、なのはとフェイトは似てる場所があると、俺は思う。

『……その子はどうしたの？』

『自分の思いを親にぶつけようとした』

『したって事はダメだった？』

『ダメと言うか、……中々言葉にしないから、俺がつい代わりに言っちゃった』

……あの時は、ホントつい言っちゃったからなあ……。

『まあ、過程はどうあれ親御さんの方も気付いて、泣きながら抱きしめてたよ』

そのあと悲惨な目に会ったのは、今じゃ良い思い出です。

『そう、なんだ……。秋介の言う通りうちも家庭の事情があつてね。』

……私が死んじゃったのが原因なんだけど、その所為でフェイトは、……生まれがちよつと特殊なんだ』

アリシアは俺の膝上から机に移り正座した。そして俺と目線を合わせ、

『ごめんね。やっぱりフェイトの気持ちもあるから詳しい事は話せないや……。それでもフェイトの事、頼んでも良い？ 私からはこれくらいのことしか出来ないけど、……あの子は頑張り屋さんだから、この

まだまだときつと大怪我しちゃう。だから、——フェイトの事を助けて下さい』

お願いします！ とアリシアが頭を下げた。

『マスター？』

『聞かれなくても決まってるって』

元からそのつもりだからね。

『——良いよ。俺の出来る限りの範囲でフェイトを助ける。ついでにその家庭の事情も解決しようか？』

そう言うときアリシアは顔を上げ笑った。

『あははは！ そこまでは無理だよ。……でも、ありがとう。フェイトの事よろしくねっ！』

『あいよ。さ、授業が始まるからどいたどいた』

『むう。……仕方ないなあ。じゃあ私、学校の中見て来るね！』

『迷子にならないようにねー』

そう言うときアリシアを見送ったあと、授業を聞きながらセラフに念話を飛ばす。

『さてセラフさん。今更だけど、何で俺アリシアが見えるようになったのかね？』

『マスターには「女神の寵愛EX」がありますよね』

『——あ、なるほどね』

それってイザナミさんがおまけで付けてくれたスキルじゃないですか。

イザナミさんは確か、黄泉の神様なんだっけ？ しかもその黄泉つて死者の国らしい。

……幽霊が見えるのは「女神の寵愛EX」の効果って事か。

フェイトに会ったのがきっかけで、突然見えるようになったのかもしれないね。

『そう言う事です。まあこの程度、私の魔法でも見えるようになってますけど』

『え？』

『え？』

まさか一日に二度もこのやり取りをしようとは……。

……まあ、セラフなら出来てもおかしくないか。

こんな事で驚いてたらきりがいいからね。

『それよりもマスター。一つお知らせしたい事が』

『何かあった？』

『大した事では無いですが、——学校の付近に複数の監視用使い魔の反応があります。どうやら管理局の魔導師が放ったモノですね』

『……それって昨日も居た？』

『いえ。放たれたのは今朝です。昨日の戦闘は見られてませんよ』

そっか。なら良いや。でもそれなら何で学校に……。

『学校だけで無く街中に放たれています。どうやらジュエルシードの探索兼関係のある魔導師を探しているのでしょうか』

『それって俺も含まれるよね……』

『そうですね。ですが既に、全ての使い魔にマスターの魔力が感知されないようジャミングを施しているので大丈夫です』

おお。流石ね、セラフ。いつの間にそんな細工を……。

『マスターが寝てる間にです。一応、万が一に備えマスター自身にも使い魔たちが魔力を感知できないよう、特殊な結界のようなものを張りましたので心配はないかと』

「え、それこそホントいつの間に……？」

『今朝、私がマスターに触れた時ですよ』

『ああ……』

アレって俺を起こす為じゃなかったのね……。

『いえいえ。九割はマスターを起こす為ですよ？』

『残りの一割で管理局は対策されるのかあ……』

とまあそれはそれで置いといて。

……近い内にクロノ君が来るんだろうね。

多分、次になのはかフェイトがジュエルシードを封印しに行ったら出て来ると思う。

よし。出てきたら出てきたでその時考えよう。今は授業中だからね！

そう思い、授業に集中しようとしたら、

『ただいま!!』

「ぬをあっ!?!」

「ニユツ、といきなりアリシアの顔が机から生えて来た。

「戸田君、今は授業中なんだけど?」

「……すいません」

まったく、注意されちゃったじゃないの……。

『ふふん! 朝の仕返しだよ!』

帰ったらもう一発手刀を落としてやろう、とそう思った。

第十話：パスタは種類が多すぎて悩む

「あー疲れたー……」

『ふふ、お疲れみたいですわね』

『そりゃあねえ……』

今日はアリシアのお陰で大変だった。特に音楽の授業が。

だって先生の話を聞いてたら急にカチカチカチカチカチカチってメトロノームが高速で揺れ出したのよ？ しかもピアノやらバイオリンまで鳴りだすし……。その所為で教室内がパニックになって授業が中断した時はマジで肝が冷えた。

……まったく、このいたずら娘は……。

帰ったら手刀二発目確定だな、と絶賛俺の膝上に座って爆睡中のアリシアを見て決意した。

『朝も思ってたけど、人の上で良く寝れるよね』

『信頼されてるからでしょう』

『それなら嬉しいけど……』

今朝会ったばかりなんだけど、……ん？ でもアリシアは昨日も居たってセラフは言ってたよね。じゃあ昨日フェイトたちと会った時が初対面になるのか？ アリシアからは昨日が初対面で俺にとつては今朝が初対面……。

……分かるようで分からん……。

ま、そんな事どうでも良いよね！ と結論を出した所になのはやって来た。

「秋介くん。わたし、今日は先に帰るね」

「あいよー、また明日なー」

「うん。また明日ね！」

そう言つて、なのはは帰っていった。

さて、そろそろ俺も帰ろう、と思い立ち上ろうとしたら、

「ねえ、秋介。あんた、なのははから何か聞いているの？」

「今朝ね、バスの中で聞いたんだけど、しばらく用事があつて遊べないかもって」

アリサとすずかがやって来た。

「ああ、その事……。俺も詳しい事は知らないけど、なのはなら大丈夫でしょう」

ユーノ君とレイジングハートが居るからね！

「それに、……人には言い難い事って誰にでもあるでしょ？」

「うん……」

「それは、……そうね」

なのはだけじゃなくて、俺やすずかたちにも言える事だからね。

「なのはの事だし、その内ひよつこりと新しい友達でも連れて来るって。だから気長に待とう」

「……わかったわ。だけど、それはあんたも同じだからね！　ちゃんとかあの時の約束守りなさいよー！」

「私も待つてるから。その時が来たらちゃんと聞かせてね？」

「あいあい、わかってますよー。……じゃ、帰るか」

「そうね」

「うん！」

帰るために立ち上がったら、

『おうっ!』

ガンツ、とアリシアが前のめりに頭を机にぶつけた。

……あ、忘れてた。

『うー、痛い……』

『そろそろ帰るよ』

『……わかった』

何か、悪い事したなあ……。手刀を落とすのは止めてあげよう。

く坂の下でアリサとすずかは迎えの車で帰った

家に着き、玄関を開くとリニスが出迎えてくれた。

「おかえりなさい、秋介」

「ただいまー。……あ、フェイトとアルフは帰ったの？」

今朝家を出る時には置いてあった二人の靴が無い。

『なんだどう!? 私、置いてかれちゃったの!?!』

ひどいよ、フエイト……、と項垂れるアリシアを尻目にリビングに向かう。

……いや、見えてないんだから仕方ないよね。

「ええ、お昼を食べた後に。秋介によりしくと言っていましたよ」

「そっか。てつきり今日も泊まると思ってたんだけどなー」

残念。今日の晩ごはんはお好み焼きでも作ってあの二人がどんな反応するか見たかったな……。

「……それで、久しぶりの再会はとうだった?」

「そうですね……。色々、有意義な時間を過ごせましたよ? 私が居なくなってから今日までの話を聞けましたし、……それに、私の中で何かが決まった気がします」

「そう、そりゃ良かった。……じゃあ、俺は晩ごはんの準備でもしようかね」

「お願いします。私は洗濯物を取りこんできますね」

『でしたら私はお風呂の用意をします』

「あいよー」

リニスとセラフを見送ってからキッチンへと入る。

「さて、今日はパスタでも作るか……」

冷蔵庫を開けて中身を確認する。

簡単にケチャップでナポリタンか、……あ、ひき肉あるからミートでも良いなー。

……卵も少し残ってるし、ベーコンもあるからカルボナーラも捨てがたい……。

うーん、これはリニスが来てから作るのを決めた方が良さかもね。

冷蔵庫の中を覗きながら他に何のパスタが作れるかを考えてると、

『ねえ、秋介。私の事、リニスに言わないの?』

いつの間にか立ち直ったアリシアが横に居た。

『そうねえ、……まだ言わないかな? 今のリニスに言っても余計に混乱させちゃうだろうから』

さつき、リニスが何かが決まった気がするって言った。そこにアリスアの事を話してややこしくしたくない。

……まだしばらくは様子見かな。

とはいえ、プレシア・テスタロツサの病がどんな感じか分からないのが不安だね。

だけど、リニスは今現在の病状を知ってるか分からない。フェイトとアルフは病自体を知ってるかどうかだ。残るは……。

『なあ、アリスア。前にリニスから聞いたんだけどママの病気って大丈夫？』

『ふえ？ どうしたのいきなり……』

詳しい事を知ってるか定かじやないけど、一番手っ取り早いのはアリスアだ。

『いや、ふと思い出したのよ。ジュエルシードを欲しがってる本人は病を患ってるから、その人の代わりにフェイトが集めに来るだろうってリニスと話したのをね』

『あー、なるほどねー。最後に会った時はまだ大丈夫そうだったよ』

『最後って、……それって地球に来る前の事だよね？』

『流石に『私が死ぬ前だけだね！』みたいな事は言わないよ？』

『………』

何だ、言わないのか。ちよつと期待したのに……。

『……それなら良いや』

『今の間、なに……？』

『ナンノコトデシヨウカ？』

『むく……』

などとアリスアと念話していたらリニスがリビングに入って来た。

『おや、冷蔵庫を開けっ放しは良くないですよ、秋介？』

『はい……』

とりあえず冷蔵庫を閉める。

『リニス、今日の晩ごはんパスタにするんだけど何が、——今の……』

食べたいかを聞こうとしたら魔力を感じた。

『マスター、ジュエルシードの強制発動と広域結界の展開を感知しま

した』

いつの間にかセラフが、首から下がっていた。

「——フェイト……」

リニスは魔力を感じた方を見ている。

『今の、……フェイトの魔力だよね』

『アリシアも分かった？』

そう聞くと、アリシアは頷いた。

……ジュエルシードが発動したって事は、なのはも来るね。

「セラフ、セットアップ」

『了解です』

瞬時に制服がバリアジャケットに変わった。

「見に行こうと思うけど、リニスはどうする？」

「当然、私も行きますよ。フェイトとアルフが心配ですからね」

『アリシアは？』

『もちろん私も行くよ！ もし危険な事になっても秋介が助けてくれるんでしょ？』

任せろ、とアリシアに念話で答え、一応〈ノーフェイス・メイキング顔の無い王〉を纏う。

「セラフ、転移よろしく」

『わかりました。——転移魔法発動します！』

視界が光に包まれた。

↳ 転移中……

光が晴れると、俺はビル群の上空にたっていた。

「む、始まって……」

下を見るとそこには、ジュエルシードを挟んで白と黒の魔法少女が、その近くではフレットと燈色の狼が向き合っていた。

『フェイト、アルフ……』

「なのはさんも居ますか……」

横には二人を心配するアリシアと、なのはを見て複雑そうな顔のリニスが居る。

『少し良いですか、マスター?』

『どうしたの念話で。二人に聞かれたくない事?』

『聞かれたくないと言うより、リニスさんとアリシアさんの心配を増やしたくない、ですね』

『……ああ、そう言う事。リニスに猫の姿になるよう頼んだ方が良いね……』

『いえ、頼まなくても大丈夫ですよ。その辺りの対策も既に終わっていますから』

『じゃあセラフの言いたいのは——』

『——状況によっては、管理局の魔導師が介入してくる可能性がある、と言う事です』

『なるほどね。……わかった、ありがとう』

『いえいえ、と言ってセラフは念話を切った。』

……管理局、か。

この状況で止めに入らないって事は静観を決め込むつもりなのかね?』

まあ、向う動かないなら特に気にしなくても良いか……。

『セラフ、ジュエルシードはどんな感じ?』

『今の所、暴走の心配は無いですが、何かしらの衝撃を受けると暴走する可能性がありますね』

『……一応、ジュエルシードが見えるようにモニター出して。あとなのはたちの会話が聞こえるようにもお願い』

『わかりました』

セラフがそう言うと、ジュエルシードが映った空間モニターが現れると同時になのはの声が聞こえて来た。

「——こないだは助けてくれてありがとう。わたし、なのは。高町なのはって言います。……あなたは?」

「私は……。フェイト、フェイト・テスタロッサ」

フェイトは少し考えてから答えた。

「フェイトちゃん、だね。……ねえ、フェイトちゃん。聞いても良い? どうして、ジュエルシードを集めてるの……?」

「……ッ！」

なのはの言葉を聞いて、フェイトはバルディッシュを構えた。

「貴方には関係ない。……私たちの邪魔をしないで！」

フェイトが魔力弾を展開し、なのはに向けて撃ち込んだ。

「——ッ！」

なのはは飛び上がって魔力弾を躲す。

「フェイトちゃん……！」

「ッ……！」

フェイトがもう一度魔力弾を展開しなのはに打ち込むが……。

……お、躲したね。

飛んで来る魔力弾を躲し飛び回るなのはと、それを追いながら魔力弾を撃ち込むフェイト。そして、その近くではアルフがユーノ君を追いかけている。

『なのはさん、少し見ない間に随分と成長していますね』

「ええ。以前はまったくの素人でしたが、今の彼女は見違えるほどに成長していますね。あの数の攻撃を見事に躲しています。これはフェイトも危ないかもしれませんね……」

セラフとリニスなのはの成長について話して、その横でアリシアは、

『そこだよ、フェイト！ あ、茶髪の子も避けて、……何あの砲撃、すごい！』

二人共頑張れー！ と楽しそうに観戦していた。

……うん。アリシアは気楽で羨ましいね。

俺だってポップコーン片手に、……は流石に無いけど悠長に見てた

い。……けど、何か嫌な予感がするのよね……。

こんな街中でジュエルシードの封印とか、アレが起きる気がするし……。

なのはとフェイトを見ると、二人は動きを止めていた。

「何か、事情があるんだよね？ 私もユーノくんも、フェイトちゃんに協力できると思う」

なのはがレイジングハートを下げたが、

「……ッ」

フェイトはバルディッシュをなのに向けたままだ。

「——だから教えて？ 私も言うから、どうしてジュエルシードを集めてるのか、教えてほしいんだ！」

「……………私は——」

「——答えなくて良い、フェイト！ 早く持って帰るんだろ!? あの人の所に!!」

フェイトが何か言いかけた時、アルフがそれを遮った。

「——そうだ。持って帰るんだ、母さんの為に！」

「あ、待って、——きやあッ!?!」

ジュエルシードに向かって飛ぶフェイトを追おうとしたなのはに、金色の魔力弾が直撃した。

「なのはっ!?!」

「大丈夫だよ、ユーノくん！」

魔力弾を防いだなのはが、心配するユーノ君の声に答えながらフェイトを追っていった。

先行していたフェイトがジュエルシードを封印する為、バルディッシュを勢いよく近づけた瞬間、ガキンッ、となのはが同じようにレイジングハートでそれを止めた。

「——ッ!?!」

直後、交差したレイジングハートとバルディッシュにひびが入ったと思ったら……、

「きやああああ——ッ！」

「うああああ——ッ！」

二人が弾き飛ばされジュエルシードが暴走した。

『——マスター——ッ!』

「わかってる！」

——やっぱりこうなったか……………!

『ええっ何!?!』

「これは、次元震……………!」

二人は驚いているが、今は答える暇が無い。一刻も早くジュエルシードを封印しないと危険だ。

「セラフ、今から使う宝具に封印魔法の付与……!」

『わかりました。——いつでもどうぞ!』

暴走するジュエルシードの直上に、セラフが一枚の魔法陣を展開した。

「サンキュ……ッ!」

なのはたちに見つからず、この場から封印するにはどうしても遠距離から行うしか無い。

モニターに映るジュエルシードを標的とし、右腕を掲げる。

今から放つ宝具は本来、構えも真名解放も必要ない。だけどやっぱり俺としては構えて真名を叫びたい。地味な宝具と言われる事もあるけど、この状況にはうってつけだからね!

だから、

「——天蠍アンタレス・スナイプ一射——ッ!」

掲げた腕を、勢いよく下に振り切った。

瞬間、一筋の流星が魔法陣を通過しジュエルシードを射抜いた。

「——ふう。何とか間に合った……!」

『ジュエルシードの封印を確認。——お見事です、マスター!』

射抜かれたジュエルシードの暴走は収まり、その場に落ちた。

「秋介……!」

『お、おお!? 凄いね! 今の何て魔法!?!』

よし。これでジュエルシードの方は大丈夫だろうけど、向うの二人は無事かね……?」

「今のって……!」

「大丈夫、なのは!」

ユーノ君がなのはに駆け寄った。

「わたしは大丈夫だよ。……でも、レイジングハートが……!」

「これは、……コアは傷ついていないみたいだから心配はない。これなら自己修復できる!」

「良かった……!」

なのは胸を撫で下ろしホッ、としたようだ。

「フェイトちゃんは、大丈夫かな……?」

なのはの目線の先、アルフがフェイトに駆け寄っていた。

「フェイト! 大丈夫かい!? どこか怪我とかしてないかい!」

「大丈夫だよ、アルフ。……それよりも、早くジュエルシードを……」

フェイトがフラフラと立ち上がり、

「……母さんが、待ってるから……!」

「フェイト——ッ!」

落ちているジュエルシードへと一気に距離を詰めた。

「あっ……!」

それを見たなのはもジュエルシードへ急ぐ。

二人がジュエルシードへ手を伸ばした瞬間——。

「——そこまでだ! 双方、共に武器を収めて此方の指示に従ってもらう!」

二人がジュエルシードに迫った瞬間、青い魔法陣が展開され間に一人の少年が割って入った。

なのはとフェイトは両の手足をバインドで拘束され、現れた少年を見て驚いていた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。今回の件について君たちに事情を聴きたい」

クロノ君が免許証のようなものを掲げ、それを見たりニスとアリスアが苦い顔をした。

「管理局、それも執務官ですか……」

『うわー、ついに来ちゃったよ。どうしよう秋介……?』

「ひとまず様子見ね。——セラフ、いつでも転移できるように準備よろしく」

『わかりました』

これで帰る準備は出来たし、後は向うの動き次第かな……?」

「逃げるよ、フェイト!」

アルフがクロノに魔力弾を撃ち込んだ。

「——くっ!?!」

クロノ君は魔法障壁を展開し防ぐが、その隙にアルフがフェイトを回収し離脱した。

「逃がさな、——ッ!?!」

「——ダメ! 撃つちやダメッ!」

フェイトを抱えるアルフに向け、クロノ君が複数の魔力弾を展開した時、それをなのはが前に出て遮った。

「なのはさん……」

『茶髪の子、ナイスッ!』

『なのはさん無茶しますね』

「そうね。……まあ、そのお陰でフェイトとアルフが逃げられたけど……」

ほら、ユーノ君にも注意されてる。

「もうあんな無茶はしないでくれ。……もし君に怪我でもさせたら、僕は……」

「あ、ははは……。ごめんね、ユーノくん。次からは気を付けるから……」

ユーノ君は表情を陰らせ、なのはが頬を掻いていた。

「取り込み中の所悪いが、良いだろうか?」

そんな二人にクロノ君が声をかけた。

「あ……」

「すみません。勝手なことをして……」

なのはのバインドが解除され、ユーノ君は頭を下げた。

「……まあ、悪いと思っっているなら良い。それで、さつきも言ったが今回の件についての事情を聴きたい」

「僕は構わないけど……」

「私も大丈夫だよ」

「わかった。それで執務官、実は——」

ユーノ君が何か言いかけた時、一つの空間モニターが現れた。

『——お話の最中ごめんなさいね。立ち話もなんですから、クロノ執

務官、お二人をアースラまでご案内してくださる?』

モニターに女性——リンディ・ハラオウンが映っていた。

「わかりました」

クロノ君がそう言つて魔法陣を展開し、三人は転移していった。

「セラフ、フェイトとアルフは?」

『お二人なら大丈夫ですよ。先ほど、無事に転移したのを確認しました。大きな怪我も無かつたようです』

「良かつた……」

『ホント、良かつた……』

ホツ、トリニスとアリシアが胸を撫で下ろしていた。

「なら今日は帰りますか。セラフ、転移よろしくー」

『分かりました』

さあて、晩ごはんは何の Pasta にしようかね?

……あ、あさが残つてるからボンゴレも良いね!

最後にそんな事を考えながら転移して帰った。

第十一話：幽霊つてお化けと一緒にされるよね！

次元震が起きた次の日。目を覚ましたらアリシアの顔が二つあった。

「おはよう、秋介」

『おはよっ！ 起きないと遅刻するよー？』

「おう、おはよう……？」

体を起こして見ると、アリシアの顔が二つある、……のではなくアリシアが二人いた。

……意味が分からん。

左はいつもの騒がしそうなちっこいアリシアで、右はいつもより大人びた大きいアリシアだ。

何でアリシアが増えるの？ 昨日は一人だったよね？
目をこすつてもう一度見る。

『「どうしたの？」』

今度は声が重なって聞こえた。

……あれえ、もしかして夢？

試しに自分のほっぺを抓ってみる。

「……うん。痛いよな」

これで夢じゃない事は解った。

あとは目の前のアリシアズを確認するだけだ。

試しに大きい方のアリシアに近づいて、

「どうしたの？」

「むにーん」

「……!?」

ほっぺを引っ張ったら感触があった。

「ひゅうふへ、ふあなふいへふお〜」

「おお、軟らかい……！」

ムニムニと触っていると、

『大丈夫、秋介。もしかして寝ぼけてる？』

横でちっこいアリシアが小首をかしげていた。

……まさか。

今俺がムニムニしてるこの大きいアリシアは……。

「……フェイト?」

引つ張る手を離すと、

「うう、……そうだよ?」

大きいアリシア——フェイトはほっぺに手を当てた。

『もう、やっぱり寝ぼけてたんだね!』

「……ごめん。マジで寝ぼけてた。……何でフェイトがここに居るん?」

「えっと、リニスがね? 朝ごはん出来たから起こしてきてって」

そつちが聞きたいワケじゃないんだけど、……ま、朝からフェイトのほっぺ触れたから良いや。

「あいよ。すぐ行くって言っついて」

「うん、待ってるね!」

そう言っつてフェイトは部屋を出て行った。

「それにしても、何でフェイトがうちに……」

昨日はうちに泊ってないよね。なのにどうして俺を起こしに……?
?

……もしかして夜中にでも来たのか……。

いや、それなら流石に俺でも気付く。フェイトが来たらリニスが起きるだろうし、それにアリシアが、……あ。

「アリシアさんや」

『なに?』

「何でフェイトがうちに居るのさ」

この幽霊お姉ちゃんに聞けば分かるじゃん。

『リニスが呼んだみたいだよ? なんか、フェイトとアルフだけだとまともにご飯を食べて無いんじゃないかって。』

それに、バルディッシュも修復中だから無理させない為って、さつきセラフと話してたよ』

ああ、そう言う事ね。確かに二人だけだとレトルト食品とかインスタント食品ばっか食べてそうだもんね。

「じゃあ、今何時？」

『八時だよ』

「全員集合、……じゃないね。とりあえず着替えるか」

『じゃ、私先に下行ってるね〜』

えい！ とアリシアは床を抜けて行った。

……今日はちよつと寝ちやつたなあ……。

あ、お弁当の仕込みするの忘れた。晩ごはんの残りも、昨日はパスだったから詰めれるようなものもないし……。

「――よし。今日は学校休むか」

起きた時間も時間だし、今からお弁当の用意してたらバスに間に合わない。

……一日くらい休んでも良いよね！

フェイトとアルフが来てるなら、気分転換も兼ねてどっか出かけよう。

『おはようございます、マスター』

いつの間にかセラフが顔の横に浮いていた。

「おはよ。あと、いつの間に来たのよ」

『今転移してきましたよ？ マスターの驚く顔が見られなかったのが残念ですが……』

驚く顔つて、今更セラフが顔の横に浮いててもなあ。

『まあ、そんな事よりも。今日は学校休むんですか？』

「そうよ。昨日の事もあるし、あの二人もジュエルシード集めばかりで大変だろうと思うからね。フェイトとアルフの気分転換にどっか連れて行くこうかなって」

『ふふ、そういう事ですか。わかりました。リニスさんには私から言っておきますね』

そう言つてセラフは下へと転移で戻って行った。

……さて、何処に行くか……。

うーん、……そうだ、自然公園なんて良いかも。あそこなら色々あるからね！

「あ、先生ですか？ 今日学校休みます」

学校に電話したあと、顔を洗ってからリビングに向かった。

「おはようございます、秋介。今日はフェイトたちを朝食に呼んだのですが、良かったですか？」

中に入ると、リニスとセラフが朝ごはんをテーブルに並べていて、アリシアとフェイトはテレビを見ていた。

「良いよ。ご飯は大勢で食べる方が美味しいからね」

そう言つて俺は席に着くと、

「お、秋介じゃないか。お邪魔してるよ」

アルフがハムをもってキッチンから出て来た。

「もう、アルフったら勝手に食べちゃダメだよ……」

そんなアルフを見たフェイトが苦笑した。

「フェイトの言う通りですよ。人様の家の冷蔵庫を勝手に漁るのは良くない事です。罰として、アルフの朝食は減らしましょうか……」

「わ、悪かったよ！ 戻すからそれだけは勘弁してれよ、リニス……」

「フフ、冗談です。さ、二人も席についてください」

「はい」

一昨日の鍋の時と同じように座った。

「んじゃ、いただきます」

「いただきます」

『うー、良いなー、私も食べたいなー』

羨ましそうにアリシアが見ていた。

『ははは、幽霊がなにを言う』

『むう。絶対いつか食べて見せるよ！』

うおー！ とアリシアは燃えていた。

そんなアリシアを無視して俺は朝ごはんを食べる。

「む。この卵焼き、……リニスが作ったやつじゃないよね」

一口食べただけで分かる。朝ごはんではあまり作らない、甘い卵焼きだ。

……ちよつと砂糖入れ過ぎかな……。

それに加えて形が歪で表面が軽く焦げてもいる。

「おや、気付きましたか。それを作ったのはフェイトですよ」
「マジで？」

「……うん。初めて作ったけど、どう、かな……？」

フェイトを見ると、顔を赤らめて俯いた。

『キッチン見て、キッチン』

アリシアに言われ、チラリとキッチンの方を見るとそこには、

……あからさまに……。

フェイトが使ったらしきエプロンと調理器具、卵の殻が置いてあった。

『まったく。リニスもあんなにわかりやすく道具を置かなくても良いのに……』

『いえいえ。それでは意味がありません。女の子は頑張ったという事を知って欲しいものです』

『そういうもんか』

『そういうものです』

女の子って難しいね……。

『それでマスター。フェイトさんお手製の卵焼き、お味の方はどうです？』

「……そうだねえ。ちよつと甘いけど俺は好きな味だね。偶には朝ごはんに甘い卵焼きも良いかも」

そう言うと、フェイトは嬉しそうに顔を上げた。

「——うんっ！ やったよ、リニス。好きって言ってくれた！」

「良かったですね。今度はお味噌汁に挑戦しましょうか」

「オミソシル……。私、頑張るよ。その時はまた食べてくれる、秋介？」

フェイトが小首をかしげ、上目使いで言われた。

『秋介！ うちの妹可愛すぎない!？』

「イエス！」

グツ、と親指を立てて答える。

……あの仕草は卑怯だと思います。

なのはたちもそうだけど、何で女の子ってこういう不意打ちが得意なんですかね。

『美味しいとは言わないですね、マスター？』

『不味くは無いよ？　ただ、美味しい！　つてまでも行かないかな。でも練習すれば絶対に美味しくなる。次に期待だね』

ま、次があればけどね！　いつになるかな。

「所で秋介。今日は学校を休むとセラフから聞いたのですが、何処か出かけるので？」

『なんだあ、休むのか……。もう一回くらいカチカチを――』

『手刀落とすよ……。？』

『ごめんなさい冗談です』

『よろしい』

アレはもう勘弁してほしい。二度もポルターガイストが起きたら変な噂が流れるわ。

「気分転換も兼ねて自然公園に行こうと思っています」

「自然公園ですか。それに、気分転換と言うのは……」

リニスが一瞬だけフェイトたちを見た。

……感がよろしいね、リニスは。

昨日の事もあるからね。偶には息抜きって事で。

「もちろんフェイトとアルフ」

「私たちがい？」

「でも、ジュエルシードを集めないと……」

さつきとは打って変わってフェイトは表情を暗くした。

「真面目過ぎよ、フェイト。少しぐらい休まなきゃダメだって」

「秋介の言う通りです。せめてバルディッシュの修復が終わるのを待ってください」

「……ごめんフェイト。私も二人に賛成だよ」

『私もフェイトは休むべきだと思うよ』

やったね！　アリシアはともかくアルフが味方に付いた。これでフェイトも折れてくれるはず。

「……皆の言う通りだね。バルディッシュも、ごめんね?」

『No problem』

フェイトは傍に置いていたバルディッシュを優しく手に取り、バルディッシュはコアを点滅させてフェイトに答えた。

「そう言う事なんで、朝ごはん食べたからお弁当作るから。……フェイト、手伝ってくれる?」

「うん。私で、良いなら……」

「それなら私も参戦します。アルフも良いですね?」

「う、私は、その、うははは、……わかったよ」

『良いなー。私も手伝いたいなー』

アリシアは幽霊だからダメでしょ。

……調理器具が勝手に動き出してお手伝いとか、中々に恐怖が……!

いや待てよ。セラフの魔法だって誤魔化せば何とかなるかも。

『——よし。アリシアには何か簡単な手伝いを頼もうかな』

『え、良いの? やったね! テンション上がって来た……!』

『程ほどにね。他の皆が驚くから。誤魔化せる範囲で頼むよ』

『わかってるよ! ん、やたー! 久しぶりのピクニックだー!!』

わーい! と諸手を揚げて喜ぶアリシアは、何か見ると心配になってくる。

「それじゃ、ちゃっちゃとごはんを食べてお弁当作るぞー」

「『『おー!』』」

「えっ!?!」

まさか皆が続くとは思ってなかった。

『何でマスターが驚くんですか』

『意外だったもんで、つい』

思わぬ一致団結に驚いたが、俺たちは朝ごはんを食べ終えた。

くごちそうさまでした〜

食器を片づけ、皆でエプロンを付けてキッチンに立った。

お弁当を作る、といつても時間が多くある訳では無い。今は八時四十分過ぎ。自然公園には二十分もあれば行けるので、十時過ぎには自然公園に着きたい。

……凝った物作らないなら、一時間くらいで作れるかな？

あ、パスタでサラダでも作るか。マヨネーズでハムとかきゅうりで和えれば簡単に出来るし。

昨日の晩ごはんまで使い切れなかったパスタの束を戸棚から取り出す。

「セラフ、お湯沸騰した？」

『はい。今しがた沸騰しましたよ』

「あいよ。じゃ、麺を茹でましようかねー」

指を切らないよう慎重に猫の手でニンジン切るアルフの後ろを通り、沸騰する鍋の前に立つ。

……狼なのに猫の手……。

と思っただけと言わない事にした。だってアルフってば凄い真剣に包丁握ってるんですもの。そんな事を言ったら刺されそうで怖い。

「塩を軽く一つまみ入れて、……ほいっと」

鍋の上でパスタの束を軽く両手で捻って離すと、いい具合にバラけて広がった。

少し待って、しんなりとしたパスタを箸で引っ付かないように混ぜる。

『おお、今の綺麗だね！ 私もやりたい！』

アリシアが何故かエプロン姿で隣に立っていた。

……どうやってエプロンを……。

幽霊って服とか汚れないから要らないんじゃないの？

『そんなに作っても食べ切れな、……いやアルフが居るし、食べきれると思うけどダメ』

『わかった……』

アリシアはショボン、って感じの顔になったが、

『代わりにパスタが引っ付かないように見て、それで七分経ったらこのざるに揚げて湯切りしてくれる？』

『——わかった！』

結構簡単に元気が戻った。

『じゃ、あとは任せた』

『任されたよ!』

アリシアに箸を渡して交代する。

『誤魔化しの為に一緒に居てあげて、セラフ』

『お任せください、マスター』

アリシアはセラフに頼んだから良い。あとは……。

「リニス、フェイト。そっちはどう?」

二人は、アルフとは別でひき肉を一口大に丸めていた。

「はい。此方はもうすぐ終わります」

「秋介、このお肉どうするの?」

「油で揚げて肉団子にします。あ、リニスの方はハンバーグにするから」

「わかりました。では、ハンバーグの方はフェイトに焼いてもらいましょうか」

「私? 大丈夫かな……」

「何事も経験です。さあ、行きますよ」

リニスとフェイトはキッチンへ向かった。

未だにきゆうりと格闘するアルフ、パスタが引っ付かないように鍋を見るアリシア、そこにリニスとフェイトが加わった。

……この光景を残したいなあ。

写真とか、目に見える感じで撮っておきたいけど無理かな……?」

『ご心配なく。既に記録として、写真と映像の両方で撮つてあるので心配はないですよ』

ポフツ、とセラフが頭に乗った。

……それって心霊写真とか言うんじゃない?」

自分で思った事だけど、よくよく考えたらなんか怖いよね。……あれ?」

『セラフってアリシアの姿は認識できないんだよね』

それなのに写真とかには映るのか……?」

『その事なら大丈夫ですよ。朝方、姿を認識できるように調整しまし

『秋介、パスタ茹で上がったよ〜! ……あれ、どしたの皆?』

『決まってるじゃない。今の状況、傍から見たら勝手に箸が動いてるように見えるからね!』

グツ、とフェイトたちに見られないように親指を立てて答える。

『え、だってセラフが、……なんで秋介の頭に居るのう!?!』

「——ツ!?! り、リニス〜、お化けが、お化けがあ……!?!」

アリシアが驚いて俺を見るから、箸が急に動いてフェイトが怯えるじゃない。

『もう、アリシア。お姉ちゃんだから妹を怖がらせないの!』

『私、悪くないよね? むしろ被害者だよね!?! お陰でフェイトにお化けって言われちゃったよ!』

『ごめんごめん。アリシアは幽霊だもんな〜』

幽霊は人の魂で、お化けは道具とか変化したモノを言うらしいからね!

『そういう事じゃ無いよ!?!』

「——うう、秋介〜!?!」

今度はアリシアが箸を持った方の手を振り上げた所為で、フェイトが涙目で俺の方に逃げて来た。

「お、おば、お化けがあ〜……!?!」

「はいはい。大丈夫だからね〜。アレはお化けじゃなくて幽霊——」
「え——」

サアツ、とフェイトの顔が青くなった。

……おお、お化けより幽霊の方が怖いのか?

『マスター』

『ごめんなさい』

いらん事考えてる場合じゃないよね。

「——じゃなくて。アレはセラフだから。ね、セラフ!」

『そうですとも。微力ながら、私もお弁当作りの手助けをしようと思
いまして……』

「ほ、本当に……?」

『本当です。ね、マスター?』

「本当です。俺がセラフに頼みました」

そう言うと、フェイトはへなへなとその場に座り込んだ。

「良かった……」

「ホントだよ。私も本気で驚いたじゃないか……」

キッチンからアルフとリニスが出て来た。

『お二人を驚かせるつもりは無かったです。……すみません』

「だね。俺もまさか二人があんなに驚くとは思わなかった。ごめん
な」

それと、フェイトとアルフがお化けとか幽霊を知ってるのは意外
だった。

「リニスもリニスで教えて上げなよ。二人に見られないように笑う
の、堪えてたよね？」

「え、リニス……？」

「それ、本当かい……？」

フェイトとアルフがリニスを見た。

「——おや。気付いていたんですね。流石です。それと、黙っていて
すみません。二人の反応が昔のままだったので……フツツ」

「なに？ 昔なんかあったの？」

今と同じ反応って、一体全体すごい気になるんですが……！

「実はですね。昔、二人が夜——」

「——わーッ！ 早くお弁当作らないとお昼になっちゃうよ！ リニ
ス、ハンバーグの焼き方教えて！」

「そ、そうだよ！ 私にも教えてよ！」

「おや、残念です。この話はお預けですね。……それでは、お弁当作り
を再開しましょうか」

フェイトとアルフがリニスの背中を押してキッチンに入ってい
た。

……フェイト、顔が真っ赤じゃないですか。

そんなに聞かれたくない事なの？ そんな反応されると余計に知
りたくなっちゃうじゃない。

でも、念話でリニスに聞いても「その内話しますね」ってほぐらか

されそうだと。

『という訳なんで、アリシアさん。お答を、どうぞ！』

『いや教えないよ？ ……でもあの時は、流石に幽霊の私でもビックリしたよ』

アレはすごかった……、とアリシアは話してくれなかった。

……むう、仕方がない。この話はいつか絶対に聞き出そう。

俺はそう誓ってキッチンに向かった。

『マスター。もう九時過ぎましたよ』

「あら、ホントだ。……んじや、さつさとお弁当作って出かけますかね！」

アリシアには、今度はお弁当を詰めるのを手伝ってもらおうかな。

第十二話：衝撃は突然やってくる

何とか予定通り、十時過ぎには自然公園に来ることが出来た。

俺はフェイト、アルフ、リニスの三人がアスレチックに挑むのを眺めながら、

「楽しそうで何よりだ……」

近くのベンチで荷物番をしている。

『あ、使い魔の方はどう？』

『ご心配なく。昨日の一件から数は増えましたが、既に対策済みです』
抜かりはありません、とセラフは言い切った。

……それにしても、此処に来るのも久しぶりだ。

前に来たのって確か、一年生の遠足だっけ？

あの時は色々あったなー、と考えていたら隣でアリシアがフェイトたちを見ながら、

『いやー、妹の楽しそうな顔が見れてお姉ちゃんは満足だよー。……でも、此処ってホントに公園？ 遊園地じゃないの……？』

どうやら初めて来た時と同じような事を思ったらしい。

『うんまあ、公園だよ、……多分』

アリシアの言いたいことは良くわかる。俺も同じように疑ったからね。

そのの種類が豊富な所は探せば此処以外にもあると思う。でも普通は、公園に燃え盛るジャングルジムとか氷のメリーゴーランドとか無いよね。

……しかも前より増えてるし。

前に来た時のアトラクションに加え、雷っぽいのがバチバチしてる雲みたいなトランポリンや、渦巻く風っぽいのに乗るコーヒーカップみたいなモノが増えてるが中でも……。

「何でこの時期に雪山が……」

もうね、意味が分からん。だってまだ春よ？ なのに雪が積もってるなんて季節感ぶち壊しだな。

……あの場所ってそり滑りした所だよね？

俺が見るのは前に、ウサギや犬や猫と言ったバリエーション豊富な
そりで滑った小山だ。

そんな雪景色の麓で、フェイトたちが雪玉を作って投げ合ってるの
を見つけた。

「うーん、冷たそうだけど冷たくないんだろうなあー」

ジャングルジムの炎も熱くなかったし、氷のメリーゴーランドも冷
たくなかった。あの雪も、向うの雷と風も大丈夫そうだね、……あれ。

『どうしたの、アリシア?』

ふと横を見たら、アリシアが立ち上がってフェイトたちに向かい、

『お姉ちゃんも混ぜろお——!』

わー! と突撃して行った。

「……………」

『マスター、頭を抱えてどうしたんです?』

『……なんでもない』

あの子、自分が幽霊だって忘れてない? さっきフェイトに怖がら
れてたのに……。

……まあ本人がそれで良いなら良いか。

楽しそうに雪遊びするフェイトたちを見てたらそれも仕方ないよ
ね。俺もアリシアと一緒に混ざりに行きたいし、それに……。

『あの二人は一緒に遊んだ事無いんだよね……』

アリシアが事故で死んでからフェイトが生まれたって事は、フェイ
トはアリシアの事を知らないだろう。

それならアリシアは幽霊として、誰にも気付かれずフェイトたちの
傍にずっと居たという事になる。

『まったく、——お姉ちゃんは凄いなあ』

並大抵の思いじゃ今日まで見守るなんて出来ないよ。

『ふふ、それは本人の前で言いますよ。大喜びしてくれると思っ
ますよ?』

『恥ずかしいから嫌だ』

『おや残念です』

と、セラフは落ち込んだように言った。

何が残念なのか、聞かない方が良さそうな気がする。

「はあ。んく、——ん？」

軽く伸びをしたら、視界の端にチラツと見慣れた顔があったような……。

フェイトたちが遊ぶ雪景色と反対側を見ると、ひとりの少女が歩いてきた。

『なのはさんですね』

『何で!?!』

俺が言えた事じゃないけど、学校はどうしたのよ!?

『このままだと、フェイトとぼったり出会って戦いになる可能性が……』

『ありますね。——結論から先に言うと、マスターが砲撃されるでしょうね!』

それ冗談に聞こえないから。今の状況だとかなりの高確率で俺にダイバインバスターが飛んで来るから。

『仕方ない。——リニス、ちよつと良い?』

『何かありましたか?』

『なのはが居たのよ。フェイトたちに会わないようにするから、荷物番変わってくれる?』

『なるほど、わかりました』

『じゃあ、よろしくねー』

そう言って念話を切り、やって来たリニスと荷物番を交代してなのはの所へ向かった。

よく見たら肩にユーノ君居たく

アスレチックから離れた所でなのはが立ち止まるのを確認して、

「なのはさんや。リュック背負って此処で何してんの、ピクニック?」

「え? ——秋介くん!? ホントに居たの!?!」

「キュツ!?!」

後ろから声を掛けたら飛んで驚かれた。

……危ねえ。ユーノ君落ちかけてるよ。

なのはが急に動いたからユーノ君が必死に肩を小さな手で掴ま
て？ いた。

リニスもそうだったけど、どうやって肉球で掴まってるの？ いや
それよりも……。

「ホントに居たって、……なに？」

「そのー、……公園の近くを通ったら、なんとなく秋介くんが居そうだ
なー、って……」

「……マジカー」

何となくって、もしかしてなのは「気配感知」のスキルでも取得し
た？

『なのはさんには驚かされますね』

『ホントにねー……』

えへへ、なんて照れ笑いしてるけど未恐ろしいよ。

……フェイトちゃんが居るかなー、じゃなくて良かったけど。

その気になったら向うで遊んでるフェイトたちにも気付きそう
……。そうならまず間違いなく、セラフが言った通りデイバイ
ンバスターが飛んで来る。

『私が言ったのは砲撃ですよ。……デイバインバスター以上かもしれ
ないですからね』

『……』

バカな、もうスターライトブレイカーを撃てると言うのか!? アレ
はまだ先のはず、……はっ！

……思ってたよりなのはの成長が早いみたいだから、もしかしたら
……。

昨日もセラフとリニスが話してるのを聞いたし、可能性はある。な
んとしてもそれだけは避けねば……！

「秋介くん……？」

「ん？ ああ、ごめんごめん。ちょっとそのフェレットが気になって
……」

「あつ、秋介くんは初めてだっけ。ユーノくんって言って、今うちで預

かってるんだ。ほら、ユーノくん」

「キユウ」

と器用に頭を下げた。

「ほう。よろしくなー、ユーノ」

ユーノの頭を撫でて思う。

……個人的には山猫リニスの方が好きね。

フサフサ感が堪らないのよね。——そうだ。今度アルフにも触らせてもらおう。

そうしよう。狼の毛触りってどんなもんなんですかね。

『私はどうです?』

『セラフは別枠。だけど好きだよ』

『マスター——!』

照れるのは良いけど二人に見られないようにね。

「それで、何でなのはが此処に居るのよ。学校は?」

「た、体調が悪くて……」

お休みしたの……、となのはが顔を背けた。

「なるほどねー。——もうちよつとマシな嘘つこう?」

「何で分かったの!?!」

「むしろ誤魔化せると思ったのか……!」

俺たちが居るのは自然公園ですよ? 普通、体調が悪い人は家で大人しくしてるって。

ほら見てみ? ユーノも苦笑いしてるよ。

「うう、……じゃ、じゃあどうして秋介くんは此処に居るの!?!」

「俺? 俺は、……学校行く気分じゃなかった。ただそれだけの事」

「アリサちゃんとすずかちゃんに怒られれば良いの」

身も蓋も無いね! しかもなのはの言う通りだから困る。

「ふ、……謝ったら許してくれないかなあ、二人……」

昨日は飛びかかりかけたアリサをなのはとすずかが抑えてくれたけど、明日はすずかも一緒になって飛びかかって来そう。もしそうになったら、なのはは助けてくれるよね? 一緒になって飛びかかってこないよね?」

「あ、あははは、……明日もなのはお休みしちゃうし、アリサちゃんたち止められないね」

「ごめんね？ となのは手を合わせて謝った。

「……くっ、なんて事だ。明日は大人しく二人に、……て、あれ？」

「今、明日も休むって言った？」

「……うん。少しの間、学校をお休みする事にしたの」
なるほど、だからリュック背負ってるのか。

「前に電話で探し物をしてるって話したの覚えてる？」

「一昨日の事を忘れるはずないでしょう」

電話越しの声から威圧感を感じたのは、あの時が初めてだったからね！

「金髪の子とは会えたの？」

「うん、会えたよ。まだちゃんとお話は出来てないんだけど、名前は聞けたんだ！ ふえ——」

「はーい、そこまで」

「いふっ!？」

プニツ、となのはが名前を言うのを、ほっぺを挟んで遮る。

「……うーん、なのはも良い感じでプニプニだ。

せつかなので少しの間この感触を味わってしよう。

「続きはその子をなのはが連れて来てから聞くよ。だからちゃんとその子とお話してきな。わかった？」

「わはっはひよ、ひゅうふへふん！」

「——ぶふっ！ く、ふ、……あ、ごめん」

ほっぺを挟まれたままで喋られると、思った以上に笑える。

『マスター、——ナイスです！ 記録は撮りましたよ！』

『セラフ!？』

そんなつもりは無かったのに……。油断も隙もないね、セラフ。流石だ……！

「ひゅうふへふん？」

「少しは抵抗しようよ……」

ほっぺから手を離すと、

「——ッ!?!」

なのはが急に赤面して、その顔を手で隠した。

……いや遅いつて。

もっと早く反応してよ。まあプニプニ感が味わえたから俺は良かったけど……。

「秋介くん……」

「なに」

「……な、なんでも、ないの……!」

『マスター、ここは「どうした、熱でもあるのか？」的な感じでなのはさんのおでこに手をツ!』

『当てないから。ちよつと落ち着こう、セラフ?』

急にどうした、セラフこそ熱でもあるんじゃないの?

『ふふ、私は落ち着いてますよ? 今のはちよつとしたお茶目です』

『……』

どうでした? とセラフに聞かれたが……。

……セラフに言われなかったら、あと一歩でおでこに手当ててたな……。

危機一髪だね。なのはに恥ずかしい思いをさせる所だった。

「……なんでもないなら良いけど。……そんな事より時間は良いの?

何処か行く途中だったんでしょ?」

「——あああああ! そうだった! お迎えの待ち合わせしてたの!?!」

「キュツ!?!」

なのはが急に大声を出した所為でユーノが器用に耳を塞いだ。

「ごめんね、秋介くん! お迎えの人待たせちゃってるからもう行くね!」

「あいよ。気をつけてなー」

「うん、またね!」

そう言っつて、なのははユーノを肩に乗せたまま走って行った。

なのはの背中が見えなくなったのを確認して思う。

……これではばらくは、なのはの方は大丈夫かね?

アースラに合流するなら今までよりも魔法の特訓が出来るだろうし、それに……。

「フェイトと再会も近いかなあ……」

「呼んだ、秋介？」

「ふえいつ!?!」

声の聞こえた後ろを恐る恐る振り向くと、

「ふえ、フェイト……?」

いつの間にかフェイトが立っていた。

『リニスさん——ツ!?!』

『すみません、秋介! フェイトがそちらに——』

もう来てるよ!?!

『——つて、もうですか!?! それで、なのはさんは!?!』

『大丈夫ですよ。フェイトさんが来たのはなのはさんが去ってからですから』

『え、そうなの?』

『はい。マスターとなのはさんが話していたのは聞かれてません』

『なんだ、それなら——』

『まあ、一緒に居たのは見られていますけどね!』

『良くないよ(じゃないですか)!?!』

やっべ、どうしよう。何とか誤魔化せないかな?

「どうかしたの?」

「い、いやどうもしてないよう? それよりも何で此処に……」

そう聞くとフェイトは、

「……雪玉が勝手に浮いたり飛んできたりしたんだ」

スツ、と遠い目になった。

……アリシアさんの所為じゃないですか!?

お姉ちゃん何してんのよ!?! また妹怖がらせてどうすんの!

『うう……。フェイトにお化けつて、また言われたく……。』

何か念話が聞こえた気がするけど、この際無視して良いよね!

「……ごめん、今度注意しとくよ」

「え、出来るの!?!」

良かったら、とフェイトは胸を撫で下ろした。

「とりあえず、リニスの所に戻ろうか……」

最近、アリシアのお陰で色々と焦ることが多くて困る。今度一回、ちよつと話し合おう……。

「うん。……あ、秋介」

「ん？」

「さつき一緒に居た子って、昨日の白い子だよ。リニスに聞いたけど、秋介の友達なんだよね？」

誤魔化せて無かった！ それに何で知ってるの!?

『……すみません。今朝、昨日の話をしていたらつい』

『リニスさあん……』

『うう、……本当にすみません』

お弁当の用意しますね……、と誤魔化し気味に念話を切られた。

勘弁してよ。何で今日は、こども驚きが満載なのよ……。

……別に友達だって言うくらいなら良いか。

フェイトなら砲撃が飛んで来ること無いだろうし。

『なのはさんとは違って斬撃が飛んで来るかもしれませんね』

『……………』

斬撃も飛んで来ないと、良いなあ……。

「そうね。リニスに何て聞いたか知らないけど、俺の友達だよ」

そう答えると、

「……………ごめんね。私の所為で、……迷惑かけてるよね」

フェイトは寂しそうな声で言った。

「気にしなくて良いって。フェイトが謝るような事は無いから。それよりも急にそんな事を聞いて、……何か悩み事でもあるの?」

「……………うん。悩み事って程の事じゃないんだけどね」

え、マジで?

『どうしよう、セラフ。なんとなく聞いたら本当にフェイトが悩んでいた』

『そうですね……。一応、人除けを張っておきましょうか。念の為、リニスさんたちが気付かないようにもしておきます』

『よろしく』

「これで周りに聞かれる心配は無いね。

」でも、どうして分かったの？」

「あー……。ちよつと前に似たような事があって、それでかな……」
「そうなんだ。……あのね、秋介に聞いてもらいたい事があるんだ」
「何でしょうか？」

実はね、とフェイトは前置きして、

「私、クローンなんだ」

とんでもない事を言いだした。

「——はい？」

フェイトがクローンだって？ 知ってるよ、そんなこゝ……ええ何
でフェイトが知ってるの!？」

『どうしよう、セラフ!？ 斬撃じゃなくて衝撃発言が飛んできた!』

『そうですね……。もしかしたら冗談かもしれませんよ?』

はっ！ それもそうだよ。フェイトなりの冗談かもしれないね
！

「ち、ちなみにそのクローンって言うのは……」

「えっと、私の基になったのはお姉ちゃんだね？ アリシアって言っ

て、昔事故で死んじゃったみたいなんだ」

はっはっは、……マジかー。

『……フェイトなりの冗談じゃなかった』

『そうでしょうね。フェイトさんが此処で嘘をつく意味がありません
から』

むう、セラフの意地悪……。

「……じゃあ、ジュエルシードを集めてる理由って」

「母さんはアリシアの復活の為、って言ってたよ?」

「……………」

あ、今回は教えてくれるんだ。でもなあ、この展開はちよつと……。
「不意打ち過ぎる……」

しかもリニスが話してくれる前に “以前の主の願い” が分かっ
ちやっただよ。

……フェイトは自分がアリシアのクローンだって事を知ってたのか。

「でもまあ、それならそれで俺のやる事は決まったか……」

「……？」

何の事？ とフェイトは小首をかしげた。

「ああ、こつちの話だから気にしないで。それよりも、セラフ」

『はい、此方ですな』

セラフが言うと、俺とフェイトの間に三つのジュエルシードが現れた。

「え、どうして？」

「俺がジュエルシード集めを手伝わない代わりに、かな」

「——ありがとう、秋介」

そう言つてフェイトはバルディツシユにジュエルシードを回収した。

『良かったのですか、マスター？』

『使わせないから大丈夫。だつて持ってたとしても、使わなかったら多少強引な言い訳でも通るからね』

『ふふ、それもそうですな』

でしょ？ リニスとの話があるからまだ動かないけどね。

「それで、俺に聞いてもらいたい事つて他にある？」

「ううん、無いよ。……私がクローンだつて事、それを知ってもらいたかつたんだ」

でも、とフェイトは続ける。

「それを聞いて秋介が私の事を嫌いになつちやうんじゃないかって、少し不安だつたけど……」

「まさか、俺はそんな事でフェイトの事を嫌いにならない」

アリシアのクローンだとしても別人だ。性格も真逆で身長も違うからね。

フェイトはフェイト。アリシアのクローンだなんて関係ない。

「フェイトは可愛いから、嫌いになる訳が無い。むしろ好きだね」

「——ッ!!」

なのはたちとはまた違った可愛さが良いよね！

『あ、またやっちゃった……。カツコつけては無いからね!』

『ふふ、そうですね……!』

ちくせう、最後の最後で油断した。フェイトが変に受け取ってない事を祈ろう。

「とりあえず、リニスたちの所に戻ろうか」

「うん……」

く沈黙が辛い……く

レジャーシートを広げるリニスたちを見つけると、その横で、

『あー、……おかえりく』

アリシアが落ち込んでいた。

……自業自得でしょうに……。

これに懲りたら少しは大人しくしてほしいね。

「おかえりなさい、二人共。戻ってこないのを探しに行く所でしたよ」

「ごめん。ちよつと二人で話し込んでしまったよ」

「そうですか……」

「フェイト……?」

アルフが俺の横で顔を伏せるフェイトを見た。

「何かあったのかい……?」

「いや特に無——」

「秋介に可愛いから好きって言ってもらったよ……!」

「……………」

フェイトの衝撃発言で、リニスとアルフに無言で見られた。

「——くも無い、かな……?」

二人の無言の視線が刺さって痛いよ。

『——秋介、私は!』

『カワイイカラスキダヨー』

『なんか雑だあ!』

そんな事ないって。てか、さっきまで落ち込んでたのにもう戻った

のか。

「……とりあえずお弁当食べたいです」

「そうですね、そうしましょうか」

「それもそうだね。あー、お腹空いた」

リニスはお弁当を広げ、アルフは食べ始めた。

「私たちも食べよう、秋介？」

「だね」

それで、食べ終わったら今度は俺も一緒に遊ぼう。

フェイトが居るし、せっかくだから雷のトランポリンにでも行って見ようか。

第十三話：オムライスがフワトロが良い

自然公園でフェイトの衝撃発言が飛んできた日から数日経った週末。

「これは、……ヒュドラの肉……？　むう、調理方法が分からん。今度セラフに聞いてみよう。お、何だこの壺、……うおつ、飴が詰まってる……！」

せつかくの休日なのにこれと言って予定が無かったので、リビングで〈ゲート・オフ・パレロンの財宝〉の中身を漁っていた。

「ん？　他の壺は飴じゃないのか……」

飴の壺と一緒に見つけた他の壺と風呂敷には、

「伝説の小豆に世界一うまいミルク、究極の蜂蜜に宇宙一ふんわり焼ける小麦粉、それに最高に美味しい生みたて卵、か……」

と、言ういかにも最高級品です、と分かるように張り紙がされていた。

……キラキラしてる食材とか、初めて見たな。

そうだ。今度、これを使ってどら焼きでも作ってみるか。なのはたちも誘って皆で作るのも良いかも。

「他には、……お酒に花札、ガチャガチャのカプセルに……。お、何か細かいのがいっぱい……」

取り出して見ると、赤に緑、透明に虹といった液体が入った小瓶が数個、……って、虹!?　虹って何です!?

……三色の飲み物は知ってるけど、七色は初めてだな……。

「試しに一杯——」

『マスター。それを飲んだら味覚を無くしますよ?』

飲みかけた所にセラフがお盆と一緒に浮いていた。

『そんな物より、私の淹れたお茶でも飲んで一息付きましよう』

どうぞ、と言われ、お盆に乗った湯呑みを受け取る。

「……ありがとう、セラフ。もう少して食べる楽しみが無くなる所だった」

こんな危険なモノはしまっておいた方が良いね。『味覚無くなるや

つ』って書いて、簡単に出てこないように奥の方に、……と。

『いえいえ。それよりも、宝具を広げてどうしたんです?』

「暇だったから。何か面白そうなのあるかなー、って」

『では、何か面白そうなのありましたか?』

「しいて言うなら温泉、かな……」

『温泉、ですか』

『……………』

セラフの入れてくれたお茶を一口飲む。

……あ、今日はほうじ茶なのね。

昨日は緑茶でその前は麦茶だったからなー。明日は紅茶かな?

「…………ふう。そろそろお昼だし、片付けるか」

『そうですね。確か今日、フェイトさんたちは来ないそうですよ』

「あー、それは残念……」

今日はたこ焼きでロシアンルーレットをやりたかったのに。

「それなら——」

『——はいっ! はい、はい! 私、オムライスが食べたい!』

さつきまでテレビを見て『おお、あの卵のフワフワ感はすごい……

!』とか言ってたアリシアがいきなり手を挙げた。

「やかましい。アリシアは幽霊だから食べれないじゃん」

『——フッフッフ。実はね、日頃の努力が実を結んで食べれるように

なったんだよ! こう、食べ物之魂をつまむ感じで……』

パクツとね! と何かをつまんで食べるジエスチャーをされた。

……いや食べ物の魂って何だよ。

そう言えば最近、うちに置いてあるお菓子の味が薄い時があったけ

ど……。

「…………もしかして日頃の努力って、……お菓子での練習してた?」

『チガウヨ?』

「——よしセラフ、魔法でアリシアを見えなくして!」

『はいはい、お任せを』

『ごめんなさいお菓子で色々練習してました——!』

ピシッ、と綺麗な九十度で頭をさげられた。

「分かればよろしい。……次から勝手に食べないですよ？」

『はい……』

そう言ってアリシアは肩を落として、

『うう、オムライス……！』

恨めしそうに嘆いた。

……いや、オムライスだけでそんなに落ち込まないですよ。

俺は作らないとは言っていないのよ？

「まったく……。ちよつとこつち来てアリシア」

『なに……？』

アリシアの手元に〈王の財宝〉を開く。

「この中に、俺の代わりにこの壺やら小瓶やらをしまつといて」

『えー……』

「今日のお昼はオムライスを作っても良いかな、って思ったのになあ」

『——よっし、お姉ちゃんに任せなさい！』

オムライスー！ と元気が戻ったアリシアが片づけを始めた。

「あ、地下室の方にも大きいのがあるからそつちもよろしくー」

『まっかせてえー——！』

おりやー！ と〈王の財宝〉を掴んで床を抜けて行った。

……アレって掴めるんだ……。

もしかしてアリシアが幽霊だからな？ まあ、よく分からんから考

えるのは止めよう。そうしよう。

「これで片付けは終わったね……」

『片づけて、宝具を回収できる宝具があるのに何言ってるんですか。』

——まさか、忘れてましたね？』

「はっはっは、……偶にはアリシアにも手伝ってモラワナイトネー」

『マスター……』

さあて、アリシアのオムライスは特別にフワトロの卵にしてあげようかな！ あ、でも三つも作ってリニスに何て説明しよう、……ってあれ？

「そう言えば今日、まだリニスを見てない……」

まだ寝てるのか。もうお昼だし、起こしに行った方が良いよね。

『リニスさんならマスターが起きてくる前に出かけましたよ？ お昼頃には戻ると言っていましたから、そろそろ帰ってくる頃かと』

「そんな朝から何処に行ったのよ……?」

『ふふ、リニスさんが戻ってくれば分かりますよ。——ほら、噂をすればなんとやら、です』

何が、と思ったら背後で魔力を感じた。

振り返ると、そこには魔法陣が展開され、

「着きましたよ。……体の方は大丈夫ですか?」

「ええ、大丈夫よ。それで、此処がフェイトとアルフから聞いていた坊やの家かしら。……案外普通ね」

リニスと黒髪に魔女のような格好の女の人が現れた。

「普通って、……当り前です。貴女たちの住んでいる所の方が特殊なんですから。それと、バリアジャケットは解除しても大丈夫ですよ。管理局に見つかる心配はないですから」

「……そのようね。良いわ、私も無駄な魔力は使いたくないし、そうさせてもらおうわ」

フツ、と女の人が光に包まれたと思ったら次の瞬間、薄紫のTシャツにジーパンと言うラフな格好に変わっていた。

「——ふう。……それで、あそこでポカンとしてる坊やがそうかしら?」

女の人が軽く髪をかき上げ、俺を見た。

「……え? ちよ、なん、一体、え!？」

『落ち着きましたよう、マスター』

『……はっ! それもそうだ。此処は一旦整理した方が良いよね……』

確か、リニスが居ないと思ったら急に帰って来て、それで知ってるけど見知らぬ人を連れて来ていきなり家が普通って言われた。よし、ざっとこんなもんか。うん。

「——良い感じでサプライズだね!」

「リニス、あの坊やは急にどうしたの?」

「ええつと……。多分ですが、私たちが現れた事に驚いているんだと

「思います」

まさかりニスがその人を連れて来るなんて思いもしなかったからね！ それに、

「前もって教えてくれたら、魔法なり何なりでうちの中を旅館風に改装したのに……！」

「——気にするのそこですか!?!」

『今のマスター、予想外の事態に変なテンションになってますね』

「ち・な・み・に、温泉もあるよ！」

今ならなんと、地下室に大浴場が——。

『——ただいま！ 何かおつきいお風呂があつて少し苦戦したけど片づけ終わったよ!』

ヒョコツ、とアリシアが床から飛び出て来た。

——広がってただけど無くなっちゃったね……。

『あれ、オムライスは何？ 私のオムライスは!? 秋す、——ママ!? 何でママが居るのう!?!』

『とりあえず、それも含めて聞くから今は落ち着こう?』

助かった。アリシアが戻って来たお陰で変なテンションが下がったよ。

「坊やって、サラツととんでもない事を言うのね」

「まったくです。私としては研究施設の方が良いと思いますが……。しかし温泉なんて物、一体全体どこに秋介はしまっていたのでしょうか……?」

「……リニス貴女、昔と変わったわね」

「そうですか？ あまり自覚は無いのですが、……以前の主である貴女が言うならそうかもしれないね。でも、貴女ほどではないですよ？」

「言ってくれるわね。……でも、リニスの言う通り。自分でも変わった自覚があるもの。昔と比べてあの子たちの事が心配で食事が喉を通らないくらいよ」

「フフ、それは良い事です。フェイトたちのお陰ですね」

「ええ、そうよ。でも」

貴女のお陰でもあるのよ？ と女の人がリニスに微笑んだ。

……何か思ってた感じと全然違う……。

もつとこう魔女って言うかなんというか、怖い感じだと思ってたのに。

まあとりあえず、

『なんかスゲエ話しかけ難いんですけど……』

『ですね。思い出話に花を咲かせる友人同士、と言った所ですね』

『あの二人、付き合いい長いからね。リニスが使い魔になる前の、猫の時から私とママは一緒だったんだよ？』

『なるほどー……』

思い出話に花を咲かせてる所悪いけど、話を聞かせてもらいましうか。

「お二人さん。ちよつとよろしい？」

今なお俺たちを放って談笑する二人に話しかける。

「——ああ、私とした事がつい、……すみません!!」

「良いよ、気にしてないから。それよりも、そつちの人つて……」

「はい。遅くなりましたが、此方の方が私の以前の主でフェイトの母親——」

「プレシア・テスタロッサよ。あの子たちが色々とお世話になったみたいね。母親としてお礼を言うわ」

「俺は戸田・秋介、秋介で良いよー。それと、プレシアさん？」

「何かしら」

「お昼はオムライスなんけど、……良い？」

「こんな時間に来たって事はまだお昼ごはん食べてないよね。せつかくだし一緒にどうですかね？」

「構わないわ。フェイトたちに聞いたけど、料理が上手なんですつてね」

「ええ。秋介の作る料理は絶品です。味は私が保証しますよ」

『私も保証するよ、ママー！ あ、私の分のオムライスも忘れないでよ！』

卵はフワトロでね！』

いや、ママに聞こえてないから。それよりもいつの間俺の料理を

食べたのさ、アリシアさん？

『……昨日のお魚は甘くて美味しかったよ』

『はっはー、……だから食べた時、俺のだけ甘くなかったんだのか』
サバの味噌煮は甘いくらいがちちょうど良いのに、通りで昨日はサバと味噌の味しかし無かったのね……。

「じゃあ、食べてからだね。——俺が聞きたい事、聞かせてくれるんでしょ？」

「——やっつとです。ようやく決心がつきました」

「そう。なら俺も、色々準備しといて良かった」

「準備って、……何のですか？」

「ふふん、内緒だよ！」

「といつても、そこまで大した準備じゃないけどね！」

「はあ……？」

「聞いていた通り、不思議な坊やね……」

リニスは首を傾げ、プレシアさんは苦笑した。

……不思議って、プレシアさんは俺の事どんな風に聞いたの？

くアリシアの分は作り過ぎたって事にしたく

『いや〜。何年ぶりか忘れちゃったけど、久しぶりにオムライス食べたな〜』

美味しかった〜、と満足顔でソファアに座るアリシアを無視して、俺は食べ終わった食器を片づける。

「あ、食後はコーヒー？ それとも紅茶が良い？」

「そうね、……なら私はコーヒーを貰おうかしら」

「私は紅茶ですね。今日はどちらが淹れるのですか？」

「勿論、——セラフさんです！」

『ふふ、お任せを……！』

なんてったって今、うちで一番飲み物を入れるのが上手だからね！

……いつか絶対、セラフを超えるんだ……！

今度、士郎さんにコーヒー入れるコツでも聞いてみよう。

「お茶を淹れるデバイスなんて、初めて見たわね」

リニスと並んで椅子に座るプレシアさんが、フワフワとキッチンに向かうセラフを見て呆れていた。

「セラフは特別だからねー。……まあ、そんな事は置いといて。さっそく話を聞かせてくれる？」

「ええ、勿論です。まず初めに、フェイ——」

「あ、フェイトがクローンって事は知ってるから。それは飛ばして良いよ。」

「『——!?!』」

「え、どうしたの……?」

プレシアさんたちが、鳩が豆鉄砲を食ったような顔で俺を見た。

……俺、なんか変な事言ったかな……?

なんて考えてたら、

『コーヒーと紅茶が入りましたよ』

セラフがトレーにコーヒーと紅茶を載せて戻ってた。

……早くないですか、セラフさん!?

一体どんな魔法を……、と思うがそんな事はどうでも良い。

『どうしよう、セラフ。皆が固まっちゃった……!』

『マスターが話の腰を折るような事を言うからです。——こういう時は初耳を装ってからの実は知ってました、的の方が良いサプライズになりましたよ?』

「——しまった……!」

俺とした事が気付けないなんて。それならさっきのサプライズのお返しが出来たのに……。

……ちくせう……!

ま、別に良いんだけどねー。遅かれ早かれ言うつもりだったし。

「坊や、その事をどうやって知ったのかしら……?」

「そ、そうです! 何故、秋介がその事を!」

ガタツ、とリニスが詰め寄って来た。

『そうだよ! 何で知ってるの!?!』

ソファアでくつろいでたアリシアまで参戦して来た。

「前に自然公園でフェイトから聞いた」

だから皆さん、少し落ち着いて？ プレシアさんはデバイスをしまつて、リニスとアリシアは一旦座ろう。お願いだから。ね？

「……そう、あの子が。なら私が何故、ジュエルシードを集めているのかも知っているのね？」

「一応、知ってる。アリシアの復活の為、でしょ？」

そう言うと、リニスとアリシアが崩れ落ち、

「——そんな。私が一番話し難かった事を、プレシアと話し合つて一緒に事情を話そうと決めてやつと決心がついた事をまさか本人から聞いているなんて……。いえ、それが本来正しいのでしようが、……ああ、だから二人が戻つて来た時にフェイトの顔が赤かったんですね。最近仲が良く見えたのにも納得がいきます。くつ、あの時に気付けないなんて……！」

『——そんな。いや確かにね？ リニスの言う通り最近あの二人仲良いなー、なんてお姉ちゃんは思つて見てたよ？ でもまさかフェイトが秋介に自分がクローンだつて話してたなんて思わなかったよ……。何でそんな大事な所に私は居なかつたんだろ。……あつ、フェイトに怖がられて落ち込んでたからだ！ くつ、フェイトの赤面した瞬間を見逃すなんて……！』

私としたことが…… と項垂れた。

……何かアリシアは違う事を悔んでる気がするけど、それは自業自得だよ。

あと、妹の赤面した瞬間を見ようとしさないの。気持ちは分かるけど……。

此処はとりあえず、項垂れる二人は横に置いて話を続けよう。

「プレシアさんがうちに来たのつて、俺にアリシアとフェイト、二人の事を説明する為にだよ？」

「そうよ。でもまさか、坊やがクローンの事を聞いているなんてね。驚いたわ」

「だよー。俺も聞いた時はビックリしたよ」

……まあ一番驚いたのはフェイトが、自分がクローンだって知ってた事だけだね。

プレシアさんが教えたのか、それとも何かの拍子に知ったのか。どっちか分からないけど二人の仲が悪くなくて良かった。

「……ねえ、坊や。一つ聞きたいのだけど、良いかしら?」

「なに?」

「貴方、奇跡を起こすってリニスに言ったみたいね」

「あー……」

リニスつてば、プレシアさんにその話したんだ。

……今思うと恥ずかしくなってきた……。

ホント、何でカッコつけてあんな事言っちゃったんだろうね。

『ふふふ、この時の事ですね……!』

セラフが言うのと、一つの空間モニターが現れた。

そしてモニターには、

『——大切な人の為だったら俺は、どんな「奇跡」でも起こして見せるよ』

いつかの俺が映っていた。

「いやあああああ——ッ!」

何てタイミングで掘り起こしてくれんの! とうか、前にも似たような事あった気がする!?

「……本当に言ってたのね」

プレシアさん信じて無かった! セラフが見せなかったら誤魔化せたのになあ!

「いやっ、コレは!」

「フフ、あの時の秋介はカッコよかったですね……!」

『すごい事言ってたんだね、秋介!』

あれ、リニスとアリシアがいつの間にか戻ってた!? ヤダ、ヤメテ、お二人さん。そんなに見ないで……!」

『ふふふ、マスター……!』

ちくしょう。セラフは何か点滅してテンション高いし、俺の味方は居ないのか——!

……くっ、何とか話を戻さねば!

「と、とりあえず俺の話を聞いてくれませんかしら!？」

しまった。焦り過ぎて変な口調になった。

『あ、ごめんね……』

「すみません……」

「……分かったなら大人しく座ってよ」

『はい……』

リニスはプレシアさんの隣に戻り、アリシアは俺の膝上に座った。

『——アリシア?』

『……ごめん。すぐにどくね』

チヨコン、とアリシアは俺の横に浮かんで正座した。

器用な。

「……はあ。それで、プレシアさんは俺にそんな事を聞いてどうするの?」

「そんなの当然じゃない。——アリシアの復活、その手伝いをしてほしいのよ」

「プレシア……」

『……』

やっぱそうだよね。

「坊やの言う奇跡がどんなモノか知らないけど、アリシアの為なら私は、どんな代償だって払う覚悟よ」

だから、とプレシアさんは椅子から立ち、

「私に、もう一度あの子と合わせて」

お願いします、と頭を下げた。

『ママ……』

『マスター?』

『わかってるって』

……アリシアはプレシアさんに似たんだね。

「良いよ。でもその代り、やり方は俺に任せてよ?」

そう言うのとプレシアさんが顔を上げ、

「本当に……?」

信じられない、といった顔で見られた。

「本当だって。こんな所で嘘ついても意味が無いでしょ？」

「——ありがとうツ！」

「プレシア……」

泣き崩れそうになったプレシアさんをリニスを支えた。

「秋介、……やはり出来るんですね」

「まあね。それよりも、プレシアさんを休ませてあげよう。……病気の体をおしてうちに来たんでしょ？」

「ええ。私が無理を言っただけで来てもらいましたから。かなり辛い思いをさせてしまいました」

それは悪い事をしたね。

……手遅れになる前に、こつちを先に何とかした方が良かったかも。

確か〈王の財宝〉の中にアレが、……お、あった。

「あとで良いから、これをプレシアさんに飲ませて上げて」

〈王の財宝〉から一つの小瓶を取り出してリニスに渡す。

「水、……ですか？」

小瓶に入ってる透明な液体を見てリニスは首を傾げた。

「水じゃないけど……。んー、……飲んでからのお楽しみって事で。体の辛さを無くす薬だとも思ってる」

「……些か心配はありますが、……分かりました。では、プレシアを私の部屋に寝かせてきますね」

「よろしくー」

リニスがプレシアさんを抱えてリビングを出たのを見送る。

「……それで何か言いたい事ある、アリシア？」

さつきからやけに静かだったけど、もしかして復活が嫌だったりして……。

アリシアを見ると、

『本当に、出来るの、……秋介？』

目に涙を溜めて服の裾を握りしめていた。

「本当だって。心配ならセラフに、——アリシア？」

フワツ、とアリシアが胸に飛び込んで来た。

『……ごめんね。ちよつと今の顔見られたくないや。少し我慢して』
「我慢も何も、アリシアみたいに可愛い子だったら喜んで胸を貸すよ」
『……やっぱり可愛いって認めてたね』

認めてたって、……前にこんな話したっけ？

『秋介が初めて私を見てくれた時だよ』

「あー、あつたなー」

あの時は寝起きで、アリシアがやかましかったからなあ。

「また手刀落とそうか……」

アリシアの頭めがけて右手を落とそうとしたら、

『何でそうなるの!? 今のつて優しく頭を撫でる展開じゃないの!?』

バツ、と勢いよくアリシアが離れた。

……お、元気が戻った。

やっぱアリシアはしんみりしてるより騒がしい方が良いね。

「すまない、アリシア。今頭をなでると、復活させられなくなるんだ

……」

『うそう!?』

「うそう、だよ」

『……………』

はっはっはっ、そんなに見ないですよ。ちよつとした冗談だから。ごめんなさい。

『マスター、今の状況でその冗談は割と効きます』

『セラフの言う通りだよ。心臓止まるかと思った』

「すみませんでした……」

というかそもそも、今のアリシアって心臓とか関係なくない……？

『まあ良いけど。それよりも、私の復活って上手く出来そう?』

『それは勿論、——マスターの頑張り次第ですね!』

「いやあつ! 変なプレッシャーかけないで……!」

ぶつつけ本番になるから結構不安が大きいんですよ!?

「秋介」

「——はいつ!?」

いきなり呼ばれて振り向くと、リニスが立っていた。

「あの、どうかしましたか……?」

「いや、いやあ何でもないよう? それよりもリニス、プレシアさんはどう?」

「眠っていますよ。秋介に渡された薬? を飲んだらすぐに。とても良い寝顔だったので、楽しい夢でも見てるのではないのでしょうか」

それで、トリニスは続ける。

「私に何か手伝う事はありますか? あるのなら言ってください。出来る限りの事はします」

「ああ、そうね……。アリシアの体つてうちに持つてくれる?」

「ええ。それは出来ませんが、……それもフェイトから聞いたので?」

「いや、……復活って聞いたから、体は何処かに保存してあるんだろうな、って。あ、服とかも忘れないでね」

「なるほど、分かりました。ではさっそく行ってきます」

そう言っってリニスは転移して行った。

……さて、あとはフェイトを呼ぶだけ、——?

かなり小さいが、フェイトの魔力を感じた気がした。

『……?』

アリシアは微妙みたいだね。

「セラフ、今の感じってフェイトだよね」

随分と遠くで魔力を感じたけどもしかして……。

『はい。マスターの予想通り、フェイトさんがジュエルシードを強制発動させました』

『ええっ!?!』

「やっぱり……。モニターで映せる?」

『出来ますよ』

セラフがそう言うと、大型の空間モニターが現れた。

モニターには曇天の下、フェイトと人間姿のアルフが海から伸びる水柱と対峙しているのが映っていた。

第十四話：目からビーム、一度は撃つてみたかった

『あの水柱は異相体のようですね……。それぞれにジュエルシードの反応があります』

『フェイト、アルフ……』

「今日は来ないって聞いたけど、この為だったのね……」

何もこんな日にジュエルシードを強制発動しなくても良いのに。

これはアレだね。あの海に残りのジュエルシードが全部ありました、つてパターンのやつだね。

……もしそうだったら、あそこに何個あるのかが問題かな。

フェイトたちは昨日一つ封印したって聞いたから、今は六個のジュエルシードを持つてる。なのはたちは、……五個のジュエルシードを持つてる事になるのかな？

次元震が起きた時のやつは多分、クロノ君がアースラに転移する時にも回収して行つたはずだ。それなら合計は十個になるよね。

ジュエルシードは全部で二十一個だから残りは、……あれえ？

「……モニターの水柱と未回収の数が合わない？」

おかしい。何でモニターには九本だけしか映ってないのよ。あと一本は何処に……。

『いえ、数は合ってます。三日前になのはさんが新たに一つ封印しますから。なので、残るジュエルシードは九個。水柱の数とは一致してますよ』

あらそうなの？ なら納得いくけど、……これはよろしくない。

「もしかしくなくてもフェイト、かなりピンチだなあ……」

『ええ。もしかしくなくてもフェイトさん、かなりのピンチですね』

クロノ君が介入する気配もまだ無いし、フェイトの自滅を待つ気だよね……。

『もう、そんな悠長な事言ってる場合じゃないよ！ フェイトが、フェイトが……！』

アリシアが俺の服を引っ張ってモニターを指さした。

モニターを見るとフェイトが一本の水柱に追われながら、海面を突

きでた四本の背が高い岩礁の間を縫って飛ぶ姿が目に入った。

『……ッ!』

フェイトが速度を上げ、岩礁を抜けたと同時に追って来た水柱へと飛ぶ方向を変えた。

『Scythe Form.』

『——ッ、ああッ!』

変形したバルディツシュを振りかぶって切りかかったが弾かれ、
『くっ……!』

弾いた水柱と、その陰から出て来た二本目の水柱がフェイトに突進し海に叩きつけた。

『フェイト、フェイト! ——ッ!』

それを見て助けに向かおうとしたアルフを別の水柱が攫った。

『アルフ! ——うああッ!』

フェイトが海中から飛び出しアルフに手を伸ばしたが、横から来た水柱がそれを弾いた。

『……はあ、はあ、——ッ!』

態勢を立て直してもう一度アルフの元に飛ばうとしたフェイトに、左右から二本の水柱が襲った。

『……!?!』

『やらせるかあ——ッ!』

フェイトの目前、迫る二本をアルフのチェーンバインドが拘束した。

『……!』

それを機にフェイトが拘束された水柱の間を抜け、
『——フォトン、ランサー——ッ!』

展開した魔力弾を、アルフを捕らえる水柱へと放った。そして、放たれた魔力弾は水柱へと直撃しアルフが解放された。

『アルフ!』

フェイトがアルフの腕を掴んで上空に避難した。

そんな様子を見て思う。

……水柱の数が減った?

モニターの中、フェイトとアルフが見下ろす水柱は七本しか映っていない、……と思つたら今、八本目が伸びていた。あ、九本目も伸びた。コレは……。

「セラフ、何個か暴走の仕方が微妙なジュエルシードがあるよね」

『はい。フェイトさんの流した魔力で満足に暴走しなかったんでしよう。先ほどから何回か収まったり暴走したりを繰り返してますね。……もしかしたら、以前の次元震のように何か起きるかもしれない』

『ええっ!? じゃあ早く助けに行こうよ!!』

「だね。セラフ、セットアップ」

そう言うと、服が瞬時にバリアジャケットに変わった。

「よっし！ 早速二人の所に、——おお？」

モニターの上端に、何かが光つたのを見た。

……ああ、なるほどね。

やっぱり来てくれるよね。

『どうしたの、秋介?』

「いやあ、ちよつとね。——セラフ、いつでも転移できるように準備よろしく」

『既にバツチリです』

「おお、流石だね！」

『え、……何で!? 今すぐ行かないの!? 早く行かないと、フェイトとアルフが……!』

アリシアの言うお通り、モニターには満身創痍のフェイトとそれを支えるアルフが映っている。

「大丈夫だから。落ち着け。……ほら、モニターの上の方を見てみ」

俺なんかより、ずっとこの状況にピッタリな子が居るから。

『——あっ』

アリシアがモニターを見ると、フェイトの背後、曇天の隙間から桜色の光が見えた。

『ふふ、流石ですね。きっと反対を押し切つて来たんでしょね』
「だろっね」

そして光が消えたあと、隙間から降りて来たのは、
『あの子、この前の……』

「そう。——なのはならフェイトを助けてくれるよ、絶対にね」
白のバリアジャケットに身を包んだのはだった。

モニターの中、

『フェイトちゃん！』

『……ッ!?!』

突然現れたなのはにフェイトは驚いている。

『またアンタ、フェイトの邪魔を……!』

『違う！ 僕たちは戦いに来たんじゃない!』

アルフが拳を構えた時、間に人の姿のユーノが降り立った。

『ユーノくんの言う通りだよ。私たちは手伝いに来ただ』

『どうして……!』

フェイトがなのはバルディッシュを向けたが、

『今言う事じゃないかもしれないけど、……初めて会った時に助けて
くれてありがとう』

それでもなのはは気にせず続ける。

『——今度はわたしが、フェイトちゃんを助ける番!』

だから、となのはが言うどレイジングハートからフェイトへと桜色
の光が伸びた。

『きつちり二人ではんぶんこ、だよ』

フェイトが桜色の光に包まれ、

『あ……』

『Charging.』

バルディッシュが答えた。

『Charging completed!』

『手伝って、一緒にジュエルシールドを封印しよう!』

レイジングハートの声を聞いて、なのははフェイトから離れた。

『ユーノくん、アルフさん！ お願い!』

『分かった!』

ユーノは水柱の方へと向かったが、

『……フェイト』

アルフはフェイトの隣を動かない。

『アルフ。行つてあげて』

『でも……』

『今回は仕方がないよ。母さんの為だもん』

『……わかったよ』

行つてくる、とアルフが緑のチェーンバインドで水柱を拘束する
ユーノの所に飛んで行つた。

ユーノとアルフ、緑と燈の鎖が九本の水柱を拘束した。

それを見たなのはがレイジングハートを構えた。

『ユーノちゃんとアルフさんが止めてくれてる今の内に、二人でせーの
で、一気に封印!』

『Cannon Mode.』

レイジングハートが変形した。

『デイバインバスター、フルパワー。一発で封印いけるよね?』

『Of course Master.』

桜色の魔力を収束させるのはから離れた所で、

『やろう、バルディッシュ』

『Glaive Form set up』

フェイトは形を変えたバルディッシュを見て、もう一度なのはを見
た。

『……ッ!』

そして、バルディッシュを構えた。

『せえーのっ!!』

なのはのかけ声と共に、

『サンダー——』

ユーノとアルフが拘束する水柱に金色の雷が走り、

『デイバイン——』

レイジングハートの先に桜色の魔力光が煌き、

『……っ!』

『……ッ!』

二人の魔法を察知してユーノとアルフがその場を離れ、

『レイジ——ッ!』

『バスター——ッ!』

桜の砲撃と金の雷撃、二色の魔法が水柱へと撃ち込まれた。

なのはとフェイトの一撃で水柱は消え、魔法の影響か曇天だった空が晴れ始めた。

「うわあ、なにあの威力……」

モニターがほとんど桜色に染まってたよ。しかも周りにあつた岩礁まで全部なくなってるし……。偶に金色が走ってたけど、海も空も見えないほど見事に桜色一色だったね。

『ふふ。今のが、いずれマスターに飛んで来る時があるんでしようね……!』

「そうならないように気を付けます……」

でももしそうになったら、その時には今より威力が上がってるような気がするの俺だけかな？

『大丈夫ですよ、マスター。私もそう思いますから』

『そうだね。私もそんな気がする』

アリシアまで乗ってきちゃったよ。

どうしよう、もしスターライトブレイカー並みになったら……。

……いや、それはもうスターライトブレイカーなんじゃ……？

と言う事はアレか？ デイバインバスターがスターライトブレイカーって事は一体、スターライトブレイカーは何ブレイカーになっちゃうの？ はっ、まさか——。

「次元の壁ブレイカー——ッ!?!」

その内簡単に壁抜きとかやるだろうし、いずれは次元の壁でさえも抜く可能性が……!」

『マスター……。そんな事を言っていないでモニターを見てください。割と危ない状況です』

「え……?」

危ない状況ってなに？ ジュエルシードはさつき、二人の一撃で封印したでしょ。

モニターを見ると晴れ出した空の隙間から光が差し込む中、二人の魔法少女が向き合っていた。

『——フェイトちゃん』
『……………』

フェイトは呼ばれても、無言のままなのは見てるけど…………。

『別に、フェイトたちがこの前みたいに戦うって感じはしないよ？』

「確かに。アリシアの言う通り二人は大丈夫っぽいけど…………」

セラフが危ないって言うくらいならやっぱり、ジュエルシードの事か。

…………ならさっきので、全部のジュエルシードを封印しきれなかった…………？

あの威力で？　と思うけど可能性が無い訳じゃない。何個か微妙な感じのモノがあつたし、二人の魔法が直撃する直前に暴走が収まって封印を逃れたって可能性も…………。

それなら割と所か、かなり危ない。今の二人はかなりの魔力を消費してるし、いくらアルフとユーノが居ても対応できるか分からない。

「このまま綺麗に終われば良いけど…………」

『どゆこと…………？』

『見ていれば分かりますよ』

何が？　と思つたのか、アリシアがモニターを見た。それにつられて俺も見る。

モニターの中、なのはとフェイトが向き合っていた。

『わたしね、フェイトちゃんと魔法の事とか好きな物とか、楽しかった事や悲しかった事をお話したい』

『——どうして？　どうしてそこまで私の事を構うの？　今は協力できただけど、私と貴方は敵同士なんだよ…………？』

なのはの言葉を遮って、フェイトが聞き返した。

『ううん。わたしはそうは思わないよ』

それに対してなのはが首を横に振り、

『ちゃんとお話をすれば、喧嘩しても友達になれるって知ってるから…………だから、フェイトちゃんとお話をして、色々な事を伝え合いたい』

左手を胸に当てた。

『友達に、なりたいたんだ』

『……ッ!』

フェイトはなのはの言葉を聞いて、目を見開いて驚いている。

その時、二人の間に青い光の柱が現れた。

『うそっ……!』

『そんなっ……!』

スウツ、と光の柱は消えていきあとには、——八個のジュエルシードが浮かんでいた。

……一個だけ残ったのか!

惜しい、けど今はそんな事を言ってる暇じゃない。

『秋介、ジュエルシードが一個足りないよ!』

「分かってる、——セラフツ!」

俺が叫んだ瞬間二人の下、海面で一つの青い光が見えた。

『——転移魔法発動します!』

『待つて私も行く!』

俺の足元に魔法陣が展開され光に包まれる瞬間、

『フェイト——ッ!!』

『なのは——ッ!!』

アルフとユーノ、二人の叫び声が聞こえた。

↳ 転移中……

光が晴れるなり、目の前に水柱があった。

……中々なタイミングだね、セラフ!?

転移したら攻撃が当たる直前とか、結構ひどくない!? なのはと

フェイトは何処に!?

周りを見ると、

「え……?」

背後でなのはとフェイトが、信じられない物を見たような顔で俺を見ていた。

するとその手前で、

『うわあああつ——!? 前、前!』

俺のバリアジャケットの裾を握って、迫りくる水柱を指さして大慌てするアリシアが居た。

『来ますよ、マスター!』

「まったく! 良い舞台だよ、セラフ——!!」

こんな危機的状況、二人に格好つけたくなっちゃうじゃないか!
だから右腕に〈風王結界〉インビシブル・エアを纏わせ、

「——風王鉄槌——ッ!」

水柱に向け右腕を突き出し一気に風を解放した。

ドパンツ、と言う音と共に目の前の水柱が破裂したのを見て、

「とりあえず避難……!」

「きゃっ!」

「わっ!」

後ろで唾然としているのはとフェイトを両脇に抱えて飛び、その場を離れる。

『マスター! 先程の水柱が封印されたジュエルシードを取り込みました!』

「うそん、マジで!」

『マジだよ! さつきよりでつかなくなった、——って何か飛んできたよ!』

アリシアが叫んだ直後、頭上から影が落ちた。

上を見ると、

「ちよっ——!」

『あわあああつ!』

大きい水の玉が落ちて来た。

『いえ、アレは海水弾ですね。魔力で圧縮されてるようですし、かなりしよっぱさそうですね!』

何を呑気な事を言ってるんだ、うちのデバイスは……!

「圧縮って、——まさか!」

魔力で視力を一時的に上げて海水弾を見ると……。

「——あの中、魚が泳いでるんですけど!？」

「『急にどうしたの!?!』」

おおうまさか、アリシアだけじゃなくてなのはとフェイトからもツッコミが入るとは思わなかった……。

『マスターも似たような事を言ってるじゃないですか。それに、久しぶりに余裕過ぎますって』

「ごめんな、——さいっ!」

謝ると同時に急停止して、体を捻って後ろを向き〈風王鉄槌〉をブースターにして海水弾の陰から出る。

瞬間、

『あうっ!?! ……ひははんは〜!』

背中から、アリシアのそんな声が聞こえた。

……この状況でよじ登って来るとは……。

さつきまでは裾の方を握ってたのに、気付いたら背中まで来てるよ。アリシアすげえ。てか、そんな事してるから舌噛むんだよ。……あつ。

「舌噛まないように気を付けて……!」

なのはとフェイトに注意するの忘れてた。

『遅いよう!!』

アリシアのツッコミだけって事は、二人は大丈夫だったみたいね。流石、普段から空を飛んでるだけある。

『もっと早く行ってよ! お陰で舌噛んじやった〜!』

『まあまあ、アリシアさん。今は止めておきましょう。今のマスターは、——呑気な事を言う余裕はあっても謝る気は無いみたいですからね!』

『何でそんなこと言うのかなあ!? ちゃんと謝る気はあるからね!』
後回しになるけどね! などと言っていた直後、さつきまで飛んでいた場所に海水弾が大きな水しぶきを上げて着水した。

その衝撃で起きた高波を避ける為に飛ぶ高度を上げ、

「あー、危なかった。これで一先ず安心、——出来ないですね!?!」

一息つけるかと思ったら、二本の水柱がこちらを海に叩きつけよう

と海面から伸びて来た。

……数が戻ってる！

二本の水柱の奥を見ると、そこには七本の水柱が伸びていた。

ああもう、せつかく二人が協力して封印したのに、振り出しに戻っちゃったよ!?

『マスター。今はこの場を切り抜けるのが先決です!』

「だよね!」

セラフの言う通り、今は目の前の水柱をなんとかしないとね。でも、どうやってあの二本を……。

両手は二人を抱えて塞がってるし、アリシアはでバリアジャケットに掴まるので忙しい。リニスは此処に居ないし、この場合は、……アレがあるじゃないですか! 前から試したくて、今の今まで忘れてたアレ。

右目に大量の魔力を集中させ、

「――梵^フ天^ラよ、地^マを覆^スえ――ツ!」

光炎の光――ビームのようなものを、此方に迫る水柱に撃ち込んだ。

ビームが直撃し水柱を穿った。

『ちゃんと掴まってなよ、アリシア!』

飛ぶ速度を上げ、穿たれた部分を抜ける。

……ついに俺の目からビームが……!

まさか此処で使えるとは思わなかったね!

『忘れてましたからね』

『なに今の凄い! もう一回やって、もう一回!!』

『やかましい』

穿たれた穴から飛び出し、

「セラフ、転移……!」

『わかりました!』

その勢いのまま前方に展開された魔法陣に突っ込む。

そして、

「うわっ!?!」

「なんだい!？」

ユーノとアルフの目の前に飛び出した。

二人の驚いた顔を見て思う。

……あ、成功した。

思い付きでやってみたけど、特に転移先を指定しなくても頭に浮かべれば行けるんだね。これは新しい発見……!

「あ、ヤッホー、お二人さん。元気?」

「……………」

あ、ダメだ。口あんぐり状態で反応が無い。

『ねえ、セラフ。フェレットと狼を餌に使ったら水柱釣れるかな?』

『どうでしょうね。元が海ですから、雑食でしょうし釣れるんじゃないですかね?』

『どうしよう。思ってたよりちゃんとした意見を言われた』

てっきりいつもみたいに『マスター……』か『余裕ですね』のどっちかだと……。

『秋介だけじゃなくて、セラフも余裕あるよね』

『マスターのデバイスですからね!』

『あー…………』

『……………』

よし。冗談は此処まで! 別にアリシアの視線が背中に刺さるからとかじゃないよう?

それよりも……。

『アリシアさんや。そろそろ背中から降りてくれませんか?』

『や』

ギョツ、と背後霊よろしく離れてくれない。

また舌噛んでも知らないよ?

「秋介、くん……?」

「秋介…………」

右からなのは、左からフェイトの声が聞こえた。

「…………ああ、ごめん」

抱えていた二人を離す。

「怪我とかしてない、二人共？」

「あ、うん。助けてくれてありがとう……」

「大丈夫だよ、秋介。助けてくれてありがとう」

「ふふん。良いよ、別に」

なのはとフェイトに大きな怪我が無くて良かった。

……もし二人に怪我でもさせたら士郎さんが、……ああ多分、プレシアさんも同じタイプなんだろうなあ。

……………

うわあ……。考えるのは止めよう。晴れてるのに雷に撃たれるなんて事態は遠慮したい。

本当に怪我とかしてなくて良かった……。と考えてたら、

「えっと、ホントに秋介くん、……だよな？」

なのはが俺の顔を覗いた。

「ん、そうですね？ 正真正銘、なのはが知ってる秋介さんですよ」

「なら、どうして今までだ、——みヤツ!？」

なのはのほっぺを両手で挟んで言葉を遮る。

「とりあえずジュエルシードを止めるのが先だって。俺の事はまたあとで」

そう言ってなのはのほっぺから手を離す。

「……うん、わかった。ちゃんと、あとで聞かせてね？」

「あいよ。……さて、フェイトも何かある？」

「ううん。私もあとで良いよ。今はそれよりも……」

「だね。——そこで未だに動かないフェレットと狼を戻そうか」

「え……？」

そっち？ って顔で二人に見られた。

「おーい。ユーノ、アルフー。いい加減その口閉じないと、——水柱釣りの餌にしちやうよ？」

「こ、怖い事言わないでくれ！」

「しゅ、秋介。アンタ、何て事を言いだすんだい！」

お、戻って来た。

「冗談だって。二人が呆然としてるから、こうでも言わないと戻って

こないかな、って」

「君は、……いや、聞くのは後回しだね。今はジュエルシードを封印するのが優先だ。早くしないと、融合して手がつけられない事に……」
「なってるみたいだよ、アレ」

アルフが指さす先、一本の水柱を中心に八本の水柱が集まっていた。

「なッ!？」

「おー、合体した」

これはまさかの人型に変身か……！　ちえ、なんだあ……。

『なんか大きい柱になったね』

『ですね。周りにも大小様々な水柱も居ますけど、……中々に地味な合体でしたね』

『まったくだ』

俺のこの期待した気持ち。思いつきりぶつけてやろうと、そう決意した。

「くっ、一体どうやって封印すれば……。僕とその彼女じゃそこまでの火力が出ないし……」

「……そうだね。アンタと私の魔法はサポート系がほとんどだ。封印魔法が使えたとしても、あれじゃ近づけないよ」

「わたしは、……さっきので魔力をほとんど使っちゃったよ。フェイトちゃんは？」

「私も同じ。貴方にもらった魔力もさっきの一撃で使っちゃった」

どうしたものか……、と四人は考え込んでしまった。

……いや、考えてる暇ないって。

あっち見てみ？　何本か子機っぽい水柱がこっちに向かってるよ

？

『さっきみたいにビーム！』

『えー……？』

もう、アリシアってばそんなに見たいの？　仕方ないなあ……！

『うれしそうですね、マスター』

はっはっは、そんな事ないよう！

「皆、逃げて！」

なのはが水柱に気付いて叫んだ。

「……………ッ！」

同時に三本の水柱が勢いよく海面から伸びて来た。

……………まとめて吹っ飛ばせるかね？

さつきよりも多めに魔力を右目に集中させて、

「梵天よ、……………？」

撃とうとしたらふと、頭上に魔力を感じた。

見上げるとそこには二つの魔法陣が展開していた。

……………なら俺は真ん中の水柱を撃ちますかね！

もう一度右目に魔力を溜めて、

「梵天よ、地を覆え——ッ！」

水柱を撃ち抜いた。

それと同時に淡い黄色の砲撃が左、青の砲撃が右の水柱を撃ち抜いた。

『イエーイー！』

『ふふ、良いタイミングで来てくれましたね』

セラフの言う通りよ。

フツ、と背の低い執務官が降りて来た。

「クロノくん……………」

「なんだか今、失礼な事を考えられたような気がするが、……………まあ良い。」

この際、君から話を聞くのは後回しだ。——そっちの貴女も同じだ。この場においてはジュエルシードの封印に協力して貰う」

クロノ君が見た先、見慣れた猫耳尻尾のお姉さんが降りて来た。

「リニス……………」

「構いません。アレを放っておいたらどうなるか分かりませんからね」

そう答えてリニスは俺の左に並び、

「では、私が異相体の動きを止めます。封印は秋介に任せました」

「何か秘策があると言う事か、……………なら、封印は君に任せよう」

クロノ君もそう言って俺の右に並んだ。
「任された！ ……えっ？」
……俺がやるの？

第十五話：見送ってからの先回りは驚かれる

「マジで……?」

合体して大きくなった水柱の封印を俺に丸投げしたよね、この猫耳尻尾のお姉さんと執務官は。

「酷い、酷いわ! いくら何でも俺一人にアレを押し付けるなんて酷過ぎる。うう……!」

『マスター、口元笑ってるのが丸見えです。泣いたフリをするならもつとこう、——貴方たちは何て事を、……それでも人間ですかッ! 的な感じで言わないと』

「あ、それだと私は使い魔なのでカウントされませんね」

「くそうっ! リニスが乗って来るとは思わなかった上に、セラフの演技力が予想以上……!」

ガクツ、とその場に項垂れる。

「空中で器用な事をするな、君は。……ついでに言うと僕は人間だが、カウントはしないでくれ」

まさかのクロノ君まで乗って来た。

「いや別に、今の冗談だから真に受けなくて良いよ……?」

そんな真面目な顔で言われると何かやりきれない。もつと楽しく行こうよ。

ほらご覧? 空から海水が降って来たよ。何で俺たち空に浮いてるのにその上から海水が降って来るんだろうね、ははっ!

「——あ、やっべ」

さつきと比べて小ぶりの海水弾が雨のように降って来た。

……今日は良く降られる日だなあ。

さつきはデカいのが降って来て今は小さいの。この調子なら今度は槍でも降ってきそうだね!

『あわああああ——ッ!』

『——アリシア、耳元で叫ばないで。キーンとするじゃない』

『そんな事言ってる場合じゃないよ!』

はいはい、分かっていますよー。

「セラフ、全部撃ち落とせるよね？」

『勿論です、マスター』

セラフの言葉と共に、俺たちの頭上に三枚の大型魔法陣が展開した。

「シューター、Go！」

『shoot——ッ！』

俺の合図と同時に三枚の魔法陣から、薄い青みを含んだ白——月白色の魔力光が勢いよく伸び降って来る海水弾を迎撃した。

「うーん、冷たい。しかもしょっぱいわー」

迎撃された海水弾が本当に雨になって降って来た。

「呑気な事を言ってる暇はないですよ、秋介。見てください、異相体が動きました！」

リニスに促された先、水柱が何やら揺れているのが見えた。

「だったらまた攻撃される前に封印しよう。……なのはとフェイトたちは此処で——」

「待たないよ。わたしも、秋介さんと一緒に行く」

「私も。秋介と一緒に行かせて」

「なら僕は彼女と一緒に援護に回るよ」

「ああ、まだバインドで縛るくらいの魔力は残ってる。任せな、秋介！」

なのはとフェイト、ユーノとアルフが並んだ。

……これは一発でドカンと封印した方が良いかな。

ただでさえ皆、魔力を消耗して疲れてるはず。あまり無茶はさせたくないね。

『アリシア』

『なに？ 私はいつでも準備オツケーだよ！』

グッ、と親指が立ったアリシアの左手が顔の横に見えた。

『また舌噛んでも知らんよ』

『……大丈夫。気を付けるから』

グッ、と立っていたアリシアの親指がシュン、と下がった。

『それにフェイトがまだ頑張るみたいだからね。お姉ちゃんの私が後

ろで見てるのは、……カッコ悪いでしょ?』

人の背中に引っ付いてるのはカッコ悪くないんですかね、と思ったけど言わないことにしよう。

『……落ちないように気を付けるのよ』

『アイアイツサー!』

よし! それじゃあ早速封印に――。

「秋介くん、あのお姉さんとはどんな関係なの?」

行こうかと思ったら、なのはがいつの間にか前に居た。

……何でこのタイミングで聞くのかしらね、この子は……!

話はあとつて言ったのに……。

「あのお姉さんって、……よく一緒にお出掛けしてたお姉さんだよね?」

「……前も言ったけど、なのはも知ってるから。ちなみにアリサとすずかも知ってる」

「でも見た事ないお姉さんなの」

「あの姿はね。あのお姉さんが何て呼ばれてるか、良く聞いてみ?」

「……?」

俺の促した先をなのはが見ると、

「私とそちらの執務官とで先行して周りの異相体を止めます。フェイトはなのはさんと一緒に他の異相体を引き付けてください」

「分かったよ、リニス。あの子と一緒にに行けば良いんだよね。秋介の為に頑張るよ」

「大丈夫だって。私がしっかりと援護するからさ!」

「ではくれぐれも無理はしないでくださいね、二人共」

フェイトとアルフを心配するリニスが居た。

「えっ」

「どうしたんだい、なのは……?」

固まったなのはを見てユーノが声をかけたけど……。

「えええええ!」

それに気付かずなのはが驚きの声を上げた。

「どうしたんだ、一体……?」

「ぎ、さあ？ 急になのはがあの人見て……」

「私、ですか……」

「リニス、あの子に何かしたの？」

「いえ、特に思い当たる節はありませんけど……」

「本当かい？」

「本当です、と返すリニスを見て思う。

……あ、リニスってば気付いてないのか。

いつもは俺が気付かないでセラフかりニスに言われるのに、今回は俺が言う番だね！

「リニス、リニスー。普段なのはたちと会う自分を思い出して」

「——ああ、そう言う事ですか。そうですね。それなら、なのはさんの反応にも納得がいきますね」

「すいません、とりニスがなのはに軽く頭を下げた。

「私はリニス。フェイトの元家庭教師で、今は秋介の使い魔をしています。改めてよろしくお願いしますね」

「は、はい！ 高町なのはです！」

「よろしく願います！ となのはがレイジングハートを胸に抱えてお辞儀した。

『私はアリシア・テストタロッサ！ フェイトのお姉ちゃんに幽霊やつてるよ！』

『いや聞こえてな——』

『幽霊なの!?!』

『——えええつ!?!』

アリシアまで驚くなよ。てか、

……ウソでしょ!?! もしかしてアリシアの声が聞こえまして!?!

「な、なのは？ 急に幽霊なんて、どした……?？」

「秋介くんの方からなにか、聞こえた気がしたの。気のせいかな」
マジですか。

「き、気のせいだって。もし幽霊なんてモノが居たら、——水柱の群れの中に投げ込んで来るから任せろ！」

『しゅ、秋介!?! ウソだよね……? 私をあんな所に投げないよね?』

『……多分』

『お姉ちゃんピンチ——ッ!』

どうしよく!? と背中で慌ててる気配のアリシアがちよつと面白い。見えないけど多分、駄々っ子よろしく両手を振ってると思う。だってジタバタする両足が見えるもん。

『大丈夫、アリシア。——三割くらいしか思っていないから』

『どっちが!? 三割って、本気と冗談のどっちの事!? ねえ!!』

勿論、本気の方に決まってるよー。

『マスター。流石にアリシアさんを投げ込んでも、向うは反応しませんよ?』

……ちえ。

『何か今、残念がられた気がする……! はっ、わかった冗談の方だね! 残りの七割は本気だったね!』

「——よーし。じゃあ早速、封印に行こうかな!」

『誤魔化さないでよ!』

大丈夫だって。流石に投げ込んだりしないから。

『はっはっは、……ちゃんと掴まっててよね!』

そう言って揺らめく水柱の群れに向かって飛ぶ。

『あうっ』

いきなり俺が動いた所為でアリシアが振り落とされそうになった。

『……とお。ふ、乗り切った……!』

私の舌は無事だよ! とアリシアが言ってくるが今は無視しよう。

「『あつ』」

「秋介!」

「急だな、君は……!」

おお。流石だね、クロノ君。俺が急に動いても反応するなんて。

「君はどうやってアレを封印するつもりだ?」

「コレを使って封印するつもり」

右手に光が集まり一振りの剣が現れ、それを握ってクロノ君に見せる。

「……そんな事が出来るような魔力は感じられないが、本当に大丈夫

なのか？ 僕にはただの剣にしか見えない」

「大丈夫だって。鞘付きでも、あの程度の水柱は簡単に吹っ飛ばせるから」

「……わかった。なら周りの異相体は僕に任せてくれ。君の邪魔はさせない」

クロノ君が水柱の元へ先行し、それを見送ると、

「秋介！ 急に飛び出さないでください！」

リニスがなのはとフェイトたちを引き連れて来た。

「いやー、そろそろ封印しないと不味いかなーって」

『そうですね。そろそろ封印しないとかかなり不味い状況になりますね』

え、ホントに？

『聞きたいですか？』

「遠慮します……」

あのまま放っておいたらどうなったのよ……。

……次元震起きてこの辺りもろとも無くなったりして。

はは、流星にそんな事は無いよねー……。

チラツ、とセラフを見ると、

『——ふふ』

淡く点滅していた。

どうしよう。今の反応からして本当に不味い状況になった可能性が……。

セラフの事だから事前に教えてくれるだろうけど、そうなったら色々危ないね。

……次からはちゃんとしてよう。

危機的状況でふざけるのは良くない事だよね。うん。

「秋介くん？」

「どうかしたの？」

「いやね、ちよつと自分の行動に反省してただけ。それよりも、セラフ」

『はいはい。お任せを』

セラフが言うとなのはとフェイト、

「これって……」

「秋介……」

「私もかい？」

「僕も良いのかな……」

加えてアルフとユーノにセラフから月白色の光が伸び、その光が四人を包んだ。

「その……大丈夫なのかな？　なのはや彼女はともかく、僕たちにまで渡して」

「そうだよ、秋介。アンタの方こそ無茶してるんじゃないかい？」

「大丈夫。これくらいの魔力なら封印に支障は無いよ。それよりユーノ、俺の事は秋介で良いから」

一応、前に自然公園で会ってるからね。

「分かった。じゃあ秋介、さっそくだけどうやって封印するか聞かせてくれ」

順応早くて助かるね。あとでクロノ君にも言おう。君って呼ばれても俺は卵じゃないからね。

『余裕ですね』

『ふ、……ちゃんと真面目にやるから大丈夫』

『ホントに？』

『本当に』

ちよつとゆっくりし過ぎたし、さっさと終わらせよう。

「今から水柱の懐に飛び込んで思いっきりコレをぶっぱなす。以上！」

『分かりやすいですね』

「ええ。なら私はバインドで異相体の動きを封じます。アルフ、一緒に来てください」

「あいよ！　任せな、リニス！」

「では、秋介。あとは任せました」

そう言ってリニスとアルフが水柱の元へと回り込んでいった。

「じゃあ、わたしは飛び回って引き付けるよ！　一緒に行こう、フェイトちゃん！」

「でも……」

なのはの言葉にフェイトは戸惑って俺を見た。

「——行ってきな、フェイト。一緒に行って、ちよつと二人で俺の道開けてきくれる?」

「一緒に、行こう?」

「……うん。行ってくるね、秋介」

そう言っつてフェイトが先に速度を上げ、

「あ、待ってよ〜!」

なのはがそれを追いかけて行つた。

「なら、二人の事は僕が援護するよ。秋介も気を付けて」

続いてユーノが二人を追つて行つた。

さて、それじゃあ俺も急ごうかな……!」

速度を上げると、

『ねえ、秋介』

「何?」

『私思つたんだけど、——あそこまで転移して行つた方が早いんじゃないの?』

さつきみたいに、とアリシアが言い出した。

……うわあ、忘れてた。

『秋介?』

「流石お姉ちゃん……!」

『え? えへへ〜。もうどうしたの急に……!』

伊達に幽霊やつてるワケじゃないね! 特に関係ないけど。

「セラ——」

『もう準備できてますよ?』

目の前に魔法陣が現れた。

「……もしかして気づいてた?」

『はい』

……言っつてよ……。

そう思つた瞬間、魔法陣に突つ込み光に包まれた。

くまあ良いや〜

光を抜けると、目の前に水柱があった。

「おお、すげえ……」

これって一番デカイやつだよ？ セラフってば、中々良い所に出してくれたじゃない。

『だねー、……って、何か細いヤツ伸びて来たよ!』

「はいは、……おっ」

足元の海面から伸びて来た水柱を切ろうとしたら、

「——君は何をぼうつと突っ立てるんだ!」

クロノ君の声と共に青の魔力弾が細い水柱を撃ち抜いた。

「あら執務官、意外と苦戦中?」

見ると、バリアジャケットが所々ボロボロになっていた。

「当り前だ! こんな大物、一人で抑えられる訳ないだろう!」

と、降りて来たクロノ君と並んで立ち、

「さっきなのはとフェイトたちが此処に飛んで行ったから、少しは楽になるんじゃない?」

再び伸びて来た水柱を見て、右手に握る剣を構える。

「……その彼女たちより先に君が居るのは気になるが、今はそれ所じゃない」

「ならとりあえず、周りを片づけようか」

「ああ……」

クロノ君もデバイス——S2Uを構えた。

「周りの細かいヤツを片づけたら、思いつきりコレをぶっぱなす。だから巻き込まれないように避難してよ、執務官?」

「分かった。それと、僕の名前は執務官じゃない。クロノ・ハラオウンだ。あとで君からは色々話を聞かせてもらう」

「じゃあ、クロノ。俺の名前は君じゃない。戸田・秋介。秋介で良いよ。あと、話をするのは色々全部終わってからね」

周りに伸びる水柱を見据える。

「あ、魔力渡そうか?」

「結構だ。何者か分からない奴からもらって、何かあつては嫌だからな」

「酷いなあ。ユーノは貰ってくれたのに」

「あのフェレット擬きめ……。いや、まあ良い。それよりも、君一人だと周りの異相体を片づけるのにどれくらいだ？」

「え？ あー……」

どうなんだろう。ざっと見ても百本以上は居るよね。

……宝具で一掃しても良いけど、あまり此処で魔力使いたくないし……。

一本一本切つてたら結構時間かかりそう。三分くらいかな？

『二分ほどですね』

セラフが俺の代わりに答えた。

「……………」

ヤメテ、クロノ。そんな顔で見ないで。今は目の前の水柱に集中しよう？

『水柱にすうちゅうしよう、……くう、言えなかつた……！』

『水柱に集中しよう、——私は言えましたよ、マスター！』

『やかましい』

アリシアとセラフったら、この状況で余裕だね。

『え？』

……はい、すみません……。

俺は人の事言えないですよ。

「君は……」

「はい、はい！ 前を見る！ 突っ込んで来たよう！」

クロノの前の水柱たちが一斉に襲い掛かって来た。

「しゃがめ、クロノ！」

「——ッ！」

俺が叫ぶとすぐにクロノが体を倒した。

後ろを振り向くと同時に構える剣に風を纏わせ、

「——風王鉄槌——ッ！」

切り払いながら風を解放した。

『マスター！』

『後ろからも来たよ！』

「分かって——」

セラフとアリシアの声を聞いて後ろを見ると、

『Blaze Cannon』

俺の下から青の砲撃が飛んで水柱を迎撃した。

「……やるね、クロノ」

「これくらい当然だ」

砲撃の出所を見るとクロノがS2Uを水柱の方に向けていた。

クロノが立ち上がり、互いに背中を預けるように並ぶ。

「……あのさ、クロノ」

「なんだ」

「あまり時間をかけると不味い状況になるっばいんだよ」

「だからなんだ」

「俺一人で二分なら、二人ならもつと早く片づけて、封印して終われる
と思うんですけど？」

「……良いだろう。なら、そっち側は任せた——！」

「じゃあ、そっちはよろしく——！」

ダツ、とお互いに目の前の水柱めがけて翔る。

「は——ッ！」

翔けた先、まずは目の前の水柱二本をまとめて切り払う。

『奥から来るよ！』

『あいよ！』

崩れる二本より一回り大きき水柱が突進して来た。

それを、剣に魔力を纏わせ上段から振り下ろし一刀両断する。

両断された水柱が俺の両側を通過し崩れ、

「——ッ！」

その陰から左右二本ずつの細い水柱が現れた。

剣を横に一閃して切り払おうとしたら、淡い黄色の鎖が水柱をまとめて拘束した。

「大丈夫ですか、秋介！」

「はああああ——ッ！」

声の方を見ようとしたらアルフが拘束された水柱を殴り、その衝撃で水柱は崩れた。

……ええ、アレって殴っても倒せるんだ。

まあ、それはそれとして……。

「リニス、アルフ！ 俺は良いから向うのクロノを手伝って！」

「分かりました。行きますよ、アルフ！」

「……ちっ、仕方ない。わかったよ」

二人がクロノの方に向かい、それを追おうとした水柱を回り込み剣で切り裂く。

「セラフ。リニスとアルフが来てくれたけど、ちよつと急いだ方がよさそう？」

向かって来る水柱を切り伏せながら聞く。

『はい。これ以上、時間をかけると次元震が起きますね。それも、——この辺り一面どころか、街の方まで巻き込みます』

簡単に消えますね、とセラフが付け加えた。

「……今のままだと、際どい感じかな。切っても切っても、少ししたら復活するし……」

やっぱり宝具使ってまとめて片づけた方が良いか……？

右手に握る剣に魔力を流し込もうとしたら、

『大丈夫です。——ほら、頼りになるご友人たちが到着しましたよ』

背後から魔力を感じた。

『秋介避けてえ——ッ!?!』

アリシアが俺の頭を掴んで振り向かせた直後、桜色の砲撃が飛んで来るのが見えた。

「うおつとおお!?!」

空中を蹴るようにして横に飛び躲す。

桜色の砲撃はさつきまで俺が居た所を通って、その先に伸びていた複数の水柱をまとめて、……消し去った。

……崩れるんじゃないかって、消えた……。

『もう少しでしたね』

ホントだよ。アリシアが居なかったら水柱もろとも消される所だった。まったく誰だ、あんな火力の砲撃飛ばしてきた子は。……いやまあ、分かっているけども。

砲撃が飛んできた方を見ると、

「あれ、……ええええええ!! 何で秋介くんがもういるの!?!」

「——ああ、間に合わなかった……。でも、何とか無事みたいだね。良かった……。」

「秋介……」

俺を見つけて驚くなのはとその横で、ホッ、と胸を撫で下ろすユーノとフェイトが居た。

……間に合わなかったって、ユーノは気付いてくれてたんだね……。

ありがとう。でも、今は良いや。とりあえず、

「おーい、なのはー。もう一回今の撃ってー。出来ればフェイトも一緒にー」

二人に頼んでこの辺の水柱を一掃して貰おう。

「え、でも……」

「本当に、良いの……?」

どうしよう、となのはとフェイトが顔を見合わせた。

……仲良いね、お二人さん。

でも、それは終わってからにしてほしいかな。

『此処は私に任せてください』

「え?」

何を? と聞く前にセラフが、

『——なのはさん、フェイトさん。お二人の思いを魔法に乗せて、マスターに向けて撃ってください!』

とんでもない事を言い放った。

「——ッ!」

「マジで!?!」

ちよつと待って、それはダメだと思うんですけど!?!

『大丈夫です! マスターは必ずお二人の思いを受け止めてくれます

よ……!』

大丈夫じゃないから待ってえ!　もしかしてセラフさん、楽しんでませんか!?

「——わかったの!　いける、フエイトちゃん?」

「——大丈夫。思いつきりいくよ、秋介!」

「今は来ないで!」

『今は、ですか。ふふ……ッ!』

『あとなら良いのか』

「やかましい……!」

言葉の綾です!

ってか、そんな事言ってる場合じゃないわね!?

「デイベイン——」

「サンダー——」

桜と金、二色の魔力光が煌くのが見えた。

……あ、何かヤバそう。

思ってたよりデカいのが飛んできそうな気配。

『先ほど渡した魔力で、最初に封印した時よりもかなり強力になってますね』

『——逃げよう、秋介。私が危ない気がする』

ああ。それには同意、——ってちよつと待った!

「ユーノ、後ろ!」

「——ッ!」

三人の後ろ、太いのが二、細いのが三本の水柱が海面から飛び出してきた。

「くっ、——ッ!」

ユーノが振り向き、緑のチェーンバインドで水柱を拘束するが、勢いに引かれてバランスを崩した。

「……!」

「……ッ!」

「二人は砲撃に集中!」

動こうとした二人を止め、瞬間的に魔力を足裏で爆発させて三人を

襲う水柱へと一気に近付く。

「——ッ！」

スパン、と水柱をまとめて横に一閃する。

「……これで……！」

「なのは、フエイト！」

叫ぶと二人がハツ、としてデカイ水柱の方見て、

「バスター——ッ！」

「スマッシュャー——ッ！」

二色の砲撃が放たれた。

直後、デカイ水柱の根元で大きな爆発が起きた。

「……すげえ。生だと迫力あるわー。」

フエイトったらさつきと技変わってるし、モニターで見たより凄かったね！

『マスター、今の一撃で巨大水柱の根元に穴が開きました！』

「あいよ！」

なのはとフエイトの間を通って大きく穿たれた穴へと向かう。

「「秋介（くん）!?!」」

「今から封印するから、巻き込まれないように避難しときなよ……！」

そう三人に叫んで穴の中に急行する。

「セラフ、リニスたちに連絡！」

『済んでいます！』

流石ね、セラフさん。仕事が早くて助かるよ！

穴に入り込み、急停止する。

『秋介、あそこ！』

アリシアが指さした先、頭上に九個のジュエルシールドが見えた。

外の皆は、……ちゃんと避難したみたいね。なら……。

「……今更だけど、一発で封印いけるよね？」

『ホント今更だね!』

いやあなんか、急に心配になっちゃった……。

『ふふ。この程度の水柱、どこぞの大海嘯を蒸発させるより簡単ですよ……！』

「なら安心したッ！」

剣の握り部分を両手で持ち下段に構え、一気に魔力を流し込む。すると剣を中心に風が渦巻き、黄金の光が放出される。

……海相手なら、こっちの聖剣が良いよね……！！

鞘付きでも十分、九個まとめて封印できる。

「約束された——」

頭上のジュエルシールドへと、

「——勝利の剣——ッ！」

一気に構えた聖剣を振り抜いた。

瞬間、黄金の光が放たれジュエルシールドを飲み込んだ。

第十六話：サプライズは仕掛ける側になりたい

〈^エ約束された勝利の剣^カ〉をぶっばなした影響で青空に変わり、撃ちあげられた海水がパラパラ降ってくる中、

「晴れたなあー……」

『晴れましたねー』

俺は海にプカプカと仰向けに浮かんでいた。

『——ケホツ、ケホツ。うう、溺れるかと思つた……』

グダア、と海から出て来たアリシアが、俺を漂流物よろしくもたれかかった。

「まったくだね……」

まさか〈約束された勝利の剣〉を上を降り抜いたら足元の海面が持ち上げられて、その海面に飲まれるとは誰も思うまい……。

……お陰でちよつと流されちゃった……。

軽く漂流した気分だよ。まあ、なのはとフェイトの声が聞こえる気がするし、大した距離は流されてないっぽいから良いけど。

「よつ、と」

その場に起き上がり海面に立つと、

『あうう……』

アリシアがゴロンと転がって海面に仰向けになった。

「早く立ちなさいな。置いてくよ?」

『……起こして?』

両手をこちらに伸ばし、甘えるような声で言われた。

「……はあ。お姉ちゃんなんだから自分で起きなさいよ」

まったく、と思いつながらアリシアの手を引いて起こす。

『いやー、海の中でグルグルなって目が回っちゃった。……あ、そう言えばジュエルシードは?』

「……さあ?」

封印はちゃんと出来たと思うけど……。

『ご心配なく。ジュエルシード九個、全ての封印は確認済みです』

「そう。なら何処に、……お?」

周りを見ると、少し離れた所に青い光の柱が現れた。

「行くよ、アリシ、……ア？」

横を見るとアリシアが居なかった。

あれ？　　と思つて首を動かすと、

『いよいよ、つと。ふう……。あ、もう飛んで良いよ、秋介！』

肩の向うにウインクするアリシアの顔があった。

『どうしました、マスター？』

『私の顔に何かついてる？』

『何でもない……』

幽霊少女がさも当然のように人の背中に引っ付いて来たけど、……
全然気にしてないからね！

……まあそれよりも、ジュエルシードを優先した方が良いか。

海面を軽く蹴つて飛び、光の柱へ向かう。

近付くとスウ、と光の柱が消え、あとには九個のジュエルシードが
浮いていた。

「さて、ジュエルシードはどう、——しふう!？」

いきなり右から衝撃が来た。

「良かった……」

「ふえ、いと……」

くう、脇腹にクリーンヒットお……！

「秋介くん！」

この声はまさか——。

「待って、なの、——はふあつ!？」

止めようと思つて体を動かしたら、不幸にもなのはロケットが鳩尾
に綺麗に入った。

『なら次は私だね！』

背中のアリシアが離れ少し距離を取ってから、

『——とうっ!』

「おっと」

突撃して来たのを、ちよつとバランスを崩すフリをしてひらりと躲
す。

『なんでえ!?!』

私だけひどくない!? とアリシアが叫びながら突撃の勢いのまま横を通過していった。

……ふ、そう来る気がしたからね。

これで引つ付き幽霊から解放された……!

『——と見せかけてからの方向転換!』

『なに!?!』

急停止からの方向転換だ?!?

『秋介の動き、マネさせてもらったよ……!』

『アリシア、恐ろしい子……!』

『遊ぶのはそこまでしましょうよ』

『はい……』

とりあえず、また背中に引つ付いたアリシアは置いておいて……。

「お二人さんや。そんなに慌てて一体どうしたの?」

フエイトなんてどっかから飛んで来たみたいだし、なのはも中々な速度だった。

「どうしたの? じゃないよ! 秋介くんが穴に入ったと思ったらいきなり光って、……それで……!」

「そうだよ! 光が収まって、異相体が消えたと思ったら秋介が居なくて、……それで……!」

心配したんだよ……、となのはとフエイトが涙を浮かべた。

……息ピッタリじゃないですかこの二人は。

「ごめん、ごめん。ちよつと海に飲まれちゃって、少し流されてた」
「いやあ、一瞬だったよ。ザバツ、つて。海って怖いね、はっはっはっ

!

「二笑い事じゃないよ!!」

二人が顔を上げて怒鳴った。

「ごめんなさい……」

「むく……」

スツ、となのはが俺から離れて、

「秋介くん、正座して」

「えっ……?」

俺の足元を指さして言った。

いきなりだね。てか、マジで? 空中ですよ此処。フェイトだって居るのですが……?

「秋介くん——?」

「……はいです」

膝を折ってその場で正座する。

下が地面じゃないから足が痺れたりはしないけど……。

……なんだろう。今は逆らわない方が良い気がする。

逆らったらなんか、……砲撃が襲ってくるようなそんな気が……。

『この状況でも秋介から離れないフェイトって、——やっぱり私の妹だよね!』

『やかましい』

でもアリシアの言う事は分からんでもない……。

……引っ付いてくれるのは嬉しいけど、今は遠慮したいかな。

だってなのは、フェイト見ながらほっぺ膨らませてむく、とか見てるもん。

「えーっと……。少し離れて、フェイト?」

「……わかった」

おお! 何て聞き分けの良い子なんでしょうね、フェイトってば。どこその幽霊お姉ちゃんとは違うんだね!

『わ、私だってちゃんと聞き分け出来る子だよ……?』

『じゃあ今は離れて?』

『……わかった』

そう言ってアリシアは俺から離れ、チョココンと俺の隣で正座した。なんで正座? と思うが、今はそんな場合じゃなかった。

目の前でジュエルシードを背景に仁王立ちするなのを見て気付く。

「——どうしよう。なのには正座させられる理由しか見つからない」

「理由しか見つからないの!?!」

だって俺が魔法使えるって黙ってた事でしょ? それにリニスと

フエイトの事も。

「そうだけど、……言い訳が無かったのはビックリなの」

「流石にこの状況で言い訳はしないって」

「でもお父さんとお兄ちゃんは良く、お母さんの前で正座してる時は言い訳するよ?」

何やってんだあの二人。

『なのはさんは桃子さん似ですね』

『どんな人?』

『高町家の頂点でスイーツ作りが上手いパティシエ』

『なのはさんの母親で彼女の家の頂点ですね』

『一体どんな人……?』

その内分かるから今は気にしなくて良いよ。

「そっか……。まあそんな事より、他の皆はどうしたの?」

「あっ」

なのはとフエイト、二人そろって声を洩らした。

「……………」

ジツ、と二人を見ると、

「ゆ、ユーノクーン、クロノクーン。秋介くん見つけたよ……」

「り、リニスー、アルフー。秋介見つけたよ……」

二人はそれぞれの名前を呼びながら自分が飛んできた方に違うよ? 待ってもらってたんだよ? 置いて来た訳じゃないんだよ?

と誤魔化すように戻って行った。

くもしかして俺、正座したままで待つ……? く

『……戻って来ないね』

『ねえー……』

五分くらい経ったけどまだ戻って来ない。なのはとフエイトは一体、何処から俺を見つけたのよ……。

しかもこの状況……。

『ジュエルシードの前で正座待機って普通は無いよね』

『普通は無いですよ、ロストログアを前にして放置なんて。おまけに管理局の監視付です』

あー、リンデイイさんか。アースラから見てるんだよねえ。

『向うにとってマスターはいきなり現れた謎の魔導師、つまり要注意人物ですから』

『謎の魔導師に要注意人物か……』

それって――。

『――なんかカツコイイね、秋介！』

『――なんかカツコイイよな、アリシア！』

しまったっ先に言われた。くそうっ！

とまあ別にそんな事はどうでも良くて……。

『今の内にジュエルシード回収して帰ったらクロノ、どんな反応するかな？』

『他の局員方を連れてうちに乗り込んでくるでしょうね』

それは困るなー。今はプレシアさんがうち寝てるし、リニスが此処に来たって事は多分アリシアの体も運んである。

……あー、フェイトとアルフにその事伝えないと。

今から念話で説明するか、それとも……。

『いつその事フェイトとアルフには内緒でアリシアを復活させちゃおうか。サプライズ的な感じで』

『ええっ!? ——何それ面白そう!』

ええっ!? ——意外と好感触だった!?

『どうしよう、セラフ! 冗談で言ったのにアリシアが真に受けちゃった!?!』

『落ち着いてください、マスター。動き出したアリシアさんはもう止まりません』

そんな。それじゃあ一体、どうすれば良いんだ……!!

『今の会話部分だけ記憶を消すか、一緒になってフェイトさんたちを驚かせる方法を考えるかのどちらかしかありません』

ご決断を、マスター! とセラフに迫られたので、

『どっちを選ぶかなんてそんなの、——一緒に驚かす方法を考えるに

決まってるじゃないですか!』

『ですよー。マスターならそう言うと思ってました』

当然面白そうな方を選ぶに決まってる。

……フェイトとアルフにはあとから全力で謝り倒そう。

雷の一発や二発、おまけの三発目まで落とされる覚悟はある。

『その覚悟って、——プレシアさんの雷も含んでますよね?』

『当然。二人にはかなり迷惑かけちゃうから、それを知ったらプレシアさんが黙ってるとは思えないからね』

理不尽で落とされるのは遠慮したいけどアリシアの為なら甘んじて受ける。

……姉妹の感動的な出会いは涙より、笑顔が多い方が良いよね。

俺は怒られても嫌われても構わないからアリシアとフェイト、二人の出会いは笑いで飾りたい。もしかしたら驚愕で染まりそうだけだね!

隣のアリシアを見ると、

『うーん、後ろから驚かす、……は普通でつまんないなー。この前テレビで見たみたいに煙モクモクの中から登場も……』

むむうく……、と顎に手を当てて考えていた。

『アリシア』

『なに?』

『フェイトになんて声をかけるか考えときなよ』

『——そうだね! 最初の一言ってやっぱ大事だよね!』

なんて声かけようかなー、と再びアリシアが考え出した。

……あとは皆が戻って来るのを待つだけ、……お?

『戻ってきましたね、皆さん』

フェイトがアルフとリニス、なのはがユーノとクロノを連れて戻って来た。

そして正座をする俺をクロノが見るなり、

「……また器用な事をしてるな、君は」

呆れ顔で言われた。

「戻って来るなり第一声がそれって酷くない、クロノ?」

もつと他に「お疲れさま」とか「無事でよかった」とか労いの一言でもあつて良いと思うな。

「頑張つて真面目に封印したのに秋介さんは悲しい……!」
特に気にしてないけどね!

『マスター、そんな事言つてないで本題に入りましょうよ』
それもそうね。

正座を崩してその場に立ち上がり、

「リニスさん集合う——!」

右手を上げて呼ぶ。

「……? 何でしょうか……」

呼ばれたリニスが小首を傾げてやって来た。

「うん。ちよつと相談があつてさ。他の皆はしばしご歓談を」

リニスと一緒に少し離れた所に移動する。

『あ、待つて私も、……!——!……あ、足が痺れたく……!』

コテツ、と立ち上がるとうとしたアリシアが転んだ。

……俺より器用なのが居たよ、クロノ。

幽霊なのに足が痺れるなんて意味が分からんね。てか、大人しくそこで考えてれば良いのに。

『ううう……』

『——ストップだ、アリシア。唸りながら這いずつて来るのはちよつと怖い!』

『だつて足が……』

『歩く事よりも飛ぶ事を意識したらどうです?』

『あ、そっか』

アリシアが浮き上がり、フワフワと飛んできた。

『いやー、何で気付かなかったんだろ』

俺の横を通つて背中に引つ付こうとした瞬間、

『えいっ』

とリニスや皆に見えないようアリシアの足を軽く突いたら、

『……ううおおおお……』

足が……! と悶えた。

……阻止成功。

「——ふっ」

「どうしたんですか、急に？」

おっと危ない。もう少して声に出して笑う所だった。こんな所で急に笑ったら何事かと思われる。

「いや、……プ。何でも、ない……！」

『堪えられてないですって、マスター』

『よくもやってくれたね、秋介、……う☒おあ☒ああ風が足を……！』

「プフはっ……！」

お願い、アリシア。そんな声出さないで。笑いが込み上げて来る……！

「本当に大丈夫ですか……」

「だ、大丈夫。何でもない。ちよつと風のお陰で面白いのが聞けただけだから」

ダメだ。アリシアにこれ以上反応してたら誤魔化し難くなる。

……気を取り直して本題に入ろう。

「早速だけど相談があります」

こつちを見る皆に背を向けてその場にしゃがみ込む。

『なんでしゃがむの？』

『雰囲気作りは大切だと思っんだ』

だからアリシアに言っても意味ないけど、内緒話だから小声でお願いします。

『じゃあ私も〜』

とアリシアが向かいにしゃがんだ。

「それで、相談とは何ですか？」

続いてリニスが俺の隣でしゃがんだ。

……綺麗に三角形。

やっぱ内緒話はコソコソ話す感が出た方が良いよね！

「まあ、相談と言ってもお願いなんだけどね。アリシアの復活の事はフェイトたちに内緒にしておきたいのよ」

「構いませんが、……それは一体なぜ？」

『面白そうだから』

『……………』

しまった。リニスの視線が思った以上に刺さる。ああ、頭抱えないで、ため息つかないで！

「…………ごめん、今の無しでお願いします」

『マスター…………』

え、俺だけなの？ アリシアも同じ事言ったじゃん。

『フッフッフ、——リニスは私の事見えてないからね！ しかも声も聞こえてない！』

さっきの仕返しだよ！ とアリシアがドヤ顔で親指を立てたので、…………——よし。復活させたら頭に手刀を落としてやろう。

そう、心に決意した。

あのドヤ顔、今すぐにでもほっぺ引つ張ってムニムニしたいけど今は我慢だ。

「理由としてはまあ、アリシアとフェイトが笑って出会えるようになっ…」

『あれ、結構ちゃんとした理由あったんだね』

『当り前よ。俺が冗談だけで言うと思った？』

『うん』

『思いますね』

『……………』

セラフにまでそう思われてたなんて…………。秋介さんちよつとシヨック。

「笑って、ですか…………。——フフ、分かりました。では、ジュエルシードはどうします?…」

「ああ、その辺は一応考えがあるから大丈夫」

フェイトやアルフ、プレシアさんに怒られるかもな方法だけどね！

「さて戻りますか…………」

立ち上がり、リニスとアリシアを連れて皆の所に戻る。

「ただいまー」

「お帰り、秋介。リニスと何を話してたの?…」

「俺が雷に撃たれる前準備」

「……？」

「どういう事？」とフェイトが首を傾げた。

「明日になったら分かるから。それよりも、……クロノが大人しく待ってたのは意外だった」

俺とリニスと離れた隙にジュエルシード持って帰るかと……。

「……下手に動かない方が良いと判断しただけだ。それよりも君たちに聞きたい事がある」

クロノがフェイトとアルフを見た。

「君たちがジュエルシードを集めているのはプレシア・テストロツサの為だと聞いた。一体彼女はジュエルシードを集めて何をする気だ？」

「アンタらにそれを教える義理は無い」

「そちらに教える義理は無くともこちらには聞く義務がある。ジュエルシードは危険なモノだ。悪用されては困るからな」

「……………」

フェイトが俺とリニスを見て、

「秋介くんはフェイトちゃんがジュエルシードを集めてる理由、……知ってるんだね」

その様子を見たなのはが話しかけて来た。

「聞いても多分、教えてくれないんだよね」

「まあ、色々とあるからね。ごめん」

「ううん、謝らなくて良いよ。それに秋介くんから聞いたらダメな気がする、……この事はちゃんと、フェイトちゃんから聞かないとダメな気がするんだ！」

だから、となのはは続けフェイトを見た。

「私と全部のジュエルシードを賭けて、本気の勝負をして欲しいんだ」

「——ッ」

なのはの言葉を聞いてフェイトは驚いてるけど……。

「マジ、——ですか？」

多分、俺の方がもっと驚いてる。だって今、声が裏返ったもん。

……うわああ。なのはがそんな事言い出すなんて不意打ち過ぎる。

この前のフェイトの衝撃発言に加えて今のなのはの衝撃、——はっ！
なのはなら衝撃じゃなくて砲撃、つまり砲撃発言……！！

どうしよう、自分で何言ってるのか分かんなくなってきた！

『内心メチャクチャ焦ってますね、マスター』

『ええ。「マジ」の部分の声が裏返ったので間違いありませんね。しかも口調がおかしくなっていましたし』

『今の声、何か面白かったね！』

『——アリスアは手刀一発追加だな』

『何で!? どうして私で冷静に戻るの!?』

いやあ、プレシアさんが来た時もそうだったけどアリスアには助けられたね、ありがとう！

『微妙に嬉しくない……。』
「というか、追加ってどゆこと!? 最初の一発は何処で決定してたの!?!』

『ヒントはドヤ顔』

『ついさっき?!』

うう……。と項垂れたアリスアは放っておいて……。

「いきなりだな、なのは。秋介さん思わず声が裏返っちゃったよ」

「にやはは、……。ごめんね」

なのははジュエルシードへと視線を移し、

「ユーノくんとクロノくんもごめんね? また勝手な事しちゃうけど、……。フェイトちゃんとお友達になりたいから、ちゃんとお話したいからまずはジュエルシードの事を如何にかしないかって思ったの」

「なのは……」

「なのは……」

「……はあ」

そのあとユーノとクロノを見てから、再びフェイトを見た。

「フェイトちゃんには譲れない思いがあるんだよね? だったらわたしはその思いを聞きたい。聞いて、フェイトちゃんと一緒にジュエルシードを使わない方法を考えたいんだ!」

「ガキんちよ、アンタ……」

「勿論、アルフさんもリスさんも、秋介くんも一緒にだよ!」

「なのはさん……」

「俺もかあ……」

うーん、コレは複雑な気分。

……サプライズ止めようかなー

でもフェイトとアルフの驚いた顔見たいしなー。アリシアもノリノリだったし……。

『……って、なに？ 何でまだ項垂れてるのよ』

もしかして手刀がそんなにシヨックだった？ それなら落とすのは止めて――。

『うう、私の名前呼ばれなかった……』

――あげようかと思っただけど、気にせず落とそう。

なに当り前の事を言ってるんですかね、この幽霊少女は。

『サプライズで茶髪ちゃんは驚かすの止めておこうと思ったのに……』

こうなったらまとめて驚かせてやる――！ とアリシアが力強く立ち上がった。

……うん、まあ。アリシアは俺の複雑な気分とかお構い無しに進むよね。

『うれしそうですね、マスター』

『あれ、顔に出てた？』

『出てませんよ』

ちくせう。久しぶりに引っかかった。

『あの、……秋介？』

『どした、リニス』

『いえその、……なのはさんはああ言ってますがよろしいのですか、ジユエルシードの事は？』

『そう言えば考えがあるって言ってたね』

ああ、その事。

『別に良いよ？ なのはの言った事は俺が言おうと思ってた事と同じだから』

俺としてはどっちが勝っても問題ないからね。なのはが勝てばそ

のまま管理局が管理するだろうし、フェイトが勝ってもその時には既に俺がアリシアを復活させてるから使わず返せる。

……改めて考えてもフェイトを囚にするって事だからなあ。

プレシアさんはメチャクチャ怒るよねー。多分アルフも。フェイトからは嫌われるだろうなー。

……自分で言つて悲しくなってるから考えるの止めよう……。その時考えれば良いよね！

土下座で許してくれるだろうか……。と思いはとフェイトを見ると、

「……わかった。その勝負受けるよ。私が勝ったらジュエルシードは全部貰う」

「それで良いよ。わたしが勝ったらお話、聞かせてね」

すぐにでも戦えるようにデバイスを構えていた。

「え、今やるの?」

それは困る。俺とアリシアのサプライズ計画的に。

「……ダメ?」

いや、揃って首傾げられても可愛いとしか思えない。

『……ダメ?』

『はいはい、カワイイカワイイ』

『せめて見てよ……!』

えー、だって見たらちゃんと可愛いって言わないとじゃん。

……次に言うならやっぱ復活してからのが良いよねー。

とまあそれはそれとして……。

「本気の勝負をするなら明日にしたら? その方が二人共、万全な状態で臨めるでしょ?」

それに、

「これ以上この辺りの魚に迷惑かけたらダメだった」

海水弾として撃ち込まれたりして大変だったんだから。

「そこは重要視する所じゃないんじゃないかな。二人の砲撃戦を始めても潜ってやり過ぎすだろうし……」

「冗談だから。そこまで真面目にコメントしなくて良いからね、ユー

ノ？」

でも、だから俺が〈約束された勝利の剣〉をぶっぱなしでも巻き込まれなかったんだね！

『跡形もなく蒸発してるかもしれないね』

『え……？』

ウソでしょ？

『ええ、ウソですよ』

『……………』

本日二度目のちくせう……。

って、念話で話してる場合じゃなかった。

「まあ魚云々は無視して、……本気で戦うなら万全な状態が良いと思う」

「そうですね……。私もその方が良いと思います。今の二人はほとんどの魔力を使っていますから」

お、リニスの援護が来た。

「全てのジュエルシードを賭けるのならなおさらです。万全な状態で臨んだ方が、どのような結果になったとしてもお互いに納得できるでしょう」

「秋介やリニスの言う通りだよ、フェイト。プレシアの為にも今日は一旦帰ろう？」

「うん、そうだね。……明日は負けないよ」

フェイトがバルディッシュを下げ、

「なら続きは明日だね。わたしだって負けるつもりはないよ、フェイトちゃん」

なのはもレイジングハートを下げた。

「じゃあ残りのジュエルシードは僕が——」

「——セラフ、回収」

『お任せを』

クロノより先にジュエルシードを回収する。

「……なんのつもりだ？」

「だってクロノに渡したら、フェイトが勝ったとしても渡してくれな

いでしょ?」

「それは君にも言える事じゃないのか?」

む、否定しないのね。まあそうだとは思ったけど。

「そんな意味の無い事しないって。ちゃんと勝った方に渡すよ」
俺としてはどっちが勝っても問題ないからね。

「それで、次に戦う場所だけど」

『——でしたらそれは、我々の方でご用意しましょうか?』

言いかけた俺の言葉を遮って大型の空間モニターが現れた。

……あら以外。見てるだけかと思つたのに。

モニターを見ると緑髪の女の人——リンディさんが映っていた。

「変な仕掛けとかが無いならお任せで」

『無論、そのような事はしません。では我々が用意すると言う事でよろしいですね?』

「あいあい、よろしく。で、時間とかはフェイトとなのはが相談して決めるって事で良い?」

二人を見ると、

「うん」

「フェイトちゃんは何時くらいが良い?」

「いつでも良い」

「そつか。だったら……」

と何処かに遊びに行くような感じで時間の相談を始めた。

「よし。それじゃ俺は帰るけど、リニスはどうする?」

「私も一緒に帰ります。——ではアルフ、フェイトの事よろしくお願
いしますよ」

「任せな! 帰ったらしっかりと休ませるよ!」

「ええ。後ほど差し入れを持っていきますね」

「もう、アルフったら……」

「本当かい!? とアルフは目を輝かせ、それを見てフェイトは恥ずかしそうにしていた。

「じゃあユーノ、なのはの事ちゃんと休ませてよ? もし訓練でもし
ようとしたらバインド使って抑えといて」

「それは流石にやり過ぎじゃないかな……。まあでも、なのはが訓練をしようとしたら全力で止めるよ」

「任せた。それとなのは、ついでにクロノも。俺の話とかは二人の戦いが終わってからで」

「うん。また明日ね、秋介くん！」

「……良いだろう。君に聞きたい事は沢山あるからな」

お手柔らかに頼むよ。

「さて……」

『とりあえず今日は解散——!!』

『……………』

『何か言っつて!?!』

いやー、今まで静かだったからつい……。

それじゃあ気を取り直して、

「今日は解散——！ あ、転移よろしくね、セラフ」

『了解です!』

直後、視界が光に包まれた。

く何てプレシアさんに説明しよう……く

光が晴れると、

「——うおわっ!?!」

いきなり目の前に、液体に満たされたカプセルの中で眠るアリシアが居た。

『おー、私の体だー。何か久しぶりく』

「……あー、ビックリした」

「すいません。うちに戻ってすぐに秋介たちの元へ転移したので運んだままで……」

それは別に良いけど……。

……これ地下室に移動したい、……あ、意外とすんなり動いた。

軽く押したらスウ、と滑るように動いた。

「とりあえず隅っこに移動して、つと。……にしてもやっぱり裸だっ

たか……」

リニスに服も頼んで良かった。

『むう、私の裸で何も反応が無いのはちよつとショックだね……』

『リニスかアルフくらいスタイルになってから出直しなさい』

今の幼児体型見てもなー。

「秋介、私はプレシアの様子を見て来るので夕食の準備を頼んで良いですか?」

「オツケー。何かリクエストは?」

『シチュー!』

『明日なら作ってあげる』

『ホント!? いやッター!』

わー! とアリシアがうちの中を飛び回りだした。

……そんなに喜ぶのか……。

だったら明日は腕によりをかけて作ろうじゃないか……!

「でしたらうどんはどうでしょう。疲れたフェイトや寝起きのプレシアでも簡単に食べられると思いますから」

「良いね、うどん。この前打ったのが残ってるからそれ使おう」

暖かいのと冷たいの両方作るか。トッピングに使えるやつは何があつたつけ?

「では頼みます」

そう言つてリニスは二階に上つて行つた。

『私は?』

いつの間にかアリシアが戻つて来た。

アリシアはそうだな……。

「なら鍋を棚から――」

「えええええ!」

二階からいきなりリニスの驚く声が聞こえた。

「出さなくて良いからちよつと上の様子見て来て?」

『……うん。ちよつと見て来る』

スツ、とアリシアが天井を通り抜けて行つた。

直後、

『えええええ!?!』

リニスと同じようにアリシアの驚いた声が聞こえた。

「プレシアさんに何かあったのかな?」

『アレじゃないですかね』

アレ? アレって一体……。

『マスターがリニスさんに渡した小瓶ですよ』

「……ああ、アレか!」

透明のヤツね。忘れてた。

「という事はつまり……」

うどんなの準備を中断して二階へと上ると、リニスの部屋の扉が開いていた。

中からは、

「だ、大丈夫、リニス?! 急に大声なんて上げて、私の顔に何かついてるかしら……?」

「い、いえ! その、……顔と言うか体全体がその!」

『ま、ママが、ママが……!?!』

プレシアさんの心配する声と、リニスとアリシアの戸惑う声が聞こえた。

……起きてたのか、それともリニスの声で起きちゃったのか……。

まあそんな事はどっちでも良いや。

開いた扉の前まで移動し中を覗くと、プレシアさんがベットに座り、その前でリニスとアリシアがへたり込んでいた。

「ぼ、坊や!?! 私、何処か変かしら!?!」

「秋介、ちようど良い所に! プレシアが……!」

『秋介、ママが……!』

そんな大声出さなくても聞こえてるから。

「うん。——かなり若返ってるよね」

「ですよね、私の見間違いではないですよね!?!」

『だよね!?! 私が生きてた時くらいの見え目になってるよ!?!』

そうなの? って事は結構戻ったのか。

「若返ってるって、……どういう事?」

「セラフさん、鏡！」

『マスターが持つてるじゃないですか』

あ、そっか。

手元に魔力を集めると〈水天日光天照八野鎮石^{すいてんにっこうあまてらすやのしずいし}〉が現れた。

「はい、どうぞ」

〈水天日光天照八野鎮石〉をプレシアさんの前に持って行き見せると、

「——え？」

そこに映った自分の姿を見て絶句した。

「一体、何が……」

プレシアさんが信じられない、といった感じで自分の顔を触りだした。

「体はどう？ まだ辛かったりする？」

「体？ ……いいえ。何処も辛くはないわね。むしろ好調というか……」

「セラフから見てどう？」

『大丈夫です。病のやの字もありません』

それは良かった。

「あの、コレはどういう事でしょうか……」

『そうだよ、何でママが若くなってるの？』

「アレが原因よ」

『『アレ？』』

プレシアさんの座るベットの枕元、空になった小瓶を指さす。

「コレは……」

『なに？』

「確か時返しの薬だったかな？」

似たようなのが他にもあるから紛らわしいんだよね。

「時返し、ですか……？」

「そ、プレシアさんの体が病気になる前まで戻ったんだよ」

……まあ何処まで戻るか分かんなかったけどねー。

『プレシアさん、リニスさんから何か夢を見ているようだ、と聞きました』

たが……』

「……ええ、確かに夢は見えていたわね。アリシアとピクニックに行った時の夢を……」

『ではその夢が大きく影響して今の姿に戻ったんでしようね』

「そんな事……。いえ、自分がそうなってしまった以上、信じるしかないわね」

ふう、とプレシアさんは一息ついた。

「……坊やは本当に奇跡が起こせるのね」

「ふふん、明日はもつとすごい奇跡を起こすからね！」

だからとりあえず、

「ほらリニス、いつまでも座ってないでプレシアさんの体とか拭いて上げて。あとついでにフェイトたちの事も説明してといてね」

「え、あ、はい……」

よし。これで俺がすぐに雷に撃たれることは無くなった。

「セラフはお風呂入れてきて」

『任せを』

『アリシアはうどん作るのを手伝ってよ?』

『あ、うん……』

さあて、さっさと終わらせてゆっくりとしようかな！

……そうだ。寝る前にアレもちよつと練習して置こうかな。明日の為に。

第十七話：残り時間〇〇！ の時間は中々経たないよね！

「ついにやって参りました！ いつもより起きる時間が早くてテンションが高い秋介さんと！」

『そのマスターの愛機で次元世界一のデバイス、ムーンセル・オートマトンこと私セラフがお送りする！』

聖剣をぶっぱなした次の日の早朝、五時三十分。うちの地下室でアリシアの眠るカプセルの前に立ち、

『——アリシア・テストロツサ復活のお時間です！』

イエーイ、とフワフワ浮くセラフとハイタッチしてバリアジャケット姿に変身する。

『イエーイ！ ついにお姉ちゃんの復活だよー！』

待っててね、フェイト！ と俺の横にテンション高めなアリシア、
「朝早くから元気ね、坊やは」

「すいません、プレシア。こんな時間に起こしてしまって……」

少し離れた所で腰に手を当てて俺を見るプレシアさんと、アリシアの服を抱えるリニスが居る。

「良いのよ、別に。私としてはアリシアと早く会えるのだから」

「それはそうですが、……もし体が辛くなったらすぐに言ってくださいいよ？ いくら若返って病が消えたとは言え、元は病人だったんですからね！」

「へ、平気よ！ さつき改めてセラフに見てもらって分かったけど私、昔のアリシアが生きてた頃くらいに若返ったんだから！」

「それでもです！」

「うっ……」

分かったわよ……、とりニスの一喝にプレシアさんがシユンとした。

二人のそんな会話を聞いて思う。

……まったく、なのはとフェイトのお陰でこんな時間に起きる事に

なっちやったじやないの。

昨日の夜九時くらいだったかな？ 今日の準備を終わらせてお風呂に入ろうとしたら、なのはから電話が、フェイトから通信が来た。内容は二人が戦う場所と時間が決まったという話だった。

場所は海鳴臨海公園の沖。そこに結界を張って戦闘訓練用の建物を置いて疑似的な戦場を作るらしい。

……でも普通、朝の六時に勝負開始とか設定しないよね……。

ラジオ体操じゃないんだからもっとゆっくりで良いのに。十時くらいとかさ。

それならお昼には終わるだろうから、皆でお昼でも食べながら色々お話しようぜ！ 的な感じの流れに出来たのに……。

とまあそんな事は横に置いて、

「じゃあ早速、なのはとフェイトの戦いが始まる前に、アリシアの復活を終わらせちゃおうかな！」

『おー！』

まずはアリシアの体をカプセルから出そう。

そう思ってたカプセルに振り向こうとしたら、

「——ちよ、ちよっと待ちなさい、坊や！」

プレシアさんに止められた。

「どしたの、プレシアさん？」

「まだフェイトとアルフが来てないじゃない。それなのに坊やは始める気なの!？」

「そうですね、秋介！ あの子たちも揃わないと意味が無いじゃないですか！」

「いやいやいや。むしろあの二人が知らない事に意味がるんだって。お姉ちゃんのサプライズ計画的に」

言い出しっぺは俺だけどね！

「お姉ちゃんって、一体誰の事ですか……」

「まさか坊や、女の子だったの!？」

『ええっ!? マスターは女の子だったんですか!？』

「待って、何でそうなるの!？」

「というかセラフさんまで何言ってるの!？」

『エエツ!? シュウスケットテオンナノコダツタノ!』

「やかましい」

『あうっ!』

「凄いやつだ。乗るならもつと上手に言いなさいよ。」

「うう、セラフみたいになんか言えなかった……。あ、でも今で手刀

落とされたから残り一発だね!」

「次は避けるぞー! とアリシアが明後日の方向に向かって叫んだ。

「……なんだ、覚えてたのか。」

「忘れてたら良かったのに。仕方ない、アリシアの期待に答えてもう一発落として……。」

『マスター。手刀を構えるより先に、プレシアさんとリニスさんに事情を説明しましょうよ』

「え……?」

「セラフに言われ二人を見ると、

『秋介……?』

「坊や、……寝ぼけてるのかしら?」

「不思議そうな顔で俺を見ていた。」

「……むう、最後の最後でしくじったか。」

「せつかく今日まで黙ってたのに……。」

「くっ、秋介さん一日の不覚……!」

『短いですね』

「そりゃね、一生なんて大きく言えないって。人生、何処で何があるか分からんからね。」

『……ふふ』

『何よ』

『いえ。マスターが言うのと説得力があるな、と思ひまして』

『……』

「まあそんな事より、

「プレシアさんにリニス、二人にちよつとサプライズがあります!」

「サプライズ、ですか……」

「一体何かしら？」

「すぐに分かるから。……セラフさん、アレよろしく！」

『ええ、勿論です！』

そう言つてセラフが二人の足元に魔法陣を展開した。

『ねえ、秋介。アレってなに？』

「見えないモノを見えるようにする魔法」

前にアリシアを初めて見た日、セラフが言つてたからね。『私の魔法でも見えるように出来ますけど』つて。

……復活させてから実は幽霊として今まで傍に居たんです！ つて驚かすつもりだったのになー。

まあ別に良いんだけどね。遅かれ早かれ二人を驚かす事には違くないから。

「そういう事だから、今から二人になんて声をかけるか考えときなよ。……あ、ごめん。そんな時間無いっぽい」

ほら、プレシアさん見てみ？ とアリシアを促す。

『……？』

アリシアがプレシアさんを見た瞬間、

「アリシアあ——！」

とプレシアさんがもの凄い勢いで飛んで来た。

がしかし、セラフの魔法は単に“見えるようにする”だけだから、『あっ』

そのままの勢いでアリシアの体を通り抜け、

「あうう!？」

ゴン、と鈍い音を立てて後ろの、アリシアの体が入ったカプセルに激突した。

……うん。幽霊だから仕方ないよね！

でも今の痛そう……。顔から突っ込んだけど大丈夫かな？

『ママ、大丈夫……？』

「大丈夫ですか、プレシア……？」

心配したりニスが駆け寄った。

「だ、大丈夫よ……。一瞬意識が飛んだけど、特に問題ないわ」
フラフラとぶつけて赤くなっておでこをさすりながらプレシアさんが起き上がった。

『えっと、……もしかしてママ、私の事見えてる?』

「アリシア……。ええ、見えてるし、声も聞こえるわ。残念ながら触る事は出来ないけど」

久しぶりね、とプレシアさんが涙ぐんだ。

「これは一体どういう事ですか、秋介?」

「ん? どうって、セラフに頼んでアリシアの幽霊を見えるようにして貰っただけだよ?」

「幽霊……」

リニスがそう呟いて母娘を見た。

『あのね、ママ。フェイトとアルフに黙って始めようとしたのはね、私
が二人にサプライズしたかったからなんだよ?』

「あら、そうだったの……。それなら坊やは責められないわね」

『それでね? ママにちよつと協力して欲しいんだけど……。』

「何かしら……。?」

アリシアとプレシアさんが、何やら相談をしていた。

「秋介は、……。いつから知っていたのですか?」

「フェイトをうちに連れて来た次の日」

しかも朝起きたら俺の上で寝てたのよ? 寝言言いながら。

「……なるほど。お姉ちゃんと言ったのも納得がいきます。だから
フェイトたちとお弁当を作った日、言い直したんですね」

「言い直した?」

はて、俺ってなにを言い直したっけ?

「鍋を見て、フェイトとアルフが驚いた時ですよ。お化けじゃなく幽
霊だ、と」

「……ああー」

フェイトが真っ青になった時か。

……うーん、もう一回見たくなってきた。

セラフが確か写真とか映像を撮ってたはずだから、夜にでもみんな

で一緒に見返すのも良いかも……。

「つて、そんな事考えてる暇ないよね。セラフ、今何時？」

『五時四十五分ですね』

もうそんな時間なのか。なら急いだ方が良いね。

「さてさてアリシアにプレシアさん、感動の再会の所悪いけどそろそろ良いかな。続きはフェイトたちの戦いが終わったあとって事で」

遅れたりしてクロノにとやかく言われたくないからね。

「……ええ、ごめんなさい。アリシア、その話はまたあとでしましよ
う」

プレシアさんがリニスと一緒に少し離れた場所に移動した。

『うん、……よし。——秋介、私はいつでも良いよ！』

ペチンツ、とアリシアは両手で軽く自分のほっぺを叩いて気合を入れた。

「あいよ。じゃあ早速、アリシアの体をカプセルから出そうかな……」
でもこれ、どうやって開けるんだろう。……分らんね。仕方ない……。

「……プレシアさん。このカプセル壊して良い？」

「構わないけど、——アリシアの体を傷つけたら許さないわよ？」

バチバチツ、と紫の雷を鳴らしたプレシアさんに睨まれた。

「……………はい」

力加減には細心の注意を払おう、とそう思った。

……ついでだし、アレで壊そう。

カプセルから少し離れ、右手に魔力を集める。

『それって昨日の鏡だね。どうするの？』

「こうするのさ、——そりゃっ！」

『投げた!？』

現れた鏡を掴み、フリスビーよろしく思いっきりカプセルに向かって飛ばす。

真っ直ぐにと飛ぶ鏡が激突し、カプセルの表面に亀裂が走ったと思った瞬間、砕けた。

「——よっしー! やったね！」

『お見事です、マスター。綺麗に中心に当てましたね、カプセルの上半分が良い感じで砕けました!』

『……あの鏡ってあんな使い方して良いの?』

「気にしない、気にしない。戦いで相手を殴ったりするよりはマシだっただけ」

『え、……殴るの? あの鏡で?』

「殴ります。あの鏡で」

その気になれば魔法だって防げちゃう凄い鏡です。

「あの鏡って確か……」

「ええ、昨日私が若返ったのを確認する時に使った鏡ね……」

「……………」

うん。二人の視線が刺さるから急いでアリシアの体を移動させよう。

砕けたカプセルに近づき、中からアリシアの体を抱え上げる。

……軽いな。

ま、当然か。長い間カプセルの中に居たからね。復活してもすぐには歩けないかも……。

「とりあえず此処に寝かせて、……っ」と

砕けたカプセルの前、破片が転がってない所にアリシアの体を降ろす。

「それじゃ始めるから、アリシアは体の傍に立って」

『ん、分かった!』

アリシアが自分の体の横に立つのを確認して、右手をかざす。

砕けたカプセルの中で液体にプカプカ浮いていた鏡が浮き上がり、俺の周りを回転しながら、円を描いて回りだした。

……さーて、ちよつとカツコつけてやろうかな!

思い鏡に魔力を込める。

すると地下室の様子は一変し、紫の薄い靄の中、幾つもの鳥居が揺らめいていた。

次に魔力で三枚のお札を生み出し、右手の人差し指と中指で挟むようにして持つ。

「——ここは我が国、神の国、水は潤い、実り豊かな中津国」
挟んだお札を前にばら撒くようにして離す。

離されたお札は床に落ちず、

「——国がうつほに水注ぎ、高間巡り、黄泉巡り」

詠唱に合わせて数を増やしていく。

増えたお札が俺を中心に回りだす。

「——巡り巡りて水天日光」

それと同時に鏡が頭上高くへと移動し、周りを回るお札から鏡へと光が伸びた。

「——我が照らす。豊葦原瑞穂国」

光が集まる鏡めがけて軽く飛び、両手で持って俺が立っていた所へと落とす。

鏡が落ちた所をめがけ、床に光が集まるような模様が浮かび上がった。

「——八尋の輪に輪をかけて、これぞ九重、天照らす……！」

ゆつくりと模様を中心へ着地し、

「——水天日光すいてんにっこうあまてらすやのしずいし天照八野鎮石——ッ！」

真名を告げると同時に俺を中心に光が高く渦巻き、辺り一面を光で包んだ。

光が晴れアリシアの方を見ると、——寝かされたアリシアの体だけがあった。

「アリシアが、居な、い……？」

そして、プレシアさんのそんな言葉が響いた。

……やっべ、もしかして失敗した？

あれか？ ぶっつけ本番でやったのがダメだ、……ん？ 何か今、

指が動いたような……。

眠るアリシアの体に近づき、

「そいや！」

「なんで!？」

頭に手刀を落とした瞬間、アリシアが飛び起きた。

……やるね、アリシア。

さつき叫んでた通り避けられたじゃない。

「復活してすぐにそれって酷いよ、秋介！」

「復活してすぐに起きない方が酷いと思うね、アリシア」

だってプレシアさん、一瞬だったけど俺が失敗したと思って顔が青ざめてましたよ？

「う、それはそうだけど、……ってあれ？ 何か体が重くなってきた……」

何で……、とアリシアがその場にヘナヘナと座り込んだ。

「そりや当り前だって。その体はずっとカプセルの中で液体に浸かってたんだから」

しかも一回死んでるからね、当然です。

「うう……。眠くもなってきたー。これからフェイトとアルフを驚かしに行くのに……」

「そんなアリシアにコレを差し上げよう。秋介さんとセラフの特製回復薬だ……！」

そう言つてズボンのポケットから一つの小瓶を取り出し、アリシアに渡す。

「あ、ママが飲んだやつと同じだ」

「色と入れ物はね。コレを飲んで少しすればちゃんと歩けるようになる」

「ホント!？」

これでフェイトとアルフを驚かせる……！ とアリシアは一気に回復薬を飲んだ。

「——ぷはあ、まさかのリングゴ味！」

「そこが一番苦労しました……!」

飲みやすい方が良いだろうと思つて頑張りました。寝るのが日付変わつてからになつたけどね！

「……ありがとう、秋介。——あつ」

「どうした、アリシ、——あうぶ!？」

いきなり何かに突き飛ばされ、

「ガツ!？」

砕けたカプセルに頭から激突した。

「痛い……」

……コレ、意外と硬い……。

プレシアさんがさつき、一瞬意識が飛んだって言ってたけどそれも分かる気がする。

「だ、大丈夫ですか、秋介……!」

「何とか……」

駆け寄って来たりリニスの手を借りて体を起こす。

さつきまで俺が立っていた所を見ると、

「アリシア、アリシア! 本当に、本当に良かった……!」

「うう、ママ苦しい……」

プレシアさんがアリシアを抱きしめていた。

「——はっ、リニス! 急いでアリシアの服を持って来て! このままだと風邪を引いてしまうわ……!」

「落ち着いてください、プレシア! そう言うのでしたらまずアリシアを離してください!」

さつきから苦しんでいます! とリニスが二人の所へと駆けて行っ

た。

そんな光景を見て軽く伸びをする。

「んー、……ふう。とりあえず、こっちはこんな感じで良いかな」

あとはフェイトとアルフ、……ああ、しまった。

「今何時だ……」

『五時五十七分です。なのはさんとフェイトさん、お二人の戦いが始

まるまで残り三分ですね』

ポフツ、とセラフが頭に乗った。

「あらヤダ、かなりギリギリじゃないですか……」

〈水天日光天照八野鎮石〉を解除して立ち上がり、バリアジャケット

に付いたカプセルの破片を払う。

……別に壊さなくてもプレシアさんに頼めばよかった。
そうすればこんなに破片が散らばったり、中の液体で床が濡れな
かったのに……。

カプセルの片づけとかは帰ってからにしよう、と決めてアリシアたち
ちに近づき声をかける。

「おーい、悪いけど服着るの急いでくれる？ もう六時になるからさ」
「分かったら、あとズボン履くだけだからちよつと待って、……ん
しよ、つと」

幽霊の時と同じく髪をツインテールに結び、青いワンピースを着た
アリシアが立って灰色のズボンを履いた。

「よし。お姉ちゃんの準備完了だよ！」

「はいはい。それでプレシアさん、ちよつと辛いかもだけどアリシア
を抱っこしてくれる？」

「ええ、それくらいならお安い御用だけど、……何故かしら？」

「このマントを着て姿を隠してもらおうかと」

ノーフェイス・メイキング
〈顔の無い王〉を見せる。

「それは確か、周りから見えなくなる宝具ですよね」

「そうよー」

これからフェイトたちの戦いを見に行くけど、リニスとはともかく、
プレシアさんとアリシアをそのまま連れてく訳にはいかないからね。

「なるほど。——さあいらっしやい、アリシア！」

「ママ——ッ！」

「分かりましたから、遊んでないで早くしてください」

「はい……」

プレシアさんがアリシアを抱っこし、リニスが〈顔の無い王〉を二
人に被せた。

「おお、消えた」

そして、

「——首だけアリシアちゃん！」

「セラフさん、転移よろしく」

「無視された!？」

ニユツ、と現れたアリシアの顔を無視して、

「ちよつと坊や、その対応は酷いわよ!？」

「プレシアまで顔だけ出さないでくださいー！」

「あう……」

さらにフードを取って現れたプレシアさんの顔にリニスが再びフードを被せた。

「まったく……。ではセラフ、転移の方をお願いします」

『はいはい、お任せを』

リニスの言葉にセラフが答えると同時に魔法陣が展開し、視界が光に包まれた。

く転移中……く

「秋介さん、登・場！」

転移の光が晴れると同時にビシツ、とどこぞの仮面ヒーロー一号の変身ポーズをとる。

「……………」

あ、ユーノとアルフの視線が痛い……。

「……おはよ、お二人さん。待った？」

『無かった事にしましたね、マスター』

「ええ、無かったことにしましたね」

うるせえやい。

『——そうだ！ あとであのポーズ一緒にやろうよ、ママ！』

『ええっ!? 本気なの、アリシア!?』

流石に恥ずかしいわ……。プレシアさんの眩きが聞こえた。

「……………」

アルフが俺の後ろを見た。

「どうした、アルフ？」

「んー、気のせいかな？ 何か今、プレシアの声が聞こえた気がするんだよ」

それに匂いも……。とアルフが首を傾げた。

『——!?』

後ろで二人が慌てて口を塞いだような気がする。

……しまった。アルフが狼だっけ忘れてた……。

野生の勘は恐ろしい、と実感してたら、

「それは私ですよ、アルフ。此処に来る前、プレシアに会って来ましたから。声の方は聞き間違いでしょう」

リニスが上手く誤魔化してくれた。

「……それもそうだね。様子はどうだった？ プレシア、フェイトの前だと無理して元気なフリするからさ。ちゃんと寝てたかい？」

「いえ、寝てはいなかったですね。部屋の掃除や洗濯をしていましたから叱っておきました」

『ちよ、ちよつと!? その事は言わないって言ったじゃない!』

え、リニスが言った事、ホントの事なの？

『ママ……。ちゃんと寝てないとダメだよ?』

『プレシアさん……。病人がやったら怒られる事を見事にやってたのか』

『し、仕方ないでしょう!? フェイトとアルフがいつ帰って来ても良いよう綺麗にしておきたかったのよ!』

やっぱり。この反応からしてホントの事だったか……。

「あー、プレシアならそうだよね……」

「ええ。ですから今頃、大人しくフェイトの事を心配して見てると思いますよ?」

フフ、なんて笑ってるリニスとアルフは横に置いておいて、

「なあユーノ、肝心のなのはとフェイトはどこよ?」

転移して来てから二人の姿が見えないんだけど。

「あの二人だったらもうやる気満々で位置についてるよ」

あそこに居るよ、とユーノが指さした先、海にそびえ立つビル群の中に向き合うのはとフェイトが見えた。

……よく見たら俺たちが居るのもビルの屋上だったのね。

気付かなかった。それに……。

「二人が居る所から離れてるけど、巻き込まれたりしない?」

「流れ弾が飛んで来たら僕が防ぐよ。並大抵のモノだったら防ぐ自身はある」

『お二人の全力が並大抵のモノだったら良いですね』

「……………」

セラフさん、何故にそげん事言うと？

「…………ユーノ。もし何かあったら全部クロノの所為にしよう」

『だったらそこじゃなくて、もつと離れた所から見れば良いだろう』
俺たちの頭上に大型の空間モニターが現れ、そこにはクロノが映っていた。

「何よ、自分だけ安全な所から高みの見物？ それとも遅刻かしら？」

『戦闘開始時刻ギリギリにやって来た君に言われたくない』

「それは仕方ないって。俺にも色々やる事があったんだから」

眠り姫を起こしたりとかね！ などと三人で話してたら、

『おはよう、秋介くん！』

『おはよう、秋介』

二つのモニターが現れた。

「おー、なのはにフェイト、おはよー」

朝から元気なー。秋介さんは徹夜からの眠り姫を起こす作業で既にお疲れですよ。

「二人共調子はどう？」

『バツチリ、だよー！』

『私も。…………あ、昨日リニスが持って来てくれたうどん、美味しかったよ』

『え？ それって秋介くんが作ったやつ？』

『うん』

『むー、フェイトちゃんだけずるい…………』

私も食べたかったな、となのはがシユンとした。

…………この二人、緊張感無いなー。

今から本気の勝負しようってのに、なんて仲が良い雰囲気何でしょうね。

「じゃあ全部終わったらうちにごはん食べに来れば良いよ」

眠り姫の要望通りシチューを昨日から仕込んでるからね。しかも多めに。だから数人増えても大丈夫よ。

「だから二人共、——全力で頑張りなよ？ 俺はどっちも応援してる

から」

『うん！　じゃあ始めようか、フェイトちゃん！』

『負けないよ、絶対に』

なのはとフェイト、二人の魔法少女が距離を取り、

『わたしはフェイトちゃんとお話がしたいから』

『Standby ready.』

なのははレイジングハートを構え、

『私は母さんの願いを叶えてあげたいから』

『Get set.』

フェイトはバルディッシュを構え、

『わたしとフェイトちゃんの——』

『私と貴方の——』

それぞれが魔法陣を展開し、

『——ジュエルシードを賭けた最初で最後の、本気の勝負!!』

声を上げた直後、二人が激突した。

第十八話：爆発を背景に登場するのは熱そう

「戦闘開始、か」

うどんがどうのと話してた時と打って変わり、真剣な表情で海にそびえ立つビル群の合間、そこを縫うようにしてなのはとフェイトが飛び回っている。

お互いの放つ魔力弾に自分の魔力弾をぶつけ相殺し、なのはが飛ぶ高度を上げ、フェイトがそれを追って行く。

二人が一番高いビルを越えた所まで昇った直後、桜と金、二色の光が横に広がるように瞬いた。

光が消えると共に大きな爆発が生じ、

「——ああっ！」

なのはが弾かれたように海に落下していく。

それをフェイトが追い打ちをかけ、体勢を立て直したばかりのなのはを背後のビルへ叩きつけた。

「なのはっ——！」

「おお、ビルを貫通した……」

心配するユーノと見る先、ビルの反対側に飛び出たなのはが一度海面をバウンドして再び態勢を立て直した。

そのまま海面スレスレを飛ぶなのはをフェイトが見つけ、後ろを取った。

『Photon lance.』

「ファイアツ！」

フェイトが魔力弾を展開し、なのはに向けて撃ち込んだ。

「……い！」

それをなのはが左右に揺れながら躲し、飛ぶ速度を上げ、上体を反らすようにして大きく旋回しフェイトの後ろを取る。

『Divine shooter.』

「シュートッ！」

なのはが魔力弾を展開し、一つだけを手元に残して他をフェイトに向け撃ち放った。

放たれた魔力弾の一部がフェイトの横を抜け、その先のビルを爆破し、それに気を取られたフェイトを残った魔力弾が回り込むようにして襲う。

『Scythe form.』

「……ッ！」

フェイトが向かって来る魔力弾をバルディッシュで切り払い、なのはに向い飛んだ。

「シュートッ！」

向かってくるフェイトに対してなのはが残っていた魔力弾を撃つ。

フェイトは体を捻ってそれを躲し、切りかかった。

しかしそれをなのはがシールドで防ぎ、フェイトの背後からさつき躲した魔力弾が襲った。

「ッ——！」

フェイトが右手を掲げ、

『Thunder Bullet.』

「ファイアッ！」

「きやつ!？」

なのはのシールドを砕くと同時に顔を横にずらし、背後からの魔力弾を躲す。

シールドを砕かれたなのはが、再び背後のビルを貫通し海へ落とされる。

海面で爆発が起こり大きな水飛沫を上げた。

「……はぁ」

フェイトが手近なビルの屋上、その手すりに止まってなのはが落ちた方を見る。

立ち上がる水飛沫の中、桜の色が光った。

「——ッ！」

それを見たフェイトが手すりを蹴って飛び、空中へと身を回す。

瞬間、それまでフェイトが立っていた場所を手すりごと桜色の砲撃が穿った。

「……………」

砲撃を躲したフェイトが見る先、

「——はあ、はあ」

穿たれたビルの向うにレイジングハートを構えたなのはが居た。

「うわあ。あの白いガキんちよってばほとんど無傷じゃないか……」

「なのはさんの防御力には驚かされますね」

アルフとリニス、二人の言葉を聞いてそんな事より大事な事があるだろう……。

『壁より先にビルを抜きましたね』

「穴に通す、じゃなくてまとめて撃ち抜くとか……」

しかも今の砲撃、見た感じだけどディバインバスターじゃなかったね……。

……普通の砲撃あの威力とは末恐ろしい……。

やっぱ将来的には次元の壁さえも抜きそうな気がする。

もし俺に飛んで来るような事があつたら全力で逃げよう。そう決めてなのはとフェイトに視線を戻す。

「っ——！」

なのはが前を飛ぶフェイトに向け魔力弾を展開していた。

二人はぶつかり合いながらビルの合間を縫い、なのはがフェイトへ魔力弾を放った。

フェイトはビルに沿いながら飛び、飛んで来る魔力弾を躲す。

屋上に差しかかった所でフェイトがビルに魔力弾を撃ち込み、それと同時にビルから離れた。

なのはは降って来る瓦礫を躲しながらフェイトを追い、空を行くフェイトへ再び魔力弾を放つ。

フェイトがそれをバルディッシュで薙いだ瞬間、

「な——ッ!?!」

切られた魔力弾が爆発した。

爆発から逃れるようにフェイトが飛び出し、

「せええええい——！」

「ッ!?!」

そこ所を狙ってなのはがレイジングハートを槍のように構えて突

撃した。

咄嗟にフェイトがバルディッシュで防ぐが、なのはは突撃の勢いのままフェイトを空高くへ押し上げる。

「……ッ」

フェイトがバルディッシュを押し込めようにして体を前に倒し、身を捻ってなのは背後へと抜け、

「ハッ！」

「……っ！」

バルディッシュを振りかぶって切りかかったが、なのはは空中を軽く蹴ってジャンプしそれを躲した。

そしてすぐさまバルディッシュを振り抜いたフェイトにレイジングハートを振り下ろす。

フェイトは振り抜いた方に体を回し、なのはの攻撃を躲して上を取る。

続けざまに今度はフェイトがなのはにバルディッシュを振り下ろす。

なのはがレイジングハートでそれを防ぎ、体を回してフェイトの上を取る。

二度三度と、何度も二人が互いの位置を入れ替えながら、デバイスをぶつけ合いながら螺旋を描くようにして空を昇って行く。

「——！」

雲が流れる高さを越えた辺りで二人が互いを弾くようにして距離を取った。

『すごいわね、あの白い子。フェイトのスピードにあそこまでついていくなんて』

『つい最近まで素人だったとは思えませんね……』

プレシアさんとリニス、二人の驚く声を聞いた。

『ねえ秋介、あれだけクルクル回って目とか回らないのかな？』

『アリシアよ、何故にこのタイミングでそれを聞く……』

それは俺だつて気になるよ？　もしかして目が回ったから二人は離れて休んでるんじゃない？　って思ったくらいだからね。

『多分アレじゃないかな。何処か一点を見つめると良い、って聞いた事あるから』

戦いの時は基本的に相手の動きに注意するから、自然と見つめてるんじゃないかな。

『おおー、なるほど』

『いざと言う時に実行できなかつたら意味ないですけどね』

『デスヨネー』

仕方ないって。昨日はほら、いきなりだったからね。しかも海の中だったから。

……上下左右がわからなかったね。

まあそんな事はこの際どうでも良くて、

「お、戻って来た……」

空を見ると、デバイスをぶつけ合う音を響かせながらのはとフェイトが降りて来た。

再び二人はお互いを弾くようにして離れ、魔力弾を展開し撃ち放った。

放たれた魔力弾はぶつかり、相殺し合って爆発する。

「っ、……はあ、はあ」

「ッ、……はあ、はあ」

なのはとフェイト、二人はデバイスを構えたまま向き合った。

「ん……？」

一瞬だけどフェイトがこっちを見た気がした。

「……ふう」

フェイトは一度大きく深呼吸して、

「——いくよ、バルディッシュ」

バルディッシュを横に払い、空を切った。

直後、フェイトの左右、横に大きく広がるようにして無数とも言える数の魔力弾を展開した。

同時になのはの周りに一瞬だけ魔法陣が展開し、消えた。

それを見たなのはがその場を離れようとしたが、

「……っ、——えっ!？」

両手を金色のブロックが拘束した。

「あれは設置型のバインド……?」

「ライトニングバインドですね。それにあの展開されたランサーは……」

「やっちまいな、フェイト!」

ユーノとリニス、アルフたちがフェイトを見る中チラツ、となのはを見ると……。

「……………」

なのはが両手で握るレイジングハートのコアの部分が、淡く光ったのが見た。

『決める気ね、フェイト』

プレシアさんの言葉を聞いてフェイトを見ると、バルデイツシュをなのはに向け掲げた。

「フアランクス……」

魔力弾が煌き、フェイトの周りを金の雷が走る。

「……打ち、砕けえ——ッ!」

フェイトがバルデイツシュを振り下ろした瞬間、展開された魔力弾がなのはへと撃ち込まれた。

「——ッ!」

撃ち込まれた魔力弾が直撃する寸前、なのはがシールドで防ぐ。

しかし、それでも構わずフェイトは一部を残して他全ての魔力弾を嵐のごとく撃ち込む。

撃ち込まれる魔力弾を防ぐなのはの背後、ビルが倒壊し大きな水飛沫を上げた。

それに合わせるようにしてフェイトが左手を頭上に掲げ、残した魔力弾を集める。

「スパーク——」

フェイトは集めた魔力弾を一本の雷槍に形を整え、

「——エンドッ!」

なのは目がけ投げ放った。

放たれた雷槍は一直線に飛び、直撃した。

瞬間、大きな爆発が生じ周りのビルごと海面を抉った。

「は——あ。……はあ、はあ」

フェイトが大きく肩で息をし、そして、

『フェイトの勝ちだあ——！』

アリシアが叫んだ。

『……………』

おおう、いきなり叫ぶのは止めて。頭がキーンってなる……。

『あれ、秋介ってば嬉しくないの？ やっぱり茶髪ちゃんを応援してた……？』

『いや違う違う。そんな事無いしまだ終わってないから』

『なのはさんを見れば分かりますよ』

『え？ ——うそう!?!』

セラフが促した先、俺は二人を見る。すると……。

「——ッ!?!」

フェイトが驚いてみる先、

『Can you move, Master?』

「——いけるよ、レイジングハート」

爆発の煙の中、バリアジャケットを所々ボロボロにしたなのはが佇んでいた。

『あの子、一体どんな防御力をしてるのよ……』

『まさか此処までとは……』

本当に驚かされますね、トリニスが呟いた。

「あのなのはの堅さ、魔法を教えたユーノ先生のご感想は？」

「驚きを隠せません、……って、先生は止めて」

じゃあ師匠？

「それも止めてくれないかな……」

『ならフェレット擬きなんてどうだ？』

「……クロノ、もしかして僕に喧嘩売ってる？」

『冗談だ、気にするな。それよりも二人の戦いを見守るのが先だろう』
彼女が動くぞ、とクロノに促されなのはを見る。

『Cannon mode.』

「……っ！」

なのはが形を変えたレイジングハート構えた。

それに反応してフェイトがバルディツシユを構えようとしたら、

「……ッ、——あっ!？」

右手と両足を桜色のリングが拘束した。

「バインド、……あのガキンちよいつの間に!？」

『皆さんがフェイトさんに注目していた時です。あの時彼女の周りを走っていた雷に紛れ込ませる形で、あのバインドを設置していましたね』

アルフの言葉にセラフが答えた。

……バインド返しとはよくやるね。

しかもフェイトが避けられないように足を拘束とか、砲撃当てる気満々じゃないですかなのはっいたら。

それにもし、フェイトがシールドで防いだとしても耐えられるかどうかは微妙だね……。

「今度は、こっちの番!」

なのはの声と共に桜の光がレイジングハートを中心に波紋のように広がった。

「ディバイン……」

光が揺らめき、レイジングハートへ集まる。そして、

「バスター——ッ!」

フェイト目がけて桜色の砲撃が放たれた。

「——ッ!」

咄嗟にフェイトが左手を上げ放たれた砲撃をシールドで防ぐ。

砲撃が直撃し、少しずつ押されながらもフェイトは耐える。

次第に砲撃の勢いが落ち、細くなり、光が消えた。

「——あ、はあ、はあ」

スルリ、とフェイトの肩からボロボロになったマントが滑り、ユラユラと揺れながら海面へ落ちた。

「ふう、……?」

それを見たフェイトが一息つき周りを見回すと、細かい桜色の光が

空へと昇っていた。

「――」
頭上から桜色の光が差し、フェイトが空を見上げた。
釣られて俺も見上げると、

「うわあ……」

レイジングハートを構えたなのは下、桜色の魔力の塊があった。

「ねえ、秋介。アレってちよつとヤバイよね？」

「違うぞ、アリシア。アレはちよつと所かかなりヤバイ。ね、セラフ？」

『そうですね……。軽くこの辺りのビル群は消えるんじゃないでしょうか？』

『『『………』』』』

セラフの言葉を聞いてプレシアさんとリニスまで黙り込んだ気がした。

……巻き込まれたりしないよね……？

戦いが始まる前に確かユーノが「流れ弾が飛んで来たら僕が防ぐよ」なんて言ってたよね？

そう思いユーノを見ると、

「あ、あははは、……。ごめん無理。流石にアレは防げる気がしない」
苦笑いしながら顔を背けた。

「気にするな……」

ポンツ、とユーノの肩に手を置いて励ます。

だってアレ、並大抵のレベルじゃないもの。対軍軽く越えて対城行ってる気がするから。

「……セラフ、一応アレの余波が来ても大丈夫なように結界よろしく」
『分かりました』

大丈夫だとは思って万が一って事があるからね。

……だけどもあ、思ってたよりデカイ……。

もしかして俺たちが居るのを忘れてない？ と再びなのは見上げると、

『Starlight Breaker!』

ただの塊だった桜色の魔力が球体へ変わり、脈動する度に大きくなっていく。

「受けてみて！…これがわたしの、全力全開!!」

なのはがレイジングハートを振り上げ、

「スターライト——」

桜色の球体が強く脈動し、さらに大きくなる。

「ブレイカー——ッ!」

なのはが叫ぶと同時にレイジングハートを振り下ろした。

瞬間、桜色の巨大な砲撃がフェイトへと放たれた。

「うああああっ……!」

それを見たフェイトが左手を頭上に掲げ幾重にもシールドを展開した。

「……ッ」

展開されたシールドは放たれた砲撃を真ん中から裂くようにして防ぐ。

フェイトは耐えるが砲撃は次第にシールドを砕いていき、

「うっ、——ッ!」

桜色の光が一気にフェイトを飲み込んだ。

そして、

『こっち来たよ——!?!』

海面を抉り周囲のビルを消し去る、そんな砲撃の余波の一つが勢いよく俺たちの方に飛んで来た。

『……ふ、今度は頭がキーンとならなかった……!』

もしかしたらと思っただけで注意しておいて良かった。意識したら案外ならないもんね、キーンって。

『そんな事言ってる場合じゃないよ!?!』

『大丈夫だって、アリシア。ちゃんとセラフに頼んで結界張ってもらったから』

そう言った直後、すぐそこまで余波が迫って来た。

が、直撃する寸前に余波が何かにぶつかるようにして弾けた。

『……おお、ホントだ』

『……ね、言ったでしょ?』

『そうだけど何故、坊やまで驚いているのかしら……?』

それはあれだ、条件反射的なやつだって。目の前にネットがあってもボールが飛んで来たらビクツ、つてなるじゃん? あんな感じ感じ。

……いやそんな事言ってる場合じゃないよね。

砲撃を撃ち終え、肩で息をするのはを見る。

「はあ、はあ、……——フェイトちゃん!」

なのはが叫んだ先、気を失ったフェイトが海に落ちた。それを追ってなのはが海に飛び込み、

「——ぷはあ。はあ、はあ……」

すぐにフェイトとバルデイツシュを抱えてなのはが海の中から飛び出した。

「だ、大丈夫、フェイトちゃん……?」

「……うん」

「良かった……。とりあえず皆の所に行こう?」

「……」

顔を俯かせるフェイトを抱え、なのはがこっちに向かってフラフラしながら飛んで来る。

「おーい、なのはー。きついなら手伝おうか?」

「へーきー! そんなに心配しなくても大丈夫!」

あらそう。戦いが終わったばかりなのに元気だね。

……これでこっちもひと段落。

あとはアリシアと一緒に皆を驚かせるだけ、……つて、そう言えばアリシアがどうやって驚かすつもりか聞いてない……。

二人が戻って来る前に聞いた方が良いね。

『あのさ、アリシア』

念話で話しかけたら、

「……あつ」

「……?」

「……ごめんね、フェイトちゃん。魔力切れちゃった」

「えっ」

あとちよつとだったのに、ごめんね……、となのはとフェイトが海に落ちて行った。

『……フェイトがなのはと一緒に海に落ちた』

『見れば分かるよ!?!』

だよねー。見ればわかるよねー……。

「——やっべ、セラフツ！」

『はい!』

目の前に魔法陣が展開され、そこに勢いよく飛び込む。

一瞬光に包まれ、晴れるとなのはとフェイトが降って来た。

「——つよ、と。……ふう、なんとか間に合った」

海に落ちるギリギリの所で二人を受け止める。

『お二人のデバイスは私にお任せを』

レイジングハートとバルディッシュが横に浮かんだ。

「何が「そんなに心配しなくても大丈夫！」だ。魔力切れで落ちてるじゃないのさ」

「にやははは……。ありがとう、秋介くん」

「ごめんね? と手を合わせてなのはが首を傾げた。

「まったく、……フェイトは大丈夫?」

「うん……。ありがとう、秋介……」

フェイトが顔を上げず答えた。

……まあ仕方ないよね。

コレはお姉ちゃんに元気づけてもらうしかないね!

「じゃあもう一回転移よろしく」

『ええ、分かりました』

再び光に包まれ、晴れると屋上、皆がビルの下を覗く後ろに居た。

二人を屋上に降ろす。

「フェイト……!」

「なのは!」

アルフとユーノが駆け寄って来た。

「……アルフ、負けちゃった」

「フェイト……」

「頑張ったけど、全力で戦ったけど、……負けちゃった。——ううっ！」

ギユツ、とフェイトがアルフに抱き着き、

「——ごめんね、母さん。ごめんね、アリシア……ッ！」

涙をこぼした。

「フェイトちゃん……」

なのはが呟いたその時、

「——フェイト、貴女はよく頑張ったわ」

俺の後ろからプレシアさんの声が聞こえた。

……え？

「え……？」

「今の声……」

「秋介くん……？」

「はあ……」

そしてフェイト、アルフ、なのはが順に俺を見て、その横でリニスが頭を抱えていた。

『プレシアさん!』

『ママ!』

『何で声出しちゃうの!』

せっかく此処まで黙ってたのに! と俺とアリシアの念話が被った。

『だ、だってあんなに辛そうなフェイトを見て黙ってるなんて、私には出来ないわよ!』

『もー! せっかく秋介に炎とか風とか出してもらって派手に登場しようと思ってたのに!』

『そうだよ、プレシアさん! 俺が派手に炎とか風とか出して、——つてちよっと待ってアリシア! そんな話聞いてない!』

『今言いましたからね』

待って!? セラフは知ってたの!?

『いえ、私も今聞きました。なんとなく言ってみただけですよ。』

紛らわしいわ！

『むう、……—ようし。こうなったらもう派手に登場しちゃうよ、ママー!』

『ええっ!?!』

『行くよ、秋介！ 爆発よろしく!』

『爆発だ?!? —よっしや、任せろ!』

炎と風から爆発にランクアップした気がするけど、そんな些細な事は気にしない。

『ちよ、ちよつと待つてアリシア！ 坊やも任せろ！ じゃないわ!?!』
だからお願い、待つて二人共!?! とプレシアさんが必死に止めるのを無視して、

『セラフ、行ける?』

『バツチリです!』

周りの皆にバレないように、なおかつ皆を巻き込まないように離れた所に魔法陣を展開する。

あとついでに熱くないようにもしておこう。

「えつと、秋介? 今何か言った?」

「俺は何も言つてない。ちよつと後ろの人が思わず言つちやつてね」

「え、後ろ……?」

チラツ、とユーノが俺の後ろを見た。

「僕には誰も居ないように見えるんだけど……」

「うっそだあ。ちゃんと後ろに居るって。なのはは見えるよね?」

「だ、誰も居ないよ……?」

フェイトちゃんとアルフさんは? となのはが二人を見た。

「ううん。私も見えない」

「この匂い、もしかして……」

フェイトが首を横に振り、アルフが何かに気付いた。

「おっと、アルフ。それはまだ言つちやダメだよ?」

「へ? ……つて事はまさか、——むぐ!?!」

「リニス……?」

「今は静かにしてください、アルフ。それに、そんなに落ち込む必要は

ありませんよ、フェイト」

ほら、涙を拭いて、トリニススがハンカチでフェイトの涙を拭った。

……アルフの鼻はよく聞くね。

あと野生の勘。リニスが居なかつたら先に言われる所だったよ。

なのはとフェイトたちから離れ、魔法陣を仕掛けた所の近くに移動する。

「——ではご登場いただきましょう。サプライズゲストのお二人です！」

両手を広げて俺の後ろを見るように促す。

『逆です、マスター。右じゃなくて左ですよ』

「おっとこっちか」

広げる向きを修正する。

『ママ、準備は良い？』

『ほ、本当にやるの、アリシア……!?!』

『本当にやるの！ あ、こっちの準備はオツケーだよ！』

「じゃあ気を取り直して、——サプライズゲストのお二人です！」

『加えて爆発です！』

展開した魔法陣に魔力を流し込んだ瞬間、両手を広げた先で大きな爆発が起き、

「フッフッフ。——お姉ちゃんが愛しのフェイトに会いに来たよ！」

「え、あ、うう、——い、愛しのフェイトに、……母さんが会いに、来たわ……!」

バツ、と〈ノーフェイス・メイキング顔の無い王〉を脱ぎ捨て爆発を背景に、アリシアとプレシアさんがどこぞの仮面ヒーロー一号の変身ポーズでいきなり現れた。

……プレシアさんの顔、見事に真っ赤だね！

顔から火が出るほど恥ずかしい、ってのは今のプレシアさんを言うんだろうね。

「フフ——ッ！」

リニスの笑い声が聞こえ、

「——」

「え、ええっ!? ちっちゃいフェイトちゃん!」

「あの二人は……」

フェイトとアルフが絶句し、なのはは戸惑い、ユーノはプレシアさんとアリシアを見ていた。

「か、母さん、……それに、アリシア……?」

「イツエーイ! お姉ちゃんだよ、フェイトおー!」

とりやつ! とアリシアがダツシユからのジャンプでフェイトに飛びついた。

「え、え? えええっ!」

「やっぱりあの匂いはプレシアだったんだ。でも、なんでアリシアが……?」

フェイトは驚愕して、アルフがリニスを見る。

「——フフ、プレシアが、……フフツ!」

「リニス……」

ダメだ。なんか知らんけどプレシアさんのポーズがツボにはまったらしい。

「しゅ、秋介くん? あのちっちゃいフェイトちゃんは……?」

なのはがいつの間にか横に立っていた。

「すごいよね。あの見た目でフェイトのお姉ちゃんだっていうんだから」

どっからどう見ても妹にしか見えないのにねー。

「フェイトちゃんってお姉さんが居たんだ……」

「まあ詳しい事は本人に聞くと良いよ。二人の所に行つてきな。——勝負に勝つたらお話するんでしょ?」

「——うんっ!」

大きく頷いてなのはがアリシアとフェイトの元へ走つて行った。

「あの、フェイトちゃんのお姉さん?」

「あ、茶髪ちゃんだ! 私アリシア・テスタロッサ、アリシアで良いよ! よろしくね!」

「アリシアちゃんだね! わたしは高町・なのは、わたしもなのはで良

いよー!」

「なのは——ッ!」

「え? あ、アリシアちゃん——ッ!」

「えっ? ええ!?!」

ガシツ、とアリシアがフェイトごとなのはに抱き着きついた。

……元気だなあ、アリシア。

なのはに抱き着くんだったらフェイトを離してあげなよ。突然の事が起き過ぎてついに行けてないから。

「プレシアさんもさ、いつまでも項垂れてないで二人の所に行つて来たら?」

さつきアリシアがダツシユした直後に崩れ落ちたけど、よっぽどさつきのポーズが恥ずかしかつたのか……。

「……そうね。でもその前にちよつと良いかしら、坊や?」

プレシアさんが立ち上がり、俺の頭に手を置いた。

「う……」

「あら、頭を撫でられて恥ずかしがるなんて可愛いじゃない」

『マスター……!』

やかましい。セラフさんは黙っていてください

「急に撫でられたら誰でも恥ずかしい……」

「前もって言うほどの事じゃないでしょう。まあそんな事よりも」
プレシアさんは頭を撫でるのを止めて、

「——アリシアと、もう一度会せてくれてありがとう」

俺を優しく抱きしめた。

「ちよっ——!?!」

『マスター——ッ!』

いきなりなにすんの、プレシアさん!?

「それから、フェイトの事を助けてくれてありがとう」

「いや、それは良いから離して!」

俺も顔から火が出そう……!!

「フフ、さつきの私はこんな顔をしていたのかしら?」

『ええ。今のマスターと同じように顔が真っ赤でしたね』

見ますか？　と言うセラフの問いに、

「止めておくわ。坊やを離すから、代わりにデータを消してくれるかしら？」

『構いませんよ。マスターの良い表情は既に撮って保存してありますから』

「そう、なら良いわ」

そう言ってプレシアさんは俺を離してくれた。

……なんか不吉な事を聞いた気がする。

まあ良いや。この際そんな細かい事を気にするのは止めよう。

「あー、顔が熱い……」

両手で扇いで顔を冷ます。

「坊やにお礼も言った事だし、娘たちの所に行こうかしら。……あつ、最後に一つ忘れてたわね」

「……？」

なにを？　と思つてプレシアさんを見ると、

「あいたつ!？」

ゴツンツ、と頭にゲンコツを落とされた。

「なんで……!？」

頭を押さえてその場にしゃがむ。

「フェイトを囮にした罰よ。アリシアから聞いたけど、あの子に黙つて復活させようと言つたのは貴方らしいじゃない」

「それは、……そうだね」

冗談で言つたら予想外にアリシアが乗つて来たからね。

「じゃあ私は娘の所に行つて来るわ。——本当に、ありがとう。秋介」
そう言残して、プレシアさんはとびきりの笑顔でアリシアとフェイト目がけて突撃して行った。

……雷が降つて来なかつただけマシ、か。

フェイトとアルフに謝らないとだけど、あとで良いよね。せつかくの出会いを邪魔したくない。

『嬉しそうですね、プレシアさん。それにアリシアさんにフェイトさんも』

「本当にね。……だからまあ、家族の感動的再会兼出会いに、水を差すのは遠慮してもらえないかな、クロノ？」

立ち上がり後ろを振り向くと屋上に展開された魔法陣の中、バリアジャケツト姿のクロノが立っていた。

「それとも執務官は気にせず話を聞きに行く？」

「……いや、止めておこう。その代り」

「分かってるって。約束したからね、話すのは色々と全部終わってからって」

脱ぎ捨てられた〈顔の無い王〉を回収し、クロノの展開する魔法陣に入る。

「待ってくれ。僕も行くよ」

そう言っつてユーノが走って来た。

「あれ、残らなくて良いの？」

「まあ僕が残っていても意味がないからね。正直、居場所が無い気がして……」

何となく分かる気がする。なのはおも一緒になって笑ってるし、横で見ても暇だよねー。

「それに、僕も秋介には聞きたい事があるから」

「……じゃあ転移するが良いか？」

「あいよー」

転移の光に包まれた。

第十九話：広いと泳ぎたくなるのは仕方ない

光が晴れ周りを見ると、幾つもの空間モニターが浮かぶ広い部屋に立っていた。

……コレは見事なSF感……！

「なあクロノ、此処って……」

「此処は時空管理局所属・次元航行艦船アースラ、そのメインブリッジになります」

聞くとクロノではなく、女の人の声で答えが返って来た。

声の方を見ると、

「初めまして、ではないですね。昨日、モニター越しでしたがお話しただから。改めまして、私はリンディ・ハラオウン、この船の艦長をしています。貴方が戸田・秋介君ですね？」

俺たちから少し離れた所、椅子に座る緑髪の女の人——リンディさんが湯呑みを持って微笑んでいた。

そしてその横に、

「どうも。私はエイミィ・リミアッタ、そこなクロノ執務官の補佐官兼この船の通信主任と管制官やっています」

よろしくね、と手を振る茶髪のお姉さん——エイミィさんが立っていた。

「じゃあ俺も改めて。戸田・秋介、秋介で良いよ。それでこっちが……」

『デバイスのムーンセル・オートマトン、セラフと呼んでください』
「ええ、よろしく願いますね。秋介君にセラフ」

そう言ってリンディさんは近くに置いてある二つの器の内、手前の器の蓋を開け、

「では早速で悪いのだけど、お話を聞かせてもらえるかしら？」

そこから取り出した白いサイコロみたいな形のモノを湯呑みに落としました。

「アレって……」

『角砂糖ですね。それにもう一つの器に入っているのはミルクです』

「……………」

セラフの言葉を聞いてクロノの肩に手を置き、

「——頑張れ」

心からのエールを送る。

「今の一瞬で君は一体何を悟った？ ……だがまあ、その気持ちは素直に受け取るよ」

おおう、クロノが頭抱えちゃったよ。つて、またリンディさんが角砂糖を……。

「艦長！ それは流石に入れ過ぎ！ もう五個目ですよ!?!」

エイミイさんがリンディさんを止め、

「何を言っているの、エイミイ。——これはまだ六個目よ？」

「母さん——ツ!?!」

それでも止めようとしないうリンディさんを見て、クロノが叫んで止めに走った。

「ちなみにセラフさん。あの湯呑み中身は？」

『緑茶ですね』

「……まあ味覚は人それぞれだからね」

否定はしない。しないよ？ でもさあ、……五個は流石に無いよね。落としたとしても一個でしょうに。

……今度、挑戦してみようかな。

ちよつと味も気になるし、物は試し、つて言うからね。緑茶が勝つか砂糖が勝つか……。

「ユーノはどっちが勝つと思う？」

「ごめん。話が急すぎて君の中でなになにが戦っているのかが分からない。……でも何となく言いたい事は分かるよ」

「じゃあどっちだと思う？」

「砂糖」

即答だね!?

「……初めて此処に来た時に一回、飲んだ事があるから」

スツ、とユーノが何処か遠い所を見た。

……ふむ。ならなのも飲んだって事か。

あとで聞いてみようかな。ユーノの反応からして結果は見えてるけど、もしかしたら違う反応が見られる可能性が……！

『無いですね』

『無いよねー』

などと暇つぶしを兼ねて話してたら、

「まったく。昨日注意したばかりなのに、……はあ。エイミー、コレを片づけて来てくれ」

「はいよっ、クロノくん！」

クロノがリンディさんから角砂糖の入った器を取り上げ、ため息をつきながらエイミーさんに渡した。

「ああっ、待って！　せめて、せめてあと一個だけでも……！」

「ダメですよ、艦長。あ、ついでにミルクも持って行きますね〜」

「ああっ——!?!」

二つの瓶を持ったエイミーさんがブリッジを出て行くのを見送り、

「うう、お茶が苦いわ……」

「それじゃあ気を取り直して、本題に入ろう」

こつちに来てくれ、と肩を落とすリンディさんを無視するクロノに呼ばれた。

「あいあい。で、まずは何から話せば良い？」

俺の事？　それともプレシアさんたちの事かな？

「いや、君に関してはあとで良い。僕が聞くより適任者がいるからな」

「なのはだね」

『なのはさんですね』

「なのはかぁ……」

なんて説明しようか……。

……うーん、……よし。あとで考えよう。

今はクロノたちに事情を話すのが先だからね！　となんとなく宙に浮かぶモニターを見ると、

『か、母さん。苦しい——』

『ふえ、フェイトちゃん！　大丈夫!?』

『ママ!?!　フェイトの顔が青くなってるよ!?!』

『しつかりしな、フエイト……!』

『貴方たち落ち着きなさい! ……フエイトの顔がさらに青くなつて、——リニス! 今すぐうちに戻ってフエイトの着替えを持って来て! このままだと風邪、——あうっ!』

『落ち着くのは貴女です、プレシア! まずはフエイトを離してください、苦しんでいます! それと、濡れたのはバリアジャケットなので元の服は無事です!』

『——そうだったわ! フエイト、今すぐバリアジャケットを解除なさい!』

風邪を引いてしまうわ……! とりニスにフエイトから引き離されるプレシアさんの姿が目に入った。

「……………」

なんだろう。ついさつき似たような光景を見た事がある気がする。

「どうかした?」

「……いやなんでもないよ、ユーノ」

ちよつと既視感がただけだから気にしないで。

「それで、まずはプレシアさんの事からだよね」

なにかから話せば良いかな? 他人の俺が勝手にあれこれ話すのはダメだから……。

とりあえず、

「プレシアさんがジュエルシールドを集めてたのは娘を復活させる為だったんだよ」

昨日クロノがフエイトたちに聞いてた事で良いか。もう隠す必要もないし。

「……………は?」

どういう事? とクロノユーノだけじゃなく、「お砂糖とミルク……」と呟きながら湯呑みを眺めていたリンデイさんまでが、鳩が豆鉄砲を食ったような顔になった。

「んで、さつきいきなりプレシアさんが現れたのはこのマントで——」

「——待て」

〈ノーフェイス・メイキング顔の無い王〉を見せようとしたら、クロノに止められた。

「なに」

「なに、じゃない！ 君は今なんと言った!?!」

ちよつ、クロノ。そんな詰め寄らんでも……。

「ジュエルシードを集めていたのは、娘を復活させる為だと、——まさか」

クロノが宙に浮かぶモニターを見た。

「つ……!! あの手フェイト・テスタロッサの生き写しのような少女は誰だ!」

『アリシア・テスタロッサ。プレシアさんがジュエルシードを集め、復活させようとしていた娘さんですよ』

俺の代わりに答えたセラフの声を聞いて、

「——ッ!」

クロノがS2Uを構えた。

……ええ。

俺なんか変な事言った? 聞かれた事を答えただけなのに……。

「何故だ……」

『追っていた相手の目的を聞いて、しかもそれが既に達成されているとなれば当然の反応でしょう』

マジですか……、と思っていると、

「ただいま戻りました、——つて何この状況!?!」

エイミーさんが戻って来た。

「な、なにがあつたんですか、艦長……?」

「実は……」

リンデイさんがエイミーさんに事情を説明し、

「アリシア? ……あつ、プレシア・テスタロッサの娘さんか。昔起きた事故で亡くなったって資料にあつたけど、……ええええつ!?!」

それを聞いたエイミーさんがモニターを見て叫んだ。

「どど、どーゆー事なの、クロノくん!?!」

「それを今から聞く所だ。……昨日君が回収していったジュエルシード九個。アレを使ったのか?」

「つ、使ってない。あんな爆弾みたいな危ない宝石、使ってないから

！」

『見てもらった方が早いですね』

「え？」

そう言ってセラフがモニターを表示し、

『——ここは我が国、神の国、水は潤い、実り豊かな中津国』

お札を持った俺と、その近くで自分の体の傍に立つアリシアが映っていた。

それに加えてモニターの左上、

「セラフさん、あの数字なに？」

5:48と出ていた。

『アレですよ、アレ。朝の番組でおなじみの時間表示ですよ？』

「芸が細かいよ……」

時間表示要る？　と思うが声に出さないと胸にしまっておこう。

「これは……」

「アリシアちゃんが二人……？」

リンディさんとエイミイさんの声を聞いて、俺もモニターの中の自分が詠唱する姿を見る。

……良かった。別のバージョンでやらなくて、本当に良かった。

クロノたちが見てるこの状況で、最後に茶目っ気出してなんちゃって、とか言っちゃう自分の姿は見たくない。

今回は恥ずかしくないね！　と思ってモニター見ると、

「ユーノ。君はあの魔法をどう見る？」

「映像だけじゃ判断は出来ないけど多分、あの鏡を触媒として何かしら特異的な状況を作り出したんだと思う。儀式魔法、……いや、どちらかと言うと結界魔法なのかな？」

モニターの中、アリシアが復活したのを見たクロノの問いかけに、ユーノが顎に手を当てて答えた。

「詠唱を必要とする結界魔法は数こそ少ないけど確かに存在する。でも、死んだ人間を生き返らせる事が出来る魔法なんて聞いた事がない」

「そりや当然よ。だってアレ、魔法じゃないからね」

「——は？」

ユーノとクロノが、本日二度目の鳩が豆鉄砲を食ったような顔になった。

「魔法じゃないのか？」

「うん、魔法じゃない。魔力を使うって所は同じなんだけど魔法じゃない」

「じゃあなんだい？」

「宝具という名の『物質化した奇跡』」

確か人間の幻想を骨子に作り上げられた武装、だったかな？

「俺たちの世界の神話や伝承、物語に出て来る英雄たちを象徴するモノが使える、とそう思ってくれば良いよ」

「では昨日、異相体を封印する際に貴方が使用した剣、アレも宝具なの？」

「ああ、アレね。確かにリンディさんが言う通りあの剣も宝具だよ」

お城一つ簡単に落とせるレベルのね。

「あ、ちなみに言うとおプレシアさんがいきなり現れたのも宝具の効果だったりします」

じゃじゃーん！ と〈顔の無い王〉を見せる。

「このマントをユーノに被せると……」

「フェレット擬きが消えた……」

「僕はフェレットじゃない！ ……って、なんだこれ!？」

……おお、首だけユーノ君。

「すごいねこのマント。ユーノくんがコレを着たら艦内から反応が消えちゃった……」

『完全なる透明化、背景との同化と言う身を隠す事に特化した宝具ですからね』

「まあ野生の勘とかには見つかる可能性はあるけどねー」

次からは匂い対策を……、と考えてると、

『——こらあ、管理局！ 秋介を返せえー!』

アリシアの大声がブリッジ中に響いた。

……返せ、つて。別に俺は無理やり連れて来たんじゃないんだけど

なー。

そう思つてモニターを見る。

『良いわ、アリシア。もつと叫びなさい。坊やの事だからきつと声を聞いて抜け出して来るわー!』

『分かったよ、ママ! 秋介えー、シチュー作ったあー?』

いやそれかよ。

『あ、付け合わせはパンが良いー!』

『私はワインをお願いするわ……!』

『静かにしてください!』

『あうっ!?!』

おお、リニスの手刀が見事に二人の頭に落ちた……。

『二人そろつて何を空に向かつて叫んでいるんですか!』

『だってリニスが、秋介が黒い執務官と一緒に居なくなつたつて言うから……』

『だってリニスが、坊やなら美味しいワインを持ってるかもつて言うか、……ごめんなさい』

『アリシア、それに母さんまで……』

『今はそつとして置こう、フェイト』

『にはははー……』

アリシアとプレシアさんがリニスの前に正座するのを見た。

『なにやってんの、あの二人……』

『じゃ、じゃあクロノ執務官、皆さんを此処に……』

『あ、それでしたら私が代わりに』

俺たちの後ろに魔法陣を展開され、

『まったく……。人の話をちゃんと聞いてください、……つてあら、此処は?』

『……あ、秋介だ』

『ホントね。坊やが居るわ』

『秋介……』

『え? あれ?』

『秋介くん、それにユーノくんも、——ユーノくん!』

なんで首だけなの!? とユーノを見て驚くのはとテストタロツサ一家が現れた。

「あんな簡単に此処へ転移させるなんて……。あ、これ返すよ」

「あいよー」

ユーノから〈顔の無い王〉を受け取る。

「……君のデバイスは一体なんだ?」

「次元世界一のデバイス、かな」

なにせセラフさんは特別製だからね。

「ゆ、ユーノくん! 今く、首だけになって無かった!」

なのはが駆け寄って来た。

「だ、大丈夫だよ、なのは。今のは体の部分が隠れてただけだから」

「え、あ、そうなの?」

「うん。秋介の宝具って言う……」

「あ、リニスさんに聞いたよ。奇跡の力を持ったすごいモノ、だって」

奇跡の力を持ったすごいモノ、……そんな簡単な説明の仕方があったのか。

……なんで気付かなかったんだろう。

「物質化した奇跡」とか人間の幻想を骨子に作り上げられた武装とか、そんな小難しい言い方しなくても良かったじゃない……。

「ちくせう」

「君は急にどうしたんだ……?」

「ちよつと前の自分に聞かせたい事があって……」

まあクロノには関係ないから気にしなくて良い。

それより、

「さつきからどうした、フェイト?」

チラチラとリニスの陰からこつちを覗いてるけど、俺なんかしたかな。

『囿にしましたよね』

「面目次第も無かった……」

此処はしっかりと謝ろう、と思つてフェイトを見ると、

「秋介……!」

バツ、とフェイトが胸に飛び込んで来た。

「ん、どうした？」

「アリシアの事も母さんの事も、全部聞いたよ」
フェイトが離れ、

「——本当にありがとう、秋介」

そう言つてとびきりの笑顔を見せてくれた。

……元気になったか。

やるじゃないアリシア。ちゃんとフェイトを元気づけてくれたね。
にしてもまあ、面と向かつてお礼を言われるのはちよつと照れる。

「あー……、囲みたいにして本当にごめん」

「ううん、私は気にして無いから大丈夫。だから秋介も気にしないで
？」

「……分かった。それで？ お姉ちゃんと初めて話したご感想は？」

「うん。……思ったより賑やかだったよ」

「騒がしかったか……」

「なんで!?! なんでそうなるの!?!」

だって賑やかかって事は騒がしいって事でしょ？

「普通そこは「アリシアは元気だから」とか「ああ見えて寂しがりやなんだよ?」とか色々と私をフォロ―する所だよ!」

「えー……」

元気だから、は分かるけど寂しがりやなんだよ? はちよつと見え
ないなー。

「じゃあ「フェイトに似て可愛いよね」で」

「逆! 私とフェイトの立場が逆になつてる……!」

そこは私に似て可愛いねって言つてよ! とアリシアが騒ぎだ
した。

……確かに、フェイトの言うとおり賑やかだよね。

偶に過ぎてやかましい時とかあるけど。ま、それはそれで良いもん
じゃないかな。

これからテスタロッサ一家は賑やかだろうな、と思ふとプレシア
さんを見ると、

「では秋介君が言っていた事は……」

「事実よ。私がジュエルシードを集めていたのはアリシアを復活させる為、それで間違いないわ」

リンデイさんとプレシアさんが話していた。

「ならどうやって、ジュエルシードを使ってアリシアさんを復活させるつもりだったのですか？」

「……貴女はアルハザードという名前を知っている？」

「忘却の都、禁断の秘術が眠る土地、存在するかどうかとも怪しい『見果てぬ夢』の域を出ない伝承、ですね。……まさかアルハザードへ行く為に？」

「ええ。一昨日までの私はそのつもりだったわ。——それが例え、貴方たち管理局に追われるような事になろうともね」

「……………」

プレシアさんの言葉にリンデイさんが押し黙った。

……はっはっはっ。危ねえ。

もしリニスが昨日、プレシアさんをうちに連れて来なかつたら、下手したら大変な事になってた可能性が……。

「リニスに感謝だね……………」

「私がなにか？」

「プレシアさんを連れて来てくれて良かった、って事よ」

アリシアの事もあるけど、病気の方も危ない感じだったからね。色々と間に合って良かった。

「はあ……………」

そうですか、とリニスが首を傾げた。

「……あ、そう言えばユーノ。俺に聞きたい事がある、って言ってたけど何だった？」

色々立て続けに起きたから聞くのを忘れてたよ。

「ああ、そうだね。なのはも居るしちょうど良いかな」

「わたし？」

「うん。僕が秋介に聞きたかったのはね、——今までなのはを助けてくれていたのは誰だったのか、って事だよ」

あー、その事か。

「ふ、——その助けてた誰か、って言うのは俺のこ——」

「え？ それって秋介くんの事でしょ？」

「……うん。そうだけど、そうなんだけど」

言われた。先になのはに言われちゃったよ……。

『マスター、……変に溜めるからですよ？』

「そうだね……」

でもまさか〈顔の無い王〉被ったり〈アンタレス・スナイプ天蠍一射〉を使って見つからないようにしてたのに、なのはにバレてるとは思わなかった。

主人公補正つてすごいね……。

「む、なんでわたしに見つかりなくなかったの？」

「だってその方が面白い反応が見られそうじゃん」

アリシアの事とか全部終わったあとで「実は俺魔導師だったんだ！」的な感じでバラそうと思ってました。

……なのはの事だからさっきのエイミイさんみたいに「えええええつ!？」って驚いてくれるかなー、って。

実際は「え……？」って感じだったけどね！ まあ危機的状況だったからしょうがないけど。

「……………」

『マスター……』

「ごめんなさい」

だから「意外とダメな理由だった……」的な目で見ないでください。お願いします。

「……じゃあ今度、秋介くんのおうちにごはん食べに行つて良い？」

「それくらい的事なら全然オツケー。むしろ今から来るか？」

「良いの!？」

「良いよ」

なのはとフェイトが戦いを始める前にも言ったけど、昨日から仕込んだシチューがあるからね。

……でも流石に、朝からシチューは重いかな。

もつと別の、おにぎりとか卵焼きとかにしようか……。

「なにか食べたい物ある？」

「シチュー！」

「アリシアには聞いておりません」

「酷い！」

「わ、わたしはシチューで良いよ？ 戦ってお腹空いちやったから」

「なのは——ッ！」

ガシツ、となのはに抱き着くアリシアを無視してフェイトを見る。

「フェイトもどう？ さっきの戦いでお腹空てるでしょ？」

「私も、良いのかな……」

何か心配するようにフェイトがチラツ、とプレシアさんとリンディさんを見た。

「あら。ではフェイトさんがそんな事を……」

「ええ。——あの時私は天使を見たの……！」

「良いですね。それに比べてうちのクロノはどうも愛想が無くて……」

「ホントですよね。クロノくんってばいつもむっ、とした顔してますからねえ」

「ホントにねえ」

プレシア女史が羨ましいです、とリンディさんとプレシアさんが、エイミーさんを交えて子供の話をしていた。

……おかしいなあ。さっきまでシリアス感漂う話をしてたはずなのになあ。

いつの間に子供の話になったんだろうね……。

まあそれは良いとして、

「なあクロノ、今からうちにごはん食べに帰るのってアリ？」

「ナシに決まっているだろう」

「別に逃げないんだけどなー」

『ではクロノさんに一緒に来てもらえば良いじゃないですか』

「——それだ」

そうしよう、クロノ。うちで一緒にシチュー食べようぜ！

グツ、と親指を立てたら、

「それだ、じゃない。勝手に決めるな」

グイツ、と横に親指を倒された。

「ええー……。ケチいー」

「ケチで結構。食事だったらこの船の食堂で取ってくれ」

「俺はそれでも良いんだけどさ……。アレを説得できる？」

「……？」

促さした先、

「良いじゃんフェイトー、一緒に行こうよー」

「そうだよ、フェイトちゃん！ 一緒にごはん食べよう？」

「えつと、……。うん」

「じゃあ決まりだ！ リニスにアルフー、今から秋介のうちにごはん食べに帰るよー」

「分かりましたから。少し落ち着いてください、アリシア」

「シチューか、……。あああ、私もお腹空いて来たよ」

これからシチューを食べる気満々の集団が居た。

「……代わりに頼んだ。ふえれ、……。ユーノ」

「いやだ」

ユーノが即答した。

「どうする、クロノ執務官？」

「…………。艦長に聞いてくる」

そう言ってクロノがリンディさんの元へ向かった。

……。クロノが折れた……！

一体どれくらい葛藤をしたのか……。

「あ、ユーノも来るよね？」

「僕も良いのかい？」

「当り前よ。どうせ食べるなら大勢の方が美味しいからね」

「じゃあお言葉に甘えるよ」

そうしてくれ、と思っていると、

「……はあ」

ため息をつきながらクロノが戻って来た。

「お早いお帰りで」

「君たちが食事に帰る許可が条件付きで下りた」
「条件つてなに？」

「局員が三名、監視役として君たちについていく」

三人？ 結構多いね。

「その三人つてだれ？」

「一人は僕。あとの二人は……」

クロノが言いよんだ時、

「私たちもご一緒にお邪魔しますね」

「よつろしく」

リンデイさんとエイミイさんがやって来た。

……エイミイさんはともかく、リンデイさんは大丈夫なのかしら。

艦長つて船から簡単に離れちゃダメなんじゃないの……？

「あらプレシア。話の方はもうよろしいのですか？」

「ええ、大体の事は話し終えたわ。だから少し休憩。フェイトを休ませてあげたいしそれに、……私もお腹が空いてきたのよ」

「ああ。そういえば私たち、朝から何も口にしていませんからね……」
リニスとプレシアさん。二人の話を聞いてなんとなく納得した。

……なるほど。二人の話し合いが終わったからか。

まあだからと言って簡単に離れて良い理由にはならいだろうけど
この際、気にしなくても良いよね！

あとでクロノには胃薬でも渡そうかと、そう思った。

「じゃあセラフ、……あつ」

「秋介くん？」

「どうかしたの？」

危ない危ない。色々あつて忘れてた。

「クロノ、ジュエルシードつてどうすれば良い？」

「あつ」

なのはにフェイト、二人も忘れてたな……。

……全力で勝負した目的を忘れちゃダメでしように。

俺とアリシアの所為かも知れないけどね！

「ん？ ……ああ、そうだな」

いやおい。クロノも忘れてたな？

「忘れてない。色々あつて後回しにしていただけだ。一応、ジュエルシールドは此処で受け取ろう」

「あいよ。セラフさん」

『はいはい』

俺の周りに九個のジュエルシールドが現れ、

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

『Put out.』

なのはとフェイトの周りにも六個ずつのジュエルシールドが現れた。それをクロノがS2Uに受け取り、

「では僕はジュエルシールドを保管室に置いて来る」

ブリッジを出て行った。

……クロノを置いて行ったらどんな反応するかな……。

ちよつと試したい。でも怒られるのは目に見えてるから止めておこう。

此処に来て面倒事は嫌だからね。

「じゃあクロノが戻って来るまでしりとりでもする？」

『それでしたら私から。——マスター!』

俺?! その場合はどっち？

『け、ですね』

「そう。なら……」

こうしてクロノが戻って来るまでのしりとり大会が始まった……!

まあすぐに戻って来て一周もしなかつたけどね!

く付け合わせになるパンあつたかな……く

うちに戻ってバリアジャケットを解除し、

「まだ九時前か……」

時計を見たら意外と時間が経っていた。

「お昼には早いし朝ごはんにはちよつと遅い……」
微妙な時間だね、と思つてたら、

「——お風呂に入りたい」

元幽霊少女が突拍子も無い事を言い出した。

……何故にこのタイミングでお風呂。

シチューが食べたい、の次はお風呂に入りたい、つて。

「我がままお姫様ですか……」

「何を言っているの？ ——アリシアは天使よ!？」

勿論フェイトもよ！ と今度は元幽霊少女のママが言い出した。

とりあえず無視して、

「急にどうした？」

自分のほつぺをムニムニするアリシアに聞く。

「んー、なんか体がちよつとベトベトする。あと髪の毛も」

『海風の影響でしょう。ビルの上と言ってもずっと海の上に居ましたからね』

「そう言えばわたしもベトベトする……」

「私も……」

お風呂に入りたくないな……、となのはとフェイトも言い出した。

「二人もか……。ならお風呂を先に入れてから、……——そうだ。アレを出しますか！」

入れるまでもなく広げるだけであつという間だからね。

「「アレ?」」

『——なるほど。なら先に地下室を片づけた方が良いでしょうね。私がちよつと行つて片してきます』

そう言つてセラフが転移して消えた。

……あ、そっか。カプセルの破片とかそのまんまだったわ。

「アレってなに？」

「見てのお楽しみ」

じゃあセラフの事だから片づけとかすぐに終わるだろうし、俺たちも行こうか。

皆を連れて地下室へ行くと、

『あ、マスター。ちょうど終わった所なので思いっきり広げちゃってください!』

お風呂セットと輝くアヒル隊長、それに衣服の入った籠とバスタオルと一緒にセラフが宙に浮いていた。

……セラフさんつてば準備良すぎ。

あのアヒル隊長、どことなくカプセルと同じような素材っぽいけど気のせいだよな。あと地下室が若干熱いような気がするけど、液体を蒸発させたって訳じゃないよね？

しかも籠に入ってる服、前になのはとフェイトが着てた服に似てるような……。

『ふふ……!』

「……………」

さあて、地下室が綺麗になった事だし早速広げようかな!

「んー、…………あの辺で良いかな」

手元に〈ゲート・オブ・パピロン 王の財宝〉を一つ開いて手を突っ込み、

「出ですよ、温泉——!」

思いっきり引き抜くようにして地下室の真ん中あたりを狙い、温泉を広げる。

『おおっ…………!』

後ろで皆の驚く声を聞いた。

「温泉なの…………!」

「わあ…………!」

「こ、コレは…………! 秋介!?!」

目を輝かせて温泉を見つめるのはとフェイト、アリシアを見て一言。

「飛び込みは危ないから禁止。だが、——泳ぐのは許す!」

「いやッター——!」

私いっちばーん! とアリシアが服を脱いで温泉にダイブした。

……飛び込みは禁止って言った傍から、…………はあ。

怪我だけはしないでね。

「行こう、フェイトちゃん!」

「うん！」

なのはとフェイトがアリシアに続いて温泉に向かった。

「アルフも行つて来れば？」

「いやでも、着替えが……」

「大丈夫だつて。ね、セラフさん？」

『はい。大人の皆さんには浴衣を用意してありますよ』

セラフが籠から大人サイズの浴衣を浮かせて見せた。

「やっぱり。そこまで準備万端だったか。それでこそ俺のセラフだね！」

『もう、マスターだったら……！ 褒めても冷えたコーヒー牛乳しか出ませんよ！』

「ならそれは上がつて来たなのはたちに渡して上げて」

お風呂上りのコーヒー牛乳は格別だからね。

『ちなみに普通の牛乳とフルーツ牛乳もあります！』

流石過ぎる……！

「うくん、コレが浴衣か……。……なら私も入らせてもうらおうかな、……つてプレシア!？」

アルフが勢いよく見た先、

「さあアリシアにフェイト！ 私が体を洗つてあげ、——あぶ!？」

「まったくプレシアは……。ではフェイトになのはさん、一緒に入りましょうか」

「ねえ見て、エイミイ！ 資料で見た温泉よ、温泉！」

「艦長！ 入るなら服を脱いでからにしてください！」

プレシアさんとリニスだけじゃなくて、リンデイさんとエイミイさんまで温泉に入る気満々だった。

「……行って来な、アルフ」

「そうするよ……」

苦笑いしながら歩いていくアルフを見送る。

「じゃあ俺は戻つてごはんの用意でもしようかな。ユーノにクロノ、二人は手伝つてよ？」

それとも一緒に入つて来る？

「ば、バカな事を言わないでよ!？」

「……………」

「冗談、冗談だって」

だからクロノ、セットアップしようとしないで。

『ではマスター、此方はお任せを』

「あいあい、よろしく。……なら戻るか、お二人さん」

「はあ、……上で待っていれば良かったな」

「だね……」

俺とクロとユーノ、三人で上に戻ってごはんの用意を始めた。

第二十話：呼ぶ事に意味がある

アリシアを筆頭に皆が地下室で温泉を満喫している間、

「おいしい、クロノ。ちよつとそこの食器棚からお皿出しといてー」

「お皿、……って、どれだ？ どのお皿を出せば良いんだ」

「シチュー入れるから底が深いヤツ。下の方にしまつてないかな」

「秋介、こつちはサラダの盛り付け終わったよ。何処に置いておけば良い？」

「テーブルの真ん中らへんに置いてー」

俺とクロノとユーノでごはんの準備をしていた。

「さて……」

シチューが焦げ付かないようにかき混ぜながら、壁にかかった時計を見る。

……皆が温泉に入って四十分、そろそろ出て来る頃かな。

コンロの火を止め、後ろの棚に置いてあるパンの入った籠を覗くと、

「バゲットが半分に食パンが一枚、ロールパンが二個か……」

ちよつと物足りない量のパンが入っていた。

「今から買いに行くのもあれだしなあ、……仕方ない」

ゲート・オブ・パレロン

〈王の財宝〉を手元に開いて中からテーブルクロスを取り出す。

それを軽く振るようにして回し、

「とりあえずバゲットを二本、あと適当にパンの盛り合わせ」

名前を唱えるとテーブルクロスにくるまれるようにして、焼きたてのバゲットとパンの盛り合わせが現れた。

……これで付け合わせの方は良いね。

サラダもあるし、早めのお昼ごはんにはこれくらいで足りるかな……。

「——あ、アルフが居た」

これだと絶対に足りない気がする。いや絶対に足りなくなる。

「お肉食でも焼くか……」

何が残ってたかな、と冷蔵庫を覗いていると、

——トタタタッ。

廊下の方から足音が聞こえた。

……この騒がしそうな足音は……。

冷蔵庫を一旦閉め足音の方を見る。

「——おっなか空いたああああ——ッ！」

口のまわりに白いひげっぽいのを付けた浴衣姿のアリシアが、勢いよくリビングに飛び込んで来た。

……アレはまさか牛乳!?

なんて綺麗なひげが口の周りに……！　　っっていうのはどうでも良くて、

「やかましい」

「あうっ」

ねえ秋介シチューは!?　と騒ぐアリシアに近づいて手刀を落とす。

「上がって来て早々やかましいわ。——アリシアのシチューだけカレーに変えるよ?」

「ごめんなさい!」

ビシッ、とアリシアが直角九十度で頭を下げた所に、

「アリシア、ちゃんと口を拭いてからにして、——っ、早々に何をやらかしたんですか、アリシア!」

タオルを片手に浴衣姿のリニスがりビングに入って来た。

「もう口の周りに牛乳を付けたまま……」

「いやあ、しちゅーのひひにほいがひたはらく、あああー」

「口を拭いている最中に喋らないでください……」

なにを言っているか分かりませんよ、とリニスがため息交じりにアリシアの口まわりをタオルで拭いた。

……いやあ、シチューの良い匂いがしたから、あははー、っ、って感じか。

うん。——別に分かったからと言って特に何も無いんだけどね!

「それにしてもアリシア、何で浴衣着てんの?」

昨日リニスが何着か服を持って来てたよね。そっちに着替えれば

良いのに。

「りにすがきてるのほみへたらきたふなっは」

「いやもう口拭いてないでしようが」

「あう」

ペチンツ、と軽くアリシアのオデコをはたく。

「リニスが着てるのを見てたら着たくなつた」

「……サイズあつたけ？」

確かさつき、俺が見た限りだと置いてあつたのは大人サイズの浴衣が四着。あとはなのはとフェイトの服があつたけど……。

「セラフに聞いたら『お任せください』ってすぐに作ってくれたよ？」

「……あー」

セラフならそれくらいの事は朝飯前だよね。

「二人が上がって来たって事は他の皆も？」

「プレシアとリンディはもう少し浸かってから上がるそうです。フェイトとなのはさんはもうじき着替えを終えて上って来るんじゃないでしょうか」

アルフとエイミィと一緒に、とリニスが答えた。

……リンディにエイミィ、ね。

「そう。ならなのはたちが上がって来たら先に食べようか」

なんのお肉焼こう……、と考えていると、

「へえ。フェイトちゃんとアルフさんってそんなに前から一緒なんだ」

「うん」

「あんたの方はどうなのさ。あの使い魔、ユーノって言ったっけ？」

ネズミを素体にしたのかい？」

「あー、やっぱりそう思っちゃうよねー。私たちも最初はそう思ってたなあ」

「……？」

「えーっと、わたしに使い魔はいなくて、その、……ユーノくんは人間の魔導師さんなんだよ？」

「——えっ!？」

なのはとフェイト、アルフとエイミイさんが話しながらリビングに入ってきた。

そして、

「ネズミか……」

「クロノ……?」

「なんでもない」

気にするな、とクロノとユーノの話す声も聞こえた。

今のクロノ絶対に「フェレット擬きだろう」と言おうとしたよね、と思いつつ、上がって来たなのはとフェイトたちを見る。

「温泉はどうだった?」

「あ、秋介くん! すごいね、あの温泉。入ったら体が軽くなった感じだよー!」

「私は魔力が回復したって感じかな……」

え、あの温泉ってそんな効能あったの?

『ありますよ。腰痛肩こりに病気や怪我、その他にも魔力の回復や美肌効果などが色々です』

「マジか。知らなかった……」

所でセラフさんってばいつの間にも俺の頭に乗ってたんですね? いつもの事だけど。

「……もしかして効能の事、プレシアさんとリンデイさんに教えた?」

『ええ、勿論』

「……」

あの二人が残って温泉に浸かってるって、……効能目当てじゃないよね……?

「――よし。考えるのを止めよう」

此処で俺が悩んでも仕方がないからね!

「アルフ、お肉焼くけど何が良い?」

牛肉はシチューに使ったから無いけど豚肉と鶏肉、あとヒュドラの肉ならある。

「ヒュドラって、……なんだい?」

「神話の怪物」

「何故君はそんな生き物の肉を持つてるんだ……」

持つてるって言うか蔵の中に入ってるって言うか、……まあ気にするな、クロノ。

……調理するのは初めてだけどセラフが居るから大丈夫、……なはず。

セラフなら調理方法を知ってるよね？

『知っていますが……。あれは調理に時間がかかるうえに念入りに血抜きをして、内臓を取らないと毒で今朝までのアリシアさん状態になりますよ？』

「……………」

それってつまり……。

「体から魂が抜け出ちゃう的なアレか」

『体から魂が抜け出ちゃう的なアレですね』

そっかー。もし調理ミスしたら、食べた人が朝までのアリシア状態になるのかあ。

「はっはっは。——アルフ、間を取ってハムで良い？」

一日にそう何度も魂を体に戻すなんて事はしたくないからね！

「へ？ あ、ああ良いけど……。豚と鳥はダメなのかい？」

どっちかと言うとそっちが食べたい、とアルフの尻尾が垂れた。

「いや別に。アルフが食べたいなら焼くよ。時間が無いから簡単な調理しか出来ないよ？」

「おうさ、全然構わないよ……！」

秋介にお任せだ！ とさつきとはうって変わってアルフの尻尾が元気よく揺れた。

「秋介、さつきパンを出した布は使わないの？」

「分かってないな、ユーノ。料理は作って食べたいんだよ。唱えるだけで出てくなんて、なんか手抜き見たいで嫌じゃん」

さつきのパンは一から作ってる時間が無かったから仕方なくだし。

「そういうものなのか」

「そういうものなんだよ、クロノ。じゃあセラフさん、ハムとお肉出してー」

『はいはい、お任せを〜』

セラフが冷蔵庫からハムとお肉を取り出すのを見ながらキッチンに入る。

……さあて、急いで焼こうかな。

いつの間にかアリシアがスプーンとお皿を持ってスタンバイして
るからね！

〜いただきます〜

「なるほどねー。ジュエルシードがこの世界に散らばったのって、運
んでた次元船が事故を起こしたからだったのか」

俺とユーノとクロノはソファーに座ってシチューを食べていた。

「うん。僕が遺跡の発掘中にアレを発見して、管理局に保護を依頼し
ただけど……。運んでいる途中に謎の事故が起きたらしくて……」

謎の事故ってなによ。原因分かってないの？

「いや、原因は一応だが判明している。貨物室の周辺に小型の次元船
がぶつかっただけらしい」

「一応にらしいって。ハッキリしてないの？」

「ああ。事故の前後にあの周辺には、ジュエルシードを乗せた次元船
以外は居なかった、と言う話だ。小型船がぶつかった、と言うのも破
損部を見た見解に過ぎない」

なにそれ怖い。ホントに謎の事故じゃん。

「もしかして幽霊船とかだったたりして……」

「……噂は一応ある」

「マジか……」

どんな噂か気になるね……。

「あ、その噂だったら私知ってるよ〜」

テーブルの方、座ってシチューを頬張るアリシアとハムをかじるア
ルフの横。

なのはやフェイト、リニスと一緒にバゲットとお肉類、サラダの野
菜で簡単にサンドイッチを作るエイミイさんが手をあげた。

「確か次元の海には船の事故で亡くなった人たちが乗る幽霊船が彷徨っている、だったかな？」

「おお、こっちの世界にもあるようなベタな噂だね」

「こっちだと昔の海賊とかバイキングとか、あとは柄杓を要求して来る船幽霊だっけ。」

「にや、今年の夏は海に遊びに行きたくなくなってきたの……」

「なのはがバゲットを持ったまま表情を暗くした。」

『大丈夫ですよ、なのはさん。もし幽霊が出てもマスターが守ってくれますから』

「任せろ。幽霊なんて俺の特製カレー粉で成仏させてやる」

「海がカレーで染まりそうなの……!」

「そうなたらシーフードカレーだね!」

「海かあ……。良いなー、私も行きたいなー。ね、フェイトもそう思わない?」

「うん、私も行きたい」

「じゃあ今年は皆で一緒に行こうよ!」

「ホント!」

「え、でも、その……」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん。——もし幽霊が出ても秋介くんが守ってくれるよ!」

「違うでしょ。フェイトが気にしてるのはそっちじゃないと思う。」

「……うん。秋介が守ってくれるなら、……行こうかな」

「そっちだったの!」

「良いよね、秋介くん!」

「いやまあ、別に良いけど……」

「別になのはとフェイトは俺が守らなくても良いじゃないかな。だって魔法使えるし。」

「……幽霊より二人の魔法の方が怖いよね、とは間違っても言えない。」

「さっきの戦いを見ても思うけど絶対、幽霊が成仏する前に消える。と言うか消されるね。」

「じゃあ私も秋介に守ってもらおう！」

「アリシアは自分の身は自分で守りなさい」

「なんで!？」

「忘れたの？ 朝まで貴女、幽霊だったのよ？」

「それに、

「大丈夫だって。——この前の音楽室の時みたいに何とかなる」

「音楽室って、……もしかしてアレってアリシアちゃんだったの!？」

「その節は大変ぐ迷惑をおかけしました！」

「弾き手の居ない音楽会、アレは大変だったなあ、と思い返してみると、

——トタタドツガツ。

と言う音が廊下から聞こえた。

……今何か、滑ってぶつかつたような音が……。

それにこのパターンまさか……。

「——アリシア、フェイト！ お・待・た・せ！」

「さあ一緒にごはんを食べるわよ！ とおでこを赤くしたプレシアさんが飛び込んで来た。

……ああ、やっぱり。母娘だね。

「さっきのアリシアと同じような飛び込み方。こっちは牛乳ひげじゃなくて赤くなつたおでこだけだ。」

「まずはどっちからあーん、——あうっ!？」

「食事中なんですから騒がないでください、プレシア」

「はい……」

「リニスに手刀を落とされシュン、と大人しくなったプレシアさんがアリシアの向かい側に座った。」

「あらあら、やはり娘さんの事になると人が変わりますね」

「少し遅れてリンデイさんもやって来た。」

「あ、艦長もどうぞ。シチューは私がついで来ますから。量はどれくらいが良いですか？」

「ありがと、エイミー。それじゃあちよつと多めにお願いしようかしら」

「エイミーさんが席を立ち、それと入れ替わるようにリンデイさんが

プレシアさんの隣に座った。

「ではプレシアの分は私が。量はどのくらいで？」

「私も多めをお願いするわ」

リニスも席を立ち、エイミイさんと一緒にキッチンへ入って行く。
……プレシアさんにリンデイさん、なんかさつきより若くなつたように見える。

温泉の美肌効果スゲエ。プレシアさんなんて昨日も若返つたのにまた……。

まあそんな事は横に置いて、

「話がかなり脱線したけど戻そう。それで？ その幽霊船について何か分かつてんの？」

俺としてはちよつと見てみたい。何かしら手がかりがあればセラフに頼んで探すの手伝ええると思うし。

「ん？ ああ、そうだな……。次元船以外の破片が見つかった、と聞いたな。それには文字が書いてあつたそうだ」

ほほう、文字ですか。一体何て書いてあつたの？

「確か、D・S、だつたな」

「……ん？」

何だろう。前にも同じような事があつた気がする。

「D・S……？ 何処かの遺跡で見たような」

「本当か、ユーノ？ それならあとで色々と聞かせてもらいたい」

「うん、それは良いんだけど、……何処で見たんだっけ？」

思い出せない、とユーノがシチューをソファアの前、背の低いテーブルに置いて、腕を組んで考え出した。

「うーん、……あ、確か人の名前だつた気がする」

「人の名前？ それならイニシャルかなにかと言う事か。D・S、そして幽霊船の噂……」

一度本局で調べてみる必要が……、とクロノまでユーノと同じように考え出した。

……D・Sで人の名前って。

いやいやいや。そんな筈はないって。だつてあの人最近見て無い

もん。最後に会ったのって確か一年生の時の遠足だからね。……あ、でも自然公園のアスレチックが変わったり増えたりしてた。

……と言う事は最近もこっちの世界に来てたって事か……。
ならもしかしてその時に……。

「……世界って狭いね、セラフ」

『本当ですね、マスター』

「……?」

今度会ったら聞いてみよう。いつ会えるか知らんけど。

「何か心当たりでもあるのか?」

「いやないよ。心当たりなんて少ししかない」

「少しあるじゃないか」

はっはっは。ちよつとゲーム機の名前に似てるな、って思っただけ。
ホントにそれだけだから気にしないでね!

それよりも、

「俺としてはこのあと、プレシアさんたちがどうするかを聞きたいかな」

「ごはん食べたらもう一回温泉に入って泳ぐ」

「アリシアには聞いてない」

「そんな!?!」

俺が聞きたいのはそう言う事じゃなくて……。

「私たちが今後どうなるか、でしょ。坊やが聞きたいのは」

その通り。俺が聞きたいのはプレシアさんたちがこれからどうなるか、だ。

……俺が関わった以上ハッピーエンドで終わらせたいからね。

プレシアさんたちが何かの罪に問われてバラバラになる、なんてそんな展開にはなつてほしくない。

「——フフ」

「……? どうしたの、プレシアさん」

「まさかそこまで坊やに心配されているなんて、……フフ」

「大丈夫ですよ、秋介君。貴方が心配するような事はありませんから」

む、リンデイさんまでちよつと笑ってる……。

「それってどう言う事？」

「言葉のままです。プレシア女史たちは罪に問われる事はありません。勿論秋介くんも、ですよ？」

……へ、そうなの？

「じやなきやこんな呑気にごはんなんて食べないわよ。ねえ、リンデイ？」

「ええ。もし罪に問うような事があるならば、此処に来る許可なんて出しませんよ」

そんなあつさりと……。あ、もしかして。

「セラフは知ってた？」

『はい。お望みなら何故罪に問われないかを説明しましょうか？』

「んー、……それは別に良いや。長くなりそうだし」

それに、

「ごはん食べてる時に聞くような話じゃないでしょ。そう言うのは寝る前に、子守唄代わりにでも聞くよ」

今日は早起きだったからね。夜は速攻で寝る自信がある。

『つまり聞く気は無い、と言う事ですね』

そうともいうね！

……にしてもいつの間に二人はそんな事を話してたんだろう。

やっぱ温泉に入ってる時か……。二人だけ残ってたし。時間的にも良い機会だったかな。

「あの、……艦長？」

「なにかしら、クロノ。そんなポカンとした顔してどうしたの？」

「いや、あの……」

……ん？

リンデイさんの言葉を聞いてクロノを見ると、確かに呆気にとられたようにポカンとしていた。

……クロノだけじゃなくてユーノまでポカンとして、……ああ、そう言う事ね。

よくよく見たら二人だけじゃない。サンドイッチを頬張るアリシ

アを除いて、さつきまで海がどうのこうのと話していたのはやフェイトたち全員が同じようにポカンとしていた。

「……あむ、むぐ、……あ、……ポカン」

「いや遅いよ、アリシア」

「口でポカンとか言わないの。あとサンドイッチ置きなさいよ。」

「てへっ」

「はいはい、カワイイカワイイ。だから口元についたマヨネーズ拭きな」

「あ、ホントだ」

ペロツ、とアリシアが親指で拭いたマヨネーズを舐めた。

「それで皆、何でポカンとしてるの?」

「多分だけど、プレシアさんとリンデイさんがサラツと言ったからだと思う」

「私たちがサラツと?」

「言ったから、ですか?」

なにを? と揃って首を傾げる二人の周り、

『えっ、えええええ——!?!』

俺とセラフとアリシア以外の皆が一斉に叫んだ。

……おお、耳がキーンってなった。

でもテーブルの料理が零れたり、コップが倒れたりしないようにリアクション取る皆すげえ。

「か、艦長! 罪に問われる事は無いって、勝手にそんな事を決めないでください!」

「そうですね、艦長! 私たちに相談の一つでもあつて良いんじゃないですか!」

「だってクロノは一緒に温泉入っていなかったし、エイミーはアリシアちゃんと泳いで遊んでたじゃない」

「プレシア! 何故そんな大事な事を教えてくれなかったんですか!」

「だってリニスにはフェイトとなのはちゃんの髪の毛を洗っていて、近くに居なかつたじゃない」

詰め寄られるリンデイさんとプレシアさんがそれに、と声を揃え、
「黙っていた方がサプライズになるでしょう?」

言った。

「ああ、なるほど!」

『マスターとアリシアさんが納得しても意味ないですよね』

だよね!。

「えっと、その……。つまりフェイトちゃんは捕まったりしないって
事、……。ですか?」

「ええ。捕まったりしないわ、なのはちゃん。だから今の皆で海に行
こうって話、喜んで受けるわ。日程が決まったら教えてくれるかし
ら」

「——はいっ! 良かったね、フェイトちゃん。一緒に海行けるよ!」
「……うん」

なのはとフェイトが楽しそうに話す向かい側、

「——という訳ですから。くれぐれもよろしくお願いします、クロノ
執務官。それにエイミイ補佐官も」

「はあ、……。分かりました。確かに艦長の言う通りですから、僕の方が
らも嚴重注意程度で済むよう報告書をまとめておきます」

「はい、了解です。それにしても艦長、随分と強引な理由になります
けど大丈夫なんですかね? もし裁判なんて事になったら……」

リンデイさんたちがちよつと気になる事を話してた。

……裁判って……。

それつてもしかしなくともプレシアさんたちが、つて事だよ。結
構危ない橋を渡る気だったっぽいし、万が一にでもその可能性が
……。

「大丈夫よ、エイミイ。そんな事は万が一にも無いわ。だって管理局
提督と執務官が揃って証言するんですもの。今回の事件で特に大き
な被害も犠牲者も出なかったのは、彼女たちの協力で迅速に解決でき
たお陰です、つて」

それに、とリンデイさんは続ける。

「私も同じ子を持つ親として、彼女のこれからを応援したいのよ。」

……家族と過ごす時間は、何ものにも代え難い大切なモノだから」
「艦長……」

ほんの一瞬だけ、リンデイさんがクロノを見たような気がした。

……心配は、……しなくても大丈夫そうだね。

リンデイさんたちに任せておけば悪い事にはならないよね。

「おい、秋介」

「ん？ ——へっ？」

「どうした、間拔けな声出して」

いや、急にクロノに呼ばれてビックリしたと言うか……。

「よく分からんが、……今回の事件についての報告書を作成するにあたって君にも幾つか聞きたい」

なんだ、そんな事か。

「まずはアリシア・テスタロッサの復活に使用した宝具についてだ」

「あ、その話僕も聞きたい。アレは何か、特殊な結界なの？」

「そうね……。ユーノの言う通りアレは特殊な結界だよ。

〈水天日光天照八野鎮石〉っていつて……」

こうして宝具の説明やら軽い世間話をしながら楽しく皆でごはんを食べ、

アリシアの「晩ごはんなに？」という言葉に「鮭か鯛のお茶漬け」ともしかしてうちに泊まってくの？ マジで？ と思いつつながら答え、

「わたしも泊まるの！」と譲らないのはを「今度泊まりに来て良いから」と何とか説得してリンデイさんたちとアースラに帰ってもらった。

……ふ、明日は八時くらいまで寝よう。

今日はいつもより一時間半も早く起きたからね。明日はその分寝よう。絶対に。

『明日は学校がありますからね？』

「あつ」

すごく休みたくなった。

〜数時間後〜

その日の夜。

食器や温泉の片づけ、明日の学校に持って行くお弁当の仕込みを終わらせてあとは寝るだけだね！ とりびんぐでセラフさん特製カフェ・オレを飲みながら一息ついていると、

「あ、秋介……」

パジャマ姿のフェイトがやって来た。

「ん、どした？」

「お水、もらっても良いかな。アリシアがバウムクーヘンを詰まらせ
そうで……」

「……ええ」

バウムクーヘンなんていつの間にも持って行ったんだよ。あの元幽霊少女。

……そう言えば冷蔵庫の中のカットバウムがなくなってたな。

あれ結構な量があったけど全部持ってたのか……。

「なに、二階でバウムクーヘンの早食い大会でもやってんの？」

「えつと違って、その……。アルフとどっちが口に多く入るか勝負になって……」

四個目を口に入れた所だったよ、とフェイトが申し訳なさそうに言った。

「ごめんね。勝手に食べ物持って行って……」

「いやそれは全然良いんだけど……」

くれぐれも気を付けてほしいね。せつかく魂を戻したのに、その日の夜にまた魂が抜け出るなんて事は遠慮してもらいたい。

「はあ。……まあ良いや。それで水だよ」

「うん」

アルフも、って事はコップ一杯じゃ足りないよね。確か冷蔵庫に、……つと。

「はいこれ。とりあえず二本持ってきてな」

冷蔵庫からペットボトルを取り出してフェイトに渡す――。

「えい」

「ひゃうっ!？」

——と見せかけてほっぺにヒタ、と引っ付ける。

『マスター、……………——ナイスです!』

「ふ……………」

イエーイ、とセラフとハイタッチする。

「うう、ビックリした……………」

自分のほっぺに手を当ててフェイトがしゃがんだ。

「急に何するの……………」

「んー、フェイトが何か悩んでるからかな」

「っ……………。うん……………」

今度は自然公園の時みたいになんとなくじゃなくて、しつかり分かった。

……………悩んでるのは多分、自分がアリシアのクローンだ、って事をなのはに言うかどうかだよね。

俺に話してくれた時も悩んでたみたいだし、なのはにも対しても同じように……………。

「……………友達になりたいって言ってくれたあの子に、返事をしたいんだけど」

どうしたら良いか分からなくて、とフェイトがその場に座った。

「……………そっちかあ」

全然違った。俺の予想してたのと全然違ったわ。

「そっちってなにが?」

やべ、口に出てた?

「いやその、……………アリシアのクローンだから云々の方かな、って」

「その事だったら一緒に温泉に入った時にもう話したよ」

しかも既に悩む所か話し終わってるよ。それも温泉で。

『ふふ、——マスター!』

これも知ってたなら教えてよ。セラフさんの意地悪。

……………にしてもコレ、どう答えたモノかな……………。

俺が教えても良いけどなんか、……………それは違うような気がするんだよねー。

「友達になるにはどうしたら良いのかな、秋介……」

「そうねえー……。俺から言える事は一つだね」

「……?」

「どういうこと? とフェイトが首を傾げた。」

「フェイトはもう友達になる方法を知ってる、というか俺相手にもうやってるよ」

「……?」

『マスター、マスター。それで分かるなら悩んだりしませんって』

「それもそうか。」

「じゃあヒント。アリシアがなのはに会った時何をしたか、だ」

「私が秋介にもうやって、アリシアがあの子に会った時にした事……?」

「なんだろう、とフェイトが考え、」

「——抱き着くの?」

「惜しい。確かにそうだったけども！」

「ちよつと違うかな。抱き着く前、というか瞬間かな」

「あ、俺の事は考えない方が分かりやすいかも。」

「……もしかしてな——」

「フェイトが何かを言いかけた瞬間、」

『——アリシアああああ——ッ!?!』

「二階からプレシアさんの絶叫ともとれるような叫び声が聞こえた。」

『た、大変よりニスー! アリシアの口から白いモヤモヤが!?!』

『落ちて着いてください、プレシア! アレはバウムクーヘンの欠片、——じゃなくて魂ですか!?!』

『フェイト、フェイト! 速く水を持って戻って来て! アリシアが』

「……!」

「ドツタンバツタン、続く阿鼻叫喚を想像させる声を聞いて、」

「「……あつ」」

「どうしてフェイトがリビングに降りて来たのかを思い出した。」

「「……ごめんね、秋介。騒がしくして」」

「気にするな。それよりコレ持って早く戻った方が良いよ……」

手に持つペットボトルをフェイトに渡す。

「うん。明日の朝までまだ時間はあるから、さっきの事もう一回考えてみる。……じゃあお休み」

そう言ってフェイトが急いで二階へと戻って行った。

「あいあい、お休みー。……って、あれ?」

明日の朝までって、明日の朝に何かあるの?

『はい。テストロッサ一家の皆さんとアースラ組の皆さんが明日の朝、この世界を離れる事になりました』

「へえー、……ええっ!?!」

そんな事聞いてませんよ!?

『決まったのはつい先ほどですからね。今回の事件についての事情聴取や事後処理、なのはさんとの約束に間に合うには早めに終わらせた方が良い、という事になったそうで』

「あー、なるほど」

なんでずっと一緒に居たセラフがそんな事を知ってるの? と
思っただけど聞かないでおこう。

セラフさんならそれくらい余裕だろうからね!

「なのはにその事連絡したの?」

確かアースラに帰ったあとにうちに帰る、って言ってたよね。

『なのはさんにはリンディさんの方から連絡をするそうです。お見送りの場所は海鳴臨海公園、時間は今日と同じ時間に集合、と言う事です』

マジですか。

「……もう寝ようかな」

明日も早いみたいだからね、……はあ。

〜翌日〜

集合時間よりもちよつと早く来たにも関わらず、既に待っていたク
ロノと合流して海を眺めていると、

「フェイトちゃん! 秋介くん!」

フェレット姿のユーノを肩に乗せたなのはが、手を振りながら走って来た。

「おはよう！」

「うん。おはよう」

「おう、おはよー……」

あ、ヤバイ。ちよつと眠くなってきた……。

……二日連続早起きする事になるとは思わなかった。

しかもこのあと学校があるなんて思いたくないね。

「随分と眠そうだね、秋介」

ピョン、となのはの方から飛び降りたユーノを拾い、肩に乗せる。

「まあね。昨日の夜も日付が変わる頃まで寝むれなかったのよ」

「……何があつたの？」

「バウムクーヘンが原因の阿鼻叫喚の地獄絵図」

「一体君の家で何があつたんだ……」

気にするな、クロノ。ちよつとアリスアの魂が抜けかけただけだ。

「じゃあなのはにフェイト、俺たちは向うに居るから。ゆっくり話しな」

「うん、ありがとう」

「ありがとう」

二人を残して少し離れた所、木製の休憩所に移動して座る。

そしてなのはとフェイトを振り返ると、海を見ながら話していた。

「あはは、……いっぱいお話したい事考えて来たのに、忘れちゃった」

「私は、……うん。私も同じかな。なんて言ったら良いか分からなくなっちゃった……」

あのね、とフェイトが続ける。

「伝えたい事が、あるんだ」

フェイトがなのはの顔を見て、言う。

「君が言ってくれた、友達になりたいって言葉。……私が出来るなら、

私で良いなら、って思う」

「フェイトちゃん……！」

「でも、どうしたら良いか分からなくて、秋介にも相談して、……ずっ

と考えて来たんだ。どうしたら友達になれるのかな、って」

ちよつと照れた顔でフェイトがなのはの方に体を向け、

「簡単だよ、フェイトちゃん」

それに合わせてなのはもフェイトに体を向ける。

「友達になるの、すごく簡単！」

「うん」

二人がお互いに向き合い、

「——名前を呼んで」

言った。

「ぷ、あははっ……！」

「あははっ……！」

なのはとフェイトが同じ事を言って笑う姿を見ながら思う。

……あのヒントで答えが出て良かった。

もしかたフェイトが抱き着く、なんて答えになってたら完全に俺の所為だからね。

「良い子ね、なのはちゃん」

「ええ。彼女はフェイトの事を本当に思ってくれていますね」

「私、なんだか泣けてきたよ……」

プレシアさんとリニス、アルフが見つめる先、

「なのは。わたし、高町・なのは」

「フェイト。私はフェイト・テスタロッサ」

二人が改めて自己紹介をしていた。

「フェイトちゃん」

「なのは」

なのはがフェイトの手を取り、

「ありがとう、なのは」

フェイトがその手に自分の手を重ねた。

「友達になりたいって言ってくれて、本当にありがとう、なのは」

「っ……！」

ツウ、となのはの目から涙が溢れた。

「あれ、……急にどうしたんだろう。もう会えない訳じゃないのに、

……っ！」

なのはが溢れる涙を拭うが、次から次へと涙が溢れ出る。

「大丈夫。すぐにまた、会えるから」

フェイトがなのはの涙を拭い、

「だから、その時はまた君の名前を呼ぶよ」

「——うん、うん！ フェイトちゃん……！」

なのはがフェイトの胸に飛び込んだ。

そして、

「秋介え——ッ！」

「はいはい」

ガシイ、ともらい泣きしながら飛び込んで来たアリシアを受け止める。

「——そんな。今絶対にアリシアは私の胸に飛び込んで来ると思ったのに……！」

「プレシア……」

「うう、……この際アルフでも良いわ。——さあ、来なさい！」

「プレシア——ッ！」

ヒシイ、と抱き合って泣くプレシアさんとアルフが視界に入ったけど今は無視しよう。

「うう、……ズピ。秋介え、……うあああん」

「まったく。お姉ちゃんが泣くなよ」

カッコ悪いよ、とアリシアの涙を拭う。

「グスツ。……フェイトに見られてないから良いの！ でも……」

うあああ……、とアリシアの瞳から次から次へと涙が溢れる。

「どうぞ、アリシア。これを使ってください」

「ん。ありがと、リニス」

アリシアがリニスに受け取ったハンカチで顔を拭いた。

……またすぐに会えるだろうに。

そこまで泣かれるとこっちまで泣きそうになる。

『残念です。マスターの泣き顔が見られると期待していたのに……』

そんな期待は要らないよ、セラフ。

「……そろそろ時間だ」

「あれ、もう？ 二人にゆっくり話しな、って言ったんだけど……」

「これ以上は、……余計に別れ辛くなるだけだろう」

「ああ……」

なるほど。確かにこれ以上は別れが辛くなるよね。

「行こうか」

「だね」

立ち上がり、二人の元へと向かう。

「お二人さん、ちよつと良い？」

「すまないが、そろそろ時間だ」

「……うん」

「秋介くんはユーノくん。それにクロノくんも、……あ、フェイトちゃん！」

「……？」

なのはが自分のリボンを解き、

「思い出にできるの、こんなものしかないけど……」

フェイトに差し出す。

「じゃあ、私も」

フェイトも自分のリボンを解いてなのはに差し出す。

二人が互いの手に自分の手を重ね、

「なのは……」

「フェイトちゃん……」

「またね」

笑顔でリボンを受け取った。

……あ、今のちよつとヤバイ。

涙腺が、と抑えようとしたら、

「なのはっ！ またねえ——！」

「はにやつ!? アリシアちゃん!？」

アリシアがなのはに突撃した。

……一気に泣く気分じゃなくなったね……。

タイミングが良いのか悪いのか、困ったお姉ちゃんだなあ。

「じゃあね、なのは。また今度」

「こつちに戻れるようになったら連絡するわ。だからまたね、なのはちゃん」

「アルフさんにプレシアさん……」

二人は撫でられるなのはが恥ずかしそうに笑う。

「じゃあ僕もそろそろ」

「またな、クロノ」

「ああ。……所でユーノはこつちの世界に残るのか？」

あ、それ俺も気になってた。さつきから俺の肩に乗ったままだけど……。

「もうしばらくはね。なのはにまだ魔法を教えて欲しい、って頼まれたから。……僕としては、これ以上は教える事は無いんだけどね」

「そうか。なら帰りたくなったらいつでも連絡をくれ。こつちで手続きを済ませるから」

「ありがとう、クロノ」

フェレット姿で短い手を振るユーノを軽くつまんで、ヒョイ、となのはの肩に移す。

「秋介」

フエイト？

「ありがとう、秋介。しばらく会えなくなっちゃうのは寂しいけど、……またね」

「ん、またね。いつでもうちに遊びに来て良いから」

「やったね！」

「アリシアは、……まあ良いや。風引かないように気を付けなよ」

「うん！ 色々ありがとうね、秋介！ それにセラフも！」

『はい、また今度です。お元気で』

元気でね、と二人に挨拶を済ませ、

「じゃあ行こうか」

クロノの言葉と同時に魔法陣が現れ、プレシアさんたちがその中に入った。

「あれ、何でリニスはこつち側に居んの？」

プレシアさんたちと一緒に行くんじゃないの？ てつきりついて行くと思つてたけど……。

「やっぱり一緒に帰らない？」

「リニス……」

アリシアとフェイトが寂しそうな顔でリニスを見る。

「……だって私、今は秋介の使い魔ですから。フェイトたちの前から黙って消えて、生きている事も連絡しなかったのに、今更どんな顔で一緒に暮らせと言うんですか」

私には分かりません、とリニスが悲しげに顔を伏せる。

そんなリニスを見て、

「スウ、——はあぁ……」

大きく、そしてわざとらしくプレシアさんがため息をついた。

「プレシア……？」

「リニス、まったく貴女は……。そんな事で悩むくらいなら直接私たちに聞きなさいよ。どんな顔と一緒に住めば良いですか、って」

いやプレシアさん。それはなんか違う気がする。

此処は普通「そんな事気にしないで一緒に帰りましょう」とか言うんじゃないの？

「では聞きますが、……どんな顔して一緒に暮らせば良いんですか？」

え、リニスさんつてば聞いちゃうの？

「知らないわよ」

即答!? しかも自分から聞けとか言ったのに知らないって酷くない!?

「だってリニス、生きていた事連絡してくれなかったんですもの」

プイ、とプレシアさんがそっぽ向いた。

……照れ隠しかあ。

言うのが恥ずかしいなら言わなきゃ良いのに。

「はい、はい！ 私分かるよ！ 名ま——」

「名前を呼んで、とかは無しだからね、アリシア」

「……フェイト、パス」

おい。

「えつと、……じゃあ笑って、それで一緒に暮らそう?」

「そうだよ、リニス。フェイトの言う通りだ。……帰って来る時は、笑顔で帰って来ておくれよ」

「フェイト、アルフ……。私は……っ!」

その……、とリニスが言葉を飲んだ。

「ねえリニス。もしかしてだけどき、——俺に恩を返さなきゃ、とかまだ思ってる?」

「——ッ」

やっぱりそうか。

「命を助けた恩とかはもう、返してもらってるからね? ……ありふれた事を言うけどさ、今日まで一緒に過ごしてきた思い出がそうだよ」

言つてて恥ずかしくなってきたけど、此処は我慢して続ける。

「一緒にごはんを作って食べたり、お散歩に行ったり。魔法の特訓に付き合ってもらったりしながら過ごしてきた日々や思い出が、リニスからの恩返しだと俺は思ってる」

だから、

「俺の事はもう良いから。これからはプレシアさんたちとの思い出を作りに帰りな」

「——秋介ッ!」

ギユ、とリニスに優しく抱きしめられた。

「はい、……グス。分かりました。——行ってきます、秋介」

「うん。——行ってらっしゃい、リニス」

ヤバイ。リニスにつられて俺も泣きそうになって来た。

「ちよつと、……離れて」

流石にこれ以上は恥ずかしさと相まって大泣きしそう……。

『そんなマスター、私は見たいです』

「私も」

セラフとアリシアはちよつと黙ってください。

「……はい。それではこの辺にしておきましょうか」

リニスが俺から離れ、プレシアさんたちの方へと歩いて行った。

「お帰りなさい、リニス」

「ただいま、プレシア」

二人の笑い合う姿を見て、思う。

……これで一件落着、だね。

あ、そう言えばうちにあるリニスの荷物とかどうするんだろう……。

『それではリニスさん。荷物の方は後ほどそちらに転送しますので、向うに着いたら連絡してください』

「はい。ありがとうございます、セラフ」

おお、流石セラフさん。抜かりが無いね！

「ごめん、なのは。それにクロノとユーノも」

俺の関係で時間を取らせて、本当にごめん。

「ううん。気にしなくて良いよ」

「ああ。気にするな、秋介」

「ちよつと感動のお別れがあっただけ、でしょ？」

む、クロノとユーノにそれを言われるとは思わなかった。

「じゃあ今度こそ本当に行こうか」

クロノが魔法陣の中に入り、

「またな」

「じゃあね」

「おう」

ユーノと一緒に手を振って挨拶を済ませる。

「ッ……！」

「っ……！」

フェイトとなのはが手を振ると同時に魔法陣が光だしそして、

「「またねっ！」」

皆は転移の光に包まれ帰って行った。

「帰るか」

「うん」

なのはとユーノと一緒にその場をあとにする。

『帰るのは良いんですけどマスター。それになのはさんも。……学校

の事、忘れてませんよね?』

「……はあ」

「……にや」

「二人とも……」

やっぱ行かないきやダメかあ。

『頑張つて行きましようよ。——今日はお昼までなんですから』

「え、マジで?」

『マジです。今日からテスト週間になっていますから』

あー……。そうだったんだ。完全に忘れてたよ。

「確か今日のテストは国語と理科だったっけ?」

『はい。その二教科だけですわね』

「き——」

「なのは……?」

ユーノが首を傾げ見上げると、

「聞いてないよ——っ!」

なのはが叫んだ。

……耳が……!

てか、俺よりユーノが大丈夫か? 思いつきり耳元で叫ばれてるよ

ね!?

「キュツ——!」

おお、器用に耳を塞いでる……!

「どうしよう、秋介くん!」

わたし勉強してない! となのはがあたふたし始めた。

「良いか落ち着け、なのは。——一旦うちに帰って朝ごはん食べよう」

まだバスの時間まで余裕がある。転移で戻れば食べたあとに、少し

でも勉強する時間はある筈だから。

「——はっ! そ、そうだね。お、お願いします!」

「じゃあセラフさんよろしくー」

『はいはい。では、なのはさんのおうちから道具一式と一緒に転移さ

せておきますわね』

「セラフは凄いの……!」

そりやそうだ。

「なにせ俺のデバイスは——」

『だって私は——』

足元に魔法陣が展開され、

『——次元世界一のデバイスだからな（ですからね）！』

光に包まれると同時にうちに帰った。

あ、ちなみに朝ごはんはおにぎりとたくあんだからね！

日常編

第二十一話：最近のアトラクションはリアルだね！

テスト週間も終わりを迎えた今日。

「それじゃあ皆、テストお疲れ様でした——ッ！」

「二「お疲れ様でした——ッ！」三」

学校帰りになのは、アリサ、すずかと一緒に翠屋に寄りシユークリームをご馳走になっていた。

店内の角席。

通路側の椅子に俺が座って窓側のソファーに右からなのは、アリサ、すずかの順に座り、

「美由希、なんでお前が音頭を取るんだ。此処は普通なのはたちが取るべきだろう」

「良いじゃん、別にー。私も今日でテスト終わりだし、此処はやっぱり年長者である私を取るべきだと思うんだよね。ね、忍さん？」

「今日はすずかたちが主役だから、あの子たちに取ってもらうべきだったかな」

「えええー」

忍さんまでそんな事言うのお、とオレンジジュースの入ったコップを片手に話し合う年長組の席を横目に、土郎さん特製カフェ・オレを一口。

ちなみに。なのはは牛乳、アリサはリンゴジュース、すずかはぶどうジュースを飲んでる。

「あく、美味い……い！」

うん。やっぱり桃子さんのシユークリームに土郎さんのカフェ・オレは最高に合うね！

……それもテスト終わりと言う絶好のタイミング。

これは誘ってくれた土郎さんと桃子さんに感謝しないとね。

ありがたやく、と高町夫婦を拝んでると、

「——と言う事だから秋介。あんた明日、予定ちゃんと空けときなさ

いよー!」

バン、とアリサがテーブルに手をついてこっちに身を乗り出していった。

「え、なに。何かあんの?」

「テストを頑張ったご褒美って事で明日。皆で遊園地に行こう、って事になったのよ!」

「遊園地って、どこの」

「夢の国に決まってるじゃない!」

あー、あそこか。

「ちよつと前に新アトラクションが追加された、ってテレビでやってたよね」

「そう! そうなのよ、すずか! あたしはそれに乗りたいのよ!」

グツ、とアリサが右の拳を握り、

「古代から伝わる聖なるモノ、それを求めて魔宮を巡る探検型アトラクション! そんな面白そうなモノが追加されたなら行かない手はないわよ——ツ!」

ものすごくキラキラした目で力説された。

「ほほう。それは確かに……」

「ちよつと気になるかも……」

「でしょ、でしょっ!」

「遊園地には私の姉ちゃんと、なのはちゃんのお兄さんが保護者役で一緒に来てくれるんだって」

忍さんと恭也さんか。じゃあもしかして二人はデート気分だったりして……?」

チラツ、と隣の席を囲む年長組の方を見ると、

「え、恭ちゃん皆と夢の国行くの? 良いな、良いな! 私も一緒に行きたいな——!」

「ダメだ。美由希の場合なのはたちと一緒にになって楽しんで、保護者役所じゃないからな」

「ふう、ケチいー。……恭ちゃんだって忍さんとデート気分な癖に」
「ブフツ!」

「——プ、あつははは——ッ！」

「おい、美由希！　そ、それに忍まで……！　くっ、俺はあくまでなのはたちの保護者役として行くんだ。断じてデート気分なんかじゃないからな！」

本当だぞ?!　とオレンジジュースを噴き出した恭也さんがあたふたしていた。

……ふ、これはもうアレだね……。

あんな反応を見たら俺たちが明日、夢の国についてやる事は一つしかない。

「——すずか！　今すぐノエルさんとファリンさんに電話だ！」

「追加の保護者役だね。任せて！」

「良い、なのは？　明日向うに着いたらまずあたしたちがやる事は……」

「お兄ちゃんと忍さんを二人つきりにする、だよね！」

その通り。名付けて「せっかくなんだから二人で夢の国を旅行デートしてきなよ」作戦……！

『楽しんでますね、マスター』

『当然』

此処で楽しまずして何処で楽しむと言うのか。

……いやあホント、明日が楽しみになって来たね！

寝坊しないように今日は早く寝ようと、そう思った。

くそして次の日く

快晴の空の下。

夢の国へとやって来た俺たちは開園と同時に新アトラクションを目指して走った。

その途中、追加の保護者役で来てくれたノエルさんとファリンさん。あとダメと言われたのにちゃっかりついて来た美由希さんに協力して貰い、恭也さんと忍さんを二人つきりにする為の作戦が決行された。

……まあ、作戦と言つても別にたいした事じゃないけどねー。

単に皆がバラバラの方向に走って、二人に見つかからないように新アトラクションの所で合流する。それだけの事だ。

「——皆様、今です！」

『了解っ！』

「な、なんだ!？」

「ああ、なるほど」

ノエルさんの合図と共に、この遊園地の象徴の一つである大きなお城を分岐点に俺となのは、アリサとノエルさん、すずかとフアリンさんと美由希さんの三手に別れる。

「いくぞ、なのはー!」

「う、うん、——つて、ええっ!?!」

俺は此処まで頑張つてついて来たのはを足元から抱え上げ、

「ちよつとだけ我慢してよ……!?!」

「はにゃあああ——っ!?!」

いわゆるお姫様抱っこ状態で新アトラクションの元へと走る。

お城を抜け、フアンタジー感あふれるアトラクションエリアに入った所で走る速度を上げた。

どうして走る速度を上げたかと言うと、

「——待て、秋介! どういう事か説明しろ!」

背後から恭也さんが追って来るからである。

……はっはっは、——恭也さんすげえ!

こっちは軽くだけ魔力で強化して走ってるのにあの人、なんか追いつきそうな勢いなんですけども!?!

「どう言う事って、恭也さんと忍さんにデートしてもらうぜ!——つて事ですが!」

だから俺たちなんか追いかけないで忍さんの所に戻ってくれませんかね!?!

「そうはいくか! 此処に遊びに来たのはお前たちが頑張ったご褒美だ。俺たちに変な気を遣うな!」

「別にそんなつもりは無いんですけどねー、——つて、恭也さん後ろ

！」

「なに、——おわっ!？」

恭也さんが振り向いた先、

「まったくもう……。置いていかないでよ」

夢の国のナンバーワンマスコットの耳型カチューシャを頭に付けた、忍さんが居た。

「忍!? その頭の耳はどうした!？」

「どうした、ってデートを楽しむ為に買ったのよ。ほら。恭也の分もあるわよ?。」

「ま、待ってくれ! 俺たちはデートしに来た訳じゃ——」

「忍さん、恭也さんの事をお願いします!。」

「ええ、お願いされたわ。——行きなさい、秋介!。」

「なっ!。」

ちよつと待て——っ! と忍さんに足止めされた恭也さんの叫びを聞きながら、先を急ぐ。

くほう。コレが新アトラクションか……く

忍さんに恭也さんに任せて走る事数分。

俺はファンタジー感あふれるエリアからアラビアンなアトラクションエリアに入り、そこを走り抜け、遺跡のような見た目の、皆との集合場所である新アトラクションに到着した。

……皆は、……まだ来てないか。

それもそうか。途中までは魔力で強化して走ってきたわけですし。アリサやすずかたちより先に着くのは当然だよね!。

というか、

『なんか周りに見られてない……?』

此処まで走って来る途中もそうだけど、さつきからずっと見られてる気が……。

『そりゃあマスター。女の子をお姫様抱っこした少年が走っていたり立っていたりしたら、誰でも振り向いて見ますって』

え？ ……あ、忘れてた。

「ごめん、なのは」

「だ、大丈夫なの……！」

そつとその場になのはを降ろす。

『よくこんな人目の多い所でお姫様抱っこなんて選びましたね』

『いやまあ、……だってねえ？』

顔が熱いの……、と赤くなった顔を手で扇ぐなのはを見る。

……なのはって空を飛ぶのは得意なのに走るのは苦手なんだよなあ。

恭也さんの事だから俺たちの事を追ってくると思ってたし、あの人から逃げ切るのにはなのはを抱えて走った方が早いかなー、って。

それに、

『此処は夢の国だからね。お姫様抱っこした方が場所的にもピッタリでしょう』

『……マスターって偶に思いっきり大胆になりますよね』

偶には、ね。

「うう、前もって言って欲しかったよ……」

「ホントごめん」

「うん。……次はちゃんと教えてね？」

そう言つてなのはが扇ぐ手を止め、

「……あ、アリサちゃんとすずかちゃんたちだ！ おーい！」

此方へと走つて来る皆を、なのはが手を振りながら迎えに行つた。

……次は教えて、って。

そう何度も恭也さんに追われるような状況は遠慮したいんだけどなー。

『別に追われる状況じゃなくても良いじゃないですか』

『それは、……なんか恥ずかしくない？』

『先ほどのように大勢の前で抱えるよりは、恥ずかしくないと思います』

だよねー。俺も言つて思った。さっきの方がメツチャ恥ずかしいんじゃない？ って。

……そうだ。今度はアリサとすずかもお姫様抱っこで抱えて走ってみよう。

どんな反応するかなー、と考えてたら、

「——遅いですね。まったく、一体どこまで行ったのやら……。と言
うかどうしてこのような事に、……はあ」

白いブラウスに青のスカート。

金髪碧眼で整った顔立ちに、何処か騎士のような雰囲気を纏った中
学生くらいのお姉さんが、いつの間にか隣で頭を抱えていた。

……はい？

え、ちよつと待って。この人ってまさか——。

「——うそお」

「どうかしましたか？」

やつべ。口に出ちやつた!?

「い、いやその、……ちよつと一緒に来た子に置いてかれちやつて
……」

「なんと、それは大変です。その子が何処に行ったのか心当たりはあ
りますか？ あるのなら其方まで一緒に……」

「あー、大丈夫です。見える所に居ますから」

あそこ、と楽しそうに何かを話すのはたちを見る。

あ、美由希さんとファリンさんがキヤーキヤー言いだした。しかも
なのはがまた赤くなった。

何故に……？

「そうですか、それは良かった。……あまり、お連れの方たちと離れな
いようにした方が良いでしょう？ このように広い場所では、迷子に
なったら大変ですから」

「……ですね。心配してくれてありがとうございます」

「いえ、気にしないでください。お礼を言ってもらおうような事はして
いませんから。それよりも、この辺りで私に似た顔の——」

と、お姉さんが何かを言いかけた時、

「おーい、父上！ コレ見てくれよ、コレ！ 限定味のポップコーン、
最後の一個が買ったんだぜ！」

なのはたちが居る向う側。

オレンジのTシャツに短パン、隣に居るお姉さんと瓜二つなお姉さんがポップコーンバケットを掲げながら走って来た。

「……申し訳ない。どうやら騒がしい連れが戻って来たようなのでこの辺りで失礼します」

それでは、とお姉さんは軽く頭を下げ、呆れ顔で走って来るお姉さんの方へ歩き出した。

「へっ、どうだ父上！ オレ様にかかれればこれくらいどうって事——」
「そんな事はどうでも良いですから、早くそのポップコーンを渡しなさい」

お姉さんがもう一人のオレンジTシャツのお姉さんと合流し、

「お、おう……。どうぞ」

「それと、あまり騒ぎながら走るのは止めなさい。周りの方々に迷惑が掛かります」

ポップコーンを受け取り、さっそくバケットの蓋を開け、中身を口に運んだ。

「は、い……」

「……ですがまあ、それはそれとして良くやりました。このポップコーンは中々に良い味です」

「ち、——父上に褒められたあ——ッ!？」

「きゅ、急に叫ばないでください！ 回りの方々に迷惑です！」

ほら、向うに行きますよ！ とオレンジTシャツのお姉さんの首根っこを掴んで連れて行った。

……なんか、すごいモノを見た気がする。

しかもあの二人ってまさか……?？」

『ねえセラフさん、あのお姉さんたちの事なんだけど……』

『聞きたいですか?』

『……いや、やっぱりやめとくわ』

お姉さんたちについてはまあ、文字通り神のみぞ知る、って事にしておこう。

……まったく。良いサプライズだね……。

なんかあの二人だけで終わる気がしない、と言うかむしろ始まった
気がするの俺の考えすぎ？

……まあ良いか。だって、

『今日の楽しみが増えましたね、マスター』

『ホントにね』

セラフの言う通り楽しみが増えたからね！

「こらー、秋介！ そんな所で遊んでると置いてくわよ——！」

おっと。皆がいつの間にか列に並んでる……。

「秋介君、早くー！」

「あいよー、今行くー」

さて、それじゃあ新アトラクションとやらかに並びますか……！

く聖なるモノとは一体……!?!?

新アトラクションの列に並んで数分。

遺跡内へと入った俺たちは、

『——これから君たちが向かうのは呪われた魔宮。そこに眠る聖なる
モノは、この世のありとあらゆる願いを叶える力を持つと、そう言い
伝えられている』

何処からか聞こえる男の声を聞きながら、八人乗りのジープ型ライ
ドに乗りこむ。

「こういうのはやっぱり端っこに座った方がスリルを——」

「端っこはあたしが座るわ。あんたはその次！」

「——……あい」

「えーっと、……先に乗るね？」

「うん。じゃんけんで決まった事だから気にしなくて良いよ、すずか
ちゃん」

前の座席に奥からアリサ、俺、すずか、なのはの順で座り、

「うはー。思ってたよりリアルに出来てるねー、この遺跡」

「ほらファリン、足元が暗いですから気を付けてください」

「大丈夫ですよ、お姉さ、——もうあつ!？」

「がつ!？」

「言った傍から……。大丈夫ですか、美由希様？ それにファリンも」

「な、なんとか〜……」

頭痛い……。と後ろの座席。先に乗った美由希さんに転んで頭突きをかましたファリンさんを助け起こしながら、ノエルさんが乗り込んだ。

大丈夫……。？ と思いながら後ろの年長組を見ていると、

『さて。ライドに乗り込んだのならしっかりとシートベルトを締めてもらいたい。まあ別段、そんなモノを締めなくとも大丈夫だとは思いますが……。念の為だ。投げ出されたりしないように、な。それから——』
何処からか聞こえていた男の声が、ライドについたラジオっぽいスピーカーから聞こえた。

「あ、そうか……」

座席に備え付けられたシートベルトを引つ張りしっかりと固定する。

……む、これつてまさか。

シートベルト差し込み口にももの凄いなじみのある二文字が彫ってあった。

——D・S、と。

「……………」

なんだろう。自然公園のアスレチック？ の例があるから安全面に関しては大丈夫だとは思うけど……。

……途中でどう動くか、がもの凄く心配になってきた。

あの人の事だから単に上げて落とす、とかは選ばないような気がするんだよねー。

『ふふふ』

あコレ絶対に上げて落とすタイプじゃないな。セラフが淡く光っているのがその証拠だね！

どんなタイプか聞いてみようかな……。と悩んでたら、

『——とまあ以上の事を注意さえすれば多少の危険はあれ、命の保証はされるだろう。くれぐれもその車から身を乗り出さないよう心掛

けてくれ』

このアトラクションの注意事項を一通り男の声が話し終え、ライドが走りだした。

ライドは時々大きく車体を揺らし、所々崩れかけた遺跡の道に敷かれたレールを進んでいく。

進んだ先。壁が崩れて中が覗けるようになった部屋の前に差しかった所で、

『ああそうだ。君たちに伝え忘れていた事があった』

再びスピーカーから男の声が聞こえた。

『君たちが探す聖なるモノだがアレは、言い伝えによると杯のような形をしているそうだ。それに加えてその魔宮には聖なるモノを守る七人の守護者が住まう、とも言い伝えがある』

前を通過する部屋の中に大きな黄金の杯と、それを囲むように並ぶ七体の黄金像が並んでいるのが見える。

……願いを叶える力を持つ聖なる杯、ねえ……。

しかも黄金だよ。まるで映画とかお伽噺に出てくるようなモノじゃないですかー。ははっ。

『まあせいぜい彼らに出会わないよう祈る事だな。アレに見つかったら最後、君たちは侵入者として排除されるだろう』

ライドは部屋を通り過ぎて今度は坂道を上り、

『もし君たちが聖なるモノを見つけ出し尚且つ、彼らから逃げ遂せこの魔宮を見事脱出する事が出来たのなら——』

頂上に着くとその場でピタ、と止まった。

……嫌な予感が……！

それに今思っただけこの声ってもしかして——。

『——喜べ諸君。君たちの願いはようやく叶う』

そう、不敵に笑うような男の声が響くと同時に、ライドの下にぽっかりと穴が開いた。

『えっ——』

そして、

「うっそう……」

ライドが吸い込まれるようにしてその穴に落ちた。

……フワツ、つて。今体がフワツ、つてした……!

いきなり道が消えてそのまま真下に落とすとか、——中々やるね!?

『はっはっは、——コレは一本取られたね!』

『相変わらず意外と余裕ですね、マスター』

『言ってる場合じゃないよ、秋介くん!』

だよー。

じゃあ皆揃って、

『キヤー——ツ!?!』

叫んだ。

「ちよつ、なんで急に道が消えるのよ!」

「作った人の好みなんじゃないかなあ……!」

あの人の事だから「その方が普通と違って面白いだろう?」とかさも当然な顔で言うような気がする。と言うか言うね、絶対!

「そう言う事を聞いてるんじゃない——」

「きゃー! 助けて……!」

「——つてすずか!? あんたどさくさに紛れてなに秋介に抱き着いてるのよ!」

「そこに秋介君が居るからだよ!」

「意外と余裕ね!? ——ならあたしだつて!」

ガシイ、と二人に抱き着かれ、

「だったらわたしも、——ああっ、届かない!」

シートベルト……! となのはが体を引つ掛けた。

「ちよつとお二人さん!」

抱き着かれると動けなくて怖さが倍増するんですが!?

「嫌なの?」

「はは、そんなワケない!」

むしろ嬉しい。こういう状況で頼られるのって嬉しくなってくるよー。

『言ってる場合ですか、マスター。——また落ちますよ?』

『えっ——』

セラフが言うや否や、

——ドボンッ!

今度は穴じゃなくて水に落ちた。

その衝撃で大きな水飛沫が上がり軽い雨のように降ってくる。

……遺跡の地下にあるって事は、此処は地底湖って事か。

意外と水が澄んでる、と周りを見ていたらライドが動きだした。

……おお。よくよく見たら水の中にレールが浮いてる。

そのレールに沿い、ライドが水をかき分けながら目の前に見える洞窟へと進んでいく。

「ああもう! びしょ濡れ、……ってあら?」

「服とか濡れなくて良かったー……」

「お姉ちゃんたちは大丈夫……?」

「なんとかさ」

「このシートベルトのお陰で投げ出されずに済みましたね……」

確かに。ノエルさんの言う通りだね。

今日ほどシートベルトに感謝する日はもう来ないんじゃないかなあ。

「……アリスちゃん、すずかちゃん。いつまで秋介くんを抱き着いてるの?」

「このアトラクションが終わるまでよ」

「また落ちたりしたら大変だからね」

「ずるい……」

そんな三人のやり取りを聞きながら一息。

「はあ……」

俺たちを乗せたライドは上の遺跡道とはうって変わって、鍾乳洞のような洞窟の中へと進んでいく。

『……………』
「……ん?」

後ろの方から何か、不気味な唸り声のようなモノが聞こえた。

……そう言えばこの魔宮には七人の守護者が居る、とか言ってたな……。

ふと、さつき聞いた男の言葉を思い出す。

『アレに見つかつたら最後、君たちは侵入者として排除されるだろう』
てことはつまり。今聞こえた唸り声っぽいモノって……。

顔を動かして後ろを見ると、

「やっぱ居た……」

洞窟の入り口から細身の体に悪魔のような頭、大きな剣を持った黒いモノがこちらを覗いていた。

「なにが居たのよ」

「狂戦士、かな」

「……?」

アリサとすずかが顔を上げて俺と同じ所を見た。

「どうしたの、——っ!?!」

「二——ッ!?!」

二人につられてなのはや年長組が振り向き、

『■■■■■■■■——ッ!!』

『キヤー——ッ!?!』

狂戦士が吠えるのと同時に本日二度目の叫びが響いた。

『■■■■■■■■——ッ!』

「——っ!」

此方に向かって剣を振り回しながら走って来る狂戦士から逃げるように、俺たちを乗せたライドが速度を急激に上げる。

……うわ、速え!

追従して来る狂戦士を引き離しライドはそのままの速度で洞窟を走り抜ける。

走る先、光が見えた。そこをめがけてライドが突っ走り……。

「マジか……!」

洞窟を勢いよく飛び出し、中央に祭壇の置かれた広間のような場所に出た。

そのままの勢いで祭壇を飛び越え着地と同時に大きくライドが跳ね、着地する。

……あの祭壇に置いてあるアレは……!?!

まさか、と思った瞬間、

『■■■■——ッ!!』

俺たちが飛び出してきた出口の横、壁を突き破って狂戦士が現れた。

『——ッ!!』

狂戦士は俺たちを見つけ、地面を蹴る。

「イヤ——ッ!?!」

「ちよっ——」

飛んで来る狂戦士は右手に持つ剣を構え、俺たち目がけて振り下ろす。が——。

『——!』

『■■■■ッ!?!』

紅い、髪のような装飾を腰まで垂らした銀の騎士甲冑が横から現れ、狂戦士の刃を剣で止めた。

それと同時にライドが急発進する。

「騎士さんありがとう——!」

『——』

なのはのお礼を聞いて騎士甲冑が狂戦士を振り払い、俺たちを見て軽く手を振ってくれた。

意外と余裕だね、あの騎士甲冑!?! と思ったけど口に出さない事にする。

……だって俺が言えた事じゃないからね!

まあそれはそれとして。

騎士甲冑と狂戦士が響かせる剣戟の音を聞きながら、俺たちを乗せたライドは再び遺跡の中へと突入した。

「そろそろ折り返しかな!?!」

「だろうね、すずか! さっきの所にアレがあったから!」

「秋介くん! アレってなに!?!」

「そりゃ聖なる、——うおっ!?!」

モノ、と言いかける途中、道を真っ直ぐ走っていたライドが急に左へと方向転換した。

「また何か来たわよ!？」

「そんなあく……!？」

「飽きさせませんね、このアトラクションは!」

アリサが叫んだのを聞いて美由希さんとフアリンさんが抱き合つて涙目になり、ノエルさんが後ろを見た。

「今度は、——暗殺者ですか!？」

「マジで!？」

ノエルさんの言葉を聞いて俺も後ろを見ると、

『——』

白い髑髏のような顔に狂戦士よりも細い体、黒の双剣を手に壁から天井へと駆けり移るモノが居た。

「それだけではありません! あの時暗殺者の奥からまだ何か来ます、秋介様!」

ノエルさんが指した先。騎馬が引く馬車に乗り、右手で長槍を左手に手綱を握るモノが現れた。

「うーわ、騎兵まで来ちゃったよ!」

「秋介くん! 前、前——っ!」

「ん? ——おおうつ」

暗殺者と騎兵に続き……。

「今度は魔術師……!？」

ローブに身を包み、本を片手に杖を構えるモノが待ち構えていた。
『……………!』

魔術師が大きく杖を頭上に掲げ、周囲に光の弾を展開した。

『マスターやなのはさんのシューターと比べたらまあまあなモノですね』

『ふ……………!』

『喜んでる場合じゃないよ、秋介くん!』

おっといけね。つい頬が緩んじやった……。

……それにしても此処までに出て来たのは狂戦士に騎士甲冑、それに暗殺者と騎兵と魔術師か……。

この流であとに出てきてないのは……、と考えていたら、

『……ッ！』

魔術師が杖を振り下ろし光の弾が放たれた。

「ええ、——つてあれ？」

放たれた魔力弾は俺たちの頭上を通過し後ろを走る暗殺者と騎兵へと向う。

『……ッ！』

暗殺者が身を捻り、騎兵は手綱を左に引っ張って馬車を左にずらす事で向かってくる光の弾を躲した。が、

『……ッ！』

魔術師はすかさず新たに光の弾を展開し、次々に放っていく。

「あの魔術師もさっきの騎士甲冑みたいに助けてくれたの!？」

「お助けキャラって事なんじゃないの!」

残りがどつちかは分からんけどね!

「まだ居るの!？」

「多分!」

言った直後、ライドが魔術師の前で右へと車体を回す。

そして、そのまま真っ直ぐ先に見える上り坂へと続く吊り橋を渡る。

「あつとっはつきゆうっへ、——いあ!？」

舌噛んだあ……!

『揺れる橋を渡っている時に喋ったらそうなりますって、マスター……』

うう、と口を押えてる内に吊り橋を渡りきり、ライドが坂を上りだす。

『……ッ！』

『……ッ！』

途中、後ろを振り向くと、幾つもの道に分かれる十字路で魔術師が暗殺者と一対一で相対していた。

「騎兵が居ない……?？」

何処に、と思った矢先、

『……ッ！』

左の壁を突き破り隣の道を走る騎兵が現れた。

「いつ!?!」

騎兵は俺たちの後ろにつき、長槍を上段に構え――。

「――、ッ!?!」

振り下ろそうとした瞬間、何処からか飛んで来た矢を騎兵が横に払った。

「……………!?!」

「■■■■!?!」

騎兵は矢継ぎ早に飛んで来る矢を払いながら、驚く騎馬の手綱を引く。

引かれた手綱に従って騎馬が大きく身動き騎兵の乗る馬車が揺れる。

「……………ッ、――!?!」

馬車の上で体勢を立て直し再び長槍を騎兵が構えたが、

「――ッ!!」

「……………!?!」

俺たちの頭上を飛び越え、白い羽の意匠があらわれた帽子を目深にかぶる、槍を構えたモノが騎兵の馬車に乗り込んだ。

「今度はなに!?!」

「槍兵が助けてくれたんだよ……………!」

俺たちの後ろで槍兵と騎兵が互いの槍を交える光景から、ライドが目指す坂の頂上に視線を移すと……………。

「――」

腰に矢筒を携え、そこから矢を引き抜き弓に番えるモノがこちらを見下ろしていた。

……………やっぱりさつき矢は弓兵だったのか。

騎士甲冑と槍兵もそうだったけど揃って良いタイミングで助けてくれたね。魔術師に関してはやつと意外だったけど……………。

『それはそれとしてマスター。そろそろ両手を上げる準備をしておいた方が良いでしょうよ』

『なんで』

『坂の頂上にたどり着いたら分かります』

『……っ？』

どゆこと？ と首を傾げて考えているうちに、ライドが頂上へ上りきった。

そして徐々にライドが前に傾きだして……。

「——ああ、なるほど」

そう呟いて両手を上げる。

……此処に上げて落とす、を持って来たのか……。

ならこれで最後って事かな？ いやあホント、思ってた以上に楽しめたよ。はっはっは！

「秋介？」

「どうしたの？」

「こういう絶叫系アトラクションのお約束」

『あー』

なるほど、と皆が頷いて両手を上げる。

そして、

『キヤー——ッ!!』

ライドが勢いよく坂を駆け下りると同時に皆で叫んだ。

くふう、やっと終わったー……く

俺たちはライドに乗り込んだ場所に戻って来た。

シートベルトを外しライドから降り、出口に向かって歩いていると……。

「お。このアトラクションって写真撮ってたのか……」

出口の手前。

天井から吊るされたモニターに、ジープ型のライドに乗った俺たちの画像が映っていた。

一枚くらい買ってこうかなー、と悩んでいたら、

「この紙に欲しい写真の番号を書いて渡せば良いんだって」

「ありがとう、なのはちゃん」

「何枚くらい買おうかしら……」

うーん、とモニターを見ながらなのはたちが悩んでいた。

『マスターはどの写真を買うので?』

『んー、……やっぱ皆が揃って映ってる写真かな』

買ってリビングとかに飾つときたいからね。

「はい、秋介くん」

「ありがとう」

なのはから紙と鉛筆を受け取り、写真の番号を書きこむ。

「すみません。この写し——」

スタッフさんに紙を渡そうとカウンターに持って行くと、

「——いらっしやいませ。何番の写真を購入かね、少年?」

そう、不敵に笑うように言う神父服の男が立っていた。

「……」

「どうかしたかね?」

「え? あ、いやその……。この写真を一枚下さい」

番号を書きこんだ紙を渡す。

「承った。では、少々待っていてくれ」

「はい……」

男がカウンターの奥の部屋に入って行くのを見送る。

……まあアトラクションの説明の声を聞いた時からまさか、とは思ったけど……。

写真販売のスタッフをやってるなんて思わないよね、普通。もしか

したら売店に居るかも? とは思ったけど写真販売とは……。

意外だわー、と思いつながら待っていると、

「待たせたな、少年。君が注文した写真はコレで間違いないな?」

現像した写真と袋を持った男が戻ってきた。

「えーつと、……コレで大丈夫です」

「そうか。……所で少年。一つ良いかね?」

「なに」

「聖なるモノは見つけることが出来たか?」

「……一応ね」

狂戦士に追われて出た広間の祭壇に、確かソレっぽいモノが置いてあったよ。

「けどそれがどうかしたの?」

「フ、今日はまだ見つけ出した者が居なかったからな。——喜べ、少年。君は今日初の発見者だ」

「あらそう。そりやどうも」

もしかしてなにか景品とかもらえたり?

「そんなものはない。……では写真一枚で、……いや、まあ良い。持つて行け」

男が写真を袋にしまい、俺に差し出す。

「……なんで?」

まだお金払ってないんですけど……。

「なに、簡単な事だ。あそこで写真を選んでる子らは君の連れなのだろう? なら別々に会計するの、めんどくさいジャン」

「……………」

「何か文句でも?」

いや別に……。

「それならさっさと戻れ。そこに居られるとあとがつつかえる」

「はいはい……………」

男の差し出す袋に手を伸ばし、受け取ろうとしたら男がニヤリ、と口元を釣り上げ、

「——温めますか?」

「温めるかあ?」

コンビニの店員風に言われた。

……絶対わざと言ってるよね、今のセリフ……。

そう思いながら袋を受け取りなのはたちの所に戻った。

第二十二話：手が塞がってる時に限って転ぶんだよ

——『人魚姫』

それは、世にも名高い童話の一つ。

嵐に襲われ、難破した船から溺れる王子を助けた姫は、その王子に恋をしました。しかし姫は人魚の掟によって王子の前に姿を現す事は出来ず、でも、どうしても自分が助けた事を伝えたかった姫は一人の魔女を頼る事にします。

姫は自身の声と引き換えに魔女から尻尾を足へと変える薬を貰うと、それと同時に王子が他の娘と結ばれたら泡となるだろう、と警告を受けました。

そして、人間の姿へと変わった姫は陸に上がり王子と一緒に暮らせるようになりました。

だけど。声を失った姫は自分が王子を助け出した事を言い出せず、王子は自分が倒れているのを介抱した娘を命の恩人と勘違いし、二人の結婚が決まってしまうのです。

それを知り、悲嘆に暮れる姫の元に姉たちが現れました。王子の血によって姫は人魚に戻る、という事を伝えるために。

しかし姫は王子を手にかける事は出来ず、自ら泡になる事を選び、空へと昇っていきました。

人魚のお姫様と人間の王子様。報われる事の無かった悲しい恋の物語——。

『——とまあ大体こんな感じのお話ですね、マスター』
『なるほど。うん。——いきなりどうしたの、セラフ?』

しかも夢の国 *ver.* じゃなくて元のお話の方なんて。もしかしたら俺たちがその、夢の国 *ver.* がモチーフのレストランで絶賛お昼ごはん中だから?

『ふふ。ヒントは先ほど増えた今日の楽しみ、です。店内を見れば分かりますよ』

『……?』

セラフに言われた通りお店の中を見回す。

海底をイメージしたデザインの壁と天井。所々に吊るされた海藻を模した照明。中央に置かれた岩を模した大きな時計。サンゴをあしらったテーブルとイス。トレイに色々な料理を乗せて座れる席を探す人たち。

……ヒントはさつき増えた今日の楽しみ、か。

俺の左側には、

「ハンバーガーのバンズが先になっちゃった……!」

「——苦い! あ、自分のカップと間違えちゃいました!」

「おや私のコーヒーは何処に……」

よくある状態の美由希さんと偶にある感じのファリンさん、それから首を傾げるノエルさんが座っていて、

……つまり。

俺の向かい側には、

「チャウダーの付け合わせのパンが先になっちゃったの……!」

「なにやってのよ。そういうのはちゃんとバランスよく、——ああつ

! エビが!」

「あ、そのピザ生地をチャウダーと一緒に食べてみたらどうかな」

美由希さんと同じ状態のなのはにピザ生地だけを抜き取っちゃったアリサ、それをフォローするさすが座ってる。

……あ、それは美味しそう。

カレーと一緒に食べるナンみたいな感じになるのかな。ちよつと試して——。

『マスター……』

『ごめん』

気になったからつい……。

『まったくもう。——カレーとナンよりシチューとパンの方でしょう』

『あー』

そっちの方がしっくりくるなー、……って、しまった。

……いつの間にか話が逸れちゃったね。

よし。気を取り直して——。

「——酷いのだわ！」

「ん？ ……おおっ」

お店の出入り口の方から女の子の声が聞こえた。

『アレか、セラフ』

『はい。アレです、マスター』

なるほど、そう言う事か、と声の方を見る。レジの前に、さっきのお姉さんたちや神父服の男に続いてなんだかとても見覚えがある子たちが居た。

「もうっ！ どうしてあなたはいつもそうやって意地悪な事ばかりを言うの!? このレストランのモチーフになったお話は、元のお話よりもとつても、とーつても素敵なお話だよ！」

「そうよ！ それなのにどうしてあなたはそれを「気に入らない」なんて言うの!?! 信じられない！」

俺たちと同年代くらい？ の黒いドレスと白いドレスの双子のようにソックリな女の子たちと、

「別に信じてもらわなくて結構！ 俺は俺の思った事を口にしただけだ。お前たちに何を言われようが俺は考えを変えよう気はない！ まったく、——リア充爆発しろ！ と、叫びたくなるな……！」

同じく同年代くらい？ の水色の髪に縦縞のシャツ、紺のベストにズボン姿の髪と同じ色の蝶ネクタイを付けた男の子と言いついていた。

……本の妖精とはまたピッタリな。

いや、女の子たちの方は良いとしても男の子の方はアレだ。——こんな憎らしい妖精がいてたまるか、とかって言われそうな感じだね。うん。間違いなく言われるな。

「ありや？ あの子たち喧嘩してる？ 止めに入った方が良いかな」「大丈夫でしょう、美由希様。あの子たちの傍に、……なんでしょう。どう見ても親御様には見えませんが、保護者のような方たちが控えていますから」

そう。ノエルさんの言う通りあの子たちの近くには要るんだよね。保護者っぽい感じのおじさんたちがさ。

「まあ止める気とかないと思うけどねー」

「どうしてでしょうか」

だってほら、とノエルさんを促した先。

「ふむ。吾輩としましては別に
there is nothing either good or bad but thinking makes it so
『良いも悪いも、それは人それぞれである』
と言った感じなのですが、あなた方はどう思いますかな？ えーつ
と、このスペシャルサンドのセットを二つ。飲み物はコーヒーのホッ
トとアイスの一つずつで」

ヨーロッパ風の洒脱な衣装を着た髭のおじさんと、

「あの子らの言う通り、結末はハッピーエンドの方が良いに決まっ
ている。そうでなければ物語を読んだ子供たちが悲しんでしまうでは
ないか。む、このチャウダーとシユリンプを二つずつ、サラダを三つ
頼む」

けも耳尻尾に翠緑の衣装のお姉さん。それから、

「ま、俺も姐さんに同意見だわ。チビ共が読むんなら悲劇よりも喜劇
の方が向いてんだろ。あつ、ちよつと待つてくれ姐さん。あとこのス
ペシャルサンドつてのを四つ、山盛りポテトを二つ追加で」

白緑の髪に、オレンジ色のスカーフを肩から下げた黒い服とズボン
のお兄さんが、それぞれレジで料理を注文していた。

「ね？」

「そのようですね……」

ま、俺としては止めるか止めないかよりも、あのお姉さんの耳と尻
尾の方がよっぽど気になっちゃったりするんだけどねえ。

……アレって本物かな？

あつ、尻尾が揺れた……。耳もピクツ、つてなった。うーん、どう
やら本物っぽいね。

「流石は夢の国、耳と尻尾があるくらいじゃ誰も気にしないのな……」
『似たようなグッズが売っていますからね。傍から見たらリアルな手
作りアクセサリー、といった所でしょう。——マスターも生やしてみ
ますか？』

『遠慮しておきます』

夢の国で生やしても「そのグッズどこのお店で買ったの？」で終わっちゃうからね。それじゃ勿体ない。やるならもつと驚くシチュエーションじゃないと。——ズズツ。

「む、このメロンソーダ美味しい」

なんだろう。いつか何処かで飲んだことのあるような味がする。

「あ、本当？ 良かった。実は味が二種類あってさ、秋介はどっちが良いか悩んだんだよねー」

メロンソーダに味があつたの……？ メロンクリームソーダとかそんな感じかな。

「ううん。あつたのは普通の味とスイカ味改」

「へえ……。ちなみに美由希さん、コレはどっちの味？」

「スイカ味改の方」

「あー」

通りで。どこかで飲んだ事あるような味だったワケだ。

前に自然公園に遠足行った時からかなり改良してあるね、コレ。微妙な量の果肉がなくなるだけでこれほど美味しくなるとは……。

「それにしてもあの方たちは一体、どういったご関係なんでしょうか……」

「ファリンちゃんはと思うの？」

「うーんそうですねー。——保育士さん、とかですかね」

「ングンツッ!」

「秋介!? 急にどうしたの、大丈夫!」

いやちよつと、ゴホツケホツ。メロンソーダが変な所に入ったあ……!

……くう、ファリンさんの発言が思った以上に効いたね!?

危ねえ。もう少してメロンソーダを吹き出すとこだったわ……。ケプツ。

それにしてもあの人たちが保育士さんとは、ファリンさんってば中々に面白い予想するね……!!

「意外とエプロン姿が似合いそうなのがまた憎い」

特に髭のおじさんが。見た目的に言えば園長とかそんな感じの立

場っぽいね。

それで、お姉さんはベテランの先生でお兄さんは最近入った若手の先生、とかつてのとはどうかな。エプロンの色はオレンジ色でさ。

「——ふっ」

あのお兄さんがオレンジ色のエプロンなんて付けたら髪の毛の色と合わせてもう——。

「どうかしたの、秋介くん？」

「いやあ、ちよつとね。恭也さんと忍さんはデート楽しんでるかなー、って」

さつき追われる途中で忍さんに任せて来たけど、まだ俺たちの事を探してそうでちよつと心配。

「んー、それは大丈夫なんじゃないかな？　忍さんが一緒だし、流石の恭ちゃんも諦めたっぽい」

「そうなの？」

「うん」

だつてほら、と美由希さんが開いていた携帯の画面を見せてくれた。

「見てコレ。今、忍さんからメールが来たんだけどこの写真、見るからに恭ちゃんも楽しんでいる気がするんだ」

写真には、夢の国のナンバーワンマススコットの耳型カチューシャを付けた恭也さんと忍さんが映っていた。

忍さんは満面の笑みで恭也さんは照れ笑い、周りを夢の国のマスコットたちに囲まれながら。

……何このバカツプル。

口では「デートしに来た訳じゃない！」とか言ってたのになあ——
！　ふ、俺たちの作戦が成功したって事だね！

「美由希さん、私にも見せてくださいー！」

「お姉ちゃんわたしも！」

「はいはい。順番、順番」

恭ちゃんには内緒だからねー、と美由希さんが携帯を回す横でふと思つた。

……あのお姉さんたちは実際の所、どういう組み合わせなのかね？
気になる。もの凄く気になる。いや、お姉さんは女の子たちを喜ば
せる為に遊びに来て、お兄さんはそんなお姉さんとちよつとしたデー
ト気分について来た、って感じがするけども。

……でもそれだとおじさんと男の子がなあ。

あの二人、夢の国に好んで来るようには見えないんだよなー。

どうなんだろう、と気になってもう一度レジの方を見る。

「……それで？ 何故、汝らが此処に居る。此処は汝らのような者た
ちが好き好んでやって来るような場所ではなからう」

するとちよつど注文を終えたお姉さんが、おじさんに俺が気になっ
た事と同じような事を聞いていた。

「ああそれは、ちよつとした現実逃避、——ではなく、気分転換ですな。
彼と缶詰め明けのテンションで入園してしまった手前、せつかくなの
で面白そうなネタの一つや二つ探していこう、と相成った訳でして」
「缶詰め、ネタ……？ 汝らは一体なにを」

「趣味と言うか仕事というか、まあちよつとした執筆活動ですな。――
——そうだ！ 是非、次回作のネタにあなた方の事を書かせてもらいた
いのですが。タイトルは「初めての二人の共同作業」なんて愛の詩を
――」

「応、是非た――」

おじさんの提案にまだ追加注文をするお兄さんが振り向く寸前、

「――その頭を射抜かれないか？」

「ははは、これは手厳しい！ ——では吾輩、射抜かれる前に退散する
といたしますかな！ あ、そのスペシャルサンドとアイスコーヒ―は
吾輩のモノですか？」

「た、たー、た、たこ焼きとハンバーグも追加で……」

おじさんはスタツフさんからトレイを受け取ってそそくさとその
場を去り、お兄さんは振り向きかけた顔をゆっくりと戻した。そし
て、

「むう……！――」

「ふん。……まあ、なんだ。お前たちの言う通り、俺もアレは少しやり

過ぎだと思、——つておい待て！ そのアイスコーヒーのセットは俺の物だ！ お前はホットコーヒーの方だろうが！」

未だに女の子たちと言いつつあつた男の子がおじさんに気づき、あとを追いかけて行った。

……お姉さん、怖え。

一瞬だったけど背筋がゾクツツてしたよ!? 睨んだだけで男二人を黙らせるとはすごい……。いやまあ、おじさんは黙るところか喋ってたけども。アレは誤魔化しだね、絶対。だって額に汗かいてたもん。

「そういえば秋介、あんたは何か乗りたいアトラクションとかある?」「ん? そうだなー……。あ、アレが良い。海賊のアトラクション」

今日は色々な人に会える気がするからね。あそこならどこぞの女海賊さんたちに出会えるかもしれない。もしかしたら黒いのも居るかもしれないけど、気にしない。気にしたら負けだと思う。

「ああ、あのタコが出て来るヤツ」

「オツケー。それじゃあ、早速行こうか。私とファリンちゃんでお皿とかトレイを返してくるから、ノエルさんは皆と先に外で待ってくれる?」

「分かりました。では皆様、行きましようか」

はい、とノエルさんと一緒に席を立つのはたちを見て、ふと思った。

……いつの間にか皆が食べ終わってる……。!?

俺まだメロンソーダ残ってるんですけど……。あとホタテのサンドも。

「よそ見してるあんたが悪いのよ。それに、それくらいだったら食べながら行けば良いでしょ」

「それは、まあ確かに」

レストランから海賊のアトラクションまで距離はあるし、乗る前に食べちゃえば大丈夫か。

右手にサンド、左手にメロンソーダを装備して食べ歩きも夢の国の楽しみだよねー、なんて事をなのはたちと話しながらお店の外へと向

かう。

「おお、マジか……」

お店の出入り口に差し掛かった所で、これまた見覚えのあるお兄さんとお姉さんたちが視界に入った。

「なあなあ。やっぱりさっきの、あとらくしよん？ とかいう乗りもんのクマさん。昔、小僧と一緒にあったクマさんにそっくりやあらへん？ 久しく見いひんうちにえらい丸っこくなつとつたなあ。——おっと」

紺の髪に、その隙間から伸びる角。紫の着物を身に纏い『酔』と書かれた小さな赤ちようちんを腰帯に引つ掛けた色白お姉さんと、

「うっぷ。うう、吾は酔ってなどおらぬ、おらぬぞお、……あいたっ!」
そのお姉さんに引きずられる、薄い黄色の髪におでこから伸びた角。纏う黄金色の着物を大きな数珠で締めたお姉さん。それから、

「だーから似てねえって。さっきのクマさんとアイツを一緒にすんじゃないえよ。クマ公と違ってあのクマさんは、変形するようには見えなかつたろうが。つーかオメエは段差に気いつけるよ」

金髪サングラスで襟を立てた白シャツにズボン姿の、『GOLD』と大きく書かれたベルトを腰に巻いたお兄さんが、

「そんな事よりわたしたちお腹空いたー。はんばーぐがたーべーたーい——!」

灰色の髪の、首からナイフのようなペンダントを下げた白いワンピースを着た女の子を肩車しながら、お姉さんたちと一緒に向うから歩いて来た。

……何故に一人だけ引きずられてんだろう。

顔色が悪いし、乗り物酔いでもしたのかな？ それともお酒の飲み過ぎか……。まあ、どちらにしろ引きずって来るのはどうかと思う……。おもいつきりお尻打ってたし。

鬼か、と思いつつ、お姉さんたちと入れ違いにお店の外へと出る。なんとなく足を止めて振り返ると……。

「おう。今、戻ったぜ。オレのゴールデンサンドはちゃんと頼んでくれたか？」

「ゴールデンサンドって何だよ、スペシャルサンドな。ちゃんと頼んだっつーの」

金髪サングラスのお兄さんの言葉にオレンジスカーフのお兄さんが呆れていたたり、

「へへん、良いでしょー」

「あら？ まあなんてこと！ あなたたちだけお兄さんに肩車をしてもらうなんてずるいのだわ！」

「あら本当だわ！ わたしたちもお兄さんに肩車をしてもらいたいわ！」

肩車される女の子を見て、ドレスの女の子たちがピョンピョン跳ねていたり、

「……………」

「なんやあ、やきもちか？ 小僧にあの子ら取られて、やきもち焼いとるんやねえ」

「お、おい！ そんな事より吾の着物を離せ、——うつぶ。うう……」
少しムツとした顔のけも耳尻尾なお姉さんのほっぺをつつく色白お姉さんに、未だに引きずられた格好のお姉さんが抗議したりと、何やら騒いでいた。

……………なんと。

コレは驚いたね！ まさかのあの人たちがお連れ様だったとは——

『マスターったら顔がニヤニヤですね』

やかましい。良いでしょ、別に。楽しそうならそれで良いじゃないですか。あの子たちも笑ってるし。

『そういうものですか』

『そういうものなんだよ』

笑顔が一番だよねと、ちよつと格好つけて踵を返す。お皿やらを返しおえて出て来た美由希さんたちと一緒に、少し先を歩くなのはたちを追いかけると、

『あつ。マスター、そこに段差が——』

「あいつ、——つて、あれ…………？」

ちよつと格好つけたら転んだ、と思つたら誰かが俺の服を後ろから引つ張つた。

……セーフ。もう少しで地面に頭突きする所だった……。

美由希さんかフアリンさん……？ と振り返ると、

「あらあら。ちゃんと足元を見なければ危ないですよ？ 気を付けて、怪我でもしたら大変です」

「えつと、ありがとう——」

につこりとほほ笑む、長く艶やかな髪を毛先でまとめた、薄い紫の衣装を纏つた女の人が居た。

女の人は服を掴む手を離し、呆氣にとられる俺の頭を軽く撫でてから一度頷き、

「それでは」

そう会釈をしてレストランへと歩いて行つた。

……あのままで居るとは思わなかつた。

これからあのお店で一波乱ありそうだね、と目を反らしながら再び美由希さんたちとなのはたちを追いかけた。

それからすぐに、

「ちよ、なんでアンタが此処に居んだよ!？」

「息子と一緒に遊びたいと、そう想うのは母として当然の事です」

「おうい、小僧。早よ、うちの分を持つて、……なんや。海の底や思うたのにいつの間此処は牛舎になつたんや」

「おや、此処にも煩いのがぶんぶんと……。まったく。何処にでも蟲と言ふのは湧くのですね、困りものです」

「つ……………」

「わ、わわ、吾を挟んで睨みあうな——ツ!!」

なんて叫びが聞こえてきたけど気にせず先を急ぐ事にした。

第二十三話：お土産の買い忘れは気を付けよう！

結果から言うと、海賊のアトラクションは普通だった。

内容としては追ってくるタコ海賊から逃げたり飛び交う砲弾の中を潜り抜けたり、再登場したタコ海賊が操る怪物から荒波の中を逃げたりと、うん、普通に楽しかった。女海賊さんたちがいなかったのは残念だったけど。

まあそれはそれとして。

『気付きましたか、マスター』

『気付きましたよ、セラフさん。流石に遠目で分かるくらい目立つ格好の人は見逃せないって』

もうすぐ始まるお昼のパレードを今か今かと待つなのはたちを横に、ついさつき俺たちが出て来たアトラクションの出入り口の方を見ると、

「むむ。海賊というモノは中々に良いモノだ。しかし、しかしだ。何故、海賊がこうも子供たちに人気があるのか。確か資料では、海賊は人々に恐れられる悪だと、……む、悪？　もしやそこに何か人気の秘密が——」

「あるのかもしれませんが、考えるのは帰ってからにしましょう、ドクター。急に立ち止まられると迷惑になってしまいます」
「む……」

ものすごく見覚えのある白衣が、これまた見覚えのある女の人に背中を押されて出て来た。

……海賊じゃなくて科学者が出てきちゃったよ。

久しぶりだなあ、スカさんとウーノさん。相変わらず元気そうで、……って、あれ？　よく見たら二人の後ろから誰か……。

「さあ、妹たちよ。姉に続け！　もう一度並ぶぞー！」

「ええー、またあ……。いい加減に違うアトラクション行こうよ、チンク姉え」

「何を言う、セイン。まだ四回しか乗っていないぞ？」

「もう四回も、だよ。私もそろそろ他のアトラクションに乗りたく

なってきたな」

「デイエチちゃんの言う通りよ、チンクちゃん。流石にちよつと乗り過ぎ、今日はこの辺で止めときましよう」

「むむ、ドゥーエまで……。分かった。今日はこの一回で終わりにしよう。——残りの五回は明日に持ち越しだ」

「おいおい、明日も乗る気かよ！ しかも五回つて。海賊にはまり過ぎだろ、お前……っ！」

「ドクター！ ウーノ姉様！ お願い、チンクちゃんを止めてく——ッ！」

おおっと、マジですか。もしかなくてもスカさんの娘さんたちだよ、これはビックリだね！

あんな目立つのになんで並んでる時に気付かなかったんだろう。

後ろの方で偶に「おのれメガネ姉、よくもあたしのポップコーンを……！」「あ、すまん。それ食べたのオレだ」「どうしてあたしが一番に疑われるのよー！」とかつて聞こえたけど……。

「おお……！」

「ん？」

まさかアレ？ と並んでる時の事を思い返していたら、なにやらお城の方から歓声が聞こえた。

……始まった。

歓声の方に目を向けると、お城の門が勢いよく開かれ、陽気なテンポの音楽に合わせて踊る、煌びやかな衣装の踊り子さんたちが現れた。

次に大きな列車を先導するように音楽隊が続き、さらに歓声が大きくなった。

列車の上には夢の国のマスコットたちが乗っていてそれぞれ踊ったり手を振ったり、列車から降りて握手に応えたりしながらお城の前の通路へと出た。

「確かこのパレードつて夢の国を一周するんだよね？」

「はい。園内を一周して、それからまたあのお城に戻って来る、とパンフレットには書かれていますね」

「じゃあ、忍お嬢様や恭也さんもどこかで来るのを待つてるかもですね」

美由希さんたちのそんなやり取りを後ろに、前を通過していく列車に手を振りながら見送る。次に来たのはガラスの馬が引く馬車で、

「踊りましょう、唄いましょうよ！ これは楽しいパレード！ さあ、みんな一緒にヴィヴ・ラ・フランス！」

ヴィヴ・ラ・フランス！ と通路の向う側から続く声が聞こえる辺り、どうもキラキラキラ輝いてるあの赤いドレスの王妃様には熱狂的なファンが居るらしい。

あ、後ろの性別判断が難しい騎士さんが向う側が見えないように横に移動した。しかもマントで隠すようにしてる。そこまでするとは変態か変人でもいるのかね……？

「わ——！」

また歓声が聞こえた。続く音は、

「うっはあああああ！ あのライオン父上そっくりじゃねえか——！」

「もぐ、もぐ、……もぐ」

で、はしゃぐお子さんを隣に、素知らぬ顔でマスコット型クッキーアイスを食べるお姉さんは、

……あのアイスって自分にそっくりなライオンの顔。

構わず顔に食らいつくのはどうなんだろう。隣のお子さんも揃って同じアイス持つてるし、ちよつとくらい複雑な気分になったりしないのかなあ。

「あつ」

マスコットライオンに続いて、小柄な女神様を背中に乗せる翼の生えた白馬と、その手綱を引いて先導する長身の女神様が来た。

「ユニコーン！」

「違う。天馬だって」

俺も偶に間違えるけどなのは普段から間違えて、ああ、ごめんごめん。よくある事なの！ って、分かったから、だからそんな膨れないの。ほっぺをぷにっとしたくなる。ははっ。

ぷしゆう、となのはほつぺを両手で挟んで空気を抜いておく。

「うふふ。こんなにも人が私を見ているなんて……。良いわ、私の笑顔でイチコロにしてあげようかしら」

「お願いですから、……。それだけは止めてください。上姉さまのそれは本気で洒落になりませんから」

うーん、小さな姉に大人な妹か。この組み合わせはよくあるよね。ちよつと前にも身近にあったし。色々と似通った所があるよねー。

——妹の方が姉より背が高い所とかさ。

『マスター。たった今『成長期、成長期だから私！ 寝る子は育つって言うからね！ あ、でも「むしろ寝てた時間の方が多いの……」とかって言うのは無しだよ!!』とメールが』

『まさかのお姉ちゃんセンサー……!!?』

相変わらず驚かせてくれるなあ、あのちっこいお姉ちゃんは……。

「がお——!」

「いっ!?!」

『ビクウ、つて！ 今ビクウ、つてなりましたねマスター!』

セラフさんやかましい。

「うふふ、上出来ね！ この調子でどんどん驚かせに行くわよ！ お次は、……うちの駄妹で決まり——」

「うん、わか、った。あ、と。おどろかせて、ごめん、ね」

じゃあ、と頭を下げて牛の角を生やしたかなり大柄な男の子は、肩に、先に通過した女神様と同じ見た目の女神様を乗せて行き、

「におお——!」

「ひあつ、下姉さま——!?!」

「あら。可愛いポーズね、それ。私もやってみようかしら。——がおお——!」

「ひっ、上姉さま——!?!」

「いっしょ、に、やろ? がおー、つて」

「うう、……が、がおー」

「これは、……ちよつと生意気ね」

と、頑張つて照れながらもポーズをとる妹さんを、

……可愛いなら可愛いって言ってあげれば良いのに。
ぷくう、と膨れ顔でつつくお姉さんたちは、ホントに素直じゃないと思う。

『マスター。新しくメールが来まして、『今、遊園地に行ってるってホント!? お土産よろしく。私はクッキーかおせんべいで……!』だそうです』

『……素直なものも考え物かなあ』

こうも直球に言われると逆に清々しい。こうなったらお土産は両方買って送ろうかな。わさび味とか。「ツーンと来たあ……!」と
かって涙目になる姿が目には浮かぶね……っ!

「――」
今度は歓声、と言うより黄色い声が聞こえた。続いて門から現れたのは、大きなこすつたら魔人でも出てきそうなランプで、

「わ、可愛い……」

「ぬいぐるみ売ってないかなあ」

そこから飛び出した炎の精霊さんが空中でぐるりと身を回して一礼。続ける動作で精霊さんが両手を頭上に伸ばすと花火が上がり、
「おー」

“たのしい”や“すごく たのしい”の文字を作った花火はすぐに消え、紙吹雪へと変わる。

「今の見た? 秋介。」ありがとう“ですって。花火でお礼を言うなんてあの精霊、やっぱり可愛いわね!”

「え、俺は“たのしい”とか“すごく たのしい”って見えたんだけど」

「私には“あるよ”って見えただけ。なにがあるんだろう……。あつ、ぬいぐるみかな」

じゃあ、なのはは?

「わたしは魔法みたいだなあ、って思って、そしたら“そうだよ”って」

「ほう……」

あの精霊さんは魔法なのか。なら納得だね。さつきから飛び回

ながら手を振ったり踊ったり、ランプに火を点けて仲間を呼び出した
りとかしてるけど魔法なら仕方ないな。ははっ。

「、——！」

ランプの魔人ならぬランプの精霊さんたちが飛び回り、さらに花火
を打ち上げる。今度の花火は文字ではなく、夢の国のマスコットたち
それぞれの顔が浮かんだ。

そして、紙吹雪が次第に花びらへと変り、

……あれ、あのお姉さんって……。

ランプの後ろに、色とりどりの花に飾られた王冠を模した乗り物が
続いて来た。その上に見えるのは二つの人影で、

「この乗り物はちよつと派手すぎるような……。でも、皆さんが喜ん
でくれるのなら頑張ります！ この聖剣は愛する人々の為^{つるぎ}に輝くも
の、皆さんの旅路に花の祝福を——」

「よつと」

眩く輝く黄金の剣を掲げた百合の少女騎士に合わせて、後ろの花の
魔術師が杖を鳴らした。すると降ってくる花びらが風に乗る、空へと
舞い上がる。

「まさかの白い父上キタアアアアアア——ッ！」

またはしゃぐ声が聞こえたけど、とりあえず聞かなかった事にしよ
う。隣で「黙れ」「叫ぶなど言つたはずです」「黙りなさい不良息子」「あ
の子の邪魔です」と、お姉さんが……。って、なんかいつの間にか黒
とか青ジャージとか増えてるんですが……。まあ良いか。気付いた
お子さんは嬉しそうだし。

「ハート……！ お花がハートになったよ、秋介くん！ あれって私
だけじゃないよね……？」

「見えますよー。俺もちゃんとハートに見えてるから、そんな心配そ
うな顔しないの」

空のハートは次に星、ドラゴンへと形を変えてさらに空へと昇って
いく。

「——！！」

「てやあ——！」

咆哮し、踵を返して勢いよく降下してくる花のドラゴンを少女騎士が一闪した。裂かれたドラゴンの体が弾け花びらが宙を舞い、シヤワーのように降ってくる。そして、

「うわあ、すごい。今のドラゴンってどういう仕組みなのかなあ。ノエルさんかフアリンちゃん分かる？」

「映像、……ではなさそうですね。プロジェクターらしき物は見当たりませんし、かといって作り物してはやけにリアルで……」

「もしかしたら魔法なんじゃないでしょうか……！ ほら。さっきの魔法使いっぽい人がこう、杖をコンツ、つてやってみましたから。夢の国なら魔法でもおかしくありません！」

はは、まっさかー、なんて美由希さんが笑ってるけど、フアリンさんの言うそれ、意外とありそうなんだよなあ。

マスコットたちが同時に別々の所に居たりとか、たった今パレードに出てたはずなのに終わったたら一瞬で他の場所で登場したりとか。

『ああ、それはですね？ 此処の方々は——』

『聞——こ——え——な——い——！——』

『本当は——』

『あ——あ——！——』

『念話なのに耳を塞ぐのって意味あるの……？』

『ない』

『ないですね』

『ないんだ……』

……一回やってみただけ。

「……………」

あれ。周りの音が全然聞こえない……？

『耳を塞いだらそうなりますって』

『あ、そっか』

と、手をどかすと今までの中で一番大きな歓声が聞こえた。

少女騎士と花の魔術師を乗せた王冠に続き、小さなお城の見た目をした乗り物が現れた。その上で回りに手を振るのは夢の国のナン

バーワンマスコットカップルと、もの凄く知ってる顔のカップルで――

「……えっ」

今一瞬、あの乗り物に居る筈のない二人が見えた気が……。

「「えっ」」

「「えっ」」

なのはや美由希さんたちの今の反応はまさか――。

「あ、やつほー。お陰様ですっごい楽しいデートをしてるよー」

「アツハハハ……」

ちようど俺たちの前を通過していく乗り物の上、此方に気付いて手を振ってくれるカップルが、

「それじゃまたあとでねー」

「……………」

メチャクチャ良い笑顔のお姉さんと、その横でもうどうにでもなれ、と開き直ったような照れ顔のお兄さんは、――忍さんと恭也さんだった。

『なんでえ――』

く夢の国は驚きがいっぱいだね！く

「はあ……」

夢の国からの帰り道、迎えに来てくれた鮫島さんが運転するリズムジンの中で、恭也さんがため息をこぼした。

座る位置としては助手席にノエルさん。向かい側の席に恭也さんたち年長組が、俺の横にはなのは、アリサ、さすがが座ってる。ちなみに、帰る前に買ったお土産はトランクの中。

「恭也さんってばかなりお疲れ？」

「誰の所為だ、誰の。まったく。お前のお陰で今日は散々だったぞ。忍にあっちこっち連れまわされた上に、パレードにまで参加させられたんだからな……」

「そう言えば、アレ、どうして恭也さんたちがパレードに参加できたの

？」

あのあと二人と合流したのは帰る直前だったし、それからすぐに夜のパレードが始まって見に行ったりお土産を買ったりで、今の今まで聞くの忘れてたよ。

「んー、偶然かな？」

と、忍さんが、軽く船を漕ぐずるかのアリサを携帯で写真を撮って、次に隣で完全に熟睡する美由希さんとファリンさんを見て恭也さんの膝の上に移動した。

「おい」

「良いじゃない。この方が綺麗に撮れるの」

それでね？ と忍さんが二人に携帯を向け、シャッター音を鳴らす。

「本当は私たちじゃなくて他に参加するカップルが居ただけど、いつの間にか彼氏さんの方が居なくなつて、探しに行った彼女さんも戻って来なかつたんだって」

「じゃあ、その代役に恭也さんと忍さんが選ばれたって事？」

忍さんが頷いて、元の位置に戻つて携帯の画面を確認する。

「それにしてもスタッフさんが言つてたけど、ピンク色の髪をした女王様みたいな彼女さんってどんな人だったんだろう」

「彼氏の方は黒い骨みみたいな尻尾があつたらしいが……。それで気付かれずに居なくなるとはかなりの手練れか」

「……………」

いやあ、ははっ。まったくはた迷惑なカップルさんが居るもんだ

……………！

「あら？ ……ふふ。なのはちゃんも、もう限界みたいね」

言われて横を見ると、なのはもアリサとすずかのように船を漕いでいて、

……………通りで静だと。

ズボンのポケットから携帯を取り出して時間を確認する。画面に表示されたのは「20:42」で、

「うわ、もうすぐ九時じゃん」

帰ったらちやっちやと風呂入って寝よう。あ、でも沸かす時間が……。よし。今日は温泉を広げよう。アレなら沸かすまでもなくすぐに入れるからね!

「おや。これは困りましたな……」

「どうかしたの?」

鮫島さんが、車をゆつくりと路肩に止めて此方を覗き、

「どうやらこの先で事故かなにかあったようで、通行止めになっているようです」

「なら戻って別の道で行けないのか?」

「行けませんが、それだと遠回りする事になってしまうので……」

忍さんやノエルさんたち年長組の話を聞きながら窓の外を見ると、そこは住宅街で、前に散歩で来た事があるような気がする。気のせいかな。流石にこの辺りまで来た事無かったなあ。

「秋介」

「なんですか、恭也さん」

「お前、今日うちに泊まっていけ。それか忍の所か。どっちが良い?」

「……はい?」

話が急すぎてついていけないんですけども……。

『道を迂回していく事になったので、帰りのルートの的にマスターを送るのが最後になります。』

それだとうちに着く時間がかかなり遅くなってしまっているので、高町家が月村家のどちらかに泊まってはどうか、と言う話です』

『あー、なるほど』

つまりは明日の朝、なのはかはずか、どっちの驚く顔が見たいかを決めると、そう言う事だね!?

『違いますって』

『だよねー』

まあとりあえず。

「いや。俺、此処から歩いて帰りますよ。着替えとか用意ないし。帰ってやる事があるんで」

「……そうか。なら俺が送って行こう」

「それも大丈夫です。なのほも寝ちやつたし、美由希さんも寝てるんで。あつ、忍さんもノエルさんも大丈夫ですから。すずかとフアリンさんも寝てるし」

そう言つて、車の扉を開けて降りる。なのほがこっちに倒れてきそうになったのを支えて、ゆっくりと座席に寝かせ、

「では、トランクを開けますので少々お待ちを」

車から降りた鮫島さんが、トランクから俺が買った分のお土産を取り出して、それを受け取る。

「それじゃあ、今日はありがとうございました」

「こちらこそ今日はありがとうね、秋介」

「ああ、またな」

またねー、と手を振つて返す。鮫島さんとノエルさんに頭を下げてもらつて見送られるのは、ちよつと気恥ずかしい。アリサとすずかは毎日こんな感じなのか。流星はお嬢様……！

く帰つたらまずお風呂入つて、次にお土産を……く

少し歩くと、道路を挟んだ向う側に人だかりが見えた。

その周りには救急車やらパトカーが止まっついて、

「事故か」

『事故ですね』

見た感じトラックが電柱にぶつかつてるけど、どうやら怪我人はいないらしい。

『トラックの運転手さんは子供を引きそうになった、と言っていますね。あと、急にその子が消えた、とも』

「急に消えた、つて。そんな幽霊じゃあるまいし、居眠り運転でもしてたんじゃないのかな」

この事故をきっかけに今後は注意してほしいね。うんうん。……うん？

「マジか……」

なにげなしに空を見上げると、結構な高い位置に白い、三角形の魔

法陣のようなモノを見つけた。

……ようなモノじゃなくてそのモノか……！

見上げる先。白の魔法陣の周りに赤、赤紫、緑、青の四色、同じように三角形の魔法陣が展開していて、

「よりにもよって今日だったかあ……」

白も含めたそれぞれの魔法陣に人影があつた。よくよく見ると、白と赤に女の子、赤紫と緑にお姉さん、青に男の人で、

『どうしますか、マスター？』

「……帰ろう」

流石に、此処で関わりに行くのはちよつと遠慮しておこう。なんかあたふたしてるように見えるし、俺が出ていって変な誤解とかされたくない。

「一応、他の人に見えないように結界を張っていてくれる？ 万が一って事があるから」

『ええ、お任せを』

さて、と。それじゃあ夜も遅くなってきたから帰るとしますかね。それで、うちに着いたらテスタロツサ家にお土産を送ろう。あとハラオウン家にも。

セラフさんに頼めば大丈夫だとは思うけど、こんな時間に大丈夫かな……？

『その辺りも私に任せてください。クリスマスのプレゼントのように枕元に送っておきましょう……！』

「ならメッセージカードを添えるしかないね……!?!」

喜んでくれるかなー、と、そう思いながら帰り道を急ぐ途中で、

「——あつ、わさび味買うの忘れた」

仕方ない。代わりに自分で買った「わさび塩・わさび抜き味」のおせんべいを送ろうと、そう決めた。

第二十四話：面と向って言うのは恥ずかしいんです

「うお、まぶしいい……」

カーテンの隙間から差し込む朝日が、顔に直撃した事によって目が覚めた。身を振って朝日から逃げ、枕元に手を伸ばして携帯を探す。見つけた携帯を開いて時間を確認し、

「七時半……」

せめてあと三十分、八時くらいまでは寝たかったなあもう……。

……そうだ、二度寝しよう。

それが良い。そうしよう。今日は土曜日だから二度寝しても誰も文句は言わないよね。

「……………」

……無理か。

どうにもさつき朝日による顔面直撃起こしのお陰で眠気が少し飛んだらしい。これはもう起きるしかないかな……。

「ん。ん——、よ、っと。ふう」

寝たまま、仰向けの状態で伸びをして、頭の上に伸ばした手を振り下ろす勢いで上体を起こす。一息ついてベッドを下り、カーテンから覗く雲一つない空を仰ぎ、

「……朝あはんは卵焼きかなあ」

遠く、楕円の形の雲が流れるのを見て口が卵焼きの気分になった。あ、でも卵かけあはんも捨てがたい。どっちにしよう……？

くやっぱり卵焼きかなく

トントントン、とりビングから小気味よい音が聞こえてくる中、洗面所で歯を磨く。歯磨き粉のミントな刺激と冷たい水で顔を洗ったことで、残っていた眠気が飛び、

……えっ、リビングに誰がいる。

タオルで顔を拭きながら、そこでふと気が付いた。

リビングからの音をよく聞くとそれは包丁がまな板を叩くような

音で、漂ってくる香りからしてリビングに居る誰かさんは料理をしているようだ。

おかしい。今うちには俺とセラフ以外誰も居ないはずだ。もしかしたらリニスがサプライズ帰宅をして朝ごはんを作ってくれてる、なんて可能性があるにはあるけど……。

「いやまさかね……」

泥棒だったりして。でもそれだったら何で料理してるんだろう……。

ごはん目当ての泥棒かな、と考えながらこそつとりビングに入り、キツチンを覗く。

「ふふふ、ふふん。ふふふふ」

鼻歌交じりに、テンポよく小ネギを刻む女の子がいた。背の高さはなのはと同じくらい。髪は肩に着かない程度の長さだ。格好としては白のTシャツにホットパンツ、太股の上まで来る黒のソックスで、焦げ茶色のエプロンをつけているその女の子は、

……いや誰え。

まったくもって初見さんなんですけどあの子。というかどうやってうちに入って来たんだろう。

一応、うちにはセラフが張った防犯用の結界がある。

泥棒とかそういった怪しい類の人がうちの敷地内に足を踏み入れた瞬間に結界が反応して、学校だろうが夢の中だろうがお構いなしに変なピロリ音が知らせてくれる仕様だ。

それと同時に侵入者に対して“急に頭が痛くなる”、“急にお腹が痛くなる”、“急に金的が二連続蹴りからの飛び蹴りを受けたように痛くなる(男限定)”の、三つの呪いの中からどれか一つがランダム発動する。……らしい。

実際に発動した事がないからどんな感じのピロリ音かは未だ不明。セラフは『こう、頭にキュピーン！ と来る感じですよ！』とか言ってたけどそれはもうピロリ音じゃなくてキュピーン！ って音のようにな気もする。

ともあれ今日はそんなピロリ音もキュピーン！ もなかった。つ

まり、

「ふふふ、ふふくん」

さつき刻んだ小ネギを醤油と一緒に混ぜ込んで、フライパンに流し込んだ黄色い、——アレは卵焼きだね!? しかもネギ入りの! を、器用に返して厚みを作る女の子は、そういった類じゃない事は確かだ。

……それでも結局あの子が何者かは謎なんだけどねー。

「よっ」

と、綺麗に焼き上がった卵焼きをお皿へと移した女の子はフライパンを置き、次に横の鍋の蓋を取って菜箸をお玉に持ち替える。中身を掬って味見して、空いた方の手で小さくガッツポーズ。

……ほほう。

匂い的にあの鍋の中身はお味噌汁か。なら赤みそか白みそか、はたまた合わせみそか。昨日は白みそだったから今日は赤みそのが食べたい気分。

「ええ。そうだろうと思ひまして今日のお味噌汁は赤みそです。具はお豆腐と油揚げ、お好みで卵を落としましょうか」

「卵焼きがあるなら落とさなくていいよー、——はっ」

しまったバレてる!? 気配を消しきれていなかったのか……!

「いえ。気配が云々以前に階段を下りる音とか廊下を歩く音で気付きますよ」

「あー、確かに……」

いくら料理をしていてもリビングの前を通る足音くらいは聞こえる。ましてやテレビもついてない、包丁の叩く音が洗面所まで聞こえるくらい静かだったんだから階段を下りる音だって聞こえるよねー。

「それじゃあちょうど卵も焼き上がりましたから、食べましょうか朝ごはん。先に座って待っていてください。あ、ごはんとお味噌汁はどれくらいにします?」

少なめかなあ、と答えて席に着く。テーブルの上には既に二人分のおかずが用意されていて、

……これは見事な和食系朝ごはん……!

焼きたて、と見て分かるように湯気が立つ鮭と、その横に置かれた二つの小鉢の中身は、鰹節のかかったほうれん草のおひたしと冷ややっこだ。それに加えてあとから卵焼きがくる。

これはまるで、

「おじいちゃんとおばあちゃんの朝ごはんみたい、ですか？」

と、女の子が切り分けた卵焼きと、二人分のごはんとお味噌汁を乗せたお盆を持って来た。

「そう。そんなイメージがする。これでうめぼしとか味付け海苔があつたらもう完璧で」

「勿論あります。今もって来ますね」

そう言つて女の子がごはんとお味噌汁、卵焼きをそれぞれ配置してキッチンへと戻つた。

……アレこれつていつも俺が使つてる茶碗とお椀だ。

なんであの子が知つてんの？ 置いてある箸だつて俺のだし……

もしや今の俺の状況は俗にいう「朝起きたらそこは異世界だった……

！」の並行世界Ver. って可能性が――。

「いや無いですつて」

「だよーね」

もしそんな事になつてたら朝一でセラフが教えてくれるつて。

はっはっは。………ん？

………そういえば今日セラフを見てない………？

どこに行つたんだろう。黙つて居なくなるなんて事は今まで無かつたのに。いつもなら起きると目の前に居たり頭に乗つてたりする。もしくは朝ごはんの準備を――。

「――まさか」

いやいやいやいやいや。そんなまさか。いくら何でもそれは、……ありえそうだから困るなあ。あるだろうなあセラフなら。うん。黙つて居なくなる事は無くても黙つてサプライズを計画する事はあ
ると思う。

「どうしました？」

冷蔵庫からうめぼしを、棚から味付け海苔の缶を取り出して女の子

が戻って来た。

俺の向かい側の席に座り、二つをテーブルの真ん中に置く。首を傾げて私の顔に何かついていきますか、それとも何処かおかしな所でも……、と自分の顔をペタペタと女の子が触りだした。

……何ですぐに気付けなかったかなー……。

あのかわいい声にさっきのやり取り、というかむしろ最初の俺に気付いていたと、そう言われた時点で分かりそうなものだったの。いやホント、眠気が飛んだからといって頭が回るとは限らないね……。

「あのー」

「ああいや。かわいい声だったから、つい」

「もう……ー！」

うれしいですよ！ と、女の子はほんのりほっぺを染めながら照れ笑う。

やっぱり。この声にこの反応、この子は間違いなく、

「セラフ、だよね……？」

「——はい。そうですよ、マスター。やっと気が付いてくれましたか。ふふ、試しに人の姿になってみたんですが、……どうですか？」

上目使いで小首を傾げるその仕草は、反則だと思えます。

くセラフがセラフさんに。あ、セラフちゃん……？く

セラフの手作り朝ごはんを美味しく食べながら、どうして人の姿になったのかを聞いた。理由としては単純なもので、

「マスターを驚かせるためのサプライズです。新しく魔法を作ってみました。どうです。驚きましたか？ 驚いたのなら卵焼きを、驚かなかったのならごはんを食べてください」

なので、卵焼きに箸で切れ目を入れて、ごはんを少し詰めて口の中に放り込んだ。それを見たセラフが「そうきますか……！」と、こつちをマネして卵焼きに切れ目を入れてご飯を少し詰め、何故かそこらうめぼしを追加して「あ、すっぱ」とかやったのを見て笑った。

そして続けざまにセラフが、

「べ、別に笑わなくなっただっていいじゃないですか！ 私、初めてなんですよ？ うめぼし食べるの。味のシミュレーションはしていましたよ。まさか此処までとは……！」 味覚の調整をあっちゅうい！」

口直しに、とお茶を飲んだ反応を見た瞬間さらに笑った。フーフー冷ましながら湯呑み揺らして「感覚が鋭すぎましたか」「少し下げましょう」「お茶が美味しい……」などと自己完結していたので、まあ、気にしなくていいか。問題発見からの即修正とはさすがだね……！

そんなこんなで朝ごはんを食べ終えたあと、今日は特にこれといって予定もないので食後の運動を兼ねて散歩に出た。横を並んで歩くセラフが突然、

「二度ある事は三度ある、って言いますが、三度ある事は四度目もあると思うんですよ。私は。マスターはその辺どう思います？」

と、たまたま通りかかった公園の前で言い出した。ヤメテ。その言い方だとまるで近い内に何かがあるような感じじゃない。一度目はともかくとして、二度目と三度目みたいな目には遭いたくないし遠慮したいんですけど。

……あ、でも一度目は目の前で泣かれて俺が泣かしたようになってたなあ。

あの時、周りの奥様方からの視線の痛さは今でもよく覚えて、……アレ。俺ってこの公園での出来事で必ず何かしらの大変な目に遭ってる？ もの凄い殺気で睨まれて胸倉掴まれたり誘拐されて銃で撃たれかけたり誤解からの戦闘で焼きすぎたり、……うわあ。

「……四度目があるなら、出来れば平和的な出来事が良いなあ」

「ふふふ、そうですね」

それから公園を過ぎて数分。河川敷の横を歩いていると見知った人を見つけた。

「あれ土郎さん？ こんな所で何を……」

ああ、翠屋JFCの練習中か。そういえば夏休みになったら試合があるって言ってたわ。

「以前の練習試合だとマスターが助っ人として参加しましたが、今度の試合も助っ人で？」

「出ないよ。あの時はメンバーの一人が怪我でお休みだったからその代役。今回は大丈夫でしょ」

なのはたちと応援には行くよ。是非来てくれ、って誘われてるし。もしもの時の交代要員として数えられてそれで若干の嫌な予感がするけどねー。

「そりゃあ前回の試合で活躍したんですから、期待されるのも当然ですって」

「そんな事言われてもねえ……」

活躍したなんて言われても別に俺シュート決めたワケじゃないですし。だって一点も取ってないよ？ なんとなく相手がパス回しそうだなあ、って思った所に入って、ボールを奪って味方にパスしただけで。

「サラツと言いますけどその、マスターの“なんとなく”が完全の中なのは普通から見れば異常ですからね？ 飛んで来たボールを徹底的に横からかすめ取って味方にパスを回して。」

流石に相手のチームもイライラして後半やけくそになって突っ込むのも分かります」

「それを言うなら俺じゃなくてキーパー君を褒めるべきだと思うんだけどなあ」

俺が奪ったボールを味方に回して、それを奪い返されてシュートされてもその全部を弾いたキーパー君の方が真に活躍したんじゃないかな。

「私やなのはさんたちにとってはマスターが活躍した、その事が重要なんです。それに、キーパーの彼にはちゃんと見ていた方がいたようですから、マスターが気にしなくても大丈夫でしょう」

「あー」

マネージャーちゃんか、などと話しながら河川敷を通り過ぎ、そのまま川沿いに歩いて行ったら臨海公園に着いた。セラフと並んでベンチに座り、海を眺め、

……途中でバスに乗ればよかった。

いや別に、臨海公園を目指してたわけじゃないから乗っても別の場

所に行っただろうけど、……やっぱ気分的にはそう感じちゃうよね。まあ良い食後の運動になったけどさ。

と、不意にセラフが立ち上がり、

「——マスター。私、たい焼きが食べたいです」

「……はい？」

「あそこの屋台、たまにマスターたちが学校の帰りに立ち寄る屋台じゃないですか。リニスさんともわざわざ買いにも来ていましたし、……私だけまだ食べてないんですよ」

「そんな真顔で言わなくても」

「いいえ。言います。——私だけ仲間はずれとか悲しいですよ!」

えええー……。

くそこなの……?？」

屋台でたい焼きを二つ買って、休憩所に移動した。セラフとお互いを選んで味の違うたい焼きを半分こして食べつつ、

「そういえば以前、ここでのなのはさんのビックリ行動があったじゃないですか」

「ん? あー、あったあった。飛んで来た野球のボールを受け止めたやつ」

あの時は本当にビックリしたなあ。皆で学校帰りにあの屋台でたい焼きを買って、食べながら歩いてたらどこからともなくボールが飛んで来て、

「それをなのはさんが」はじめから見えていたように”アリサさんを庇って受け止めて、それを見たすずかさんが横で「なのはちゃんナイスキャッチ」なんて言っていましたけど、どう見てもそんなレベルじゃなかったですから。

アレ。なのはさんの、あの天性の空間把握能力には驚きを通りこして感心しますよ」

「ホントにねー」

というかすずかはその時そんな事を言ってたのか。ボールを探し

に来た高校生くらいのお兄さんたちに、アリサが食ってかかるのを止めるので気付かなかった……。

「でもアレだ。もしあの時なのはが動かなくても代わりにさすがが反応したと思う」

位置的には俺と一緒になのはとアリサの左側に居たから、二人にとっては死角でも俺たちからはボールが飛んで来るのは丸見えだった。さすがの身体能力だったら簡単に受け止められたと思う。

「ええ。飛んで来たのを見た瞬間身構えていましたから。たとえなのはさんが反応しなくてマスターがたい焼き食べるのに夢中で気付くのが遅れたとしても、アリサさんは無事だったでしょう」

「……以後、超気をつけます」

そうしてください、とセラフが一口大にまで小さくなった、俺が渡した方のたい焼きを口に入れた。そして、

「はい、マスター。あくん、です」

もう片方、セラフが自分で選んだ方のたい焼きを口に持ってきたので、それを一口。半分こで貰ったんだから意味ないと思うんだけど……。

「意味はあります。これでマスターもお返として私にあくんをする理由ができました……！ さあ、恥ずかしがらずにどうぞー！」

「いやこれくらい恥ずかしくもなんともないから」

あと、そんな理由作りをしなくてもあくんくらいやってあげるから。

「はい、あくん」

「あくん」

自分の選んだ方のたい焼きをセラフの口へ持っていくと、それをパクツと一口。

「——おや？ 噂をすればなんとやら、ですね」

満足そうに食べていたセラフが海を見た。風が吹き、乗って来るのは潮の香り。直後に感じたのは良く知る魔力で、

「なのは……？」

「それとユーノさんですね。反応的には此処からかなり沖合の方に転

移したようですが」

遠く、結界が展開されたのが見えた。

「広域結界ですか。それもかなりの強固な結界、どうやらなのはさんの砲撃練習っぽいです」

「町の上でドカンとぶつ放すより海の上の方が安全だからねえ」

なのはの砲撃つてどれも威力がすごいから、一歩間違えたら結界をぶち抜いて町に被害が出かねないんだよね。いくらユーノの結界でも、だ。実際に、

「前に失敗して結界をぶち抜いた砲撃が、夜空に桜色の流星を描いた時は騒ぎになりましたよね」

「あれ見た時に、やっぱりユーノの結界でもブレイカーは無理か……！　って。そう思ってたんだけど」

あとでなのはに聞いたら「あれはデイベインバスターだよ？」なんて首を傾げられた。

……火力に全振りだもんなあ、なのは。

どうも最近ブレイカーの発射速度を上げられないか考えてたみたいだけど、どうなったんだろう。もしアレが連射可能にでもなったら恐ろしすぎやしませんかね……!?

「えーっと、むしろその逆、って感じですねこの反応は」

「逆って」

なにが？　と聞こうとしたら風が強く吹いた。続いて結界に亀裂が走ったのが見え、

「あ——」

それと同時に桜色の光が空高くへと昇った。それが示すのはつまり、

「ユーノの結界がまたぶち抜かれた……!」

「いえ。今回はぶち抜いたんじゃないやなくて内側からの破壊。単純魔力砲撃で貫通ではなく、広域結界を結界機能ごと完全に破壊するとは……。流石ですなのはさん……!」

セラフがむしろその逆、って言った意味が分かった。

多分、「チャージタイムをさらに増やして威力を大幅アップ!」とか

言って最大威力の強化を最優先にしたんだろうなあ。

「高火力っていうか豪火力……」

「おまけに防御力もガッチガチと来ていますから、——歩く要塞ですかね？　なのはさんは」

頷きかけた。

く帰ったらユーノに感想でも聞こう

なのはとユーノが転移で帰って行ったのを確認して、残りのたい焼きを食べてから臨海公園を出た。近くの停留所でバスを待ちながら、「それで、このあとどうします？」

「どうしよう」

とりあえず、つて感じでバス停に来たけど特に行く場所考えてないんだよねえ。

「帰るって気分でもないし……、セラフはどっか行きたい所ある？」

「そうですね……。あ、それじゃあ街に行きましょうよ。中心部の方に。来週からテストタロツサ家の方々が泊まりに来ますし、皆さん専用のお茶碗を見に」

「待ってセラフ。あの一家が泊まりに来るって今初めて聞いたんですけど!?!」

「そうだ。ついになのはさんたち専用のお茶碗も見ませんか？　用意しておいて困る物でもありませんし、なのはさんには桜柄とか良いんじゃないでしょうか。アリサさんとすずかさんには、……どんな物が良いですかね」

あれスルー？　スルーされた？　ちくせう。泊まりに来るつても朝のサプライズの内か……!」

「ふふ。昨日、リニスさんから連絡があつて、マスターの夏休みに合わせて皆さんで泊まり来るそうです。前々から話していた海への旅行もありますから、その前乗りとして、だそうで」

「それ、前乗りにしても気が早すぎるんじゃないや……」

「ですよねえ」

そう言つてセラフが体を倒し、俺の膝の上に頭を乗せた。

「眠いの？」

「いえ、眠くはないです。ただなんとなく。そこにマスターの膝があったもので、つい」

「そう」

「はい」

そのまま、三分くらい経った頃にバスがやって来た。セラフが体を起こし、軽く伸びをして、

「いやあ、良いですね膝枕つて。次は私がマスターにする番です……！」

「遠慮します」

人前でそんな恥ずかしい事は勘弁してくださいお願いします。

「あくんはオツケーで膝枕がダメとは……。じゃあうちなら良いんですね……!?!」

やかましい。いいからバスに乗るよ。街に行くんでしょ？ あんまり待たせるのはよくない。

「そうですね。——あ、マスター」

と、バスに乗ろうと立ち上がったら手を引かれた。振り向くとセラフがにこやかに、

「少しの間かもしれないませんが、また、うちの中が賑やかになりますね」

その一言で、なんか、分かった気がする。セラフが人の姿になった本当の理由が。いやまあ、俺にサプライズするため、つていうのも本当の理由なんだろうけど。

……それだけとは限らないよなあ。

セラフだもん。あと二、三個は理由があると思う。特売の卵を買うのに便利でしょう、とか、リニスさんの代わりの対人戦闘訓練用です、とか。でも、

……リニスが居なくなつてちょっと寂しかったのがバレてたか。

やっぱセラフすげえ。流石だね。次元世界一のデバイスは伊達じゃない。だから、

「セラフが居るから皆が帰っても寂しくないし、なのはたちもいるから大丈夫。それに——」

少しくらいカッコつけよう。俺が気付いた事にセラフは気が付いているだろうけど、それでも、やっぱり口に出すのは恥ずかしいから笑って誤魔化そう。

「やっぱ止めた。ほら、バスが待つてるから行くよ」

「——はいっ」

心の中で、そつとつぶやく。

——ありがとう。

「あ。今リニスさんからメールが来たんですが、……アリスアさんとフェイトさんにプレシアさんが負けて、明日から泊まりに来るそうです」

「何があつたんだよ……!」

第二十五話：夏といえばやつぱり海

青い空。白い雲。さんさんと降り注ぐ太陽の日差し。

その日差しをキラキラと反射しながら揺らめく、果ての見えない紺碧の色。

「行ったわよ、なのはっ」

「え、あ、アリサちゃ、——んにゃんっ!？」

「……っ、なのはが上げてくれたボールは私がさすがに……!」

「ナイストス、フェイトちゃん! ——アリシアちゃん、それっ!」

「まっかせろお——!」

と、そんな風景を背に水着姿でビーチボールを落とさないように回し、空高く打ち上げる皆。

「ああ、なんてかわいらしいの……。あの子たちの水着姿が見られるなんて、本当に、本当に生きていてよかったわ——!」

「まあ。プレシアさんったら本当にアリシアちゃんとフェイトちゃんの事が大好きなんですわ」

「時々、それが過ぎてとんでもない事をしてかきそうになりますけど。ええ。立派な子親バカ煩惱です。——あ、こらプレシア! そのビデオカメラ防水じゃないんだから海に潜ろうとしない!」

「大丈夫。今の私に不可能はないわ、リンディ。——だってあの子たちを撮るためだもの……!」

「貴女になくてもビデオカメラにはあるのよ——!」

そんな皆から少し離れた所で騒ぐ母親組、もといプレシアさんとりンディさん。二人を呆れもしないで笑いながら眺める桃子さんは、なんか流石としか言いようがない。

普段から似たような人たちと一緒に居るからなあ。

「いいかい恭也。なのはたちの事は秋介に頼んだから、もしもの時まで僕は母さんたち、お前は美由希や忍ちゃんたちのガードだ。——気を抜くなよ?」

「分かってるよ父さん。向うは俺に任せてくれ」

「微力ながら私もお手伝いさせていただきます」

その似たような人たちと執事さんが二手に分かれた。

士郎さんが母親組。恭也さんと鮫島さんが海の家で、「やっぱり焼きそばしなびれてる……!」「このカレー具がない……!?!」「でもなぜか」「美味しく感じるのは」「どうしてなんでしよう」とかやってる美由希さんにエイミイさん、忍さんとメイド姉妹たちお姉さん組に付いた。

というかガードって何に対してなんだろう。

夏の海によく出現する声かけお兄さんたちに対するガードか、それとも旅館の女将さんに聞いた「女を攫う幽霊」に対してなのか。まあ昼間から幽霊が出ないとは思うけど、士郎さんの事だからそのどっちに対してもなんだろうなあ。そもそも幽霊の事信じてるのかは別として。

ともあれガード組を見て思う事がある。

……鮫島さんすげえ。

真夏の海、それも太陽の日差しが強い中でも普段と変わらずの執事服ですよ。あの人、春夏秋冬どこに行くにもあの格好で、しかも常に涼しい顔してるもんだから見てるとたまに季節が分からなくなる。一昨年の旅行で海に行った時も執事服だったし、去年の旅行は山でキャンプだったけどそこでも当然のことながら執事服だった。

そう言えば鮫島さんの私服姿とか今まで一回も見た事ない……。

「鑑だね……」

まあ、よそ様の執事さんがどうなのかは知らんけども。

『アリシアとフェイトですか?』

「いやそつちの鏡じゃないかなあ」

ビーチパラソルの陰に座って、海の家で買った瓶ラムネ片手に皆を眺めてたら膝上のリニスが顔を上げた。一度首を傾げ、俺と同じ方を見てニヤウと一鳴き。

『なるほど。鮫島さんですか』

『なあなあ、……そんな事よりさあ秋介。お水ちようだい。さつきから暑くて溶けそうだよ……』

続いて子犬モードのアルフが顔を上げた。暑いのかグツタリとし

た感じで俺の膝に顎を乗せ、

『うー。こんな事ならこの姿でこっちに来るんじゃないやなかったよ。私もフエイトと一緒に遊びたい泳ぎたいー』

そりや仕方ない。最初にその姿で皆には紹介しちゃったし、いきなり旅行当日に同じ名前のお姉さんが現れたら変に思われる。子犬の方がいなくなっちゃうんだから余計にね。

「なら行って来ればいいのに。別に、海でペットと一緒に遊ぶ飼い主なんて珍しくもないよ?」

現に向うの岩場にも犬を連れなお姉さんが……、

「よし。お前たち、ちよつと潜って今夜用の食材を獲ってこい。そしてフグとやらを獲ってこい。アレの毒なら万が一という事もあるやもしれん。」

……あつ、決して私が食べたいからではないぞ? 刺身にしてまとめて食べたいとか、そんな事ないからな? 分かったか。分かったな? ——なら行け、その槍にかけて!」

「いや行かねえよ! 急に呼び出して何言い出すんだ! つーかよくその説明で行くと思っただけ!? あんたがフグ程度の毒に負ける筈ねえ、ただ単に食べただけじゃねえか!」

「断じてそんな事はないぞっ」

「大体、オレは釣りがしてえんだ、行かせるならこっちにしやがれ! 急造品の槍でちょうどいいだろうが! あと何が「ないぞっ」だ。いい歳して可愛くねぐああああ——!」

「はあ!? ふざけんじゃねえ! オレだって好きで急造品使ってるじゃねえんだよ! そんな理由で選ばれてたまるか……! あと師匠は歳を考えぐああああ——!」

「おいコラ。テメエ。それは杖持つてるオレに対しての嫌味か? ああ? だったら使つてない槍よこせや! 今のテメエ以上に使いこなしてやらあ! あといくら何でも「ないぞっ」は流石にキツイぐああああ——!」

「はーはっはあ! いやまったく。お前たちは変わらん! 見ていて飽きん。——さて、それじゃあ俺は女子でも釣りに行くとする

か」

「何処に行く。——お前も行くのだ。その剣つばいドリルでちよつと獲物を突いてこい」

「——なんと!？」

生殺しか!? の叫びと共に、おじさんを含めた、三人のそっくりなお兄さんたちが海に叩きこまれた。叩き込んだお姉さんが腰に手を当て、

「ふむ。……びーちちえあとやらで一休みするか」

一瞬でタイツ姿から水着姿に変わったお姉さんが、こつちに向かつて歩いて来る。途中、金髪ロングのお兄さんと泣き黒子が印象的なお兄さんを見つけて、

「ちようどいい、お前たちも潜ってフグ獲ってこい。人手は大いに越したことはないからな」

と、かなり理不尽極まりない事を言いながら、何か言いかけた二人を海に叩きこんだ。

お兄さんたちは一体何を言おうとしたのか。大体の予想はつくけど俺は絶対に口に出さない。叩き込まれたくないからね!

……よし。今のは見なかった事にしよう。

触らぬ神に祟りなし。てか何でお姉さんが犬を連れてると思ったんだろ。うーん、……あ、お兄さんたちの雰囲気的な?

「ごめんアルフ、犬違いだったわ」

『……? よく分かんないけど。とりあえずお水おくれよ』

ああそうだった、と後ろのクーラーボックスからペットボトルを取り出して、キャップを外してアルフに渡す。

『んぐ、んぐ、……プハア。あー生き返るう』

『ペットボトルのままとはまた器用な……。ああもう、そんなに慌てて飲むと零しますよ。秋介、タオルをお願いします』

俺としては、渡したタオルでアルフの口元を拭くりニスも器用だと思っただけだなあ。

「器用以前に普通はそのまま水を渡さないだろう」

と、なにやら豆が乗った紙皿を持ってクロノが戻って来た。

「お帰りー。海の家には並んでなかったみたいだけど、それ何？　どこで買って来たの？」

「ああ、向うの屋台で買ったんだ。確かひよこ豆？　のペーストとかいうものらしい。快活そうな店主に勧められたんだが、……中々に美味しいぞコレ」

「へえ。ならあとで俺も買ってみようかな……。あ、ところでクロノ、アースラから連絡があったとか言ってたけど何だったの？」

その為に席を外したって事はもしかしてなにか事件？

「たいしたことじゃない。ただ、この辺りで妙な魔力反応のようなモノがあったから注意を、との事だ。席を外したのはちよつとした見回りだよ。特にそれらしいモノは見当たらなかったけどね」

「そうなのセラフさん？」

『はい。確かにこの辺り、特に海辺でそのような反応があります。といっても今のところ問題が起きるような気配はありませんから、一応注意しておく、くらいで十分かと』

なるほどねえ。

「じゃあなんかあったらよろしく執務官」

「その時は君も強制参加だからな。あとそのフェレットも」

『急にこつちに飛び火した!?!』

おお、今の今まで静かだったから忘れてた。ユーノ、さつきから一生懸命なにやってんのよ。

『これ？　これは』

と、ユーノが言いかけた時、向うでアリシアが打ち上げ損ねたボールが勢いよくこつちに飛んで来た。そして、

「ぼうっ」

「キュッ!？」

俺の顔面にクリーンヒット。バウンドしたボールがパラソルの裏にぶつかって、続いてユーノを襲った。

「……大丈夫か、ユーノ？」

『な、何とか』

「俺の事は心配してくれないのね、クロノ……」

「君の事は心配する必要ないだろ。ラムネが台無しになっただけのよ
うだし」

そう言いながらユーノの向う側に座ったクロノが、タオルを差し出
しながら俺の膝元を指した。

見ると、いつの間にか手から落ちた瓶から中身が零れていて、

……ラムネのシユワシユワ感が太股を……！

と、思うが、別に今は水着を着ているからセーフ。でも一応、クロ
ノから受け取ったタオルでラムネを拭いておく。あれ、そう言えばリ
ニスと膝上から消えて……。

『危なかったです』

『流石はリニスさん。アリシアさんの「あっ」って声を聞いて即座にマ
スターの頭の上に避難とは……。見事な身のこなしです……！』

『秋介の何処にどう足をかければ効率よく、そして素早く登れるかは
熟知していますので。ええ、服を着ていない分いつも以上に爪を立て
ないように気を付ける必要がありますが、——余裕です』

『登らなくてもジャンプで十分なんじゃ……』

『アルフ（さん）は分かってない』

なにがだよ。俺だって分からないからね？　って、アルフ。リニス
に登り方聞いて試そうとしない。あとユーノも『なのはと秋介は登り
方違うからなあ』なんて頷いてないでよ……。

『秋介ごめーん。だいじょーぶー？　あとボール取って——』

『あいよー』

こつちに手を振るアリシア目がけてボールを投げ返す。少し風に
流されておでこにヒット。

『惜しい……。次こそは必ず』

『当てたら雷が落ちて来そうですねー』

一瞬、バチバチ、と電気が走ったような音が聞こえた気がしたので
予定変更。寝る前の枕投げでやり返そう。

『それで、ユーノはさつきから何してたの』

『ああ、うん。実はね、なのは用に僕たちの世界の事をまとめた資料を
用意してるんだ。ほら、今度フェイトと一緒に“嘱託魔導師認定試験

“を受けるから、その筆記試験対策でね”

『あー、アレな。私、フェイトと一緒に受けるんだ。お互い頑張ろうなー。秋介』

お互い頑張るって、……何が？ それに、しょくたくまどうしにんていしけん？

『もしかして秋介は聞いてなかった？ てつきり二人かクロノに聞いたと思っただけど』

ユーノが首を傾げてクロノを見た。

「僕はちゃんと話したぞ、こつちに来た日に。……まさかとは思うが聞いてなかったのか？」

「えっ……。あ、いや、ちゃんと聞いてたよ？ アレでしょ？ なのはとフェイトが囑託魔導師の試験を受けるとか、受けないとかって、……話？」

「えっ、とか言わなかったか今。秋介、絶対にあの時の僕の話聞いていなかっただろ。最後疑問形だったし」

そんな事ない。そんな事ないですよ……。大丈夫、覚えてるから。今思い出すから。クロノがこつちに来た日って事は三日前の事だよな？ あの日って確かお昼過ぎに突然プレシアさんが、

「海への旅行にリンディたちも行くことになったから迎えに出てくるわ。あ、旅行までここに泊まるそうだからよろしく坊や」

とか言い出してセラフさんとリニス連れて行っちゃったもんだから、大慌てで部屋の準備やら掃除をしたのは覚えてる。

それで、帰って来たプレシアさんがリンディさんを連れて高町家に挨拶に行つて、残ったクロノとエイミイさんに手伝ってもらって掃除やらを終わらせて……。

『そのあとアリシアさんが「今夜はすき焼きにしようよ」って言い出して、足りない分の野菜とかお肉の買い出しでドタバタしていましたから』

『おまけにフェイトがおつかいに行った帰りに迷子になって、その連絡聞いたプレシアが血相変えて迎えに行きましたが、アレ、今思えば転移魔法使つてうちに呼び戻した方が速かったですよね』

もしそうだったとしても周りに人が居たら「海鳴市騒然!! 昼間の住宅街で女の子が神隠しに!」みたいな見出しが新聞の一面を飾ったんじゃないかなあ。

まあそれはそれとして、そのあとも色々あった。

ごはんの準備中にアリシアが糸こんのニユルニユル感に驚いてすっ転んで、近くにいたクロノに激突。そのクロノがバランスを崩して卵を冷蔵庫から取り出してた俺にぶつかり、二人揃って頭から卵をかぶる、なんてことがあった。お陰でお風呂に入ることになったけど、

……そう言えばあの時、クロノが何か言ってた気がする。

頭洗ってる最中だったから適当に「あー」とか「なるほどねー」「確かに」って返事してたけどまさかあれが……?

「はあ」

まったく、とクロノが頭を抱えた。

「……もしかして何か重要な話とかしてた?」

「いや。重要な話はしてないよ。君も二人と一緒に認定試験を受けることになったくらいだから、まあ、気にするな」

メチャクチャ気にするよソレ……! なにサラッと重要な事言ってるの!?

『適当に返事するからですよ、マスター……』

『人の話はちゃんと聞かないとダメですからね?』

くう、セラフとリニスの言葉が刺さる……!

「そうだろうと思った。あの時、随分と気のない返事だったからまさかとは思ったが……。まあいいや。それじゃ改めて聞くが、君も”嘱託魔導師認定試験”を受ける気はあるか?」

「あるよー」

「即答だな」

まあね。もしここで断ってもどの道あとからなのはとフェイトにも誘われる気もするし。二人そろって上目遣いで「一緒に試験受けよう?」なんてやられたら断れる気がしない。それに、

「嘱託魔導師になっておけば、何かしでかしても俺を誘ったクロノの

所為にできる」

「おい」

「というのは冗談で。実際は囑託魔導師になっておけばこっちの世界で何かあった時、俺の判断で勝手に動いても大丈夫かなー、って」

「その言い方だと近い内にまた何か起きるように聞こえるな」

「そりゃ二十一個のジュエルシード全部が綺麗に揃って落ちて来る世界だからね、此処は。しかも一つの街に。また何か起きても不思議じゃないって」

現に今だってこの辺りに妙な魔力反応があるみたいだし、中々気が抜けないよねえ。

「……まあ、理由はどうあれ、使い魔持ちの魔導師が管理局に協力してくれるのはありがたい」

『ねえクロノ、どうして使い魔のところで僕を見た』

『どうしてって、君はなのは使い魔だろう？ ——ネズミ素体の。あ、フェレット素体か？』

『しつこいなあ……！』

いつも通りのクロノとユーノの飽きないやり取りを見ながら、ふと疑問に思った。

「あのさクロノ、もしかしてその使い魔持ちの魔導師って俺の事？
フェイトじゃなくて？」

聞くと、他に誰が居るんだ、といった具合にクロノが首を傾げた。
……ああ、そっか。まだ言っていなかったっけ。

「君にはリニスが居るじゃないか。以前本人に聞いたが、元はプレシア女史の使い魔だったらしいが今は君の使い魔なんだろう？」

『うん。僕もそう聞いている』

「それはちよつと前までの話。今はもうリニスは俺の使い魔じゃないよ」

「……つまりどういうことだ？」

別にそこまで難しい事じゃない。ただ単に、

「クロノたちが来る前、というかプレシアさんたちがうちに来た日なだけでどね？ その日にプレシアさんに頼まれたんだよ。——リニ

スをもう一度、自分の使い魔として契約したい、って」

だからまあ、契約した時と同じようにセラフに頼んで使い魔の契約を移譲してもらったのよ。俺からプレシアさんにね。

「今のリニスは何じゃなくて、元通りのプレシアさんの使い魔。元の鞘に納まったって感じかな」

「——ああ、だからプレシア女史はこの前、母さんに使い魔の登録申請書類を頼んでいたのか。

なるほど。フェイトに渡すものかと思っただが、そういう……」

なにやらクロノが一人で納得し、頷いた。

すると向う、いつの間にかボールのトス回しからビーチバレーにシフトした、なのはたちの方で声が上がった。何事かと顔を向けると、フェイトが砂浜を蹴って大きく飛び上がり、

「せ——のっ」

アリサとすずかが見上げる、相手側のコートにシュートを叩きこんだ。が、それをすずかが拾い、アリサがトスを上げ、さらに今度はすずかが飛び上がり、

「えいやっ」

「にゃっ」

目を輝かせてフェイトを見上げていたなのはの顔横を通過させ、シュートを返した。

……すずかすずか。

「すずかすずか……と、あ。アリサ・すずかチームに一点！」

俺と同じことを思ったらしいアリシアが左手を挙げ、どこから拾って来たのか紅い棒状のモノを点数に見立てて砂浜に突き刺した。

「じゃあ次はこの黄色いヤツだから、……そうだなー。ちよつと趣向を変えて点数二倍でどう？」

「ならこっちの朱色は三倍なんてどうかな」

「この、……杖っぽいのはどうするの？」

「ノーカン。コートの線を書き直すのにでも使えばいいわ」

「じゃあこのドリルっぽいのは？」

「紅いのと一緒で一点。というかなんでこの海にはドリルとか杖とか

槍っぽいモノが流れ着くワケ？ 近くでコスプレ大会でもやってるの？」

強制参加の素潜り大会はやってるんじゃないかなあ。

「……流石は君となのはの友達だな」

『フェイトと張り合うはずかっつて一体何者……？』

「運動神経がメチャクチャ良い普通のお嬢様だよ」

『お嬢様で普通って、感覚麻痺してないかい、秋介？』

アルフの言う通り麻痺してるかもねえ。アリサだっつてかなりお嬢様だし、見方を変えればアリシアとフェイトだっつてお嬢様でしょ？

リニスに写真とか見せてもらったけど家メツチャデカかったじゃん。向うの世界じゃどうか知らんけど庭園付の屋敷っつて、こっちの世界じゃかなりランク上の方だからね？

『ならマスター。私たちは空中庭園でも造っつてランクのトップを狙いますか』

「そんな面倒くさい事しません」

え、造れるの……!? とリニスを除いた周りはかなり驚かれた。いや、魔法の世界の住人が空中庭園くらいで驚いてどうする。こっちからしたらアースラも中々だからね？ と返してバレーを再開したのはたちに目を向けた。

と、そんな皆に近づく人影を見つけた。その人影が、なのはが変な方向に飛ばしたボールを拾おうとして、

「デユフ」

「アウトオ——！」

『うあっ!?! 急にどうしたの？ 秋介。び、ビックリしたあ……』

おっつごめんユーフ。それに他の皆も。つい反射的に叫んじやっつた。

でも仕方ない、今のは絶対に仕方ない。

……ついに大人組に頼まれた仕事をする時が……!

今日の朝、海に着いた時に士郎さんたち大人組に頼まれた、重要な任務がある。それは、

……なのはたちに近づく変質者を見つけたら叫べ、か。

拾ったボールを手に、何故か若干、内股気味に皆に近づく人影を確認する。

多分、二メートル越えの巨漢。白髪に見える、髪に交じった導火線のようなモノ。黒い髭。

「ンン。このボールをきつかけにあの水着美少女たちに声をかけて、そしてバレーと一緒に楽しんじゃったりなんかしてキャツキャウフフな夏の海を満喫する。——デユフフフ！」

なんとという完璧な作戦。拙者、自分で自分の才能が怖くなってきましたぞ……！」

変な笑い方に、変な喋り方。加えて皆に近づくにごとにニヤついて行く顔。

うん。間違いなく、

「アウト——ッ!!」

立ち上がり、さつきより大きく、目標が分かるように手で示しながら叫ぶ。同時に、何処からともなく現れた二つの人影が巨漢の前に立ちふさがった。

一つは長身の、前の開いたパーカーから偶に覗く幾つもの傷跡が印象的な男の人で、もう一つは、傷跡はないがその男の人によく似たお兄さん。

二人は目の笑わない笑顔で巨漢の肩に手を置き、

「すみません。我々、あの子たちの保護者なんですが」

「ちよつと一緒に来てもらえませんか？」

「え、いやちよつと拙者まだ何もしてな」

「ほう。まだ、ですか」

「という事は、これから何かするつもりだったんですね」

「いやあ、拙者のバカア——」

巨漢に有無を言わず、岩場の方に引き連れて行く二人は、——士郎さんと恭也さんだった。

「……? 今何か悲鳴が聞こえなかった? あと雷の音も。……夕立でも降るのかな」

「気のせいじゃない? それよりもどこまでボール飛ばしたのよ、な

のは」

「確かこっちの方に飛んで行っただけ……」

「あ、あれじゃないかな。あそこに落ちてるの」

「それじゃあバレーさいかい……!」

なのはたちがチームに別れた所で、ひよこ豆のペーストを食べ終えたクロノが、

「……流石だな。なのはの家族は」

『うん』

「だよねえ」

とりあえず、俺たちもバレーに混ぜてもらおうかな。

第二十六話：温泉の洞窟って何か惹かれるよね

日が暮れるまで遊んだ俺たちは、晩ごはんの前に温泉に入る事にした。

茜色から紺色へと染まり始めた空を頭上に、夕陽が沈んで行く水平線を一望しながらお湯に浸る。お湯の表面から生えるように立つ大きめの石に寄りかかって、軽く手足を伸ばし、

「いやー、やっぱり温泉は良いねえ……」

『良いですねえ……』

露天風呂っていうのがまたさらに良い。うちで広げる温泉はいつも地下室で、雰囲気づくりとしてセラフが魔法で自然の風景を映し出してくれるけどやっぱり本物の方がテンション上がる。

「それにしても露天風呂というのは凄いな。ミッドや他の世界にも温泉のようなものはあるが、ここまで自然と近いのは初めてだよ」

『でもこの姿だと僕、温泉入ったら濡れちゃうからなあ』

ちょうど体を洗い終えたクロノが、ユーノを肩に乗せてやって来た。

「あー大丈夫大丈夫。ユーノ用にちゃんと準備してあるから」

クロノの肩から降りたユーノをつまんで、温泉のお湯を半分入れておいた桶に移す。あ、意外と沈まないもんだねコレ。乗せたらユーノもろとも沈むんじゃないか、って心配があったけど大丈夫そう良かった。

「私が一番乗りだ——ッ！ あつ」

と、アリシアの声が壁の向こうから聞こえた直後、滑って転んだのか、何かにぶつかったような音が響いた。続けざまなのはとフェイトの心配する声が聞こえて来て、

……走らないように、って注意したのに。

しかも今の音からして桶の山に突っ込んだな？　アリシア。他のお客さんの迷惑にならなきゃいいけど……。

「……あれ？」

よくよく見たらこの温泉、俺たち以外誰も居くない……？　もう

すぐ七時だから早すぎるって訳でもないしどゆこと？

「なんだ。聞いてなかったのか、秋介。今の時間帯は俺たちの貸し切りらしいぞ。そうだろ？ 父さん」

「ああ。この旅館の手配といい、何から何までデビットさんや月村さんのところに感謝だなあ」

少し遅れて土郎さんと恭也さんが、体を洗い終えてやって来た。二人はお湯に浸かろうとして、壁の方をチラッと見た土郎さんが、

「しかしこの旅館、パンフレットには混浴アリなんて書いてあったのにどこにも見当たらない。せつかく桃子と子供たちは恭也たちに任せて入ろう、って話していたのに……。」

あ、もしかして恭也。お前も忍ちゃんと一緒に混浴入るつもりだったりしたのか？」

「ぬなっ!？」

いきなりとんでもない事言いだしたぞこの人。

「どうかしたの、恭也——？ 今何か凄い音が聞こえたんだけど」

「だ、大丈夫、心配するな忍！ ちょっと足を滑らして温泉に落ちただけだから！」

「ハハ、壁を挟んでやり取りとはお熱いお熱い。流星は我が息子。温泉がさらに熱くなりそうだな……！ このラブラブカップル。ヒューヒュー！」

加えて甘くなりそうでもあるよね……！ と心の中だけで思っておく。口に出して土郎さんみたいに追いかけられたくないからね！

「お二人さーん。走ったらダメ——」

二人揃って足を滑らせて桶の山に突っ込んだ。そして見事なストライク。宙を舞った桶たちが追い打ちをかけるように二人の上に落ちて、

……遅かったかあ。

壁の向こうから、「もう、土郎さんたらはしやいじやって……」とか聞こえてくるあたりどっちもどっちじゃないかなー。流星は親子。恭也さんと忍さんも将来あの二人みたくなるのかね。

まあ、何はともあれ土郎さんと恭也さんが桶を山に戻す作業に入つたのを見届けて、壁の近くのかけ流しが通るぽつかりと穴の開いた大岩に目を向ける。次にクロノの方を一度見て立ち上がり、

「行くか」

『行きましょう、マスター』

「滑って転ばないように気を付けろよ」

えっ。一緒に来てくれないの、クロノ……？

「いやどうして行くと考えた。ただの洞窟だろう？ 何か危険があるわけでもなし、そもそもあの洞窟は入ってもすぐに出口じゃないか」と、クロノが俺の見た反対側を指した。

「むしろ入らなくても入り口から出口が見えるんじゃないか？ 探検できるような長さでもないだろ」

「ええー。一緒に行こうよクロノー。もしかしたら何かあるかもしれないじゃん」

「例えば？」

「……ろ、ロストロギア、とか……？」

「あつてたまるか」

思いつきり顔にお湯をかけられた。

くちよ、その桶はユーノ入ってるから使っちゃダメ——

クロノとのお湯のかけ合いが、土郎さんと恭也さんの乱入で二対二のチーム戦に変わり、果たして二人の親子対決へと変わってしまったので俺とクロノは洞窟の中に避難した。途中、桶から投げ出されて溺れかけていたユーノを拾って、

『ひ、ひどい目にあつた……』

「いやー、やっぱこうなつちやつたかー。土郎さんと恭也さんはしゃいでるなあ」

「呑気な事を言っていないであの人たちを止めてもらえないか……。ああも真ん中を陣取られちゃ上がるにも上がれない」

ごめん無理。ああなつたらもう止められるのは桃子さんくらいだ

と思う。もしかしたらなのはも止められるかもしれないけど、ここは男湯だから二人は居ないんだよねー。つまり、

「勝負がつくまでここで待機しかないかな」

『のぼせる……』

「身を低くしてこっそりと出て行くのはどうだ？」

やってみようか、とクロノと頷きあつてしやがみ、ユーノが溺れないように俺の頭の上のせて洞窟を出る。瞬間、目の前に勢いよく何かが叩きつけられて湯柱が立った。

見ると、その“何か”はさつきまで土郎さんたちが山に戻っていたはずの桶で、

……鼻先ちよつとかすつたんですけど——!?

急いで洞窟へと後退。直後に第二、第三の湯柱が出入り口付近に立ち、続けざまに桶と桶がぶつかるような音が聞こえてくる。やべえ、脱出難易度が間違いなく上がった……!!

「——とりあえず、お湯に浸からないように魔法で浮いてればのぼせないよね!?!」

「それは最後の手段だ! 何か、何か他にいい方法はないのか……!?!」

『じゃあ、秋介の宝具は? あの様子が消える緑のマント』

「それだ……!」

と、〈ノーフフェイス・メイキング顔の無い王〉を広げた所で重大な事に気が付いた。

……あ、ダメだ。

こっそりどころかむしろこっち見て的な状況になっちゃうんですけどもコレ。

『傍からだとお湯に不自然な穴が開きますから。しかも移動するなんて、——不自然過ぎて気付かれますね』

しかも濡れちゃうしこれぞまさしく万事休すってやつだね!!

『ソレ纏って脱衣所まで飛んで行く方法もあるけど……。流石に桶の飛び交う中は危険だよね』

「……裸で空を飛ぶというのは嫌だからな」

俺だって流石にそれは遠慮したい。いくら周りから見えないからって裸で空飛ぶのはちよつとね……。あれ? そういえば顔の無

い王」を纏ってる時って、周りと同化して見えなくなるけどその時に下から覗かれたらどうなるんだろう……？

「……ちよつと試しに」

「やるなら一人で行ってくれよ。……絶対に僕は嫌だ」

冗談、冗談だからそんな身構えないでクロノ。お願い、ここで俺たちまで対決したら士郎さんと恭也さんがさらにヒートアップしかねない。あと絶対に巻き込まれてユーノが溺れちゃうから、ね？

「じゃあどうする、このまま彼らの対決が終わるのを待つか」

「うーん……」

『なら洞窟の奥にでも行ってみたらどうです？ その横穴、別の場所に繋がっているようなので避難にはなると思いますよ』

え？ 横穴？ と、クロノと首を傾げた先、暗くて気付かなかったけど確かに洞窟奥に続く道があった。

「……行ってみる？」

「そうだな。このままここに残っていたら巻き込まれる可能性があるし、なら少しでも奥に進んで身の安全を第一に考えた方が良い」

『でもまさか、温泉で溺れる以外に身の危険を感じるとは思わなかったなあ』

頭の上で、ユーノがグツタリとした声を漏らした。確かにね。癒されるはずの温泉でまさか飛び交う桶の恐怖があるとは誰も思わないうって。

『うん。——それにしてもアレだよ。なのはの家族って本当に一般人なのか、って疑っちゃうくらいスペック高いよね。特に士郎さんと恭也さんって』

「剣術か何かを収めているとは聞いていたけど、……本当にただの喫茶店のマスターなのか？」

「んー、なんか士郎さんは、昔、要人のボディガードをやってたんだって。正式な名前は覚えてないけど御神流とかいう古流武術の後継者だとかで、恭也さんも士郎さんに御神流を師事してる」

美由希さんも同じで師事してるし、最近だと恭也さんにスピード勝負で勝ったって喜んでた。まあ、その一回だけみたいだけど。

ちなみになのはも御神流を少しかじっている上に魔法少女だから、あの一家で普通って言えるのは桃子さんだけじゃないかな。

「まあ、強いて言うなら高町家内ピラミッドの頂点にいるくらいなの、何処にでもいるような普通のパティシエお母さんだよ」

「パティシエの時点で普通じゃないと思うんだが」

「管理局提督がお母さんのクロノがそれを言っちゃうかー」

『どっちもどっちだよね?』

確かに、なんてことを話しているうちに光が見えた。

……お、出口。

意外と長かったねこの洞窟。大体、四、五メートルくらいかな?

体感じゃもっと歩いたような気はするけど……。ああそうか。暗かったから無意識の内にゆっくり歩いて来たのかも。夜中トイレで起きた時に何かにぶつからないよう気を付けるあの感じ。

『ふふ』

なにセラフ、急に笑ったりして。何か良い事でもあった?

『いえ。あつたというよりこれからあると言いますか、まあ、私としては記録できる思い出が増えるので良い事になりますね』

よくわからん。これから思い出になるような事があるってどういう事……?」

……どうしよう。今更だけどもの凄く嫌な予感がする。

温泉で思い出になる良い事って何だろう。絶景? もしくは効能とか。うーん、どっちも違う気が……。何か引つかかる。ちよつと前に重大なヒントがあつたような――。

「おおっ?」

と、考えているうちに洞窟を出た。

するとすぐに鼻をくすぐったのは温泉と、木の香りで、

「これは……」

『向うとは違う、こっちは木の温泉だ!』

ほほう。まさか岩風呂と檜風呂、両方を一度に入れるとは思ってなかった。パンフレットに温泉は日替わりです、って書いてあつたのに!

……あれ？

ちよつと待つて何かがおかしい。

さつきまで俺たちが居た方が岩風呂だったって事は、今日は男湯が岩風呂の日という事になる。なら、女湯の方は必然的に檜風呂になるわけでした。

……あ。

「秋介くん……？」

答えが頭に浮かぶなり急いで温泉に入ろうとするクロノを連れて洞窟に撤退しようとした矢先、不意に聞きなれた声に名前を呼ばれた。振り向くと、そこには、

「え、秋介……？」

『あら』

一糸纏わぬ姿でなのはと、リニスを抱えたフェイトが立っていた。二人の後ろには桶をヘルメットよろしくかぶったアリシアと、啞然とした顔のアリサとすずかも居る。

つまり、何が言いたいかというと、洞窟を抜けた先に辿り着いたこの場所は、——女湯だったという事だ。

「——」

なのはたちが一瞬で顔を真っ赤にして、声にならない悲鳴を上げながら脱衣所の方へとダッシュ。途中でアリサが滑りそうになったのをすずかが支え、なのはが滑って脱衣所の引き戸に激突したのをフェイトが起こしたりしながら慌てて中に飛び込んでいった。

続いてノエルさんとファリンさんも脱衣所の中へと入って行き、この場に残ったアリシアが大きく息を吸ったのを見て、

「キヤアアアアアアアア——ッ!!」

「キヤアア、——ああもうっ。私が叫ぼうと思つてたのにどうして秋介は先に叫んじやうかなあ……!」

ノリというかなんというか。まあ、昼間に顔にボールぶつけられたからそのやり返し。というか、俺としてはまったく動じてないアリシアに驚きだよ。

「え？　じゃあ、——きやあ、秋介のえつちー」

「あーはいはい。ドウモゴメンナサイネー」

「せめてこつち見てよ！ 可愛い仕草したのに！」

『この状況でもその余裕、流石ですマスター——ッ！』

『やかましい』

……でもまさかここが混浴とはね。

どうりで鮫島さんが一緒に入らなかつたワケだ。私は部屋風呂で十分です、って戻って行つたけど混浴だつて事を知ってからなのね。流石、執事の鑑。老紳士とは正にあの人の事だね！

士郎さんが言うには今回の旅行の手配やらをしてくれたのがアリスとすずかのお父さんたちらしいし、それなら鮫島さんが知っていても不思議じゃない。まあ、ノエルさんやファリンさんが知っていたかは置いといて。

まったく、今度デビットさんたちに会つたら文句の一つでも言わせてもらおう。

『あの方々なら、言われても笑いながらお小遣いをくれるでしょうね。いつも通りに』

『だよなあ』

そうなつたらまた皆で駄菓子屋にでも行くかな。もちろん今度はアリスアとフェイトも一緒に。言えばプレシアさんなら二人分のお小遣いくらい出してくれるだろうし。

……って、そんな事を考えてる場合じゃなかつた。さつきとクロノ連れて向うに戻ろう。

『と思つたけどなんか無理そうだなあ……』

『一瞬で諦めましたね』

いやだつて、と見た先、お湯に片足突つ込んだクロノが、

「なつ、——母さん!? どうしてここに、まさかここは女湯なのか!」

「まあクロノつたら、そんな恥ずかしがらなくてもいいのよ? こつちにいらつしやい。久しぶりに母さんと一緒に浸かりましょう」

「い、いやー！ 僕は一人で大丈夫、というか向うに戻るよ！ おい秋介、ってなんだそのニヤニヤした顔は！ やめろ。早くもど、——エイミィ!」

「フツフツ、逃がさないよクロノくん！ 艦長命令で強制連行だよ、観念してもらおうか——ッ！」

「なあんか面白そうだから協力するよ……！」

「ありがと美由希ちゃん！」

と、いつの間にか体にバスタオルを巻いた二人にクロノが捕まっていた。

「キユロノ——」

『ユーノユーノ、一旦落ち着こう？ 動揺のし過ぎで鳴き声と叫びが一緒になつた奇声発しちやつてるから』

『そそ、そうだよね！ こういう時こそ落ち着いて状況の整理を、——うああああ』

僕は何も見えない、とユーノが頭の上から落つこちた。

『大丈夫かい、ユーノ？』

『僕は何も見えない僕は何も見てない僕は何も見てない僕は何も……』

『あーこりや重症だね。とりあえずあつちの涼しい所に連れてつとくよ』

とりあえずユーノはアルフに任せておけば大丈夫か。涼しい所と言って脱衣所に連れて行くのはどうかと思うけど。むしろ逆効果なんじゃないかなー。

「へくちつ。うう、……秋介、温泉入ろうよ。このままじゃ私、風邪引いちゃう」

別に俺と一緒にじゃなくてもいいのに、と思ったけど、口に出すのは止めた。

……もういつその事こつちで温泉を満喫しようかな。

クロノとユーノを置いて向うに戻るのも気が引ける。というか一人で戻りたくない。こつちなら向うと違って桶が飛んで来る心配は無いし、母親組とかお姉さん組の方は見なければ大丈夫。

いやホント、エイミイさんと美由希さんはバスタオル巻いてくれたのに他の人巻いてくれないもんなあ。

「あ——」

アリシアと並んで温泉に浸かり、軽く伸びをしてから一息つく。すると忍さんが立ち上がった。

「どうぞ、忍お嬢様」

脱衣所から、ちょうどバスタオルを手に戻って来たノエルさんから一枚受け取り、それを体に巻いて、

「ねえ秋介。あなた、あの洞窟から出てきたわよね？　つまり、——あそこを通れば男湯の方に行けるのね？」

親指を立てて答えると、一度頷き、おもむろに桃子さんを見た。

「行きますか？」

「フフ、ここが士郎さんの言っていた混浴だったなんて思わなかった。秋介くんもこっちに來た事だし、プレシアさん、なのはたちの事をお任せしても？」

「別に構わないわ」

「ありがとうございます。それじゃあ」

行きましようか、そう言っただけ桃子さんは忍さんと一緒に洞窟の中へと消えていった。というか、

……何でプレシアさんのほっぺに猫の足跡が。

あ、逆側にも足跡がある。あれは犬……？

「ね、アリシア。プレシアさんのほっぺのアレって……」

「ああ、うん。あのね？　さっき私が滑って桶の山にストライクした時なんだけど。ママが心配し過ぎてアリサたちの前で回復魔法使おうとしちゃって、それをリニスとアルフが止めた時に付いたんだよ。」

——ホントニヤンワンパツだったよ」

「はいはい、間一髪ね。鳴き声とかけたんでしょ。——桶没収」

「ああっ私の桶メットが……！」

無駄にどっちも語呂が若干良いのが気になるけど、桶はかぶる物じゃないので問答無用に没収。とはいえ洞窟近くの山に戻しに行くのも面倒なのでその辺に置いておく。

少しして、壁の向うから聞こえてた桶のぶつかり合う音が止んだ。同時に士郎さんと恭也さんの悲鳴のような叫びが聞こえた気がするけど、多分、気のせいだと思う。思う事にした。

ともあれ向うが平和になったので戻るかというところ、そうでもない。……せつかくの混浴を邪魔しちゃ悪いからね！

いやあ良かった良かった。これであとはゆつくり温泉を満喫して、アリサたちに見られないようコツソリ転移で向うの脱衣所に戻れば――。

「――あつ」

そうじゃん。さつき洞窟の中に居た時、転移で脱衣所に戻ればよかったんじゃない。うわあ、何で気付かなかつたんだろう……。

『ちよいちよいマスターって転移魔法の事忘れますよね。ジュエルシード事件の時とか』

『シー！ ダメだよセラフ。本人気づいてちよつと落ち込んでるから、セラフがそれ言っちゃうと次から気を付けるようになって私が「もう、転移使えばいいのに。おつちよこちよいだなあ」って頼れるお姉ちゃんできなくなっちゃう』

『落ち込んでない、俺は全然落ち込んでなんていませんよ――うー！』
まあ、ここはアリシアの言う通り次から気を付ける事にしておう。

「おーい秋介。久しぶりに一緒のお風呂だから頭洗ってあげるよ。こつちおいでー」

と、洗い場の方。エイミイさんがクロノをリンデイさんに引き渡しに行っちゃって手持ち無沙汰になったのか、美由希さんが洗い場でシャンプー片手に立っていた。バスタオルを巻かないで。

……さつきまで巻いてたのに何で!?

あ、や、別に体を洗ってたなら巻いてないのは当然でもはや美由希さんのたわわなアレが露わにというかあの人もなんでアリシアみたくにまったく動じてないんですかね!?

「おお？ 秋介がフリーズした」

『内心ものすごく焦ってますね』

そこだまらっしやい。

「今更だなあ。私にとって秋介は弟みたいなものだもん。恭ちゃんくらの歳ならともかく今の秋介なら全然オツケー、小学校卒業するく

「らいまでは一緒に入ってあげるよ?」

『私は小学校卒業と言わずそのあとも別に構いませんが』

『私も』

『お願いだからリニスさんとセラフさんは黙っていてくださいお願いします』

横でアリシアが出遅れた、とかなんとか悔しがってるけど無視の方向で。流石に今は付き合う気分じゃない。というか、いつの間に脱衣所から出てきたんだよりニス。ちやつかり美由希さんの足元にいるし。

「何? リニスも一緒に洗ってほしいの?」

「ナウ」

「違うんだ。じゃあもしかして秋介に洗ってもらいたいとか?」

「ニヤウ」

「だって秋介、ご使命だよー」

ええ……。フェイトに任せたのに結局俺になるのか。まあフェイトが脱衣所から出てこないのは俺の所為でもあるし、仕方ないかな。

「あいあい。分かりましたよ」

今行きますよー、とお湯から上がって洗い場に向かう。

鏡の前に座ってリニスを前に置き、石鹸を泡立てて洗い始める。すると頭がいきなりひんやりとして、

「うおお。……。美由希さん」

「にしし。動くシャンプー目に染みるよー。ほら、ちゃんとリニス洗ってあげないと」

美由希さんが、悪戯っぽく笑いながらかゆいところはありますかー、なんて言って俺の頭を洗いだした。

リニスを洗う俺の頭を洗う美由希さん。何この状況。俺、さつき向うで頭洗ったのに……。

……でもたまにはこういうのも良いかも。

「――よし。じゃあ交代」

交代?

「えい」

あれ？　なんかいきなり美由希さんの手がちっちゃくなつたよう
な。思い、振り向くと、

「……なのは？」

「えっと、あの。か、かゆいところはありますか……？」

檜の風呂椅子を踏み台に、俺の頭に手を置くバスタオル姿のなのが居た。

「無いけど、……何してんの」

「秋介くんの頭を洗っています……」

それは見れば分かる。俺が聞きたいのはそういう事じゃなくて、どうしてなのはが俺の頭を洗ってるのか、って事で。あ、もうちょい右お願い。

「うん。皆と脱衣所でバスタオルを巻いて、戻って来たからお姉ちゃんが秋介くんの頭を洗って、良いなあ、って思ってたやってみる？　って、手招きされたの。……嫌だった？」

「全然」

むしろ嬉しい。こんな状況考えてもみなかつたね。

「えへへ。ありがと」

そう言っただけなのはが頭を洗うのを再開したので、俺もリニスを洗うのを再開する。

……なのはが戻って来たって事は、他の皆も戻って来たのかな。

少し体を傾けて、鏡を利用して後ろを見ると、

「それじゃあ勝った人が次に秋介の頭を洗うって事で良いわね？　――

――ちなみにあたしはグーを出すわ」

「勝つても負けても恨みつこなし。――私はパーを出すよ」

「なら私はチョキを出そうかな。――秋介の頭は私が洗う……！」

「アリサにもすすずかにも、もちろんアリシアにも負けないよ。――私が出すのはグーだ」

フェイトが構えて、それに皆も続いた。何故かその輪に混ざるフアリンさんが一歩引き、軽く右手を上げて、

「じゃーんけん、――ぽいっ！」

一発で綺麗に勝負が決まった。それは、深読みしそうな三人でも、

唯一正直にグーを出した一人でもなく、

「えっ」

手を振り下げた勢いで偶然パーを出した事になっちゃった、——
フアリンさんだった。

……はっはーん。さては俺、しばらくはここに釘付けだね？
ちくせう。

くやっぱお風呂上りはコーヒー牛乳だよね！く

温泉から上がったあと。俺たちは、同じく貸し切りになっていた宴会場「星の間」で晩ごはんを食べていた。

海に面した旅館という事もあって、テーブルにはどれも新鮮な魚介類を使った料理が多く並んでいる。

季節の炊き込みご飯にお吸い物、お刺身や天ぷらの盛り合わせ、一人鍋に、茶わん蒸しや小鉢といった会席料理だ。といっても一品ずつ出された物を食べて行く「喰い切り」式じゃなくて、

「一品ずつとか時間かかるし食べた気がしないだろ？　うちは人数も多いし、だから女将さんに頼んで最初から全部出してくれるよう頼んでおいたんだ」

土郎さん曰くそういう事らしい。確かに。ちゃんとした雰囲気のレストランとかならともかく、せっかくの旅館で一品ずつ出されてもちよつとね。いや、中にはそれが良いっていう人もいるだろうけど俺はなあ。

……物足りないような感じがするんだよね。

やっぱごはんはテーブルにズラツと並んでる方が美味しそうに見える。特にお刺身とか。さつき女将さんが運んで来た船盛なんて猫リニスの大きさを軽く超えて圧倒される。エビとかまだ動いてませんか？　アレ。

「……本当にあのまま食べても大丈夫なのか？」

「活き作りは新鮮な証拠だよ、クロノ。大丈夫。イカじゃないならあのまま食べても特に問題ない」

「えっ、アルフにあげちゃったけど……」

フェイトに言われて見ると、小皿に取り分けられたイカにアルフが食いついていた。横でユーノがそれを見て引いたような顔になってるけど、まあ、気持ちは分かる。醤油がちよつとグロテスクに見えるよね。

ともあれ別に、俺が言う問題は体に悪いとかそういう意味じゃない。

「足が超動いて食べにくいんだよね、イカの活き作りって。しかも食べる時に吸盤が口の周りとか裏側にくっついていたりするから余計に」

エビとかはビクビクしてて食べる時に「コイツ生きてるな……！」って、若干ホラー感じる程度だから良いんだけどさ。

『あ、秋介。次はお刺身をお願いします。赤身で、もしくは白身でも。———とかやはり大トロをお願いします……！』

リニスってば意外と贅沢な……、そう思いながら二切れ取って小皿に移す。少し醤油を垂らして、

『わさびは？』

『少し』

俺の膝上で、器用に小皿から一切れずつ食べるリニスの背を撫でる。時折、尻尾が揺れるのをさすが目で追いかけているが、

「良いなあ」

「そうですね、私たちも連れてくればよかったですね。すずかお嬢様」
「うん。……撫で撫で、良いなあ」

多分、話噛み合っていないよファリンさん。すずかのそれはリニスを撫でたいのか自分が撫でられたいのか、どっちだ。

「もちろん。私が、だよ」

目が合って、そう言われた気がする。すずか、そんなジツと見られるともの凄く食べづらいんですけど……。分かった、あとで撫でて上げるから。ね？ だからそんな凝視するのやめてくれませんか……？

「うんっ」

もしかして今の通じた？ えっマジで？ 声に出してないのに嘘だあ。

「……？ 急にどうしたのよ、すすか」

「実はあとで秋介君に……」

「——すすかだけずるい！」

どうしよう本当に通じてたらしい。アリサまで巻き込むとはやるね、すすか。これじゃあやふやにして逃げられないじゃない……。仕方ない。枕投げで勝ったら、って事でよろしいか。

「オツケー！」

おお、今度はアリサにも通じたよ!? うわ——。

「あ、そうそう。そういえば、本当に出るんだってこの辺り」

初のアイコンタクト成功に軽く驚愕していると、そう忍さんが切り出した。

「何が出るって？」

「だから幽霊よ、幽霊。朝、恭也も女将さんに聞いたでしょ？ 「女を攫う幽霊」の話」

「確か、夜な夜な海から船で現れては上陸し女を攫って行く、でしたか。仲居の方々が噂していたのを耳にした限りでは、件の幽霊、どうやら大昔の海賊のような恰好をしているようですが」

「知ってるの？ ノエル」

「はい、すすかお嬢様。ですがこの幽霊話、昔からこの辺りに伝わる物ではないそうです。ここ最近、ほんの一週間ほど前から広まった話だとか。不確かな情報ですが、この話と同じような話が海外にもあり、その話の幽霊が日本にやって来た、なんて噂もあるそうです」

それってつまり幽霊が旅行にやって来たって事？ 何か、そうやって考えると一気に怖くなくなるね。

「そういえば以前、旦那様に付いてヨーロッパの方へ渡った際にそのような話を聞いた覚えがあります」

鮫島さんが、土郎さんにビールを注ぎながら思い出すように言った。

「向うでは「女を探す幽霊」と、そう呼ばれていたかと。夜な夜な海から船で現れては上陸し、何かを探すように徘徊しては去る。今しがたノエル殿が話した内容と似ていますが」

「確かにねえ。でも何で向うじや “探す” なのにこっちじや “攫う” になつたんだろう」

「それは美由希様、恐らくこの話の終わりが関係しているのでしょう。最後、幽霊が去ったあとには必ず付近の宿泊施設に泊まっていた女性が姿を消すそうです。それも、毎度同じ女性だそうです」

「本当かどうかは分かりませんが、と鮫島さんが付け加えた。……なるほど。だからこっちじや攫われた、になつたんだ。

幽霊が居なくなると女の人が消える。つまり攫われた、と。そういう風に解釈したんだと思う。

しかしアレだね。毎度同じ女の人が消えるって、それってもうその女の人も幽霊なんじゃないのか、って思えて来る。というか、

「もしその話とこの辺りの話が同じ幽霊なら、その幽霊が探してる女の人がこの辺の旅館とかホテルに泊まってる事になるよね。——もしかしてこの旅館かも」

「にやっ——」

うお、……つと。危ねえ。もう少しでお吸い物が零れる所だった。急に抱き着いて来てどうした……?」

「い、いい、今! 今、背中! 背中がスウってしたの……!!」

なのはの言葉を聞いて、その場の全員が動きを止めた。すると、何処からか風の通る音が聞こえ、

「……何だ。隙間風か」

ちようどなのはの後ろにある窓が、少しだけ横にずれていた。多分、その隙間から入って来た風がなのはの背中に当たったんじゃないかなあ。

「大丈夫。今のは幽霊じゃないから」

「本当……?」

本当本当。ただの隙間風だから安心して。

「うう、ビツクリしたあ……。そうだよ、幽霊なんて本当は居ないんだもんね」

「え?」

「え? ……あつ」

……アリシアさんや、どうしてそこで疑問の声を上げちゃうかなあ。

ほらそこ。プレシアさんもリンデイさんも不思議そうな顔しないの。それじゃまるで幽霊を見た事ある、って言ってるようなものじゃないですかー。

「もしかしてお二人は幽霊を見た事が……?」

「ま、まあ。それはもう可愛らしい幽霊を少し前に。——ねえ、リンデイ?」

「ちよ、ええ、ええ! それはもう可愛らしい幽霊を以前に。——ねえ、エイミイ?」

「なあ!? そ、そうですね! それはもう可愛らしい幽霊をちよつと前に。——ねえ、クロノくん?」

「僕が見たのは映像だったのでアレが本物かどうかは断言できません」

『その手があった……!』

気付いてよ。

「さつすが海外出身は違いますねー。私たちとは見てる世界が違うっと感じ。そういえばノエルさんとフアリンちゃんも海外出身だったよね? 確かドイツだったけ」

「はい。といっても私とお姉様はこちらで過ごす時間の方が長いので、美由希ちゃんと同じで幽霊を見た事はないです。……ないですよね? お姉様」

「残念ながら。美由希様のご期待に添えず申し訳ありません。——まあ、それ以外はありませんが」

「ええっ……!?!」

わざと言ってるでしょノエルさん。口元ちよつと緩んできますよ?」

「おつと。どうやら温泉に入って少し気分が高揚しているようです。冗談ですよ、冗談。フフ」

「………なのは、ちよつとりニス預かってもらっていい?」

『逃げましたね』

『ええ、逃げましたね』

『秋介』

『アリシアに手刀一発確定、と』

『まだ何も言っていないよ……!?』

はいはい。じゃあ俺トイレ行ってくるからリニスの事よろしくねー。

〜星の間に陽の間、そして——〜

トイレから戻る途中、他と比べて一段と賑やかな声が聞こえてきた。見ると、俺たちがごはんを食べていた宴会場から一つ挟んだところからだった。

「ほほう。「月の間」とな」

随分と盛り上がってるみたいだけど何してんだらう。

「……ちよつと覗いてみるか」

『覗いちやうんですね、マスター……』

ダメな事だつていうのは分かっている。でも、中から聞こえてくる声が妙になるんだよねえ。

……この、なんだか絶対にカラオケマシーンを見せちゃいけないと感じる声はまさか……！

ほんの少し、五センチほど障子をずらして中を覗くと、

「して、そこの赤と緑。さつきから一体何を隠しておるのだ？、そこまでして余に見せたくない物なのか」

「君に、ではなく君たちに、だ。コレが君たち二人の手に渡ってしまったが最後、この場、ひいてはこの旅館そのものが全滅してしまう恐れがあるのでね。——絶対に死守させてもらう」

「な、なによグリーン裏切るの!? アンタ、私のマネージャーでしょ!? アイドルが見たいって言うてんだから見せなさいよ!」

「裏切るもなにも最初っから味方でもねーんですけどね。あと誰がマネージャーだ。お断りだつーの。今回ばかりは赤いのの言う通りだからな、面倒だが共同戦線だ。——絶対に死守させてもらう」

赤と赤、紅と緑。先に動いた方が負けと、そう言わんばかりに緊張

感を高めた。するとそんな光景を横に置いて、狐耳のピンクが、「さささ。あちらは紅茶さんと緑茶さんに任せて、私たちはお食事の方を楽しみましょうか。あ、そちらは茶碗蒸しというものです。ええ、文明で言えば良い文明の方で、悪い方の文明は、今回の場合こちらのカラオケマシーンになりますね」
「どうして、カラオケが悪い文明？ 歌う事は悪い事なのですか……？」

「いいえ。歌う事は悪い事ではありません。……が、歌い手によっては変わってしまうのです。よろしいですか？ ——いくら自分の声に自信があろうとも音痴では救われないのです」

「そうよー。もしそういう輩の歌を聞いたらこう言ってやればいいの。——シヨウジキナイワー、つて。あ、狐ちゃんその天ぷらちようだい」

「……なあ、オレもう帰りたいんだけど。ダメか？ ダメか。むう、それなら部屋に戻る。確か売店にストロベリーのアイス売ってたよな。……なんだよ。放せよ」

行っちゃダメー、と大小それぞれの白に、着物の青がまとわりつかれた。迷惑そうな顔をしながらも席に戻る辺り、あのお姉さん、結構いい人だよね。

……幽霊どころの騒ぎじゃない……！

下手したらこの旅館が阿鼻叫喚の地獄絵図になるとこだったのね……。カラオケマシンを死守してくれてるお兄さんたちには感謝しかない。若干、赤と紅のお姉さんたちに押されてるようにも見えるけど大丈夫だと信じよう。ともあれ、

……そろそろ戻るかなあ。

流石にこれ以上覗き続けるのは気が引ける。俺としてはもうちよつと覗いていたんだけどね！

『マスター。たった今リニスさんから、マスターの天ぷらをアルフさんが狙っているとの連絡が』

「——急いで戻るよ……！」

と、スタートダッシュを決めた瞬間、何かにぶつかった。蹴られた

ような衝撃を受けて二、散歩下がる。その場に尻餅をついて、ぶつかった何かを見上げると、

「おお？ しまった。ちよいと考え事してて気が付かなかったよ」

「まったくもう……。ちゃんと前を向いて歩かないからこうなるんですの」

「大丈夫かい？ どこか怪我とかしていない？」

えんじ色の髪の毛、顔に大きな傷跡のあるお姉さんと、金髪お姉さんに銀髪女の子だった。

……うそん。

「なんとか……」

「そう。なら良かった」

「本当に大丈夫ですか？ もしよかったですら部屋まで送っていきますけど……」

いや本当に大丈夫だから。いきなり走り出した俺も悪いし、それにすぐそこの宴会場に戻るだけなんで。

「すまなかった。ほら、立てるかい？」

「ん、立てる」

「そりゃよかった。じゃアタシらはもう行くよ。本当にすまなかったね」

「それでは」

「ばいばい」

そう言っ、温泉の方へと歩いて行くお姉さんたちを見送りながら、

……いやまさか、ね。

一瞬、さっきの幽霊話の事が頭に浮かんだけど考えるのはやめておく。

「あ、俺の天ぷらが……！」

……ん？？

食事を終え、皆で枕投げやらトランプを一通り遊んだあと。それぞれ

れ部屋に戻って寝ることにした。それから少しして、
「うあ」

ふと、目が覚めた。

暗く月明りだけが頼りの部屋の中、クロノとユーノが左右で寝ているのを確認して、

……今何時よ。

『午前二時十三分。いわゆる草木も眠る丑三つ時ですね』

ううわ、まだ夜中じゃないですか……。どうして今日に限って夜中に目が覚めちゃうかなー。

寝る前の枕投げがいけなかったか。それともトランプ大会か。まあ、多分、どっちも関係ないんだろうなあ。

と、窓の外から妙な感覚が来た。

「……セラフ、この感じて魔力？」

『はい。どうやら先ほどの幽霊話、噂ではなかったようです。——今しがた、海の方から魔力反応の出現を確認しました』

やっぱり……。

「その場所の映像、見られる？」

『もちろんです』

セラフの言葉と同時に、小型の空間モニターが現れた。

『——』

モニターの中、髑髏の旗を掲げる船から歓声が上がった。

甲板の上、そこにはいくつもの人影が見える。その中の一つ、大柄な男らしき人影が大袈裟な動きで、

『クク、ハハハ。ハハハ、ハハハハハ！ ア——ハツハツハドゥーフフフフｗｗｗｗ！！』

寝直してもいいよね？ コレ。

第二十七話：口に出さなければ、やられなかったのに！

はてさてこれはどうしたものかなー。

現在、午前二時十五分。

男の笑い声を聞いた瞬間に寝直したくなっただけど我慢して、このままアレを放っておくのもダメなような気がするのでとりあえず起きる事にした。

左右で寝ているクロノとユーノを起こさないように窓辺へと移動し、カーテンの隙間から外を覗く。

月明りに照らされる髑髏の旗を掲げた船が、沖合の方から浜辺へ向かってゆつくりと進んでいるのが見えた。

「どう見ても海賊船だよね、アレ」

『どう見ても海賊船ですね、アレ』

「さっきの笑い声って昼間、士郎さんと恭也さんに連行された巨漢の声だったよね？」

『先ほどの笑い声は昼間に、お二人に連行された方の声でしたね』

「あの船から魔力を感じるって事は、つまりそういう事なの？」

『あの船から魔力を感じるの、つまりそういう事でしょう』

そういう事なのかあ……、と思いつつ手元の小型空間モニターに視線を落とす。

「――」

空間モニターの中、甲板の上の映画に登場するような海賊の格好をした影たちが、歓声を上げながら船尾楼に立つ一人の巨漢を仰いだ。

特徴的な黒い髭に、髪に交じった白い導火線。装飾のついたマントを翻し、腰に差した拳銃に手をかけながら巨漢は、

『ドゥーフフフフ！』

「やっぱ寝直していいかな。いいよね？　ね？　――よし寝よう」

「ダメに決まっているだろう」

と、不意に声が聞こえた。振り向くと、顔の横に小型モニターを置

いたクロノが体を起こし、

「もしかして起こしちやった？」

「いや、君に起こされてはいないよ。——なあアレックス」

『う、……すみません。クロノ執務官。でも仕方ないじゃないですか……。艦長はいくら呼びかけても応答がなくて、主任からは通信拒否ですよ？ 夜更かしは美容の大敵だ、つて。急ぎの要件なのに話も聞いてもらえなくて……』

それでクロノに連絡したって事か。なるほど。

「リンディさん、寝る前に見かけた時プレシアさんや桃子さんとお酒飲んでたからなあ。多分、今頃部屋で熟睡中だと思う」

「だろうね。僕の方でも呼びかけてはみたけど反応がない。……まあ、あとでもう一度呼びかけてみるよ。とりあえず今は先に僕たちの方で様子見をしておこう。おい、起きろ、ユーノ。君にも手伝ってもらうからな」

あれ今サラツと“たち”って言われたような……。ま、別にいいけど。どの道あの海賊たちをどうにかしなきゃだし。

「もしかしてクロノ、ちよつと不機嫌？」

ユーノを起こすのに布団を引っぱがすとか、中々に手荒じゃない。座卓の足に頭ぶつかったけど大丈夫かな。

「そりゃこんな真夜中に起こされたら不機嫌にもなる。——久しぶりの休みくらいゆっくり寝たい」

「久しぶりの休みつて、クロノは前回からどれくらいぶりの休みなのさ」

聞くと、クロノは自分の鞆から待機状態のS2Uを取り出し、少し考えだした。指折り数えながら、思い出すように、

「……年明け以来、かな」

「……………」

沈黙が流れる中で、ユーノが起き上がった。ほんのり赤くなったおでこをさすりながら部屋の中を見回し、首を傾げて寝ぼけ眼のまま、

「おはよう……う？」

ん、おはよう。

「いやこの場合はこんばんは……?」

「なるほど。つまりこういう事だね？」

秋介が目を覚ましたら海の方から妙な魔力を感じて、見てみたらあの海賊船があった。

それと同時にアースラでも妙な反応を観測して、リンディさんやエイミーさんに連絡をしたけど応答がなかったからクロノに連絡が来た。

その内容は、昼間にアースラで観測された妙な魔力反応のようなモノが海上に出現したので現場の確認に向かってほしい、とアレックスさんからで、それを手伝わせるために僕を起こした、と」

「そう、そんな感じ」

「ああ。それで概ね間違っていない」

「そっか、……うん。そっか。分かった。——それならもつと普通に起こしてくれたって良かったじゃないか！ 座卓の足にぶつけるとか、夜中に起こされたからって僕に八つ当たりするなよ！」

「違う、八つ当たりじゃない。ちよつと夜中に起こされた事に腹が立ってぐっすり寝ていた君の布団を引っぱがしただけだ。そうしたら君が自分で転がって行ったんじゃないか。——人のせいにするなよ」

それを八つ当たりと言うんだ……！ と、クロノに掴みかかろうとしたユーノを羽交い締めで抑える。

落ち着いて、落ち着いてとりあえず深呼吸だユーノ。吸ってー吐いてー、吸ってー吐いてー。大きく吸ってー、吐いてー……。どう落ち着いた？ ならよろしい。ここで騒ぐと気付かれる可能性があるからね。

「ごめん」

「……僕も少しやり過ぎた。すまない」

「謝るのは俺にじゃないでしょうが。まったく……」

お互いに謝る二人から、足元へと目を向ける。

夜の海を、海賊船がさつきと変わらない速度で進んでいた。

……一応セツトアップはしたものの、気付かれて戦闘開始、なんて事は遠慮したいなあ。

だって面倒だし。絶対にあの海賊しづといと思う。どれくらいしづといかって、そりや一匹見たら三十匹は居ると思え、なんて言われるアレくらいじゃないかな。その他イメージ・評価含め類似点も多いし。

……もういつそ今の内に宝具でドカンとやっちやうのもアリかもしれない。

例えば派手に〈金星神・火炎天主〉でビームとか〈羅刹を穿つ不滅〉を投げつけてみたり、思いきって〈燔祭の火焰〉で焼き払うって手も――。

「……いや、ないな」

流星にそれは最後の手段だ。船長さんとはちよつと話してみたこともあるし、まだあの海賊たちがこれから悪い事をすると思つた訳じゃないからね。といつてもまあ、上陸して人に迷惑をかけるような話は別だけでも。

もし上陸して俺たちの泊まつてる旅館に侵入しようものなら相応の対応をさせてもらう。

女の人を探すのにもどの部屋に居るかを探さるうし、それでなのはたちの部屋を覗かれる可能性がある。

……それは流星に看過できないよね。

前に守る、つて約束しちやつたし。ま、それが無くても絶対に覗かせはしないけど。

「それにしても夏とはいえ、夜の海風は少し冷えるな……」

様子を見るにしても別に旅館の部屋からでもモニター越しで十分だと思うんだけどなあ。わざわざ海賊船の近くまで来る必要ないでしょうに……。

『やっぱ俺たちに対する八つ当たりか……!!』

『今の言葉、私だけじゃなくてクロノさんにも聞こえるようにしておきましたからね?』

えつマジで？ とクロノをチラ見する。が、特に変わった様子もなく、モニターでなにやらアレックスさんとやり取りをしていた。

『ふふん』

『この状況で仕掛けて来るとは流石だね、セラフ……!?!』

ともあれ現状、俺たちは海賊船を斜め下に見える位置で、

「やつぱりエイミーは応答なしか……」

『ええ。……どうやら完全に寝落ちしているようです』

「じゃあ次はリンディさん？」

「ダメだとは思うが、一応」

と、アレックスさんとの通信を終えたクロノが、今度は別のモニターを手元に表示した。そこには『リンディ・ハラオウン：呼び出し中』と書かれている。

……お。

少しして、画面が切り替わってあくびをするリンディさんが映り、『はいこちらお母さんです……。どうかしたの、クロノ？ こんな時間に連絡なんかして来て』

「お休みのところ申し訳ありません。艦長。実はアレックスから急ぎの要件が——」

『あつ、分かった！ 久しぶりに母さんと一緒に寝たくなつたんでしょー？ ——もうっ、クロノつたら可愛いんだからー！ ほらすぐに母さんの部屋にいらっしやい、プレシアは寝ているから今の内が』

強制的に通信を切ったクロノが頭を抱えて数秒。再びモニターを表示して、

「すみません、艦長。実はアレックスから急ぎの要件が——」

『あああああん。どうしましょうプレシア……。私、クロノにきくら、嫌われて、嫌われちゃった——!』

『やめ、ちよ、やめてリンディ。そんなに揺らさないで……!』

『最近忙しくてちゃんと話してなかったのがいけなかったの!?! それとも一日のほとんどを上司と部下で過ごしているのがいけないの!?!』

——もしやこれが噂の反抗期!?! そうなのね!?! ついにうちのクロノにも反抗期が来ちゃったわレティ——!?!』

そこで見るのを止めた。そして、モニターを閉じたクロノが何事もなかったように、

「さて。既に僕たちは現場の確認を終えた訳だが、これからどうしようか」

「切り替えの早さが流石だねクロノ……!」

これは明日の朝リンデイさんにクロノがどう反応するかが楽しみになって来たよ……!」

「やかましい秋介。それで? 君から見てもあの海賊はどうなんだ」

「どうって、何が」

「だから本当に幽霊なのか、って話だ。僕たちの中で実際に幽霊を見た事があるのは君だけだからな。あの海賊たちから何か感じたりはしないか?」

「んー、どうだろ」

魔力は感じるけど特別何か感じるって事はないかなあ。幽霊云々も俺が見た事あるのはアリシアだけから何とも言えないけど……。まあでも、しいて言うとしたら、

「あの海賊たちはこう、幽霊であって幽霊ではない存在。幽霊モドキ、……的なの?」

「つまりどういうこと?」

「さあ」

『言った本人が首を捻ってどうするんですか』

だって仕方ないじゃないですかー。俺としてもあの海賊たちをどう表現したらいいか悩むんだもの。魔力感じる幽霊とかそれもうどこの英霊だよ、って話になるわけで。

「英霊……。なるほど。つまり彼らはこの世界で過去に名を遺した人物と言う事か。」

なら話は早い。アレックス。あの海賊たち及びあの船と一致、または類似する資料を探してくれ。ああ、この世界のものからだ。至急頼む」

え、なに。何でクロノってばあっさり納得しちゃってんの? しかもまるで慣れているかのように対応が速い……。もしかしてこうい

う事って次元世界じゃ結構起きてたり？

「向うにも似たような話はいくつかあるからね。聞いた話だけど、どこかのかつて文明があった世界の遺跡には、その時代に名をはせた人が幽霊になって現れるらしい。僕の一族でも、何人かは見た事あるって」

「ほう。それはちよつと気になるね」

次元世界の英霊たちか……。うん、一回でいいから会ってみたいかも。

「……どういふことだ？」

と、アレックスさんから送られてきたらしい資料を表示したモニターを見て、クロノが首を傾げた。下の海賊船と見比べ、再び首を傾げて、

「なんだかイメージと違わないか？ あの男……」

そこに気付いちやったかー。だよねえ。俺だって初めて見た時は目を疑ったもん。だって、

『うーん、デュフ、デュフフにゆふふへへジュルリ……。ハッ、拙者とキャツキヤウフフして遊んでいた水着美少女たちは何処に!? なに夢!? そんな現実は無かった!? ぐぬぬ、それもこれも全部あの昼間の二人組の所為……。——いようし野郎ども！ 上陸したらついでにあの二人も探し出して寝込みを襲うぞ！ はあ？ 正面から行かない理由？ ——だって怖いジャンー！』

「小さいなあ、あの大海賊！」
悪名高いくせに蓋を開けたらあの性格とか予想外にも程があるよね……！

「というか今、聞き捨てならない事言っただけか？」

「昼間の二人を襲うって、それってもしかしなくても士郎さんや恭也さんの事だよね」

「じゃあなにか。あの海賊たちは俺たちの泊まってる旅館に間違いない行く」と

つまり、

「——皆の危険が危ない！」

くつい口から出ちやつたんだよ……!」

とりあえず牽制として海賊船に砲撃をぶち込む事にした。

魔道杖Ver.セラフを、速度を上げた海賊船へと構える。魔力を通し、収束したのを確認。クロノと、封時結界を展開し終えたユーノの領きを見て、

「それじゃあちよつと邪魔させてもらいましようか……!」

船首横の海面を狙つてデイバインバスター並みの砲撃をぶち込んだ。

飛沫が上がり、傾き揺れる甲板の上で何が起こつたか分からず慌てる海賊たちめがけ六発、八発と続けざまにシューターを撃ち込む。

直撃した数人が倒れ、光となって消えるのを見た。

……弱っ!

『まさか軽く気絶する程度の威力で消えるとは思わなかつたごめんなさい……!』

『言つてる場合か!』

『でも幽霊だから気にしなくても大丈夫なんじゃないかな!』

同時にクロノとユーノが動いた。

クロノは一気に甲板へと降り、混乱する海賊たちをバインドで拘束して制圧。ユーノは船内に逃げ込もうとした海賊たちをチェーンバインドで引つ張り集め、メインマストに縛りつけた。

急いで俺も二人に合流して、海に飛び込もうとする海賊たちの足を直前でバインド。何人かがつんのめつて舷に顔から激突しちやつたけど、まあ、そこは見なかつたという事で。

「よし。これで甲板は制圧完了だな。あとは船内の、……まで。ユーノ、秋介。あの船長らしき男は何処だ」

「いや、僕は見てないけど……」

「俺も」

まさかさつきの一瞬で船内に逃げ込んだ? それとも海に飛び込んだとか……。

『そこにいるじゃないですか。たつた今マスターが拘束した中に』

え？ とセラフの言葉を聞いて倒れる海賊たちの方を見ると、

「ふぬおとお……！ 角が、舷の角が顔にめり込んだあ！ 拙者の鼻折れたりしてないよね!? うあ超鼻痛い、——って、背中も痛つてえ！ 何でござるかこの突起物で刺されたような感触は!? 釘か！

一体誰がこんな所に釘を落としたあー！」

気絶している海賊たちの中、一人の巨漢が悶えていた。

……うわっ、全然気が付かなかった。

ついかメチャクチャ元気じゃないですかあの船長。よく見たら足のバインド解けてるし。んー、さっきのシューターを踏まえて弱めにやったのがダメだったか。

『秋介、頼んだ』

『俺かよ。こういうのは普通、執務官の仕事でしょうが。ほら、クロノ頑張つて』

『そうだよ。いくら相手がちよつとアレで苦手なタイプだとしても職務放棄はダメだ。——お母さんが部屋で待っているんだろ？ なら、早く終わらせて戻って一緒に寝てあげなよ』

『なんだ仕返しとか？ ユーノ、それは僕に対する起こされた事に対するの仕返しなのか!?!』

さあどうだろうね、とクロノとユーノが夜中の変なテンションのせいで取っ組み合いの喧嘩を始めちやいそうなので、しようがない、俺が代わりに声かけるかなー。

「あの一、すみません。ちよつとそのの、……船長さん?」

「ああ？ 拙者今、釘落としたままにした犯人探すのに忙しいんであとにしてもらえ、……ンン？ あれ子供？ どうして拙者の船に小学校中学年くらいの子供がいるの？ 後ろにも同じくらいの少年二人が、なんで?」

ええ、何で見ただけで俺の学年分かっちゃうんですかこの船長。あと一応、後ろの二人の内一人は高学年か中学生くらいだからそこそこよろしく。見た目で判断しちゃダメだよ。

「ほほう。いわゆる背が低くて子供扱いされるけど実は年上で本当は

凄い能力の持ち主だった、的なキャラというワケですな?」

大体そんな感じだから恐ろしい。どうして初見で見抜けるのかなー……。

「ソフッフッフ。それはモチのロン、拙者の「直感」or「心眼(真)」の賜物だゾー!」

あんたにそんなスキル無いでしょうが。嘘言うと、——焼くよ?

こう、龍型の炎で。それとも鐘楼に閉じ込めて脱出できない危機一髪なんて方法も……。

「それは洒落にならない気がするので本当にヤメてください」

よし。効果は抜群っぽいからいざという時はこの船ごと焼いてしまおう。それより、

「ねえ、船長さん。さつきチラツと聞こえたんだけど、上陸したら人を襲うって本当?」

「イエス、イグザクトリー! あのと二人の所為で拙者の『水着美少女たちと夏の海をキャツキャウフフ作戦』が台無しになって、さらには簀巻きにされて海に沈められる始末。拙者が超海賊じゃなかったら即死だった……!」

超ってなんだよ超って。それ絶対海賊とか関係ないよね? とうか船長、連行されてからそんな目に遭ってたのか……。

「それなのにまたあの二人の所に行くって、……昼間の二の舞になるだけじゃん」

「そんな事ないしー! 昼間のあれはまだ本気じゃなかっただけですー。拙者が本気を出せばあんな男の一人や二人、チヨチヨイのチヨイと朝飯前でサメの餌だし? 明日から本気出す的なあれですぞう……!」

あー、もう日付変わったから本気出したって事か。はた迷惑な有言実行だね。

「いやあ、それ程でもないでござる」

「誰も褒めてないって」

ともあれ、

「とりあえず暴れないようにバインド。あ、動くとき締め付け強くなる

から大人しくしてね」

「は？——って何でござるこの光の輪つかは!? まさかそういうプレイなの？ そうなの!? 拙者どっちもイケる口だけど、どうせ縛られるなら昼間見た美少女たちの方がよかったなあ！ あっ、この輪っかが食い込んで来る感覚新しい……！」

一人賑やかなあの船長は沈めてしまおうかと本気で思えて来る。といかもう沈めてしまってもいいんじゃないかな。そうすれば上陸もされないし万事解決なんじゃ……？

『しかしまあ、なのはたちを連れて来なくて本当に良かったよね』『なんで?』

『ほらさ、なのはたちってセットアップするじゃん？ で、空飛んだり魔法使ったりする』

『別にそれは彼女たちだけじゃないだろう。僕たちだって同じだ』

『いやいやいや。クロノは分かってないなー。ねえ、セラフさん?』

『ええ。なのはさんたちのような少女が変身して戦う、そこが肝心なんですよ』

『つまり……?』

『つまりは簡単。——なのはたちが魔法少女だから』

『……は?』

ああ、うん。だよね。分かる分かる。クロノとユーノの頭に「?」って浮かんでるのが見なくても分かる。

……俺も初めて見た時はテンション上がったからなあ。

船長が本物の魔法少女を目の前にしたら一体何をしでかすか、……想像に難くないね。まあ、出会い頭に奇声を上げて失神、なんてこともありうるけども。

……合わせないに越したことはないよね。

怪談として聞く分にはいいんだけど実際見るとなるとなあ。想像とだいぶ違うというかなんというか、下手したらトラウマものだからね。あの船長。

せつかくの楽しい夏休みの旅行なんだ。嫌な思い出を残すのだけは遠慮したい。

「……あ、そういうえば」

もし本当に船長が晩ごはんの時に聞いた「女を攫う、探す幽霊」だとしたら一体誰を探しに来てたんだろう。

といつても大体の予想というか十中八九確実にあの人だよな、っていう人には心当たりがある。けど、一応の確認をしておこうかな。もしかしたら、つてこともあるからね！

「ね、船長さん。ちよつと聞きたいんだけど——」

『マスター——ツ!!』

と、真相を知るべく、船長の方に向き直した瞬間。前から衝撃が来た。

〜——ツ!?!?〜

「っ……!?!?」

「秋介!?!?」

クロノがデバイスを構え、ユーノが心配そうに走って来る光景が逆さまに見える。

……痛ったあ……!?!?

え、なに、なにが起きたの？ 何でいきなり世界が逆さまになつてんの？ 一体全体どゆこと……!?!?

「大丈夫!?!? どこか怪我とかしてない!?!?」

『怪我はありませんが、頭を強く打つたのでたんこぶができた程度でしようか』

「そう……。よかつた」

よくない、よくないって！ 俺の事なのに何でユーノの質問にセラフが返すんですかね!?!?

『だってマスター、現状を飲み込めていないじゃないですか。自分が今どうなっているか分かります?』

え? と首を動かして周りを見てみる。

逆さまな光景の中、前にいつの間にかバインドから抜け出した船長と対峙するクロノがいた。左にはこちらを覗き込むユーノのホツと

した顔。下には綺麗な星空。おお、満月。なんだか得したね……！
じゃなくて、

「……もしかして俺、逆さまになってる？」

『見事に蹴り飛ばされましたからねえ。こう、綺麗に三回転ほどして舷に頭から激突して。もう一瞬シールドを張るのが遅れたらマスタアの顔面にクリーンヒットしていましたね』

「そりやどうも、セラフ」

あと俺が蹴り飛ばされた映像は再生しないでいいから。そのモニタ―消しなさい。

それにしてもいきなり蹴り飛ばすとは酷いな船長。てか、どうやってバインドから抜け出したのか……。まあいいや。とりあえず起き上がろう。

「よ、っと。……ふう。で、その船長。いきなり何すんの」

「むむむ。まさか割と本気で蹴り飛ばしたのに無傷とは拙者ちよつとシヨック。だけどめげない！ 上陸して美少女たちの寝顔を見るまでは……！」

なんか目的変わってない？ さっきまで仕返しに夜襲だ、とか言ってたのに。

「ンー？ だって少年たちはあの二人の身内でしょ？ てことはあの水着美少女たちの身内でもあるワケで。——キミたちを人質にでも取った方が、拙者の目的としては色々と好都合だって気付いちやっただよね」

と、船長が指を鳴らした。すると船内から海賊たちが現れ、

「さあ野郎ども。さっさとその少年くんたちをとつ捕まえて上陸するでござるよ……！ あ、その辺のお前らはそこいらの縛られてるやつらを起こしてね。もし起きないなら海に落としてよし」

完全に囲まれた。

それぞれ剣や短剣、斧といった武装をしてこちらとの距離を徐々に詰めて来る。

……しまったクロノと分断された……！

『うわー、これもう完全に戦闘開始する流れじゃないですかー。どう

そっち、一人で相手できそう？ クロノ』

『ぎつと見て約四十か。それに加えてこの男、……難しいな。』

まったく、これだからああいうタイプは苦手なんだ。ふざけているように隙を見せない、中々どうして実力が読みにくい』

『あらそう。じゃあちよつとの間よろしく。こつちも急いで周りをなんとかして合流するから』

『よろしく、って。君は話を聞いていたのか？ ……つたく』

『というか、別に僕たち一々周りを相手しなくても飛んでクロノのところに行けばいいんじゃない？ それかさつきみたいに砲撃するなりして強行突破って手もある』

『……あつ』

というわけでそうすることにした。まさか、と目線を贈って来たクロノに頷きで返す。

ジリジリと近づいて来る海賊たちを前に、セラフを構え、

「はい、バスター——ツ!!」

「いきなりだな、君は……!」

「へ?」

一直線上。船長と正面から対峙するクロノの背中めがけて砲撃をぶち込んだ。

射線上の海賊たちもまとめて光に変えながら迫った砲撃を、クロノが甲板を蹴り、宙へと身を回して躲した。

間の抜けた声を上げた船長に直撃する。それと同時に、ユーノがチェーンバインドを飛ばして周りの海賊たちの動きを止め、

「スティングー、スナイプショットツ!!」

クロノが空中で魔力光弾をばら撒いた。

弾幕の中、直撃した海賊たちが光となって消えて行くが、

……増えた……!

すぐに船内から新しい海賊たちが現れる。そして、それを見たクロノが俺に向かって叫んだ。

「——そっち、一人で相手できるか？ 秋介」

言い返された……! と思ったが、残念。こつちにはユーノが居る

から一人じゃなくて二人——。

「ごめん！ こつちに来る海賊を縛るので手一杯！ 一人で頑張つて……！ あ、こらそこ。せつかく縛つたんだから解くなよ……！」

「ふ」

『大変そうですね』

「本当にね……！」

とりあえずユーノの援護として仲間のバインドを解こうとする海賊にシューターをお見舞いしておく。

クロノから俺に標的を変えた海賊が二人、三人。切りかかって来たのを躲しながら杖Ver. セラフを指で回し、

「セラフ、光剣モード！」

『はい！』

杖から剣の柄へと形を変えたセラフに魔力を流す。形作られた月白の刃を、武器を振り切つてよろめく海賊たちの背中へ横に薙ぐようにして叩きつける。

……おお？

何か軽いぞこの海賊たち。まるで風船を叩いたような、そんな変な感じ。

「ま、これはこれで嫌な気分にならなくていいけど——」

流星に人を真つ二つにする感覚は味わいたくない。肉を切るのは料理の時で十分だからね！

「……つと。はい、次！」

構え直すと同時に背後から影が落ちた。光剣を跳ね上げながら振り返る。振り下ろされていた斧を弾き、そのまま返す刀で叩き切つた。

『左右！』

「つ——」

その場でバックジャンプ。空中で体を捻って見た先、さつきまで立っていた場所に剣が交差した。周りにスフィアを展開。躲した俺を探す二人に狙いをつけ、

「フォトンランサーッ！」

射出した魔力弾が海賊たちを射抜く。

右足からの着地で甲板を捉え、体を回す動きで光剣を横に滑らせる。

五人。まとめて光へと消える海賊の向うに、近接戦へとシフトしたクロノを見つけた。鏢せり合うその背後、切りかかろうとする海賊めがけてフォトランサーを投射する。あ、シューターにしておけば誘導利くからついでに他もやれたのにしまった……！

『そんなこと気にしている場合ですか！ ほら左、次が来ますよ！』

飛びかかって来た海賊の腹にカウンターとして思いつき光剣を叩きこむ。

『次は右です！ 左、前！ そのまま後ろに三歩、しゃがんで躲して下から切り上げる……！ あ、十時の方向、ユーノさんがピンチです！

はい、シューター！』

告げられる敵の位置に合わせて光剣を振るう。

右へ払い、左へ返す。前に刃を滑らせ、バックステップで下がって体を落とす。相手の一撃が頭上を通過したのを確認し、光剣を下段に構えて一気に振り上げる。

最後、シューターを放とうとして、

「フッフッフ。ハッハッハ、ハーハハハハデューフッフッフ！！」

と、頭上から聞き覚えのある笑い声が聞こえた。

一瞬の静寂。俺だけじゃなくて縛り上げた海賊たちを山のように積み上げていたユーノや、ステインガーを近接戦の片手間に叩き込んでいたクロノ、襲いかかるタイミングを計っていた他の海賊たちも顔を上げた。

「うわあ」

「まさか」

「あれは……」

メインマストの上。月の逆光で陰になって顔は良く見えないけど間違いない。

……何してんだあの人……！

さつき砲撃を直撃させてからまったく見かけなかった元凶。一体

いつの間にあんな所に上ったのか、装飾のついたマントを翻しながら、影は、

「とうっ」

着地に失敗して足をくじいたらしい。数秒。心配そうに集まる部下たちを手で制して、うずくまった状態からおもむろに立ち上がった。少し涙目になった顔で、何事もなかったかのように、

「——フツ。そう、拙者でござる。世界に轟く悪名高い子供好き超海賊、答えて上げよう拙者の名は黒ひげぶばはっ!?!」

爆発した。

く………今のつてステインガー?…

「ちよつとちよつと! そのキミイ! 人がせつかく名乗りを上げてんのに攻撃して来るとか、一体何を考えてますの!?! 登場シーンとか変身シーンは攻撃しちやダメって暗黙のルールがあるでしょうが……!」

「生憎と、僕はこの世界の人間じゃあない。だからそんなこと言われなくても知らないな」

「ぐぬぬぬ。まさかここで異世界人設定が出て来るとは予想外……! というか、え、異世界ってホントにあるの? マジで? じゃあ拙者が転生なり転移してハーレム築いちやったりする可能性が微レ存!?! いいな、いいな。行きたいな。拙者、異世界チョコ行きたいなあああ……!」

クロノがまた船長にステインガーをぶち込んだ。が、特に船長は堪えた様子もなく、

「顔! さつきから顔ばつか狙ってきて何なの! 拙者の顔に何か恨みでも!?! ——あ、分かった。少年、もしかして嫉妬? 嫉妬なの? 拙者のイケメンフェイスに嫉妬しちやったの? んー、これはついに拙者にも魅了系スキルの追加が……!?!」

ないって。絶対。いや、万が一、億が一あつたとしても「表明される思い(殺意)」とかになるんじゃないかな。主に女性陣から向けられ

る的な意味で。知らんけど。

……それにしても何か、船長さん頑丈過ぎませんか？

今のステインガーもそうだし、さつきだつて俺の砲撃が直撃したのに効いてない感ある。そんな「対魔力」高かったつけ。単に頑丈なだけだね？ 向うが船乗りで俺たちが魔導師だから、なんて感じのクラス相性的なものではないよね……？ そうでないと思いたい。

「……む、キミたち魔術師じゃないの？ 魔導師？ 何ソレ」

「簡単に説明すると、……魔法が使える人、かな。魔法使いとか」

だよな？ と心配になつてクロノとユーノをチラ見する。二人そろつて『まあ、大体そんな感じ』といった具合の頷きを貰つて一安心。そして、

「……え？ じゃあまさかとは思つてたけどやっぱりキミたちはリアル魔法少年なの？ てことはつまり？ ——少年たちの身内であるあの美少女たちの中に本物の魔法少女が居るといことですか?!」

うわ、バレた。

「ふぬおおおおお！ 拙者滾つて来ましたぞ——ッ！ これは！ 絶対！ 生で！ 何としても間近でお目にかかりたい脳内フィルターに保存したあ——いッ!! 同士諸君集合!!」

『ちよ、ちよつと秋介!! 何か海賊たちがスクラム組み出したんだけど一体何したの!?!』

『俺は何もしてない、してないよ——う!』

向うが勝手に自己解釈からのまさかの正解にたどり着いたせいですー。俺は悪くない——!。

『今の言葉、なのはやフェイトの前で同じ事が言えるか?』

『言えません!』

『マスター……』

さあお二人さん！ セラフがうっかりなのはたちの前で映像再生しないためにも急いで終わらせよう……!!

『おや、いくら何でも私はそんなうっかりしませんって。——やるなら故意です』

『いやあ——』

『この状況でも相変わらずだよね』

『デバイスとそこまで仲が良いのは君くらいだろうな……』

『それほどでも』

『ないです』

と、言っている間に船長が動いた。

スクラムの組まれた向う。しゃがみ込んでコソコソと何やら周りと話していた船長が、立ち上がり、数人の海賊たちを連れて舷へと移動。そこに足をかけて、

「いざ行かん。桃源郷……!」

「却下——ッ!!」

海に飛び込もうとした船長めがけてチェーンバインドを飛ばす。捕らえた感触を手に受け、容赦する理由もないので一気に引き寄せ

る。勢いよく飛んで来る船長を横に一步ずれて見送り、直後、樽の山が崩れるが響いた。

「こ、ここは拙者に任せて、お前たちは先に行け……!!」

ここぞとばかりに恰好つけに来る船長のそういうところは流石だ
と思う。けど、

……海を泳いで上陸しようとは考えたね!?

それをそう易々と見過ごすわけにはいかない。ずぶ濡れの海賊の格好をした連中がこぞって旅館に向かうとかどんなホラー映画だよ。いや時期的には怪談? まあどっちも似たようなものだからこの際いいとして、

「まったく——」

こんなことなら最初に宝具でドカンとやっておけばよかった。話してみたいなー、なんて思った俺のバカ。

『そういう反省は家に帰ってからでも間に合います。今は目の前の飛び込もうとしている彼らを』

『あいよ……!』

船長の言葉通り、続々と海に飛び込んでいく海賊たちへ照準。スフィアを広げて射出——。

「——ちよえ!?!」

出来なかった。

後ろから、いきなり腕を引つ張られた。違う。よく見ると引つ張られたのは掴んでいたチェーンバインドで、

「ツ……!?!」

打撃された。

船長の拳だ。当たる直前にシールドを張って防御する。が、そのまま下に叩きつけられ、

……また後頭部が……!

体を横に回して振り下ろされる足を回避。チェーンバインドを砕いて距離を取る。

魔法陣を展開、狙いは腰に差した銃に伸びる船長の右腕だ。

「フォトンバレット……ツ!」

魔力弾ならともかくとして、飛んで来る実弾を避けるのはまだやったことがない。ぶっつけ本番で試してみるのもアリといえはアリだけど、

……睡魔が夜中のテンションという名の壁の向うでスタンバってる……!

ついに俺にも来た。一か八かのチャレンジをする気には流石にならないね、一歩間違えば睡魔に襲われるどころか通り過ぎて死に神を連れて戻ってきかねない状況だし。あと当たったらかなり痛いらしいから嫌だ。

『最後が本音ですよね』

なにを当り前なことを。誰だって痛いのは嫌でしょうが。

「え? 我々の業界ではご褒美ですぞ!?!」

「知るか——ツ!」

刃を下に、前傾から一気に船長の懐へと飛び込む。魔力弾が弾いた右腕側から、首筋を狙って光剣を跳ね上げ、

「——キヤアアアア! いきなり首飛ばしに来るとかデンジャー!?!」

船長が、体を大きく反らしたことで空を切った。しかしそのまま返

す刀で斬撃を叩きこむ。

迎撃が来た。

打撃。振り下ろす光剣の腹を横に打たれ、カウンターとしての拳が飛んで来た。体を強引に右へ倒してそれを回避。一瞬よろめいたけど気にせず、そのまま位置を回して船長の背後を取る。

再度斬撃を叩きこもうとして、

「っ……………」

視界の端に、こちらに向けて何かを構える海賊が映った。アンティークシヨップにでも置いてあるような、棒状のものを持つあれは、

……………狙撃手……………!

三つの銃口が、こつちを狙っていた。攻撃をキャンセル、急いでその場を飛び退く。すると銃声が響いて、

「拙者のお尻にフレンドリーファイア——!?!」

跳ね回りだした船長をよそに、手近に転がっていた樽を壁にして隠れる。

……………危ねえ——!?!

もう一步遅れたら直撃だった。よくあんな古いので正確に狙ってくるなー。昔の銃はそこまで命中率が高くないってテレビで見たのに……………。

『それにしても実弾避け成功しましたよ！これは帰ったらお赤飯ですわね!?!』

『まさかの出来事に自分が一番ビツクリしてる……………!?!』

夜中のテンションがプラスに働いてくれてよかった、次は成功する気がしないね。ともあれ、

……………このまま海に飛び込んだ連中を放置しておくのはまずい。

でもだからといって今動く、間違いなく鉛玉が飛んでくるだろうし。なら、

『クロノ、ユーノ！海に飛び込んだ連中頼んでも!?!』

『すまないが無理だ！こいつら、新しく船内から現れたと思ったらさつきより手強い。少しの間その男を頼めるか、片づけ次第向かう

……!」

『ごめんごつちも! いくら縛つても次から次へと湧いて来る、きりがない! ……あ、おい! 誰だ、今僕のことを金髪美少女って言ったの! 僕は男だ……!』

『——ああ、オスだな』

『おいコラー!』

『ホントは余裕だろクロノ……!』

まさか、という返答を聞いて覗くと、囲まれているクロノがいた。クロノは向かってくる海賊をいなし、魔法陣を展開して、

「デュフツフツ。今この場に残っているのはかつて拙者と共に幾度もの戦場を戦い抜いた戦士たち。そうそう簡単にやられるワケナツシング——」

と、船長が上から覗き込んできた。顎に手を当て自慢げに語るその姿の背景で、

「ステインガーブレイド」

「うそ——ン!?!」

放たれた魔力刃が海賊たちをあっけなく光に変えた。その光景を見た船長が膝から崩れ落ちたけど、まあ、気にしないでおう。

「……あ、やっぱ余裕だったなクロノ!」

「そんな訳ないだろ、湧いてくるこいつらを相手するのに手一杯だ!

まったく、……一体どれだけこの船には乗っているんだ……!」

「ちなみにどんくらい?」

「ンー、二百五十くらいカナ?」

「だって」

「君の方が余裕じゃないか……!!」

「あ」

飛んできた魔力刃が、ちょうど立ち上がろうとした船長の頭に突き刺さった。やるうクロノ。

「だがしかあし、今の拙者にこんな攻撃は効か——ぬ!」

「でも刺さったまま、頭にステインガー刺さったままだから……!」

「え? ……ギヤ——ツ!! ち、血が! 頭から血があ、——出てなあ

い！」

出てないのかよ。

……ああ、非殺傷設定。

あれってこういうよくわからん存在にも適用されるのか。意外。けど残念だね、今の一撃が適用されてなかったら終わりだったのに。もう……。

」

顔の横を魔力刃が高速で掠めた。二、三本の髪が宙を舞い、

……夜中起こされてちよつと不機嫌なの忘れてた……！

『すまない。今君の背後に襲いかかろうとしているヤツがいたんだが、……手元が狂ってついうっかり非殺傷設定を解除してしまった。まあ、当たらなかつたから気にするな。な？ ——じゃあその男は任せたぞ！』

『うっわ、こつちに船長丸投げされた……！』

『というか敵多いよ！ いつまでもここで足止めされてたら皆が！』

言われなくても分かつてるよユーノ！ だけどその前に、

「ンデユフフ。ああ、リアル魔法少女ってどんな感じで変身するのかなー。日曜日の朝系か、平日の夕方系か。それとも深夜系の『裸になつちやう……！』“なちよつとえつちい系か。ンー、どつちも捨てがたいですなあ……！”

とりあえず斬撃を叩き込んでも罰は当たるまい。

「なんのこれしきいー！」

振り下ろした光剣は、挟んで止めようとした船長の手をすり抜け頭に落ちた。

……白刃取りに失敗したね!?

そのまま両断、とはいかず刃は止まった。

どんな石頭、と一瞬思ったけど、非殺傷設定が適用したままだったのに気付いて、あとでクロノに謝ろうと超反省。すると何故か真顔になった船長と目が合い、

「——変身シーンをLECしてもいいですか!?’

「いいわけあるか——ツ!!」

魔法陣を足元に展開。甲板から伸ばすようにランサーを発射する。それを船長が後ろに飛び退いて回避した。その先にバインドを置き、発動したのを確認。

セラフを、光剣から魔導杖Ver.に戻す。甲板を蹴り、船長との距離を一気に詰め、

「ブレイクインパレスツ！」

先端を接触させて数瞬、衝撃波を撃ちこむ。

……入った！

直撃。大きくよろめいた船長に、追撃としてバスターに繋げようと構え直して、

「なんちゃって」

「っ……!?!」

船長が、体を大きく捻ってマントを翻した。

視界が遮られる。構わず砲撃した。

……手応えなし！

『下です、マスターッ！』

避けられた、と思うや否やセラフが叫んだ。

落ちるマントの先、しゃがんだ姿勢の船長からアッパーが飛んで来る。

それを杖の持ち手で防御。その寸前、

「な——」

いきなり手が開き、持ち手の部分を掴まれた。

……まずい……！

引つ張られる前にセラフを魔導杖からいつものペンダントVer.に戻す。そしてすぐさま、今度は実剣Ver.へと形を変え、

「ぬんー！」

下からの斬撃を、足の裏で止められた。

船長の顔が一瞬歪んだように見えたけど、多分気のせい。

「思ったより、痛かった……！」

気のせいじゃなかったかー。機会があったら俺も、なんてチラッと思ったけどマネするのは止めよう。

そう心に決めて次の攻撃に移る。

実体剣Ver. を解除、再びセラフを柄へと変形。光短剣として刃を形作り、

飛んで来る拳を、光短剣の柄で弾きながら切り返す。身を回し、位置を変え、バインドで牽制。持ち手を回して連撃する。

「ほ」

振り下ろした一撃を、船長が半身を下げて躲した。それと同時に左ストレートが飛んで来る。

右の膝を折って前に倒れ込むように回避。そのまま一回転し、着地からの振り返りで船長の背後に小さく飛んだ。

回り込む。

光短剣の刃を調整。伸ばすことで光剣へと再形成する。

……これで！

と、振り向く船長に斬撃を叩き込む。が、

「っ——」

瞬間、額に何かを突き付けられた。

直撃の寸前に刃を止める。見れば突き付けられたそれは、さっきまで船長の腰に差さっていた物で、

……うわ。銃……！

「デュフフフ！ この距離なら躲されることないよね！ ということで撃たれるのが嫌だったら今すぐ魔法少女たちをここに呼んでもらおうか！」

「部下を攫いにやっておいてここに呼べとは何て酷い船長だ……！」

さては罠に使ったね!? 頑張つて海を泳ぐ部下に申し訳ないと思わないのかよ！

「——フ。策士とは常に二重三重の保険をかけておくものですよ？ あと先に行ったアイツらが拙者より先にリアルで魔法少女を見るっと思うと腹立つ」

後半本音ダダ漏れじゃないですかおい。せつかく前半格好つけてたのに台無しだね……。

と、船長の声で引き戻される。

もう待たない。これが最後のチャンスだ、ということだろう。なら、

……一か八か。

ここはセラフの言う賭けに乗ってみようじゃないか。

船長を見据えて、言つてやる。

「そりゃあもちろん、——お断りだ」

「あら残念」

銃声が鳴り響いた。

）—————）

「な、に……?」

目の前。見開いた表情の船長が、顔を左舷側へと向けた。

……は?

一体何が、と思う。撃たれたはずなのに、どこも痛くない。一応、銃を突き付けられていたおでこも触つて確認。穴は開いてない、血も出てない。

……は?

わけわからん。何で俺無事なの……?

と、顔を動かして周りを見つめる。

海を見つめて動かなくなった船長。それと同じく動きを止めた海賊たちや、ユーノたちも驚いた顔でこつちを見ていた。少し離れた所には、直前まで突き付けられていた銃が転がっていて、

『ふふふ。賭けに勝ちましたね、マスター』

「それってどういう」

ことか、と、聞こうとした瞬間。遠くの方で声が叫んだ。

「砲撃よ——うい! ——撃え——ッ!!」

女の人の声と共に、破裂音がいくつも轟く。それから少しして、船の周りに高い水飛沫が上がり、大きな揺れがやって来る。

「うそん」

船長の洩らした声を聞いて同じ方向を見れば、そこには一隻の船があった。

ガレオン船だ。

船首を回し、こちらに向かってくる甲板の上。バタバタと動き回る影たちの中央に、三つの見覚えのある顔があった。

一つはえんじ色の髪に、黒の帽子をかぶった顔に傷のある女の人。残りの二つは、金髪に身の丈以上のマスコット銃を持ったお姉さんに、銀髪の女の子だ。

……なるほどそういう。

セラフの言っていた船長に賭けてみる、の意味がようやく分かった。

「まったく。ピンチに現れるって、格好良すぎでしょうお姉さん……！」

危機一髪、助かった。お姐さんが登場してくれたお陰で隣の船長が「BBAが子供のピンチに颯爽と助けに登場するとか、とか、とか、……とかア!? ——死にそう」何アレ表情が七変化して面白い。ともあれ、

銃声がまた鳴り響いた。

周りに立っていた海賊たちが次々に倒れていく。

……今の内に。

こつちに接近するガレオン船に釘付けの船長の横を抜け、慌てる海賊たちの隙をついてその場を離れる。

援護射撃が来た。

背後から切りかかって来た海賊を、一発の銃声が撃ち抜く。

……なら!

足元に小型の魔法陣を展開。それを一気に踏み砕く。

飛んだ。

『おお。この前フェイトさんの移動魔法を参考に作った加速魔法、瞬発加速とでも名付けましょうか。成功しましたね、良かったじゃないですかマスター!』

が、思った以上に飛距離が出て、
「あ」

顔面から着地しそうになった。受け身はギリギリ成功。二回転半程して体が止まり、

「や。大丈夫だった？」

「それを聞きたいのはこっちだ。君の方こそ大丈夫か」

「また逆さまになってるよ、秋介」

「ありがとうお二人さん」

と、ユーノとクロノに手を借りて立ち上がる。そして、

『どうやら魔法陣に組み込んだ魔力量が少し多かったようですね……。ならテンプレートとしての設定を微調整すれば、と。——あ、それはともかくとして皆さん。衝撃に備えてください』

セラフが言うや否や大きな衝撃が来た。

こちらが乗る船の横腹。そこに突き刺さるようにガレオン船が激突する。

接舷した。

乗り移って来る影があった。それは先ほど確認した、見覚えのある三人で、

「げえっBBA」

「んだとこの髭野郎っ！ 開口一番がそれかい!？」

「まあまあ落ち着いてくださいな。その銃は一旦下ろして、ね？ わたしたちの目的はあくまであの子たち、そんな男をかまっただけあげる必要はありませんのよ」

「そうだよ。時間の無駄。こんな男に付き合う義理も人情も持ち合わせなくたって誰も気にしないよ」

「おほっ。相変わらぬ塩対応に拙者ときめいちゃう。もつと、もつとゴキブリを見るような蔑んだ目で拙者を見て！ それかその小さなあんよで踏みつけてえ……!」

「——よし。今すぐ首を斬り落とそう」

デレデレした顔で迫る刃を躲す船長は、すごいようすごくくないよな、何ともコメントしづらい有様だなあ。

「うわぁ」

「もう正直言って気持ち悪いよな」

「クロノが辛辣に……!?!」

とうとうクロノの眠気によるイライラが頂点に達したらしい。しかもユーノを引かせるとは中々……。

「どうどう、首を落とすのはまだですわ。今はあの子たちの方が優先よ」

「……チツ」

「舌打ちキタ——ツ!! さあお次はこうッペッッって拙者に向けて唾を……!」

「やはり先に始末してしまった方が世のためになりますわよね?」

と、金髪お姉さんが船長に銃弾を叩きこんだ。

気色の悪い声を上げ、回避行動を取った船長の頭をお姐さんが蹴り飛ばす。

……見事な四回転半……!

動かなくなつた船長の足に、銀髪の子が手近に落ちていた鎖を巻きつけた。

「おっけー」

「はい」

金髪のお姉さんが船長を海に突き落とす。

……え、えええええ!?

と、心の中で驚いてみたものの、あれくらいじゃ船長は死なないと思う。

「デュフフフ……。水も滴るいい拙者ご帰還でござる〜」

「ほらやっぱり。って、感心してる場合じゃない! クロノ、ユーノ!

今の内に旅館の方に——」

と、飛び上がろうとした時だ。

旅館の方角で光が瞬いた。続くのは、海賊たちの悲鳴のような叫びで、

……一体何事!?

見れば、旅館の前、海賊たちを前に立つ影が二つあった。

紫と緑。二色の光を手元に溜め、浴衣姿で浜辺に立つその二人は、「プレシアさんとリンディイさんか……!」

ナイスタイミングで助かったけど、あの二人には知らせてないのにどうして……?

『ちよつと坊や。一体どうなっているの? リンディイの酔い覚ましのために外に出たら変な連中が襲ってくるし、さつきから魔法少女連呼して気味が悪い』

『そいつら海賊の幽霊。狙いはフェイトとなのは。攫うつもり』

『——消し炭にしてやるわ』

話が速くて助かる。

セラフに頼んでモニターを出してもらい、二人の戦況を伺っている
と、

「えっ何々!? ついに魔法少女の登場で!?! 一体どんな衣装でタイプなのかつ!! ——なんだBBAじゃん。魔法BBAとか誰向けww
w少なくとも拙者のストライクゾーンにはありませんなwww」

雷撃が船長に直撃した。

放ったのは間違いなくプレシアさんだろう。だって紫色だったし。船長、海に落ちて濡れていたぶんダメージマシマシだろうなあ。

「見事な一撃でしたわねえ」

「ザマア」

金銀の二人が、倒れて痙攣する船長を見て嬉しそうに言う横。胸の前で腕を組んだお姐さんが、

「なんだい。他にも戦える魔術師がいたじゃないか。……つたく。これならあの連中に声をかけた意味なかったじゃないかい」

「あの連中……?」

「この馬鹿は何しでかすか分かったもんじやないからねえ。念のために途中で居合わせた野郎に声をかけておいたんだが……」

言って、お姐さんが足元に転がる船長を足蹴にしながら、旅館の方へと体を向けた。

「ぐぬぬぬ……。ここでもささかの援軍その二とは予想外。しかしたったの二人で守り切れるはずが——」

と、船長が言った時だ。

モニターの中。プレシアさんとリンディさんを取り囲む海賊たちの横を、遅れて上陸してきた別の部隊が抜けて行く。あ、と二人が声を上げた所で、

『――』

別部隊の頭上。そこから無数の矢が降り注いだ。

違う。降り注いだのは矢ではなく、柄の短い刃物のような物で、

……マジか……！

『どうやら彼女の言っていた通りになったようだな。待機しておいて正解だった』

『つたく、小娘どもの次は海賊の相手かよ……。あーメンドくせえ』

旅館の屋根上。そこに二つの影が立っていた。

紅と緑。それぞれ色の目立つ格好のお兄さんたちが、弓を構え、

『っーかこれ、アンタがいるならオレいなくてもいいんじゃないの？

制圧向きじゃねえし』

『子供たちを守るために海賊と戦うのは、私よりも君の役割ではないのかね？ 生憎と、時計を飲み込んでしまったワニは見当たらないようだが』

『どっかの誰かさんと勘違いしてませんかねえ。つてか、オタク絶対分かっててワザと言ってるんだろ。口元ニヤついてんの丸見え』

『フ』

何のことかな、と二人のお兄さんが参戦した。

プレシアさんとリンディさんの援護として、抜け出た海賊たちを射抜いてく。

『守り切れるはずが、なんだって？』

『なんでもありません』

とりあえずこれで向うは安心だ。一度ならず二度までもお姐さんに助けてもらっちゃったなあ。

……あとはこつちをなんとかするだけ、なんだけど……。

そう思い船長へ向くと、復活したのか勢いよく立ち上がり、

「ぬがあー！ さつきからガシガシと拙者のプリチーなお尻を蹴り飛ば

しちやってくれやがって、自分の尻がデカいからって嫉妬かこのBB
A！ 八つ当たり良くない！」

「うるさい男だねえまったく……。こんな東の果てにまで追つてきて、いい加減鬱陶しいんだよ！ せっかくの温泉旅行が台無しになっちまったじゃないか！」

「はあ？ 拙者がBB Aを？ ——冗談はその胸のデカさだけにしてくれませんかあ？ 変な言いがかりとかチョー迷惑なんですけどー」
「あんだとこの野郎！ 散々アタシらの行く先に現れては邪魔しやがって、何か恨みでもあるつてのかい!?」

「別に恨みなんてありません？ むしろ——」

「ああ？ むしろ何だつてんだい」

「むしろ……。な、何でもねえよこのBB A!! こつち見んな！」

と、背けた船長の顔が、真っ赤になっていた。

……ふふん。なるほど。

これは分っちゃったかもしれない。何がって？ そりや船長がこの海にやって来た理由だよ。

「つまり？」

「どういうことだ？」

「ほらアレだよお二人さん。好きな子をあえていじめちゃういじめっ子心理的なアレ」

「……ああ」

なるほど、とクロノとユーノが頷いた。

「ということは、だ。話を聞く限り、あの男は彼女を追いかけて回っている」と

「そうなるね」

「じゃあ彼女のことを好きなんだ」

ユーノの言葉に向うで船長が噴き出した。

ド直球……。と、金銀の二人が、口元を押さえて膝をついた。分かる。不意打ち過ぎたよね、今の発言。流石の秋介さんもビックリだよ……！

「少しくらい手加減してあげよう？ ユーノ」

「そうだな。流石に今のセリフは僕でもやってしまったと思っただぞ」
「え、えっ？ 僕何か言っちゃいけないこと言っちゃった!？」

『自覚がないのがまた容赦ないですねえ。ユーノさん』
「そんなセラフまで!？」

ともあれ、晩ごはんの時に聞いた話の真相がわかってスッキリした。

“女を探すor攫う幽霊”ならぬ実際は“尊敬という名の好意を抱いた男がその相手を追いかける”話だったってわけだ。本人は絶対に認めないと思うけど。

「み、みみ、みみ認めるも何も拙者元からBBAとか範疇外ですし!? 尊敬とかまったくこれっぽっちもしていませんし!! 大体、昼間の赤い水着もそうだけどそんなこれ見よがしに胸の脂肪を強調するような服着ちやつて歳を考えろって話!」

「風邪ひかないように上に何か着ろ、ってことかな」
「ゴベハアツ!？」

すげえ。ユーノの言葉は船長に効果ばつぐんらしい。体力的にはタフでも精神的には弱いよね……。

「最高、最高ですわ今の!」
「もう無理、笑えて足に力が入らない——」

金銀の二人がその場に膝をついた。
そんな二人の様子に、一度首を傾げたお姐さんが船長を訝しげに見て、

「風邪つてアンタ、……アタシを心配してくれてんのかい?」

「ち、違ア——う! だ・か・ら! 拙者はBBAの水着姿とか全然一ミリもまったくもって興味ナッシングなの! バ、BBAの露出なんて誰得レベルですからwwwいい歳こいてホルタービキニとかww恥ずかしくないんですか?」

「な、確かにあの二人より上だけどアタシヤそこまで歳食っちゃいな
いよ! 恥ずかしくないし、まだいけるっての! なに着ようがアタシの勝手だろう!？」

「無理wwwパレオにしてから出直してくださいwww」

「——は。上等だよこの髭野郎！ 樽に爆薬と一緒に詰めて海の藻屑にしてやる……！」

と、二人が激突した。

俺としては当然お姐さんに味方するつもりで、クロノとユーノに視線をおくる。

領きを貰い、いつでも加勢できるように船長を見据え、

「四方を囲まれて拙者大ピンチ！ だけど負けない！ モノホンの魔法少女を目に焼き付けるまでは……！」そしてとくと聞けえ！」

いいか、と船長が前に置き、言葉を続ける。

「BBAが「まだ若いし、いけるし」とか思ってたんじゃないねえ——ツ!!」……あ。

『マスター、しゃがんでください!!』

一瞬。背後からかものすごい殺気を感じた。

セラフの言葉に従って緊急回避。その直後、

「——はい？」

船長の左胸。そこから、一本の紅が生えていた。

「な、何じゃこりゃあ——！」

……あれは……!!

見覚えのある物だ。

投げれば必中、標的の心臓を刺し穿ち突き穿つ。紅の魔槍の、さらに古い同型武装。

背後から飛んで来たということは、あの槍の持ち主はその方向にいるということだ。

振り返って見てみれば、遠く、海岸沿いの岩場で火が焚かれているのが見える。

黒い戦装束を身に纏う赤い瞳が、こちらを睨んでいた。

「あの距離で聞こえるとはとんだ地獄耳……！」

『あの方の場合、魔境耳と言っても差し支えないような気がしますね』言ってる、と試しに軽く手を振ってみた。

返してくれた。なんかちよつと嬉しい……!! とかやっている場合じゃなくて、

「ギャ——ッ!! 拙者の胸に穴が、穴が! 血は出てないけど何これ!?! ——てかチョー痛え!!」

心臓を貫かれたのにちよつと元氣過ぎやしませんかね? 船長。

「しかも徐々に拙者の体が足元から消え始めてるんですけど!?! もしかしてこれで終わり? 拙者の出番終了なの!?! これからBBAとのラストバトルに勝利して魔法少女ちゃんたちとキャツキャウフフする予定だったのに……!?!」

いいからもう消えてくれないかな。消えてしまえ。

「何かあつけないくない? ねえ拙者の退場あつけない?! もつとこう壮絶な戦いの末に紙一重な感じはないの!?! そして芽生える友情、現れる新たな敵。俺たちの戦いはこれからだ……!?! 的な!」
ないよ。

「じゃあ拙者がライバルとして蘇るルートとか必要では?!」

いりません。さつさと消えてくださいお願いします。眠たいんで。

「お願いされちゃった……!?! なら仕方ねえ、そろそろ消えるとするか! あーあ、生で本物の魔法少女見たかったな!。次こそは必ずこの目に焼き付けてやる……!?!」

「そんな死に体でよくそこまで口が回るものですわね……。あ、尊敬はしませんから」

「ホント無駄なタフさ。……ま、でも感心くらいはしてあげるよ」

「ソフ。拙者、最後の最後でお二人のデレが見られて満足ですぞ。ついでにBBAも最後だしデレちゃってもいいのよ? ン?」

「あ?」

「何でもないですごめんなさい。あ、消える前に一言。——いずれ第二第三の拙者が」

「いいからさつさと消えな!」

「あひん。もうBBAつたら最後まで乱暴なんだからつ。それじゃあ、さらばだ魔法少年たち!」

そう言つて、船長は高笑いを残してかき消えた。

続いて部下の海賊たちも消えていく。旅館の方でも光が見えるのは、向うの連中も消えていくからか。

それと同時に船が崩れ始める。

「あらあら。このままでは崩落に巻き込まれてしまいますわね」

「それじゃあ撤退するよ！ 舌を噛まないよう気を付けなよ坊や！」

「はい？ 舌ってなん、——でえッ!？」

と、お姐さんが、俺を脇に抱えてガレオン船へと飛び移った。

……ほっぺに伝わるこの感触はまさか……！

張りのある弾力に、女の人特有のいい香り。俺が抱えられている位置からして、それは、

「——ッ!？」

『マスターの赤面いただきました……！ というかマスターって、こういう不意打ちにホント弱いですよねー』

うっさいセラフ。

あと保存するなら俺だけじゃなくて後ろの二人もよろしくね。見てほらクロノの金髪お姉さんに抱えられる顔、恥ずかしがっちゃってまあ……。ユーノなんて銀髪の子にお姫様抱っことかされちゃってもうねえ？ 両手で隠してるけど絶対顔真っ赤だよ。アレ。

「——つと。ん？ アタシの顔に何かついてるかい？ 坊や」

「へ？ あ、いやあその……。遅くなっただけど、助けてくれてありがとう」

「なんだいそんなことか。それだったら、アタシじゃなくて向こうに言いな。銃を突きつけられていたアンタを助けたのは、あの子の一発さ」

乗り移ったガレオン船の上。俺を降ろしたお姐さんが、後続の金髪お姉さんを示した。

それに金髪お姉さんが気付き、クロノを降ろしてやって来る。

「何かありませんか？」

「この坊やがアンタに礼を言いたいんだとさ」

「まあ、お利口さん。どういたしまして」

「いやそこで頭撫でられるのはちよつと……」

『本日二度目の赤面が……！ いやあ、夜が明ける前でこれとは幸先が良い』

もう好きにすればいいよ。

「へえ。喋るペンダントとはアンタ、面白いもんもってるじゃないか。それにその形……」

「助けてもらったのは感謝してるけどセラフはあげないよ？」

「……は。いいて別に。いくらなんでも子供相手に礼を要求しやしないよ。大体、直接助けたのはこの子だ。アタシは大したことはしてない」

むしろ、とお姉さんが、口元を釣り上げた。

「こつちが礼を言いたいくらいさ。アンタらのお陰でしつこいのを追っ払えたんだからね」

「僕としては最後の一撃を誰かに取られちゃったのが残念だったけど。ま、あの男が消えたなら結果オーライかな」

銀髪の子が、クロノとユーノに何かしらの説明を終えてやってきた。

続いて来たのは、肩にフェレット姿のユーノを乗せたクロノで、

「という訳だ、アレックス。例の連中は現地の協力者もあつて消滅し、民間人及び施設等の被害はゼロ。詳しい報告書は明日改めて、……いや今日か。後ほど改めて書くことにするよ。……少し眠りたい」

『了解しました。クロノ執務官。ユーノ君もお疲れ様、ゆっくり休んで。秋介君にもよろしく』

アレックスさんとの通信を終え、疲れた表情の二人があくびを一つ。

「なにユーノ、魔力切れ？」

「ううん。そういう訳じゃないんだけど、……流石に今回は眠気も相まって疲れちゃった。こつちの姿の方が楽なんだ」

「人の肩に乗れて歩かなくていいからな。まったく……」

うらやましいの？ クロノ。

「まさか。ほら、ユーノは君に任せた。今の僕は転んで海にでも落とすてしまいたいからな」

「はーよ」

と、ユーノを受け取って肩に乗せる。するとお姐さんが、

「ほら、ついでにこいつも頭に乗つけてみな」
「おお？」

危ね、もう少しですり落ちるところだった。
……………つて。これは……………。

「お姐さんの帽子……………？　なんで」
「アタシからのお詫び兼お礼さ。ま、要らないなら捨てるなり何なりしておくれよ」

そんなもつたいたいなこと誰がしますか。くれるなら丁重に扱わせてもらおうよ。うちのリビングか寝室にでも飾ろうかな、ケースに入れて。だけど、

「お礼はともかくお詫びつて？」

「いやあ、旅館で蹴り飛ばしちまったからねえ。それがどうも気になつて」

なんだそんなことか。ならありがたく貰おう。あ、ついでにサインとか貰えます？　宝物にするんで。

「セラフ、サインペン」

『よゆうです！』

え、セラフが変形するの？　てっきりいつものごとくどっからか取り出すと思つてた……………。

「この横辺りでいいかい？　あ、そうだアンタらもついでに」

「ええ。喜んで」

「僕も」

……………おお。なんとということでしょう。

あの帽子はもう一生の宝物の一つに決定だね！　帰ったら早速専用のケースを買わなければ……………！

「ほら坊や。こんなもんでいいかい？　なら、アタシらはもう行くよ。浜まで送る？」

「いや俺たち空飛べるから大丈夫。……………大丈夫だよね？　クロノ」

「……………ああ。寝てない。だから大丈夫だ」

もうダメそうだからちやちやつと転移で部屋に戻ることにした。

「じゃ。ホントに助けてくれてありがとう」

「元気でやりなよ、坊や」

「それではまたいつか。風邪をひかないように気を付けてください
ね」

「ばいばい。縁があったらまた」

セラフが足元に魔法陣が展開した。

手を振って別れを告げ、視界が光に包まれる。晴れるとそこは、

「……疲れたな」

「うん。もう無理。流石に俺もこれ以上睡魔と戦う気力はないよ
……」

「キユ……」

『ユーノさん寝ちゃいましたね』

無理もないって。俺たちも早く寝よう。

「そうだな。あとで起きたら報告書作りは手伝ってもらうからな？」

秋介。それじゃあおやすみ」

「はいはい。おやすみー、と」

あ、そうだ。窓開けっぱなしでさつき外出ちやっただよね。少し
閉めておこうか、蚊とか虫に入ってきて来られても嫌だし。

「そういえばプレシアさんとリンディさんは？」

『すでに部屋へ戻ってお休みになっているようです』

「起きた時、何て言われるかなあ……」

『その辺りはクロノさんと報告書を書くときにでも考えましようよ。
ユーノさんもいますし。リンディさんに関しては酔っていたような
ので、戦ったことを覚えているかどうかですが』

それもそうか、と窓を閉じる。次にカーテンを引こうとして、

「お」

水平線の向うへと消えていく、ガレオン船の後ろ姿を見た。

「縁があったらまた、か」

『これからの楽しみが増えましたね。マスター』

「うん」

さて、それじゃ俺も寝るとしますかなー。

くなんだか嫌な予感く

「あ・き・だ・よ・起きろ——ッ!!」

「グハッ!」

突如お腹に受けた衝撃によって目が覚めた。

……なに、な、え、ええ!?

俺のお腹の上。そこに笑顔で馬乗りになる、この金髪ツインテは、

「アリシア……?」

「あ、起きた。おはよー。もうすぐ朝ごはんだよ」

「もういつまで寝てんのよあんたは……。遅い!」

「おはよう。秋介君」

アリサに、すずかまで……。

「わたしたちもいるよ。秋介くん」

「おはよう」

「なのはにフェイトも……。おはよう」

というか何で皆さん俺らの部屋に……?」

「あんたたちが全然起きてこないから見に来たのよ。朝ごはん、皆あんたたちが起きて来るの待ってるのに」

「それで様子を見に行こう、ってアリサちゃんがいいだして。来てみたらやっぱり秋介君たちが寝てたから」

「私が飛び乗って起こすことにしました!」

「……とりあえずアリシアはあとで手刀一発」

「なんで!?! せっかく起こして上げたのに!」

もつと他の方法があるでしょうがまったく……。俺たちさつき寝たばかりなのに。

「夜更かしする方が悪いんでしょうが。ほら、いいからさつきと行くわよ」

「ちよ、待ってアリサ。腕引つ張らないで!」

「朝ごはんは食堂でビュッフェスタイルなんだって。何かあるのかなあ」

「すずかまで!?! 自分で歩けるから引きずらないで……!」

クロノ助けて、ってまだ寝てる！ よし行けアリシア、俺と同じ衝撃をクロノにお見舞いしてあげろ！

「らじや」

そう言ってアリシアがクロノに飛び込んだ。

呻き声を挙げ、無理やり起こされたクロノが俺を見て、

「……夢か」

「寝ぼけてんなクロノ！ 朝ごはんだよ起きなさい！」

『マスターがソレを言いますか』

『だよね！ あ、セラフおはよう』

『はい。おはようございます』

『もういいから行くわよ。なのは、ユーノをよろしくね』

「うん。ユーノくん朝だよ」

むう。今はフェレット姿だから起こされないとはなんと羨ましい

……！

「それじゃ行くわよー」

「いや自分で歩くから手を離してください!?!」

「ダメ」

「そんな……!?!」

「クロノも行くよ！ ほら早く！」

「いや、僕はもう少し寝かせてもら——」

「あらクロノ？ まだ寝ているのかしら。母さんが起こしに来たわよー」

部屋を出る瞬間。聞こえた声に、ものすごく困惑して頭を抱えたクロノが見られたので、まあ、よしとしよう。

ところでもしかして食堂までずっと俺引っ張られた状態なの？

途中、階段があったような気がするんだけど。

「大丈夫よ。エレベーターあるから」

「さいですか」

『ともあれこれで残りの旅行も楽しくなりそうですね、マスター』

『ホントにね。とりあえず今は、どんなおかげがあるかが楽しみ』

そうだ。いつそ食堂に着くまで寝ていよう。あ、？ですごくめんなさ

い階段で行こうとしないで……！

第二十八話：読書感想文つて夏休み最大の敵だよ

「アイスって、どれくらい冷たいんでしょうか。マスター」
「……え？」

「定番はやっぱりバニラ、ちよつと大人なビターチョコもいいですよ
ね。あとはストロベリーや、抹茶といったバリエーションも豊富です
し。中にはラムレーズンなんて変わり種も」

「……いや」

「最近ではシングルよりもダブルで頼むのが一般的らしく、コーンも
種類がワッフルやウエハースなど多岐にわたるとも。」

しかし、食べ歩きならともかく持ち帰りなら、やはりカップが適当
でしょう」

「……あの」

「ちようどこここに最近オープンしたアイス屋さんのチラシがあります
が、なんと割引券付きになっていてですね？ オープン記念でダブル
が半額！ 持ち帰りも可！ しかも期限は今日まで！」

「……急に」

「これはもう行くしかありませんよ！ 偶然にも今日はなのはさんた
ちとのお約束もありませんし、マスターは朝から暇だと嘆いていまし
たから、断る理由もありませんよね……!?!」

何を言い出すんだうちのデバイスは。朝起きて「久しぶりに見たな
セラフの人の姿……!」ってビックリしたけどまさかアイスが食べた
いなんて言い出すとは……。

「冷凍庫にあるじゃん。この前買ったバニラのアイスが」

「ダメです！ 私が！ 食べたいのは！ アイス屋さんのアイスなん
です！」

確かに、マスターと市販のアイスで「うわカチカチ」「なら私が手の
温もりで柔らかくしますよ！」「でもそれだとセラフがたべられないよ」
「ならマスターが食べさせてください！ あーん」的な感じのやり取
りとか良いですけど！ でもやっぱりアイス屋さんのアイス片手に
お散歩したいんです……!」

何今の一人芝居すごい。あとチラシをそんな大切そうにしなくても取ったりしないって。

……にしてもこっちのセラフはテンションが高い。

新鮮だ。普段のセラフと比べて動きがあるというか、いや普段もフワフワと浮いてたり瞬間移動したりと動きはあるけれど。そうだったのとは違う感じ。いくなれば、

「水を得た魚状態……!」

「むしろ私の場合は体を得た魂状態ですが、まあいいでしょう。この際そんな事は部屋の片隅にでも置いて、今議論すべきなのは、——アイス屋さんに行くか行かないか。そのどちらかでしょう」

行かないという選択肢はないらしい。ま、別に俺としては午後の予定もないのでお出かけは全然オツケー。

セラフがその姿になつてそこまで言うくらいなら、お昼ごはん食べた後にでも食後の運動を兼ねて買いに行こうか。なんか俺も食べたくなつちやつたし。

「マスターならそう言ってくれと確信していましたよ!」

「なら最初から素直に「アイス買いに行きましょう」って言えばよかつたのに」

「一度こういった回りくどい言い方をしてみたかつたんです。てへ」

あらそう。そりやようございました。

く何味のアイスにしようかな

まさかアイスを買うのに一時間半も並ぶ事になるとは思わなかった。

しかも今日は真夏日。どうやらこの暑さじや皆考える事は同じらしい。お店の外にまで続く行列を見た時は諦めて帰ろうかとも思つたけど、

「帰らなくて正解でしたね。もしあそこで帰っていたら今日の私は一日頬を膨らませるところでしたよ」

「それはそれで見てみたかつた気もするなあ」

もう、とセラフが照れ隠しか、片手に持つアイスを一舐めする。

「でもマスターだって帰らなくて良かったと、そう思っているでしょう？ 現に私よりテンション高かったように見えましたし」

「う、それは」

確かにセラフの言う通りですはい。

だって仕方ない。お好みのフレーバーにお好きなトッピングを、なんて売り文句見ちゃったら誰だってハイテンション。王道から脇道まで。己の欲求に正直に、あつたらいいな、が現実になるんだよ？

「——超楽しかったです」

「だからといってチョコアイスのトッピングにチョコチップとチョコクッキーを選んで混ぜてもらおうのは、流石にやり過ぎじゃあないでしょうか。しかも重ねでカフェモカ・チョコチップ添えなんて」

楽しみ過ぎでしょう、とセラフが笑った。

「それほどでもない」

チョコレート・チョコチップ・チョコクッキー、略してC・C・C。つてなんかめっちゃ強そう。まるで虚数空間でも生み出しそうな、そんな気配が。

「そういうセラフだって抹茶にチーズケーキは楽しみ過ぎじゃない？」

もう一つのさくらフレーバーとチョコフレーバーの混ぜ合わせの方は大人しめだと思うけど。

「甘い羊羹には渋いお茶ともいいいますし、それと同じような感覚で頼んでみましたが、……これがまた意外といける組み合わせで、どうです？ マスターも一口」

「……ほほう。これはまた」

抹茶の上品な風味に、時折顔を見せるチーズケーキの程よい甘さ。しかもこのチーズケーキ、下地がクッキーになっっているお陰でなめらかさの中にちょうどいい食感がある。

……美味しい。

今まで抹茶とかあまり食べてこなかったけどこれはハマリそう。新境地の開拓、あのお店には無限の可能性が秘められていると見つけ

たり……!」

でも、

「流石に抹茶バナラに沢庵トツピングは無いと思う」

「——ですよね? マスターもそう思いましたよね!? あの男の人!」

やっぱセラフも気付いてたか。

「ええ。注文待ちの時、後ろに並んでいた方の沢庵トツピング大盛りで、なんて注文を聞いて『正気ですかこの方……!?』って内心驚愕していましたよ!」

いくら何でもアレはちよつと、……匂い的に」

「店員さんもまさか沢庵を要求されるとは思ってもみなかったんだろうね。男の人も無いつて言われても頑なに譲らなくて、アレ絶対人の話聞かないタイプなんじゃないかな。」

挙句の果てには店員さんテンパってマンゴーの薄切りで誤魔化そうとしてたけど」

「それで若干領きそうになっていたのがさらに驚きでしたが、結局気付いて沢庵ループしてましたよね。途中でアイス来たのでお店出ちやいましたけどあの後どうなったんでしょう」

俺の予想としては困り果てたお店側がダツシユで沢庵買いに行つたんじゃないかな、と。

ともあれ、そんなこんな話しつつアイスを舐めながら帰る散歩道。その途中、馴染みのある公園の前を通りかかった時だ。

「あぶねえ!!」

そう叫んだ声が聞こえた。

直後、俺のC・C・Cが吹っ飛んだ。

「——」

……一体何事で!?

「私のアイスが——!?!」

セラフが膝から崩れ落ちたけど今は現状確認の方が先決。さつき
の声は公園の方から聞こえたようで、

「おい大丈夫か? 怪我とかしてねーか!?!」

見れば、赤毛の女の子が駆け寄ってくる。その後ろには、車椅子姿の女の子も見えて、

……わー。

まさかこのタイミングで、と思うけど、出会ってしまったんだからしょうがない。ま、遅かれ早かれって事でよしとしよう。今までと比べて割かし平和的だっただけマシだ。

とりあえず、

「う、うう。私のアイスが……。初めての、マスターとのアイスが……!!」

「……はあ。ほらセラフ立って、アイスならまた一緒に買いに来ればいいから。ね?」

くこのままだと通行の邪魔になるからく

落ち込むセラフを赤毛っ子の協力もあって公園内のベンチへと移動させ、落ち着いた頃合いに茶髪ちゃんから事情を聞いた。

どうやら近所のおじいちゃんおばあちゃんにゲートボールを教わった赤毛っ子が、その腕前を見せようと思いい切りスティックを振り切ったのが原因らしい。

打たれたボールは高速で一直線。道路の方へと飛んで、そこにちやうど俺とセラフが通りかかったようで、

「アイス舐めながら歩いてる方が悪いんだよな。男ならあれくらい避けろよ……!」

とか言われた。俺を何だと思ってるんだこの赤毛っ子は。

「アイスにC・C・C。とか名前を付けちゃう変なヤツ?」

茶髪ちゃんがほっぺをつねって叱ってくれなかったら手刀を落としてみた。

そんな茶髪ちゃんが、あ、と声を上げ、訛りのきいた喋りで、

「そういえばまだ自己紹介してませんでした。わたし、八神はやつていいいます。こっちはヴィータ、親戚の子です」

「……よろしく」

少しムスツとした感じの赤毛っ子は、どうもほっぺをつつきたくなる。

……まるでお餅のよう。

俺も自己紹介しながら試しに、と手を伸ばしてみたら噛まれそうになった。犬か。

「あたしは犬じゃねえ！」

「じゃあ猫？」

「猫でもねーよ！ 動物扱いすんな……ッ!!」

どうしようからかうのがちよつと楽しくなってきた。

「このヤロー」

「なんだとこのヴィータちゃん」

「——ちゃん付けするなッ!!」

と、いきなり振り下ろされたゲートボールステイクが鼻先を通過。その一撃が地面にめり込んだのを見て、

……きや——。

からかうのはもうやめようとおもいました。

「ところで、えつと、……秋介くん？ そつちの子は……？」

「ああ、こつちはセラ」

そこまで言って気が付いた。

……あれ？ どうやって説明したらいいんだろう。

この状態のセラフを人に紹介する場合って、何て言えばよろしいの？ ここはありきたりに姉か妹？

姉はないとして妹は、……見えなくもない？ 同じ黒髪だし身長もなのはと同じくらいでちよつと低い。あ、双子っていえば姉でも通じるかも。二卵性なんとかってやつで。

それとも親戚か。それが一番可もなく不可もなくって感じはするけども、……むう。

そこまで考えた所でセラフから念話が来た。

『任せてください』

心配になるからそのキラキラした瞳はやめてもらえませんかね？ とんでもない事を言いだしそうで怖い。

でもまあ、セラフが任せてというなら任せよう。

「私は乙女といえます。月乃 乙女。よろしく願います」

……普通だ……!」

思い過ぎしか、と安堵した瞬間。

「こちらの秋介くんとは母方の親戚関係で、——将来を共にすると誓い合った仲です!」

『よし、ちよつと聞いてもよろしいかな乙女? 秋介さん、唐突な乙女の告白に驚きを隠せないんだけど』

『もうっ。マスターったら早速その名前で呼んでくれるなんて、嬉しくて今日を記念日設定しちゃいましたよ! これから毎年この日は必ずこちらの姿になりますね……!』

『あーはいはい。それで? 月乃・乙女ってなに』

『せっかく人の姿になるんですから、それっぽい名前があつた方がいいかなと思ひまして。私、この姿だとバリバリ日本人設計ですから』
『なるほど』

じゃあその次。これが一番重要。

『将来を誓い合つた間柄とか誤解を招くでしょうが!? 見てみ? お二人さん急な告白で頭捻つちやつたよ!』

『嘘は言つてませんよ? 私はこの先ずつと貴方のお傍を離れたりしませんから』

『それはありがとう。でも、もう少し違う言い方をしてしかなかつたなあ……!』

仕方ありませんねえ、とセラフが笑みを作り、口元に人差し指を立て、

「冗談です。私たちは共に生活しているので、そういった意味で捉えていただければと」

「なんや楽しい子やなあ。そつか、秋介くんも親戚と一緒になんか。わたしと一緒にや」

「まあね。色々と騒がしくなる事も多いけど一人よか全然マシ。晩ごはんの献立考えたりとかどつちがお風呂の掃除をするかとか、……偶に不意を突かれて驚かされるけどね」

「はは。同じや」

そう言つて八神ちゃんが、膝の上に乗せた古い本を撫でた。

「わたしの家もな？ 今日夕飯は何を食べようか考えたりテレビのチャンネル争いしたり、掃除当番をくじで決めたりしてなあ。この前なんかヴィータがお布団干しとる時に」

「ほう」

「何でしょうか」

「ちよ、はやて！ それは内緒だつて言つたじゃん！」

慌てて止めに入ったヴィータをなだめる八神ちゃんの姿は、お姉ちゃんというよりも母親のように見えた。

……おかん。

「秋介くん、今わたしの事おかんや思うたやろ」

最近の女の子は鋭くていらつしやる。

「それにしても。いやあほんまに、……本当に、毎日が騒がしくなつたな」

「……はやて」

そうや、と言つて、八神ちゃんが両手の平を胸の前で合わせた。

「秋介くんと乙女ちゃんつて本は読む？ この後わたしら図書館に行こうかと思うとるんやけどよかつたら一緒にいかへん？」

「図書館ですか」

「あそこなら涼しいし、冷たい飲み物もある。アイスのお詫びになるか分からんけどジュースくらい奢らせてーな」

それに、と前に置いて、

「なんやもうちよつと二人とお話したくなくてもうて。……どうやら？」

「私は別にいいですよー」

「俺も全然オツケー」

図書館に行くなら一石二鳥。ちようど夏休みの宿題で読書感想文があるからね、それ用の本を何か探そう。

「それならわたしに手伝わせてもらえへん？ 色々おススメがあるんよ」

「じゃあ頼りにさせてもらおうかな」

……あ。

そういえば俺、図書カード持ってなかったわー。

第二十九話：筆記より実技の方が得意だったりします

青空の下、草原に立つ俺の頭上に一つの大きな空間モニターが開いた。

そこに映るのはエイミイさんだ。

『とまあ、そんな感じで、秋介くんの筆記試験の結果は問題ないよー。バッチリ合格ライン。あと残ってるのは実戦訓練だけ。それが最終試験になるから、最後まで気を抜かずガンバロー！』

「おー！」

そう。今日この日。待ちに待った訳ではないけどなのはとフェイトがやる気満々で準備していた嘱託魔導師認定試験の当日だ。

試験会場は管理局本局。

まずは筆記試験が、次に実技試験が行われる。その結果によって後日、認定書の交付時に面接があり、それをパスする事で晴れて嘱託魔導師になれるのだが、

……どうしてこうなっちゃったかなあ。

現状、俺は本局ではなく管理局の保有する、とある無人世界にいる。そうなった原因は先の二人。つまり、受験番号一番と二番だ。

どうも本来の実践訓練に使用するはずだったシミュレーションルームが、その一番と二番の連続した最終試験によって限界を迎えられない。

『すみません。大急ぎで修理と調整を進めているのですが、まだシミュレーションルームの状態は芳しくなくって……』

『ごめんなさい』

『大丈夫大丈夫。むしろ二人のお陰で上に修理費やら改良費を申請する理由が出来たし、まあ、わたしとしては全然オツケーだよー』

そんなやり取りが、エイミイさんの向うから聞こえてきた。

「なのはもフェイトも、どうしてあんなに張り切っちゃったのか。シミュレーションルームが耐えられないって相当だよね……」

『それはマスターに良い所を見せたかったからでしょう。いわゆる乙女心というモノです』

「そういうもんか」

『そういうもんです』

まあ、その乙女心のお陰で徹夜の体に鞭打つ事になった本局のメンテナンスタッフさんたちは涙目だったが、今度翠屋のシュークリームを差し入れるという事でもう一、二徹は頑張れるそうだ。大丈夫かなそれ。

『美味しいと評判のなのはちゃんの所のシュークリーム……。それが食べられるのならこのマリエル・アテンザ、シミュレーションルームの修理が終わるまで一睡もしませんとも！』

『それで貴女に倒れられでもしたら私の責任になるのよ。お願いだからちゃんと寝てちょうだい、マリー』

と、画面の中。エイミイさんの背後で頭を抱えたのは、リンディさんと横に並ぶメガネの女の人だ。それにしても、と彼女は続けて、『まさかシミュレーションルームがダメになるとは思わなかったけど。流石ね、リンディの推薦に納得だわ』

『だから言ったでしょう、レティ？ あの子たちは凄いわよ、つて。AAAクラスの魔導師なんてそうそうお目にかかれないんだから、シミュレーションルームの一つや二つ安いものよ』

『AAA+クラスの息子を持つ貴女に言われても説得力無いわー』
言つて、二人が笑い合う。その光景を見て思うのは、

……あれがミッド版ママ友か……！

確か二人は同僚で、同じ提督という立場だとか。加えて子持ちという共通点もあるので、まあ、レティさんとこの子とはいずれ出会う機会が来るだろう。ところで、

「試験官はどちら様で？」

「僕だよ」

背後からの声に振り向くと、青の魔法陣から一つの影が現れた。

執務官の制服に、カード型のデバイスを手にするその姿は、

「何だクロノじゃん」

「そうあからさまにガツカリされると流石に傷つくんだがな。……まあいい。」

僕が君の試験相手を務める理由は、先の二人と同じだ。正確に君のランク測定を行った訳ではなくあくまで推定だが、……AAAクラスの相手をできる試験官は中々空いていなくてね」

「……え？ 俺ってあの二人と同レベル扱いされてる？」

『むう。それってどういう意味なの』

と、なのはが映るモニターが現れた。

ぶくい、と頬を膨らませる姿はとてもつつきたくなくなるけど今は我慢。あとでのお楽しみだ。

『わたしたちと同じは嫌？』

「そういう事じゃなくって、俺がAAAクラスとか過大評価でしよう、って意味で」

総魔力量にはそこそこ自信はあるけど戦闘技術に関してはなあ……。凄いの俺じゃなくてセラフや宝具とかですし。一体何を根拠に俺をAAAクラスと推定したのか。

「君の元使い魔」

「ちよつとりニスさん——」

どんな話をしたんですか、あなた。推定でクラスがAAAになるなんて相当な誇張があったに違いない。

「まさか。そんな事は無かったよ。今まで彼女が見てきた君と、なのはやフェイトたちとの模擬戦の映像を見た上での総合的な判断だ」

「えー、でも……」

『私も。秋介がAAAクラスなのは妥当な評価だと思うよ？ 模擬戦

じゃ一本も取れた事ないし』

『そうだよ！ わたしもまだ模擬戦で一回も秋介くんに勝った事ないんだから』

「……むう」

フェイトとなのはにそこまで言われたら納得するしかないか。

「納得したならそろそろ始めよう」

そう言って、クロノがセットアップする。

「でもクロノ、……大丈夫？ なのはとフェイトからの連投でしょ」

「問題ない。むしろ先の試験のお陰で体が温まっているからね。——」

二人との時より本気で相手をしよう」

……それつてもう試験通り越して模擬戦になるんじゃないだろうか。

と、心の中で思うだけにしておく。今のクロノに何を言っても無駄だろうな、とも。モニターの向うでエイミーさんが、

『ウォー！ クロノくんの魔力がどんどん上がっていく……！ これは現役執務官の勝ちが濃厚か!』

それどこに向かつての実況なんだろう。

直後に何故かタイミングよくリニスからイラスト付きの応援メッセージがモニターで来たが、手が滑ったので手刀で砕いておく。確か今日はプレシアさんと二人で引越しの準備に追われている筈なのできつと気のせいだ。

『おや。意外とマスターもやる気になってます?』
「まあね」

いくらこれが試験で勝ち負けは関係ないとしても、戦うからには負けたくない。というより、

「なのはとフェイトの前だから良い恰好したいじゃん?」

『そういうもんですか』

「そういうもんなの」

あー、男心、とセラフが納得した所でセットアップ。するとクロノが、

「準備はいいか?」

「もちろん。いつでもオツケー」

じゃあ、

「試験開始だ!」

くそっ、さういえばクロノと戦うのは初めてだわ

開始一発目はシューターによる撃ち合いになった。

次に直射型砲撃のぶっ放しで、そこから再度、誘導制御型の射撃戦へと展開していく。ここまでは先の二人と同じ流れだ。

なのはは、ここから更に収束砲撃へと発展させていった。
フェイトは、クロノの一瞬の隙を突いて背後からの奇襲へと繋が
た。

ならば俺はどうするか。

……二人の間を取って遠距離やりながらの近接戦闘……！

無茶苦茶だな！　と思うが、これは試験だ。先の二人と同じより違
う事をやった方が試験管の印象に残るといふもの。エイミイさんか
ら聞いた事前説明によると、〃宝具〃の使用は禁止でなく、むしろバン
バン使っていていいと言われたので、

……一丁派手にやりますか！

クロノ相手に遠慮はしない。向うが本気で来るといふのならこち
らも相応の迎撃をするまでだ。

イメージするのはかつての時代、自らを第六天魔王と名乗った一人
の戦国大名。その姿を思い浮かべながら彼女の〃宝具〃を発現する。
魔力による形成。周囲に展開するのは三千丁の火縄銃だ。それら
全てをクロノへと向け、

「見開いて驚きなよクロノ！　——これが魔王の三千世界だ……ッ
！」

「メチャクチャだな！　三段と言いながら一斉に撃っては意味がない
だろう!？」

クロノが、集中砲火の中を飛んで来る。自分への致命傷となりえる
一撃をシールドで防ぎ、回避しながらデバイスを振って、

「第一に、それは質量兵器じゃないのか!?　次元世界では使用は禁止
されているんだぞ！　だというのに君って奴は試験の最中に……!」
「はっはっはっ。——そんなマジ顔で殴り掛かって来ないでよね!」
これ〃宝具〃！　魔力で現界してるから一応魔法扱いになるんです
よ!?　ね！　セラフさん!」

『まあ広義で見ればそうなりますね』

ともあれ試験官に先の二人より強い印象を残したに違いない。
こつちの様子を見ているだろうリンディさんやらレティさん、他諸々
もきつと驚いている筈なのでよしとしよう。した。

今、俺は火縄の銃床で防御を行っており、打ち込まれるクロノの一撃を弾いていく。そして隙を見つけては射撃し、その都度火縄を持ち替える。

何度目かの攻防をこなしながらステップを踏む。

身体を落としてクロノの下へと入り込み、指で火縄を回して、

「……とっ！」

打撃した。

ガードに対してだが、床尾での一撃が入った。そのまま魔力で強化した臂力で一気に振り抜く。しかし、

「っ、バインドか……！」

こちらの右腕を、光が捕らえた。

青の鎖。腕の動きを制限するように現れたそれは、一瞬の拘束と、直後に硝子の碎けるような音とともに散った。

……今回はちゃんと発動したな！

〈破却宣言〉。またの名を〈ルナ・ブレイクマニユアル魔術万能攻略書〉。

ただ保有するだけで一定以下のあらゆる魔術を打ち破る事のできる自動発動型の宝具だ。

ON/OFF可能な自動発動型宝具の中で最も汎用性があるんじゃないかと思うこれは、ちゃんと魔法相手にも発動してくれて安心する。だが、

「俺を捕まえたかったらユーノレベルのバインド使いなよ……！」

『ええ、その通り。最近なのはさんたちがユーノさんのバインド講座を受けているので、クロノさんも参加してみてはどうでしょうか……！』

何それ怖い。というかいつの間そんな教室を持ったの、ユーノ。俺も参加したいなあ。

「ああ、それも一つの手だ」

だけど、とクロノがS2Uを押し込んできた。すると先が俺の肩に接触し、

「今はこの一瞬で十分だ……！」

……しまった！

「ブレイクインパルスッ！」
直撃した。

……超痛え——！

と、肩から上半身にかけて衝撃が抜けて行くのを感じながら、次のクロノの動きを見た。

S2Uを上にも、詠唱とともに振り下ろす動きだ。そして現れた青の鎖が再度こちらを捕らえようと飛んで来る。

「二度ネタかクロノ……！」

「ああ、そうだ！ 例え一瞬でも君の動きを止められるのなら、使う価値はある！ そして——」

続いたのは言葉でなく、光だった。そして再度、硝子の碎けるような音が鳴るのを聞いて、

……バインドは囷か！

クロノの手元、こちらに向けられたS2Uの先に青の色があった。魔力の収束だ。

バインドからの収束砲撃。この流れはつい最近見た覚えがある。それは、

「なのはどの試験の応用だよ……！」

『にやつ、わたしの所為で秋介くんが——』

『だ、大丈夫！ どう見てもさっきの砲撃より威力低いからアレ！
秋介なら平気だよ！』

ちよつと二人の幻聴そういう問題じゃないからね？

ともあれその光を前に、対してこちらが取る行動は、

「呪層・黒天洞……！」

神鏡を、前面に現界させる事で防御とした。放たれた砲撃を受け、それを流しながら、

『あの鏡はまさか……！』

『知っているのかい、ユーノ!?』

『ああ！ あれは宝具の一つだ！ 神鏡すいてんにっこうあまてらすやのしづいしへ水天日光天照八野鎮石、能力としては特殊結界による無限の魔力供給と、魂や生命力の活性化。つまり、——その通り、主に打撃武器や盾として使用されるそうだし……！』

『つまり、と、その通り、が繋がってないよ……!? というか、ソレ鏡の使い方じゃないだろ!』

俺としてはアルフの幻聴に激しく同意だけど実際にその使い方をしているのでノーコメント。

いやあ、便利だな黒天洞！ これで若干の魔力回復まで出来るんだからこの宝具は非の打ち所がない。

『あっ』

「アリシアやかましい」

『私だけ幻聴扱いじゃないの酷くない!? まだ何も言っていないように!』

あーはいはい、幻聴幻聴。

「これで終わりじゃないんだろう、秋介!？」

「当然……!」

そんな期待されたら応えずにはられないね！ とテンション上がった自分にちよつと反省だが、まあ、やり過ぎないように気を付けよう。

いくら無人世界といってもここは管理局保有の世界だ。必要以上に傷つけたりしないよう、細心の注意を払いながら、

「痺れる覚悟はオツケー?」

右手を振り、魔力を雷霆らいていへと変換していく。やがてそれは円環を成し、大気中の魔力素を取り込んで更に増大へと進んだ。

そして、かつて一人の科学者が神々より奪った権能を今ここに再臨させる。

準備は出来た。後は放つだけ。

……非殺傷設定はちゃんと機能してるな!

最終確認終了。これで安心してぶち込める。ならば、

「フェイト以上の雷撃を約束しよう……! さあ、ご覧あれ! ——

システム・ケラウノス
人類神話・雷電降臨——」

放つなり、クロノが動きを作った。

右手の平を前に。重ねてシールドを展開した。それを一瞬の時間稼ぎとして、

「ぐ」

という声を上げ、クロノが左に吹っ飛んだ。

……うわ。やるねえ！

光が見えた。青の色。散る魔力光を目で追えば、それは右の方へと広がっていく。

何をしたのか。それは、

『収束させた魔力を、回避の為に自分へと撃ち込んだんですね……!?』
と、セラフが言った直後。不意に、こちらの周囲に青の色が光った。いつの間に、と思うが、すぐに答えが出た。向うでは既に、クロノがデバイスを構え直しているが、

……あの時の詠唱か……！

加えて、

……フェイトとの試験でもやってたなあ！

あの試験では死角からの奇襲に備えての設置だったようで、もの見事にフェイトはそれに引っ掛かっていた。その様子をモニター越しに見ていて、

「そういえばなのはどの試験じゃ使ってなかったよね、クロノ?」

「いや、仕掛けてはいたんだが彼女の砲撃にまとめて吹き飛ばされた」

「……あー」

試験前の休憩時間に驚愕的事実が判明したが、まあ、よくある。

ともあれバインドをカモフラージュとして、その下で設置型の誘爆フォトンスファイアを仕掛けられるとはしてやられた。

「絶対後で罫の看破が甘いかツツコまれる……!」

『言ってる場合ですか、爆発しますよ』

「——あつ。やべ」

思いつきり吹っ飛ばされた。

「この威力、加減してないな!?」

想定以上の爆発にちよいと内心驚きながらも、次の動きへと移った。

転がる身を立て直し、新たに詠唱を行うクロノへと踏み込めば、

「……い！」

行った。

まず一步目で、飛んで来るシューターを眼前で回避する。

そして二歩目で更に距離を縮め、魔力を成形し一刀を作成。刃を上
に、それを肩の高さに構え、

「」

三步。それでようやくクロノへ至った。

……まだまだだな！

理想は一步での到達だ。『縮地』は極めればワープ的な次元跳躍も可能らしいが、ものは試しとも言おうし、いつかはそれで次元世界を渡ってみるのもいいかもしれない。あ、でもそれだと無断渡航やらなんやらで管理局に追われちゃう？ なら、

……正式な許可か、相応の理由があれば行ける……！

その為にもまずは囑託魔導師になる事が前提だ。局からの仕事を受ければその機会も増えるだろうし、多少の事ならクロノに頼めば許可は貰えるだろう。多分。

ゆえにちよつとした目的の為に、ひいてはこれから先の未来の為に必要になる「囑託魔導師」という肩書を得るべく構えた一刀を振るう。

「……は」

『縮地』と合わせて行う攻撃といったらやっぱリアルだね。宝具じゃないし、技術的なモノであるから再現は出来ないけど、雰囲気だけでも味わいたいと思うのは男心だ。

……三段とっておきながら高速で一突きしても、前科があるから問題ないよね……！

その内、スキルの一つとして習得できないかな、と思うが、その辺

りどうなんだろう。今度セラフに聞いてみようか、多分だけど知っている気がするし。ともあれ、

「無明——」

と、突き込もうとした時だ。

空から女の人の声が響いた。

『そこまで！ 試験はここまでとし、双方、戦闘を停止なさい！』

こちらが突き込んだ一刀は、クロノの首横を通過している。対して向うが振るったデバイスは、こちらの胸元に突き付けられていて、

「……お」

見れば俺の首元、青の光を放つ刃があった。

更に視線を動かせば同様の刃が俺とクロノを囲むように展開されている。これは、

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト。どうだ？ 君が以前、フェイトとの模擬戦で披露したという刀剣の複数展開、それ真似てみた」

『んー、八十点といったところでしょうか。マスターのアレは宝具ですし比較すれば威力は劣っていますが、数で押すというならこれで十分かと。私としてはもう二割ほど数を増やす事をおススメしますね。より派手になりますよ……！』

「いや、クロノは別に派手さを求めてないでしょう」

「まさかセラフの採点が入るとは思わなかったな……」

そう言って、気を抜いたクロノがバリアジャケットを解除した。それを見て俺も同じく解除するが、

……ちよつとやり過ぎちゃったかなあ……。

辺りを見れば、所々の地面が抉れている。中にはクレーターのようになっているものもあった。

頭上からは何やら騒がしくする声が聞こえてくる。

モニターの中、笑顔のリンディさんの隣でレティさんが口を横に開いているけど何かあったんだろうか。エイミイさんの引き攣った声も聞こえるし、なのはたちに関して言えば、

『……おおう流石』

『ビリビリだね……』

『悔しいなあ』

『アリシアはともかく、なのはとフェイトは憧れても真似するのは止めてね?』

『どうか何かあったのかい?』

わからん。アルフはいつも通りで安心するね。

「さて、それじゃあそろそろ戻ろうか。試験の結果は追って連絡するが、まあ、君も含め全員大丈夫だろう」

しかし、とクロノが苦笑を作った。

「レティ提督からストップが掛かるとは……。少しやり過ぎだな」

「本気で来たクロノが悪い」

「相応の反撃をしたのは君じゃないか。君だって最後の方、結構本気だっただろ?」

「……まあ」

それを言われると返す言葉がない。

『どっちもどっちという事ですね』

「そういう事だ。……じゃあ、戻るぞ」

「あいよー」

く本局へ転移中く

結論から言って戻ったらレティさんに二人揃って説教された。

どうもへ人類神話・雷電降臨を撃った直後に一瞬だけ次元震が観測されちゃったらしい。クロノは焚きつけた原因として、俺は威力を鑑みずぶつ放した事を主に怒られたが、

「あれでもかなり威力落として撃ったんだけどなあ。本気でぶつ放したら時空断裂とか起こしかねないし」

提督二人と執務官が顔を手で覆って背を向けた。

ともあれなんとかこれで全員が試験を終了し、囑託魔導師としての認定を受けた。そして後日、認定書を受け取る際の面接ではリンディさんに、

「惜しいわねえ。……もういつそのまま正式に入局してくれないかしら。実習先にアースラを選んでもらえれば私たちもサポートできるし、クロノと合わせてAAAクラスが四人。うーん、魅力的だわー。——どう？　ちよつと入っていかない？」

「はいはい、将来有望な子が欲しいのは十二分に分かるけど無理強いにはダメよー。そんな飲みに誘うような感じで勧誘しないの。ほら、まだ仕事残ってるんでしよう？　速く戻らないとエイミイに怒られるわよ」

そう言つて、レテイさんが連行して行つた。するとマリーさんがやって来て、

「ただいま戻りましたー。いやあ、やっとシミュレーションルームの復旧と改修が終わりましたあ。つて、あれ？　レテイ提督はどこに？　リンデイ提督を仕事に連行して行つた？　あー、じゃあ報告は後回しですねー。」

おお？　秋介くん、何ですかこれ。え、差し入れの翠屋のシユークリームですか!?　あ、ありがとうございます！　いやはや、寝る間も惜しんで頑張った甲斐がありました……！

そうだ皆さん、よかつたらリニューアルしたシミュレーションルーム使ってみませんか？　以前と比べても頑丈になっていますから！」
結果としてマリーさんを含めたメンテナンススタッフが再度徹夜するはめになったが、何はともあれ無事に俺たち三人はこの日から時空管理局認定魔導師として、正式に嘱託職員として非常勤勤務を開始した。

A S 編

第三十話：貸し出し期限には要注意

そして季節は流れて十二月。めっきり寒くなった日々を過ごす中で、クロノから妙な話を聞いた。

家の玄関。靴を履きながら、空間モニター越しに聞く内容は、「謎の襲撃者?」

クロノによると、二カ月ほど前から無人世界に生息する大型生物を狙った襲撃事件が多発していたらしい。その手口は全て同じで、リンカーコアを抜かれ魔力を奪われていたそう。更には、
……ここ一か月ほどでついに局の魔導師が襲われ始めた、と。

その被害者たちは皆、無人世界での調査中に襲撃を受けていて、『これまでと同様、リンカーコアを抜かれ魔力を奪われた状態で発見された。幸いにも命に別状はなかったが、……同時に奇妙な事もあった』

「奇妙な事?」

『ああ、襲われた局員は皆、魔力を奪われたもののリンカーコアに深刻な損傷はなく、抵抗時に負ったと思われる傷や怪我が治療されていたそう。』

「そりやまた……」

確かに、とセラフが言った。

『その襲撃犯はただ魔力を狙っているのではなく、何か目的があるという事でしょうか』

『恐らく、という言葉が頭につくが、管理局の見解としてはセラフと同じだ。儀式か研究か、この襲撃者は何かしら大きな目的の為に魔力を集めていると思われる』

「それならあれじゃない? 最近被害が拡大したのって、無人世界の生物じゃ間に合わないからじゃないの?」

何か急がないといけない理由が出来たとか、そんな感じでさ。

『可能性としては有る。むしろその方向が近いかもしれない……』

一部ではロストロギアが発動している、なんて噂が流れているが、それなら魔力を集める行動にも納得がいくか』

はあ、とクロノが一息。そしてこちらに半目を向け、

『まさかとは思うが、宝具発動の為に君が魔力を集めていたりしないだろうか……?』

「おおっと、ここで疑われるとは俺も予想外。いくら何でも流石によそ様の魔力を奪うなんて危険な行為はしないって」

『そういった用途の宝具はあるんだな……』

しまった嵌められた!? くう、中々の策士だねクロノ……!

『……まあいい。ともあれそういう事だ。君たちの事だから大丈夫だとは思うが、いつどこに襲撃者が現れるか予測できないからな。そちらでも一応の注意をしておいてくれ。何かあれば連絡を頼む』

「あいよー」

『……と、そうだった。君に伝言を頼まれていたんだった』

伝言? ……一体どちら様から? 俺、管理局に知り合いなんて数えるほどしかいないんだけど。

『そうだな。僕としてもかなり意外なところからだ。……いや、あの人の出自から考えたら当然かもしれないが。一度会って話がしてみたいと、そう君に伝えてくれと頼まれた』

「だから誰ですよ、その人。俺が会った事ある人?」

ないだろうな、とクロノが言った。

『そもそも君は本局にあまり顔を出さないだろう? 僕ら以外に知り合いがいたら驚きだぞ』

「失礼な。少ないだけでちゃんというって。この前だつてレティさんとこのグリフィスくんにも会ったし、食堂でご飯食べてたらナカジマ夫婦に絡まれるくらい交流はある。あ、この前はヴェロツサにケーキ奢ってもらったつけ?」

『いや、グリフィスは母親の仕事を見学に来ていただけだからノーカンドだろう。というか待て。君の言うヴェロツサとは、ヴェロツサ・アコースの事か? こう、緑色の長髪の』

「そうそう、そのヴェロツサ。リンディさんとはまた違った緑色の。」

よく仕事サボったとかでシスターに追われていたけど、クロノと知り合いだってあの人言ってたし」

最近だと三日くらい前に新しいケーキ屋さんを見つけたとかで連絡が来たかな？　しばらくはそのお店に通って全品制覇するって宣言してたから、もし行方不明ならそこにいると思う。

『……その店の場所は分るか？』

「一応」

と、新しいモニターを展開。そこにヴェロツサから教えてもらったお店の場所をメモしてクロノに送信する。少しして向うが頷き、

『助かる。担当者には僕の方から伝えておくよ。それで、話がだいぶそれってしまったが、君に会いたいという人物の事だ』

「ああ、うん。どちら様で？」

クロノが続ける。

『——ギル・グレアム。君たちと出身世界を同じくする人物だ』

く……へえく

「とか何とか意味深な雰囲気出しておきながら会いに行かないなんて、流石ですねマスター！」

「そりゃあ外せない用事が出来ちゃったからね。見知らぬ上役より眼前の危機回避を取るでしょう」

と、人の姿のセラフと言いながら向かうのは、この辺りで一番大きな図書館だ。

夏休みにはやとと出会って以降、たまにおススメを紹介されて借りに行くのだが、

……意外とマニアックなものが多いというか、大きい図書館じゃないと置いてないんだよなー。

お陰で夏休みの宿題で提出した読書感想文が「異彩を放っているで賞」とやらに選ばれたが、題材に選んだのは世界の不思議を物語調に編集した冒険物だったのに何故だ。ミイラか、やはりミイラが魔女と宗教戦争を起こした辺りがいけなかったのか……。

ともあれ、今日の目的は先週借りた「メトロポリタンV S ルーブル裏切りの大英博物館」の返却だ。

「まさか今日が返却期限日だったとは……。くっ」

クロノたちとの共同任務が、無人世界での遺跡調査だったのがいけなかったと思う。

一昨日、金曜日だからと泊まり込むつもりで出向いて現地合流したクロノやユーノと遺跡に入っとうっかり罫を発動させて大岩が転がってきたり逃げた先がロストログアの保管空間で爆発に巻き込まれたような気がするが、一夜過ごして遺跡を出れば、外では何故か二日も経ち応援の調査隊やら編成されていた救出部隊が出発直前で軽い浦島効果を感じた。

というか、地球に帰って来たのは今朝方で、まず取り掛かったのは着信履歴が凄かったアリサとすずかへの事情説明。携帯の故障という事で何とか納得してもらったがまあ本当の話はその内だ。

有り難かったのは、リンデイさんをはじめとしたアースラの大人組で、事前になのはとフェイトにこちらの事情を通しておいてくれたことだ。あれが無かったら二人は間違いなく現地にまでやって来、救出部隊に参加し、入れ違いになっていたかもしれない。この辺りはプレシアさんやリニスが二次被害を起こさぬよう説得に動いた事と、アリスアの、

「むしろあの三人の事だから遺跡の中でキャンプでもしてるんじゃないの?」

というのが効いて納得したと聞き、結論から言うと凶星だから反論できない。

そしてそれらを含めなのはたちへの帰還報告と、エイミイさん経由での調査結果や次の仕事の打ち合わせ等をしていて、気付けば既に時計の針は十二時を回っていた。

お昼は簡単にお茶漬けで済ませ、クロノからの通信で打ち合わせ漏れの確認と、ちよつとした世間話を行いながら軽く掃除機を掛けているのだが、布団干しを担当していたセラフが本を片手に戻って来て、「そういえば先週借りたこの本って、確か今日が返却期限日じゃな

かったですか？」

と、驚愕の事実が発覚したのですぐに掃除と世間話を切り上げ、家を出たのだ。

とはいえ図書館への道すがらバスに乗っているだけで暇も多いので、

「さっきのクロノの話だけどき、セラフさん的にはどうよ」

「マスターの予想通りだと思いますよ？　内容や時期的に見ても」

「やっぱりかー」

ならちよつと対策を考えないとなあ。

「どのような方法を取るにしてもマスター次第です。確実性を取るにしても、賭けに出るも、何もしないという選択肢は有りませんよね」

「当然」

ただ、

「一つ、試したい事はある。けどそれが絶対に成功すると言えないのがちよつとね……」

「では失敗してもいいように代案をたくさん用意しましょう。——宝具というものは、奇跡の具現です。それを持ってして救えないなどと、そのような不幸は認めますか？」

「絶対無理。……正直、分の悪い賭けだけどセラフは付き合ってくれよね」

彼女は笑みを作った。そして、

「当然です。私は、貴方のデバイスなんですから」

くやべえ、今ちよつとキュンと来たく

図書館の入り口。潜ってすぐのカウンターで本の返却を済ませ、そのまま蜻蛉返しというのもアレなので睡眠前の読書本を探しに館内を見て回る事にした。

二階は主に外国文学や歴史書が置かれているが、翻訳されていないものも多いので場の雰囲気を感じるために一周する。途中、不思議の国のアリスの、原文のコピー書がピックアップされていて、その隣に

は切り裂きジャックについての特集が組まれていたのは何かの偶然だろう。反対側に西部開拓時代の木こりを題材にした小説も置いてあったのはきつと気のせいだ。

ともあれ、何となくホッコリとした気分でセラフが読む用を数冊取って二階を後にする。そして次に自分が読むためのものを探しに一階の文庫コーナーを回っていたのだが、

「セラフさんや」

「ええ、いい感じのタイミングで見つけましたねマスター」

と、揃って本棚の陰から覗く先。一人の少女がいる。

車椅子。茶髪の髪に、ブランケットを肩から掛けた彼女は少し高い位置の本に手を伸ばしていた。すると、

「お」

来た。

少女だ。現れた彼女は、車椅子の少女が取ろうとしていた本を手に取り、

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

そう言っ、少し訛りの効いた声で車椅子の少女が微笑んだ。そして何やら話し始めた二人を眺めながら、ふと思った事がある。

……ここを出て行ったら面倒になりそう。

チラリとセラフを見れば、既に文庫の並びを眺めている。手には追加の数冊を持って、こちらにおススメと、掘り出し物を見つけたように掲げているが、

……喫茶戦士モーニングって何だ、逆襲のミルクコーヒーって……。

第一巻で逆襲するなよ、と思うが、セラフが楽しそうならそれでいいか。まあちよつと気になるので読み終わったら貸してもらおうとして、

『セラフ、今の内に見つかからないように本借りて撤収』

『おや、挨拶はしないの？』

『ここで割って入るほど無粋じゃあないし、そもそも今のセラフと一

緒に会う訳にはいかないでしょう。その姿を知ってるのは、はやてだけなんだから』

『ああ、そうですね。すずかさんの手前、マスターが一人で行ってもはやてさんの事ですから私が居ないのを不思議に思うでしょうし』

『そういう事』

だからまあ、今日のところはここで退散しておこう。

『ではちやちやつと借りてきますねー』

と、貸し出し受付へ向かうセラフを見送り、ふと思った。

……はやてが一人って事は、他の皆はもしかして……。

しばらくは徹夜かなあ、と覚悟を決めつつ、図書館の外でセラフを待つ事にした。